



AC            Zoku Gunsho ruiju  
145  
G856  
1923  
v.24  
pt.2

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---







昭和十四年版

# 續羣書類從

第貳拾四輯下

東京 續羣書類從完成會



AC  
145  
G856  
1923  
v.24  
pt. 2

續群書類從第貳拾四輯下目次

武 家 部

卷第六百八十七

伊勢備後守貞明覺悟記……………一

伊勢六郎左衛門尉貞順記……………一五

同約文書……………三〇

卷第六百八十八

伊勢貞興返答書……………三六

同貞久武雜記……………五七

卷第六百八十九

伊勢加賀守貞滿筆記……………七〇

伊勢貞助雜記……………八二

卷第六百九十

常照愚草……………一〇九

道照愚草……………一二二

卷第六百九十一

中島攝津守宗次記……………一四七

河村誓眞聞書……………一五八

同雜々記……………一七二

卷第六百九十二

澤巽阿彌覺書……………一七九

岩村意休懷妊着帶之事（產所聞書）……………一九九

宮參之次第……………二〇三

卷第六百九十三

豐記抄……………二一二

故實聞書……………二二五

卷第六百九十四

烏板記……………二四〇

魚板記……………二六五

卷第六百九十五

人唐記……………二七八

人賢記……………二八八

たる事有へからず。わるき事すくなくよき事の多を上手と云へき也。上手のしわざのみ無下に計不可在之候也

一ミかうしの間の出入きらるゝ事なり。みかうしと申ハしとみのある間の事也。其ゆへは忌れたる時ミかうしの上をおろし。しとみの下はかり取て其あひたより出入候間如此候と也。又妻戸の出入も常には有るへからず。つま戸ハこしよせの事也

一小袖を人に出すには二に折。袖を兩人おろかへし。したかへを上へなしゑりの方をすちかへて出へし。又廣ふたにすへて出すもしたかへを上へなしてすゑる也。其時は小袖を取出さすそ出へし。又さるかく田樂には如前手に取て可遣候なり。

一小袖一重二かさねといふは。あはせをはそへましき也。むこひきてものゝ時はかはる

へき也。

一らつそくのさきは座敷のは取おろし候はてさしなから取事本儀也。しかれとも取にくきやうに候ハ、おろして取へし。又のうなとの時舞たいのさきのあり明のらつそくをは立てなからとるへき中不可在之。先らうのなたれを取て。さておろして取へし。あさ／＼と取事りかあるへましき也。らつそくかへ候時ハかけよりともしてさしかゆる也。又ともしさしをも火をけし候いてとりてかへる也。一段と手もあつく候はん程ならはそくたいのものとて候すへき事如何。又そく臺の足。貴の御前へ向候やうにをくへき也。

一具足人に參するは兩人してかく也。右の方をかく人は少さきへなるやうに可有之と。左をは上ての人かく也。少すちかへて左を

かく人は跡になるやうにと也。是賞翫候人々右をかく人やかて立のき。左をかく人居のこりて射むけの方を少すちかへて。をしなほしてのき禮義候て。さてもとのことく兩人出てかきうしろを見せ候はぬやうにかきて人也。くそくハからひつのふたにすへ。とうたてを立てても甲をわたかミにからみ付てもふたをかきて出る也。のとわハそへてもくるしからず。

一まな板をかきて出る事。是さきの方へ出る人下手て也。たとへは兄は跡をかき弟はさきかくへき也。是も少すちかへてかきて出る也。具足のことく跡をかく人居のこりて。正面にをきなをし足なとゆるき候ハぬやうに。兩のはしを持てよくしたゝめのくへき也。さて庖丁人出て切。其後又まへのことく兩人しかきて人也。

一賞翫の人をは先御奏者中人座敷へしやうし入申。さて亭主出て御禮申。猶上座へしやうし入可申候也。又出向しやうし申さるゝ方も有へし。同送申禮の事。賞翫はゑんに一をくり庭上へ出ても申。又門まで送り申方も可在候。その次座敷にて一度ゑんにて一送りたるへし。又其下は座敷に一送りまで也。一主人のつかひに罷越又そうしやいたし候事。其口うつしに申わたすハきと聞申計ハいかゝ候。たゝ其義理をよく分別候はん事肝要也。ことはゝ違候てもくるしからず候也。猶以ふしんなるをは主人にて候共さし返し尋申。分別候はん事可然也。又兩使ならは兩人そう者あるへし。上使も在之事候。子細にしたかつて如此也。

一貴人へはいかにめつらしき事なり其此方より申かくる事はしんしやく可申。被仰懸義

をは御返事可申也。

一物をもちて貴の御前をとをり申時禮義無之。手あきかへり申時は兩の手をつきて罷出なり。但事によるへき也。

一はいせんの事。首は目より高く持候と也。たゞ我いきのかゝらぬほとにもちたるかよく候。又下さまへは少ひきくもあるへく候也。

一膳は五四三二とあけ候事。本式にて候。少人わか衆はいせんの膳をすはる人そと手をそへたるかよく候。あかる時も同前。但貴人ハ其御あつかひ無之義也。

一初こんのさかつきをは家の宿老等隨分之輩もちて出可然候。但初こんのをわか衆など持て出たるハいかかにて候。ちと年老たる人可然候。其後は不苦候。猶以初こん先以三ツの心へたるへし。二めにくはへたるかよく候。但末座之衆。人はくはへすとも三まい

らすへき也。てうしに酒なくはくはゆへし。一相伴之事。上座を見合。われより上に座し候人よりはやくはしを取てめしをくい候計如何。上次第たるへし。但二番めよりは不曰くるしからず。湯つけは先かうの物よりくうへし。めしハ中もりよりくうへし。あへませなどよりくうへし。但時宜によるへし。あまり手とをき物。かたく候はんやきもの。はさみにくき物。しんしやく有へし。ことに兒若衆不及申候也。

一ゑほしをきて御しやくの時。ゑほしかけをすへし。又ひもかはをは小袖とすはうのあひへおさむへし。上下をきて御とほりなと参り候時も。ひもかわをまへに如申候。おさむへき也。

一貴人の御盃を下さまへくたされ候時は。御しやくの人つかさねなから手にすへて被

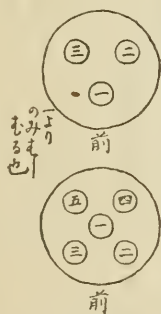
下候人の前にて御盃を取。上手にすへて出へき也。又御盃銚子にをきて出候計ハ公方様攝家門跡などの御事歟。又せこのてうしはかならずさかつきを銚子の上におきて被出候を。たまはり候人にすゑなからさし出候。兒わか衆へはさかつきを取て酒を入れてまいらせ候。其時はてうしを下に置て右の手をもそへて出し可申也。又下輩のさかつきを

をめし上られ候時ハ。いたゝき申事有へからす。そはよりも前のすはりたるたいにすへてまいらせられ候。御しやくも如此すへて參候。其時めし上られ候輩罷出ふかく御禮申也。同はいの人もさし候盃は。かくにすへす下にをき候を酌の人すへて出し候也。

一めし出候時くわへ候事は三も五も被下候時の事なり。其時くはへ候ぬハたまはり候人くつろきなくそ如何候。又一つゝにて次第

に罷立候時てうしに酒候ハねはそと入候やうしてくわへ候事わろく候。銚子に酒なく候ハ、御とをりに參候人の透々にくはへて可然候也。めし出にはうはい衆のさかつきなれはいたゝかす。をく時も目前したをもすてす候也。但下こにて候を御しやくたふと入申候はゝそとかけにてしたをすて、前の所に置へし。

一三ほし五ほしのさかつきの事。めいゝにいたたきてのむへし。臺共にいたゝく人候へ共それはわろきと也。金仙寺ものたまひ候し。次第にのみてもこのことく臺に置へ次第如此し。





し。

貴人の御さかつきいたゝき口をそへ。さてうけたまはるへし。一段一かとの禮義也。又師匠之事敬申事勿論也。兒若衆の御盃同前。其外口をそへうけ申事有へからす候也。惣別さかつきのたいの事。色々の木草花鳥人形以下の作り物在之。そのあひたにさかつきをくるゝ也。さのみ盃の臺の時はしけく式たいあるへからす。さらへはしやくのはたらきもめいわくたるへし。殊臺のさかつきは末の献に出候事にて候へは三度までの禮。式たいは如何候歟。さてたいをゝし上て先さかつきのあり所をよく見て臺を感じ候様にて。いかにもうゝ敷やうにしてしつかにさかつきを取あけて。人のさゝれ候ハ、いたゝきてのみ。をく時もよくもとの所にしつゝとをくべき也。又しやくはか

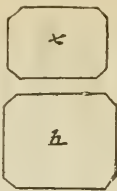
た手にてもちて。一方にてうしを持。さし次第にまいらせ候也。又一段大なる臺は兩の手にてもち。てうしをハ下に置。先たいはかりもちてまいらせ。さて銚子を取て參候也。

一折かはらけ物上座に在之をいかに座敷廣くとも。さかなあり所をはそのまゝをき。はさみてまいらせ候也。又亂酒の時は足へからす。又食籠ハ本式にハ不出ものにて候也。けい肴ハさかつきさし次第にまへのみたる人參する事勿論に候。され共若輩ハしんしやく有へき也。

一盃いたゝく事。人によりて淺深有へし。一せんすへやう。時に至てかはる事候へ共定たるは此分候。

本に七ツ御湯つけ 二に五ツ御汁二ツ  
三に三ツ御汁二ツ 四に三ツ御汁二ツ





前

七のせんにハ一段の事也。まれの儀也。

御成之時御繕いつ七までまいる

候へ共御相伴衆ハ三まで参也。

あけ申時ハ七より次第にあかり申也。

五に三ツ御汁二ツ 六に二ツ御汁二ツ

七に二ツ御汁一ツ 八に二ツ御汁一ツ

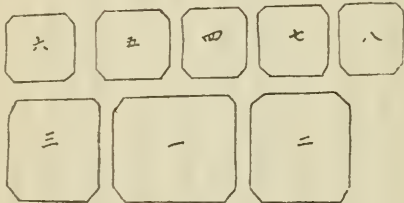
大かた如此。

一すへかはらけの事。きとしたる時は必出候。

初こんさかな出候てやかて出候。三と入たるへし。

重ねてもちて出一ツ、わきに引申也。是は酒のしたみを入らるへきとの事也。

さ候とてしたみをたふくとうちまかせて入らるゝ事は無之。すへかはらけをは後まで其まゝをくへき事にて候を二献めにとられ候也。



前

又八までまいる事も如此也。惣別御汁いろとハ引

しる也。膳とハ申ましき也。御まハリ二にてもす

ハリ候ハてハ。膳さハいふましき也。

又三五も此次第也。引も

のおほく出候も此心にすへ申也。

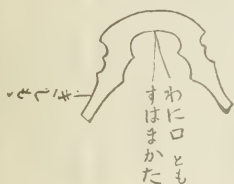
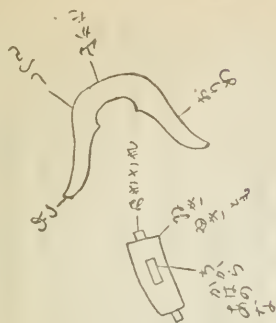
一はうのものと申もした入候事也。これははれの時は面へは不出ものにて候。女中むきにてかならず出され候。一段けつこうなる

して輿をとをすへし。

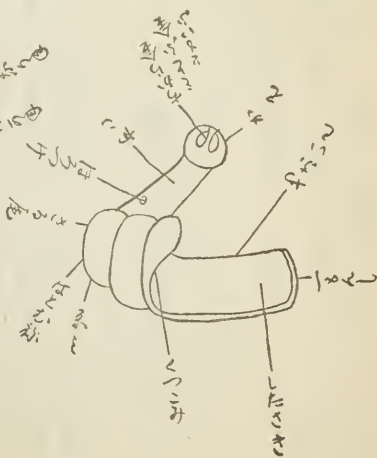
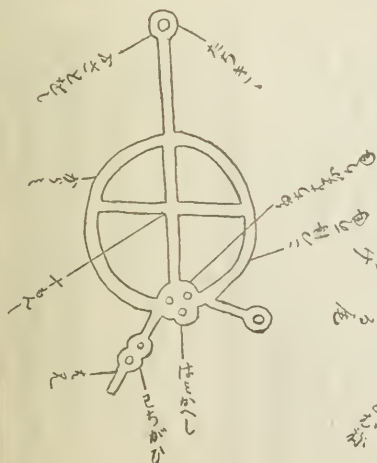
一鷹之事。いかに遠くとも見かけ候は、下馬勿論なり。かちにて行合候とも。先五間も十間もこなたにまち候て鷹をとをし。禮義候てとをるへき也。

一鍵長刀をし出で禮義候出事本儀にはあらず候。万一太刀もち合さる時返禮として進上

一くらの名どころの事。



一あふみの名どころの事。



此等之名所の事一所に二も三も在之と云  
在之。一へんに心へらるへからず。あふみち  
から金に名色々其さた候。さすかとも云説  
候。これハ古哥の心にて申候歟。むさしあふ  
みさすかといふ事。あふみをよせたる事  
也。又くらにものりあひまはさまかり等の  
名候事候。それは具あひの事なり。

する事在之候。なにとなくよこたへかくと  
申。やかて立へき也。右へ立へし。又座敷に  
て長刀をすみなど可然所にたてゝをき。か  
くと申出事も候。

一せむる馬にはたれにも下馬有へからず。但  
せめ申候間御免あるへく候とも可申也。又  
馬をせめらるゝ所をはあしたなどはきたり  
共ぬきこをるへき也。

一鷹をすへて御めにかくるハ先むちをぬきて  
もち。左のひさをたてゝ面をみせ申なり。さ

てたゝさきの羽のむちのさきにてなをし  
又尾にも左のかたよりはしめてむちをあつ  
へし。又尾の下へむちを入。こふしをまへし  
てうしろをもみせ申へきなり。

一同わたす時は如前みせ申て後。糸袋をはう  
け取人の付候やうに出へし。鷹をすへ。右の  
かた手にてときて出す也。其後むちのもと  
を下におきて出し。さて大をのさきを人さ  
しゆひに一巻まきて。其手をたゝみに付て  
うけとらすへし。

一同うけ取人とのことく出したる餌袋をとり  
て付て。むちをはさしても。さゝてもくるし  
からず。右のひさをたてゝわたす。大をのさ  
きをとらんとすへし。渡す人は上をとらせ  
んとするあまりに。禮義して鷹をとらせ候  
事惡候。其まゝ人の手の上へ我右の手をこ  
して。やかて人さしゆひに一巻して。さて左

の手をこして請取へし。其まゝ身を左へひらき。左のひさをたてむちをとり上。如前尾羽をなをし。さて鷹の取やうを尋ぬへし。むちのかたをつき禮をして立へき也。ゆかけをはかけにてさしていたすへし。

一ほこをゆふ事。木すゑの方を我右へなすへし。

一鷹の鳥御めにかくる事。野山にても尾の方を人の方へなして。かい口を上へ兩の手にて羽かひの上を持て御目にかくる也。又たいにすへて參候とも。尾の方を人の前へなしておくへきなり。

一鷹のむち凡二尺五寸也。大鷹にも小鷹にも同前。但小鷹にはなかく三尺五寸にもする事あり。野にては長をよきと也。惣してむちの長さ不定。しかる間本をそきたるやうにする。一にハ尺不足と云心といふ義候。在候

と也。

一ほこに鷹をつなきて。餌ふくろをはたかの左にかけ。ゆかけとむちをは右にかけておくへし。又むちゆかけほこにかけぬも無別儀。ゑふくろはわなの所をかけて置へし。

一主人貴人へハ大をゝ卷なから右の手に大ををすへて鷹をわたし申也。

一かりほこは我ちのとをりにゆふへし。

一ひつしきをほこたれにするは毛の方をおもてへなすへし。

一餌袋もをきゑさす事。大鷹にハおん鳥。兄鷹にハ女鳥をさすへし。何も鳥のはらの方を我身の方へなし候也。

一鷹の名ところ。大かた此分なり。ことゝく毛にも羽にも名在候也。

鷹のゑつ候へとも別に有之間不書。同たいはこの寸法之事。



へ入分をはとからかし候。其内一本はかり  
さき。まるはしのさきのことく。くろ金にて  
かけて何方にても其串にて串のあなをつき  
て。のこりをもたつるなり。

一幕をはるといふは出陣の時也。うつといふ  
は敵對陣之時言へし。船中にてははしらか  
すと云へき也。うつと常不苦候也。

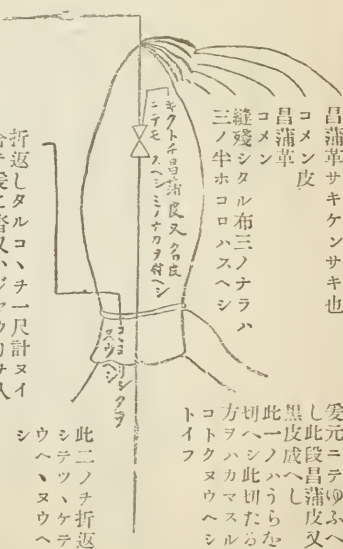
一幕一もんしにうつ事いむ事なり。右之方を  
少うち返して打也。又うちつゝくるをは具  
足のさねのことくいかほごもつくへき也。

一幕の出入候事。一段分別ある事也。左右のは  
しをは袖と云也。袖より出入へし。又仁鉢に  
より中よりも出入在は。かまへによるへし。  
先出時たゝみ上て出へし。入時我前へそと  
まくりて入へし。

一上の野をはかふりのともいふ。又甲のとも  
云。又其次をは勝のとも云。其次は中野とも

爰元装束皮  
付へし

折返しタルコ、チ一尺計ヌイ  
合テ爰に沓又ハジヤウリチ入  
ヘシ又此チ長ク殘ノ猿ナトノ  
時ハ馬のヌカチ入也故實也



云。其次はもん野とも云。すそをは沓の又は  
しはうちとも云也。中三のを中ともいふて  
もくるしからず。上下をは上をかふりの下  
をしはうちと云へき也。流々在之事候間一  
方向に難すへき事如何。すそをは地に五寸  
はかりたまる程に打てよく候。幕は四堅五  
横を表する也。左その糸にて男衆一日々中

にこしらゆる物也。口傳在之。

伊兵太

貞明花押

貞親 伊勢守

古勢州ト云是也

貞宗

兵庫頭伊勢守  
金仙寺ト云是也

貞藤 備中守

貞親弟

貞運

貞孝弟

貞明

備後守  
又七兵太夫永正  
ノ比ノ人

右伊勢備後守貞明自筆也古筆可貴者也更  
寫之畢

以宮内省圖書寮本謄寫校合畢

# 伊勢六郎左衛門尉貞順記

一三方の盃は御賞翫之時也。三方と云事は御  
四方賞翫けに參り候げんしやう四方にあく  
るなり。御すへりになり重て參る事なき也。  
御はした衆四方を一方ふさき用候三方と申  
此説誤也。穴四方ニ一ツモナキタクキヤウト云也  
也。又くきやうとも申也。

一かはらけの事。平高。三度入。あいの物。五度  
入。七度入。十度入。口傳。

一おもひさしと申事。やくそくして盃をさす  
事なり。くてんにあり。

一おもひかへしと申は。人の盃をいたゝきて。  
又其人にさすことを申也。

一おもひ取といふ事。人の吞たまふ盃をこひ  
取たまはる事也。

一つけさしと云事。約束もせずして御酒給候  
て人に遣候もつけさし也。亦我一ツ二ツ吞



殿中ニテ柄ヲツ、ム事ナシ

一 てうしの柄を包事。正月廿日まで包也。又むこ取よめ取に包候。其外に包事無之候。

一 御酌に參候時座中の人又ハ貴人之方より盃被下候は、何方へもてし御座候へど申事もあり。又我と盃目上申事候人にさし候時はかく盃を兩方の手に持候てさし申候。人の前にて盃いたゝき參らせ候。其後てうしを取申て御酒中也。

一 めしいたしと有時ハ盃一ツにて諸人にのませらるゝ事也。一段ノ貴人ノ時御通ト云。奉公覺悟記ニ見。メシ出ト云モ同シ事ニテ少サケテ言詞ナリ。

一 御流と申はかはらけ餘多をかせられ候て一人前一ツつゝ出さるゝ也。それにて御酒を給り其かはらけ持て罷立候也。

一 女房へてうし渡事。てうしをたゝみの上に置。左の手にててうしのおりめ持候也。其御女房の御酌其まゝ參らせられ候様に渡す

也。

一 茶のきうし。右に持て左の手を天目にかけ持て參。いつものことく居さかり。きこしめしはて候て。御天目取申候時左にて持。右の手を天目に添持て罷立候也。

一 しきろうよし。こはんわろし。

一 膳を上ると申よし。後はくたすともごとくも申なり。

一 あんとん持て參候事。賞翫の御方客居に御座候はは左にて持候て參り。右の手を下にそゆるなり。主居御座候時は右にて持て左の手を下にそゆる也。らつそくも同前也。

主人ならせられ候事。

一番に御手かけ三方可然候。

二番に式三献參り御盃皆下シて。

三番に御ひきて物。

四番にしきの雜煮參り候て御酒三こん。



それより御ゆつけ上申候て數遍御酒上候て御てんしん上り添肴上候て御酒たるへし。それよりしきろう三方なとたるへし。

一座敷之三ツの物と申事は。太刀おりかみに書狀相添時之事にて候。

一ふたのものゝ事。先渡申候人の方をしやうしなをし置候てそこにて一禮意趣有て扱渡なり。請取候人請取候て上座に向てたゝみに置候て一禮有也。

一ふたの物に錢などにて候はゝ横に置。扇は十文字にたてに置へし。

一箸はいねのはらはみたるを學ひてけつり候なり。てんしん箸は一尺二寸。御食の時は一尺一寸計也。

一祝言の時渡す刀の事。下緒にて刀の柄をいゝ候て渡也。此心は袋に弓をおさめ劔を箱に納る心のくわんねん也。

一御菓子盆物にすゆる事有間敷也。柳枝の先左になる様にうつなり。かいしきする事もあり。又たゝくるしからす候て。

一たてゝ渡す物。尺八。扇。小刀。小鞭。

一御酒のかんの事。九月九日より明の三月三日までなり。

一落花の盃テテンジン三皇二皇何も亂酒の時之事。盃ハ平高なり。高信に必參なり。是は臺盃本儀なり。臺の作黄花色吞人の右にあるなり。臺のなり

はすはま木黄いろ也。

一臺の二皇の時三かきなされ候へは金の盃に詩を書。銀の盃に歌をかく也。吞時は詩より被下始也。吞様ハ二ともに參り候也。但金の盃ハ花の有方也。

一三皇の時。召出被下候はゝ。盃を三ツ共に吞む。しろの上にかさね。臺の下にする罷立也。兒などの酌には銚子も我取口傳也。

二三皇の吞様の事。上の方より吞始めて口に向て吞へし。末座より上座に向候はゝさきの盃より口廻に差へし。口傳に有。

一五梅の盃は右の方より中のしん盃不吞。四番にて二度吞納也。

二亂酒に成て盃の禮六ヶ敷時は酌取に心得有  
事也

一蓮葉の盃は蓮の花見にかきりたる呑様。是又口傳也。

一盃を始申時三度禮は仕る也。そこにて盃始  
るなり。初こんハ約束不仕候也。  
いたゝかすの  
めと云事也

いと云事也

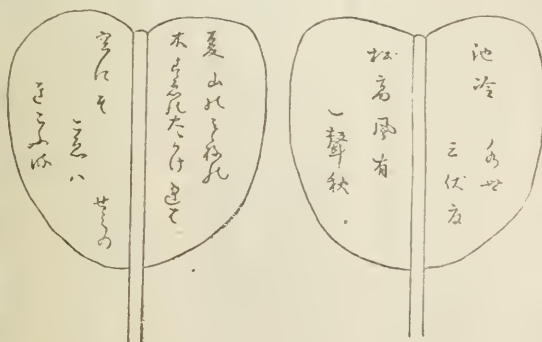
一主人よりも御盃被下候時は盃をとらす。何  
もに禮を申候て御盃被下候人に御禮を申候  
也。是はいつれもまつあけ申へく候へとも  
御盃にて候間被下候と禮を申事也。

一盃の露我末座に上座の手にてすつるなり。

一兒御盃被下候時は取頂候て下をしつかに吞

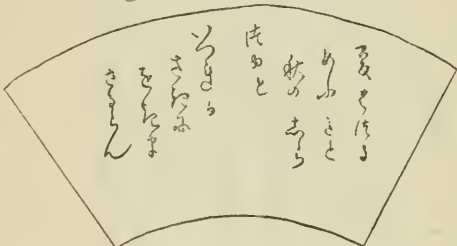
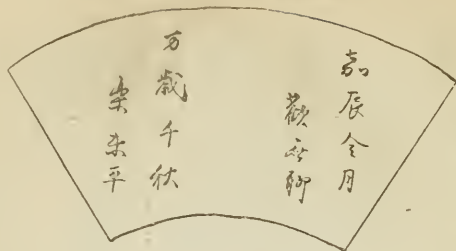
候て御酒請給候也。

一團扇子物を書様々事如此候。



のはらにすへ。扇なとにすへ候也。臺にすへ  
へからす。但躰にもよるへし。

一扇に物を書様之事。



一入道衆ははかまはきず候也。刀は二ツなか

らさゝれ候也。

(朱)二ツナカラトハ腰刀ヲサシ。  
太刀ヲ持セラル、コナ云也。

一むきおしきの事。再進なければ六枚重て出  
候。ケ様の時は心得て被下可然候也。

一あら木の弓披露之時は渡人弓の下筈を右に  
てする。上を左にて取すくに渡へし。内竹を  
人の前に成て可然候。請取人弓の本を左に  
て取。上を右にて取候。一禮候て可罷立候。  
一すはうはかま小袖一重渡候事。いち下に袷  
其上に小袖。その上にはかま。其上にすはう  
を置候て。小袖のゑりの方を人の右の方へ  
成様に渡中候。又すはうはかま計の時は。袴  
のおりめの方人の前へになし渡中候。

一我主人之文を他家に持て參候は。文箱より  
取出候てそうしやに渡候。若又封の文箱に  
て候は、其儘渡中候。

一懸繪見様の事。三幅の時は中尊左右と見る  
へし。又二幅の時はおし板の左を見候て。扨  
右を見るへし。

一みすの掛様。座敷にては敷居内に懸候。卷上候時は内へ卷候てかきにかけ候。みすのふさ同かきは内に候て懸たるかきさきは外へなし申候。

一神前のミすは敷居外にかけ候。是も卷上候時は内へまき候てかきにかけ候。かきハ外に候て掛たるかきさきハ内になり申候。

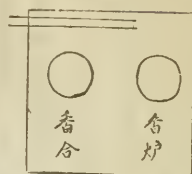
一火鉢の事。十月朔日より明年の三月二日まで御座に置候也。火鉢持參候事。炭を置上に火を置候て火鉢の臺にすへ上座に置いて足ひとつ有方を下座になし候。火筋は足と臺との間に置候。取候方下座へ成候。又臺は板にても仕候。又たゝみのへりを織筋などにて取候ても能候。おもき臺は火鉢と臺と二人して持參候。火鉢は誰にても二人の中より持出候。たいのなりハ火鉢のなりに隨へし。四角にも丸くも火鉢は鋪名などにて仕候。

又炭を置候時は先火はしにて火をのけ候て其中にすみを手にて置。扱火筋にてまはりの煨を上にとり上候て火筋を本のこくく置すみを持て罷立候。摠ては上座に置候。又客人亭主の前にも時によりて置候。

一幕出入之事。内へ入り候時はそとのかたへまくり上候て入候。晝は日の物見の下より可出入。夜は月の物見の下より出入せよと有。されとも頼朝公より結城七郎弘光に被下候本書には正中の間より入て右の脇へ出よ。若又左より入て正中の間より出よと有。同右の脇よりも出よとあり。又右のわきよりは入事なかれ。左のわきより出事なかれといへり。次にハ只の出入は右に注申こくにて候。又軍陣の時は先しは引の維左の手をかけ。同右の手をかけ幕をそとへまくり上て入へし。又出候時は是もそとへ上

候て出候なり。出入ニ付色々様躰有之儀候。  
一方盆に香爐。同香合。同香筋置様の事。

御前



一食籠を座敷へ持參候事。かけより蓋を取て  
出たるか能候。又蓋を仕候て箸を置候て持  
參候て人の前に置候て。蓋の上に箸を折敷  
共に取てをき。扱食籠の蓋を取て箸を常の  
如くすへ。箸のすはりたる小折敷を蓋中へ  
入て持て立申候。如此兩様に用意申候也。

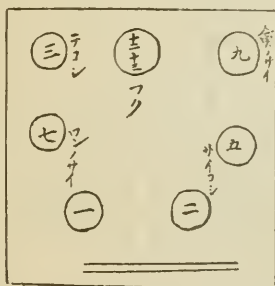
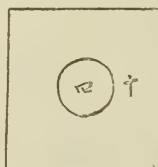
一弓渡候事。右にて弓の握より少上を持。左に  
て本筈を持て渡候。請取候ハ渡人の左右の  
間を左にて取。右にて本筈を取候也。征矢は  
左にて矢の中程を持。右にて下を持。ま横に

持候て渡候。請取候は、渡人の左右の手の  
間を取候。空穂も征矢も渡様同前也。

一手にて喰物之事。

鷹の鳥 せき飯 まんちう かうし焼 き  
んとん 肴のかまぼこ

一五ツ菜受用之事



して右の一ツを向合候。頭は上座になる。はしになる方の魚を一ツは右を面に成様に可入候也。

一魚十の時は腹と腹とを合て入申候。是は鯛又ハ鯉鱸此外の魚の頭をも此分候。大畧入候か。但流々によりて入様相替候。色々口傳有。

右本書に有ハ惡し。十ヲの時も上座の右に九ツは腹をなし申候て右の一ツにて向合候。頭は上座へなし申候かよく候。

一鯉などは時によりて川の藻を皆敷に仕候。すゝきなども同前たるへきか。

一鰻には藤の葉をかい敷にせられ候也。(朱)鮎  
フクラギ  
ヲフクラギト云。伊勢  
國ナトヨリ出ル  
ノ別名

一大成鰻は頭の方を折のはらへ成て尾のかたを合て入候。少鰻ハ何共入候。

一鰻はうつむけて入られ候。是も首のかたは

人の左へ成へし。いくつ入候共此分たるへし。

一王餘魚カレの事。鰻ととうせんに候。いくつ入候とも此分たるへし。

一魚を一かけ二かけと申事なき事にて候。一ツ一ツと其敷を申か能候。

一精進之物を餘所へ遣候はは。先鰻頭にて候は、かい敷は五葉松の葉を敷て。まんちうを積て上のまんちうにも松の葉を間にさしちらしはくなどおかれ候也。(朱)折ニ箔ニテモヤウヲ畫ナルヘシ

一海松を遣候は、かい敷に板葉を敷候。是も能見はからい候て折に入也。

一豆腐を遣候ハ、かい敷に篠の葉などを敷て遣候。折に入也。心安方へは盆か重箱也。

一苟弱を遣候は、是も篠の葉を敷て遣申候。

(朱書)惣別肴ノ一ツ物と云ハ魚を切らずして丸のまゝにて煮焼したるを云也。此條さしみの事とあれとも。さしみ計にて外の肴出候さきハさしみをさして一ツ物



と申さ云事也。

一御肴の一ツ物之事。一ツ物と申候は、大さしみの御事也。食のさいに被出候時はさしみと申候。自然別に何もなくなさしみはかり一ツ前に被居候は、御さかなの一ツ物と可申候。其儀受用仕に右にて箸を取。左にて酢鹽ちよくを取上候て。魚の有所へ酢の入たるちよくをさし寄候て。箸にてはさみ候て酢につけ。箸ちよく共に口に寄候て可被用候。酢に魚を入はさみ上申候へは。膳に酢落候間念入喰也。

一酢取候に小兒を仕候事。昔は毒を酒にませ候ニ付。酌取候人御座之真中にて。てうしの酒を左の手のほらに入吞申候。袴にて手をおしのこひ候て參らせ候也。

一湯けいらんの事。常の根にけいらんを作てゆて、ゆともに出さるる也。其後たれみそ

のしるを出也。其時かさを取。汁を請。前の方へ居申候。若前の方せまく候ハ、脇にも置申候。けいらんの入たるもの。なほしなと仕事なき事にて候。

一花の事。自然草花木花と被持候は、草は左

木花ハ右に持也。又白花は左。その外の花は

右に持なり。渡候時は左より渡。右を渡なり。

一天井折之事。是は六角ニまけたる物也。足はナルヘシ。此箇條見合スヘシ。

三ツ付也。そこ二ツ也。下の底ハほけて有

也。上のそこより上に餅を積候て餅の間ニ

にきそくをさし申也。扱それを水引にてか

らけ候て有なり。御座に持參候て結をひと

所とかれ候は、皆々一度にどけ申候。其時

きそくにて菓子をさし候て菓子入に入てき

そくを一ツやうしをそへ候て上申候。箸を

取寄はさみ又はきそくにてさゝれ候事有間

敷候。必々ひらかれ候事あらは。ゆひめどか

れへく候。今時此心得無之候由ニ而候。折ハ餅漬候折二ツ。木の實盛たる折二ツ。又魚の折二ツ。鳥の類のおり二ツ。しほけの折二ツ。必々如此一對つゝ可有。ひらき様何も同前愁祝言ハかい敷にて可有心得候。

一瓶子ビンの酌の事。右にて下のはそき所を持。左は下の方に添申やうにして取可申候。

一同かさり様之事。陣中にては床の方へちうの向申候様ニ二ツともにかさり申候。婚入之時は向合てかさり申候。惣別ちうこんほうの事はきそくと申候。

一同酌にくわへはなき事なれ共くわへ候時ハ如常ひさなど其外作法つねにかはらす候。

一ちうのかい敷の事。根は下座之方右の角に根を置也。三ツもおかれ候は、前より次第に日廻りに可被置也。とかく上座之方へ根の有様に置申候。愁の處へ遣候は下座の方

之左の角より根を置。逆ニかい敷を次第にしかれへく候。是も上座に次第に根の方を置へし。かやうに逆に置候へは愁の時箸打申候所あき申候なり。故に常に愁之箸打所を皆敷の根を置候也。左候へは不置候也。是は上座より下り向ての右左の角にて候。

一式三献之時は本膳の二ツの皿の間に折形にのしを包て置也。式三献呑候時は本膳來候時。上の土器三度呑て膳の右の前の角に置申候。又二膳來候時二番目之かはらけにて呑候て一番のかはらけに重て置。三の膳來候時末之かはらけにて呑候て本の所へ重て二ツ有。上のかはらけを取て只今のすへたるかはらけに重て又其下に有かはらけを取。二ツのかはらけにかさねて置て貴人は片手。平人は兩手にて候。

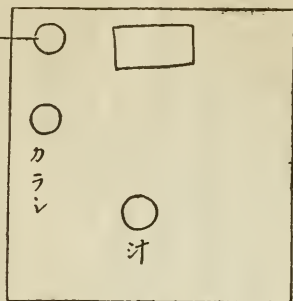
一盃にさんの事。三所おそしと申儀也。是は



盃を長く持てをらぬと云心得也。

一せゐろうそうめんの喰様の事。再進ハ赤せ  
いろうに入て持出候也。喰様人參取候ハ、  
うつりよりせいろうにかへて置候也。

こゝハ再進ハ居れましく候。



山桃

明打敷を膳はたに引かけ候時は箸にてのけ  
られへく候。平人は右に箸を持ながら左右

の手たるへく候。再進持出候時は平人は明  
打敷を兩手にて取宮仕に可被渡候。貴人は  
宮仕にまかせへく候。

一せいろうそうめんにむかしはかはらけをか  
ふせ候。今は杉<sup>杉ニテオシキヲコシラユルト云フ</sup>にてもくるしからす候。

一小袖一ツ人に渡候は、廣蓋へのせ候様に襟  
人に向へし

をさきにして袖すその下に左の手をすけ右  
の手にては小袖のまかりめを持て渡也。請  
取人又左右かいなを下より入て取まはしに  
やりまはして。襟の方をさきになして。左の  
かいなにて此まかり候所を取て立也。請取  
て人にわたさす候ハ、そのまゝひきまは  
すに順たかい申候。<sup>請取時又人に渡さすバ引なほ</sup>  
<sup>也。され共引直</sup>すに及はす。依て順たかふと意  
し請取へし。

伊勢六郎左衛門尉貞順

以宮内省圖書寮本膳寫校合畢

# 貞順豹文書

一ひやうもんの事。梅もへき。るり。ひは。紫にて色えたるを申候。二色を三色四色に見へ候様に染たるはくるしからす候。夫は唯二色にて候間。ひやうもんにてはなく候。ひやうもんをは不斷有之御きんせい。

一紅梅の事。男は十四五裕の事まで着候。其比過候得は無着候。また赤きはだをは依人廿歳計までも着用候。次に女中衆被用儀は格別にて候。別紙委注置也。

一丸すすしの事。是も依仁躰十四五まで被着候。公方様の御儀は不及申候。近九二一等之御着用候。また此外にも御用之方可有之候歟。

一一重すすしの事。同前にて候。是も賞翫候間。唯之人の着候事如何。

一帯之事。さのみひろきをは御沙汰候ましく候。昔は六わりの帯を被用候つる。慈照院殿様之御代より被相留候間。人によりさる儀候。

一丹後つむきの事。紋を付ては被着方も候。白きは可有斟酌。又出家ハ白きも不苦候。一紫うらの事。御きんせいの御沙汰はなく候。但下々の人は斟酌にて可然候。

一大かたひらの時は白き小袖も不苦候。只の時はいつれの小袖も着候。但たり物なとを異相はめし候ましく候。此外い異相そうなる小袖人の目に立候をは不可有着用候。

一かけもへきの小袖。同かけあさきの小袖の事。昔はもつはらはやり申候つる。近來はすたり申候。殿中へも着かけあさき同かけもへきと申候はきぬを染たるにて候。小紋なとをも付申候。

一たり物之小袖の事。唯の人は着候ましく候。  
公方様より拜領仕候得は勿論着申候。りう  
んに着候事如何。三管領其外之大名等へは  
御免にて御用候。

一からおり物之事。三管領御拜領候。此外公家  
にも御給候方候。又管領之御母なともゆる  
し申事も候。是も御免候はぬ間は無御用  
候。

一嶋おり物之事。おもてむきへは不着候。内々  
にては自然着する方も候。地下人專用申候。  
惣別織もの御服にてなきを下にも被着間敷  
候。自然御覽候て御とかめの時は申のへら  
れや有間敷候。

一無紋の小袖之事。畧儀に候間殿中又は貴人  
主人の御前へは無着候。私にては自然可着  
候歟。

一赤根之小袖之事。是も式々の出仕之時ハ可

有掛間候。不斷は不苦候。年寄も着候。無紋之  
類にて候得共是は少々之參會には不苦候。  
一くれなひすちの小袖之事。男ハ十四五まで  
ハ着候。但貴人の御子息等は十七八までも  
御着用候。

一一ツませの小袖の事。是も大畧同前也

一紫の小袖の事。紋を付たるをは着候。無紋の  
をはめすましく候。又むらさきも染やうに  
もよるへく候。ねりなとをこしをあけに染  
たるは猶よく候歟。こしのあき候はぬハ畧  
儀候。又つむきなとを染たるは表むきへは  
不出候。染小袖のこしのあき候はぬをはう  
ら打の時は可有掛酌候。

一梅そめの小袖之事。殿中へも着候。不苦候  
又裏うちの時も可着用也。

一ちやそめの小袖の事。同前。是もこしのあき  
たるか能候也。

一しゝらの小袖の事不苦候。殿中へも着用候。  
同あはせもしゝら猶可然候。

一ぬひ物の小袖の事。男は依人十四五まで着用候。下々の人は不可有着候。

一はくの小袖の事。同前也。貴人の御息御用勿論候。

一あはせの事。何れも不苦候歟。但むらさき色をは可有斟酌也。先若き人には。くちは。ひは柳色。紫可然候歟。又人の好みによりて。ひはた色。玉むし色。きねりぬき。とかげ色。なとをも着候。次に年寄にはこん。あさき。ちや。又白あはせ紫相應にて可然候。おり色のあはせ御きんせひの間それに依てえり袖なとをしほりて着用候。又しゝらのあはせにて候得はしほり候はね共其儘用候。  
一はたんのあはせの事。四月一ヶ月計被用様に承及候。これも十四五までの事にて候。

一白き小袖の事。本人は不可着用候。公家ハ御用候。

一かた身かはりのあはせの事。是も十四五までの事にて候。

一あさきうらの事。紫の小袖。又はあかねなどのうらには付る方も候歟。是もおし出し式々の參會には可有如何哉。

一うらの付たるかたきぬの事。らうせきなる儀も人前へ著候事。ゆめく不可有之候。

一袖はその事。一重袖はそは昔はやり申候。近年すたり候。又うらの付たるは慮外之儀にて候。袖はそも布を用候。きんしやの類を用候事不可有之候。

スワウ上下。同シ色ナルチ上下ト云。

一上下の色はかちん又はあさき先可然候歟。又むくのみ色も能候。此外のいろは主のこのみにもよるへく候。乍去式々の參會にハ唯かちんあさきなど可然候。年寄にハむく

のみ色もよく候也。

一上下の紋もちいさきか可然候。オホキナノ大紋は慮外なる儀候。但若人は少大なるも不苦候。

一十徳も紋を付て可用候。紋のなきは畧儀にて候。是主人社參の時は馬上の供衆いづれも十徳を可着候。我家の紋を可付候。

一かたきぬはかまの色も上下と同前也。

一こおんそには大略織物を用候。おもてむきへ出候ハぬ故に平人も此分にて候。

一上さしの袋も同前也。平人も常用申也。

一すゝしの帶の事。男も夏は可用候。さりながら唯常の帶も可然候。

一かたひらの事。唐布をも殿中へも着候。不苦候。唐布御きんせいの無御沙汰候。

一はくのかたひらの事。男は依人十四五まで被着方も候。

一すりの小袖の事。是も依人跡十四五まで被

遊候歟。

一くろむめのあはせの事不苦候。殿中へも着候。

一かたすそを無紋にして。こしを白くあけ候は。むもんにて候はねとも。何とやらんいさうに相見え候間殿中へは如何。

一白き小袖のえり袖計にあいの花にて紋をちいさく書て着候。是は白小袖にてはなきの由にて着する人も候。是もおもてむきへは出さる儀にて候。私にての事に候。

一めゆひの小袖の事。内々にては不苦候。これも式の時はむやくにて候歟。

一地をきちやにして紋を所々に付。それを紫又はもえき杯にて色えたるは不苦候。又地をもへき同淺黄にしたるも同前也。但是も式々の時はむやくにて候歟。

一すはうとはかまの色かはりたるを着候事略



義にて候。但幼少の間は自然は不苦候歟。

一かたきぬとはかまの色かはりたるは内々にては不苦候歟。是も式々の時ハむやくにて候。

一めゆひのかたひらの事。慮外なる物にて候。

可有斟酌に下々の者常着仕候也。

一もめんはかまの事。人中へ着候事不可有之候。當時は被用候。本々なき事にて候。

一もちのかたきぬの事。六月七月之間は可被用候歟。但夫も心安き參會の事にて候。貴人の御前へは可有斟酌也。

一地紋の上下も畧義の様に申候。只ぬいめ付可然候。

一上えりの事。自用之儀候歟。只二えり可然候。兒若衆等は色々にて候間不苦候。又ひやうじやなとは物をあまた着候はんためにえり計にわたをうすく入候ていくつも重て着

候。是もえりは二えりにて候。

一すきすほうの事。もとは六月中計めし候つる。近來は六月七月此兩月着候。八月朔日よりあつすほうにて候。すきすほうは越後布の事にて候。さゆみ又はもちなとを殿中へめし候はんするかたは人によるへく候歟。女中衆にも中臈ハこかうしをはめさす候。こかうしはくわしよくにて候。自然中臈の中に上意に相叶候人。ゆるし申され候て御用候。またおり物かうしにて候はて。すちすたれなとおりたるは。夫は中臈衆もめし候。こかうしをめさす候。人によるへく候。

一すゝしうらの事。是も女房衆夏計きられ候。男ハ不着候。

一ぬき白のはたの事。男は十四五まで被着候。女中若き間計被用候。

一おなし色の小袖にて候得共腰のきき候は賞

袖にて候。こしあかぬはいやく候。

一鹿子小袖の事。是も貴人等の御前へは可有如何候歟。かたひらの事は中々不及沙汰候歟。

一紅梅の事。男は十五又ハ十六まで着候。其頃過て候得は無着候。女房衆は廿八の五月五日の午翹までめし。此已後はめさす候。是は公方様にての御法にて候。惣別年々にめし。そめられ候事ハ十一月卅日よりめし候て明年五月五日までにて候。毎年此分にて候。

一かけあさきの小袖。同かけもへきの事。昔ははやり申候。近年ハすたり候。殿中へもめすかたも候。くるしからす候。

右一卷依御懇望如形注進之候。但他家之覺語ニ相替儀可有之。不可被外見候也。

伊勢六郎左衛門尉

天文十七年十一月十八日

貞順

以東京帝國大學圖書館本謄寫以宮内省圖書寮本校合畢

續群書類從卷第六百八十八

武家部三十四

伊勢貞興返答書

すわうぬきの事。

一各ぬかれは。舞臺へ持て出てをき候。ぬきて  
なけ候事有ましく候。翌日太夫その外座の  
衆もちて廻候。私にても同前。口傳。

御能乞候事。

一公方様にてハ。伊勢守役にて候。能組かね共  
あんなひ申候。なんはんめにたて申へき由  
申候をかくこにてこひ候。その外御機嫌次  
第になんはんも乞候。又なん時にても。座衆

のこらす立候躰みえ候とき乞候。口傳。

弓征矢請取渡事口傳。

野太刀うけ取渡。前々より如此之道具  
人に出候事。

一まれなる事に候。つかをさきへなし。はを人  
のかたへいたさぬなり。請取人ハ手下々々  
をうけ取なり。頭をこしてまかり立。故實口  
傳。中半太刀あつかい同前。

長刀出す事。

一むねを上へなしまいらする。奏者の時も又  
座敷にて人にいたす時宜口傳申。



鍵。人にいたし候事。

一なき事なり。さりながら出候事候ハ、取あつかい口傳申。

一虎豹の皮。折に入やうは。二ツに折候て。かしらを上になして。よこさまに御めにかかけ候。又かしらの方をみせ申てもくるしからす。

一ひはを人にまいらせ候にハ。人の引時のやうにいたきて。くひを左の手にて。たてに持て。右の手をはちめんの上をこして。いその方をかへて。たゝみにたてゝをしまはして。ひはをあをのけて。海老尾のかたを左に成やうに可渡。口傳。ひはに海といふ所あり。

小野すわうたゝみやうの事。

一下かんを上になす。袖ハ兩方へ折かへす也。口傳。

主人へ御腰物。御扇。はな紙まいらす事。

一御腰物ハつねのことく。はな紙の上に御扇を置。かなめのかたをさきへなしてまいらせ候。口傳。

はな紙折やう。

一公方様のもたせられ候やうたいおりてみせ申候。近代はいろ／＼にたゝみ候てもたれ候。本儀をしり候得は。それにしたかひ。何やうにもくるしからす。

金襴段子島織物以下つゝみやう。

一金襴段子ハ。からのつゝみたるやうにてよく候。折にすはり候て可然候。板物つゝみやう口傳申。

こしよせの事。

一こしの左あかり候。右は下て。女房のこしは。右あかりなり。めし候て後。こしをもと

御たゝき候時。ゑんより兩人かきおろし候へは。こしかき請取候。

公方様には。御こしかきはかりあつかひ申候。女房衆めし候ときは。こしそへそはむさかしこまるなり。口傳中。

こしのよけ方。

一こしをは。道の中をとをし申候。又馬ハみちのわきへとをり候。ほそ道などにては。馬を別の方へうちのけて可然候。ことに女房ことなどは。尙以此分に候。等輩の時。こしと馬との禮の事。先こしよりおり候かよく候。其ゆへハゆるしなき人。こしにのる事ははかる心にて候哉。是は平人の覺悟候。口傳。

かたきぬはかまたゝみやうの事。

一かたきぬは。下かへを上へなしたゝみ候。はかまは二ツに折て。うしろこしを上へなし。かたきぬを上ををき候なり。

一菊とちは。ぬいめをすくい候て。いとにも

とち付候。またそくいにても付候。雨のはし。そくいにて付候。ひも革の色。黒梅むらさきかわきの國革能候。くろ梅尙以可然候。

よめむかへの小袖すわうたゝむ事。

一別にかはる事なく候。三重五かさねも遣候。すわうハ一具にて候。

ゑほし刀扇たゝうかみをく次第。口傳申候條みやつかいの事無別義。口傳申候。祝紙出事。

一紙のうへにすゝりをき候。又人にまいらせ候すゝりのうみを。わかまへになして人のそのまゝかき候やうに渡候。

妻戸の事。口傳。

しとみの間とをる事。

子細同前。口傳同前候。

ひやうふたつる事。

一上に金屏風先上座に立。其外次第々々にたつる。下へ入々かさねたつるなり。

御前へ扇さすや否事。

一なにても役の時ハ。ぬきてをき候。つねにはさしてもくるしからす候。口傳。

すわう引の事。

一やかて其座にてハはかまをも御引候ハ。めしつかへかつく。但こすわうにこはかまなどの時は。すわうはかり御引候へく候。又こはかま共にも候ハ。はかまも御ひき候へく候。人によりまた當座の時宜によるへく候。

粥たまはる事。

一本式の時無之候。連歌または祈禱。或家參會には在之汁なとかけ候事あるましく候。又公方様へ御粥。

さいはん引之事無別儀候。口傳。

主人御てうつかくる事。

一はんさう。たらい持參の事。たらいの中にはんさうを取出して。みつをまいらせ候。あひのきれ候はぬやうにかけ可申候。又手のこひハ手に取候はて。臺ともに主人の右之方へをき候。大略此分にて候歟。口傳。

湯つけくひやうの事。

やない箱の拵之事。

一やないはもち候事は。公家衆元服の時。かふりもとゆい以下すへられ候。又御たんしやくなともすへられ候。又人の中陰とふらいの時。經なともすへておくり候。木の數てうは吉。はんハ不吉。重半により吉凶有之事候。口傳。

主人御太刀持之事。

一主人の左の方に參よき也。太刀の持やう口傳。

主人より御太刀御腰物たまはる事。

一太刀の上に刀を置いて被下を。一度に左右の手にてとりいたゝき申候。口傳申候。

御太刀持て。御酒たまはる事。

一同名其外身よりの人に。御太刀わたし候て。御酒たまはる可然也。口傳。

引合。鳥子。杉原以下折に入やうの事。

一紙のきりめの方を。さきになしてすへ候。杉原ハひもにてゆひ候て。上に扇板の物なとすへ候。又五束も十束もつかひ候事。しるしわけかたく候。口傳申。

北上座之時。盃出しやう。

一すこしすみかけてをきて可然也。

大なる盃の臺の時。酌取やうの事。

一銚子をもちてまいり。下にをきて。臺を貴人にも主人にても。御前におきて。主人貴人御しきたい御禮すみ。その時。御酌よりてま

いらせ候也。

主人御酌の時。くはへの事。

一其家の年寄又は一そくの人。くはへに罷立候。

みすのかけやう以下。

一條々口傳申也。こまるとは釣。是を云也。

猿樂。田樂舞に召出之事。

一酌の覺悟口傳申也。

能ほむる事。

一殿中にてハ伊勢守役にて候。すゑのこい能などは。伊勢守御前に候はて。能はて座衆たち候へは。御相伴衆。公家衆なども御こひ候事も候。これに諸家懸せられ可然候はん歟。

太刀板物以下をへわたす事。

一先太刀を下に置。左右の手にてそひ候物をさきへ渡。子細を申。後に太刀を渡候て可然候。

打太刀請取渡事。

一小太刀同前。口傳。

廣ふたの事。

一小袖を下かへを上へたゝみ。ひろふたにする。ゑりのかたを人のかたへさし出す也。主人御前にて人に被下之時。ふたよりとりおろし。たれにてもつかはし候なり。口傳。

風呂之宮仕之事。

一わき刀までもぬき。宮仕へし。御湯かたひらめさせ候やう。御袖をまきよせて。右之御手よりめさせ申なり。同ゆかたひらしたてやうの事。すそもたちたるまゝにておかれ候。わたくしさまには。すそをちとりかけにぬひ候。つねのかたひらのことくすそぬいをし。のりこうなる事なり。其外口傳。

とのい物之事。

一こしらへやう。面に申候。こおんそは。手の

ことく也。是もわたあつく候へは。たゝまれぬ物にて候まゝ。宿直物たたみしく也。

かゝり火のある應通事。

一急度法とてハ候はす候。かゝりと御前のおりをとおりましく候歟。

花とりわたす事。

一草花をはつゝむなり。紙一かさねを二ツに折て。折めを上になして巻て。下の方のさきを折返して。其上を三ツにゆふなり。上を二所ゆいて。下同まへにとむるなりとの様。口傳。同木の花はつゝむへからす候。五所結なり。ゆいやうは右同前。又兒喝食花まいらせ候やう。金銀の紙につゝみまいらせ様。口傳。

すへかはらけの事。

一急度としたる時ハ。かならす可出候。初献肴すはり。やかて出候。私さまにては。三と入

をかさねて。兩方へ持て出候て。肴の右之方のたゝみに一ツつゝおき候。是はさけのしたをすて候はんため也。條々巨細口傳中間敷。不及注候。

袋之事。

一女中衆男衆つかり。くゝりかす在之。やうた  
いかわり候。口傳申候也。

こしの高下の事。

一ぬりこしは公方様。又門跡長老なとめし候。  
其外管領大名衆。公方様より御免の上にて  
めし候事。一段規模なる事候。金物の數は五  
ツ七九十一なとは。平人はあるまじき事候。

御女中衆の御盃を給候事。

一いたゝき候て。口をそへ候はぬかきつかい  
故實のよし申つたへ候。

主人の御前へたひはく事。

一御ゆるしなくては。はくましく候。又御めん

にてよりは。はかん事くわんたい也。

香爐受取渡之事。

一貴人のあしをさきへ出す也。口傳申也。

他家より使節兩人にてもいく。

一此方兩人可然候。

鞍ほねに太刀添之事。

一くらを前輪を先へなし。左の手にかけて。太  
刀をつねのことく持て出。太刀を下に先お  
き。兩の手にて。くらをわたし。さて太刀を  
つねのことくわたす也。但前後依時宜不可  
定候。

みたれくらの事。

一しはらぬくらをは。左の手にまへわしつゝ  
わをうけ。居木を右の手にてあはせてもち  
出るなり。渡候時はくらの紋を上へなしを  
き候。懸御目候やうたい。御傳申候也。

ちいさき魚。折に入やうの事。



一何となくみたれたるやうに可然候。

馬上にて御供之時。馬の足いたす事。

一築地森林にて。馬をかゝへて出し。主人を見附てすゆるなり。是かとの足角の足と云也。口傳。

馬上にて御供の時。小者房中間以下古具次第事。別にしるし進之候。

公方様御小者六人にさたまり候。それにしたかい大名衆五人。四人。三人。二人めし具られ可然候。口傳。

はしり衆の事。

一公方様は六人にて。ゑほしすわうにて。小太刀をはかれ候。是はしきしやうの御成の時。此分候。御鷹野以下御遊覽の時は。御はしり衆不可相定候。大名衆はゑほしすわうの時も。人の分限ほとにつれられ可然候よし。古記録にもみえ候。大勢は不可然候。

しきしやうの時。刀のしたての事。

一ゑほし上下の時は。刀のつかはとかわにてまき候事有ましく候。くるつくり本儀候。人によりめぬきかうかい金にてもくるしからす候。大かたひらの時。刀のつくり。さけをまてかはるなり。

御ゑんのあかりおりの事。口傳申。

丸すゝしの事。

一公方様にては。大上臈小上臈まではめし。二重すゝしハ一段賞翫の事也。

小袖の紫うらは。

一たれにてもくるしからす候。御きんせいと申儀無之候。

女中かたの小袖。

一わたいり候へは。うはきにふならず候。夏こしまきの事。いづれもすゝしうら本儀にて候。但兩ひとつませこうはいは。すゝしうら



にハせぬ物也。

しろき織物御禁制。

一つむきほけんは。あをはなにて繪をかき候得はくるしからず。口傳申。

こしかきしたての事。

一十徳を地をあさまにそめ。ぬいめにハ四ツめゆひを付候。十とくのうへにしろき帯をする也。

公方様御こしかきつかさをとり候物一人ハ刀をさし。御こしの御ささへ參候也。口傳。

御祝儀の時。銚子之事。

一かたくちにて。しろくこしらへ候。口傳。

連歌の時。盃まいらする事。

一上座つまり候へは。いつかたにても上座の内。見はからいまいらすへし。貴人御出座の時。執筆あり所かはる也。

女中衆うはきうちをきおり物。

一わたのいらさるか本儀候。ぬいはく同前也。

小袖の事。

一男はをりすちのこしあけ可然候。そめ小袖もこしのあきたる本に候。おり物ハ主人より拜領候得は。勿論くるしからず。うちまかせては斟酌あるへし。ねもしハおとこは十五まで着候。いろく四季いしやうの次第口傳申。

大鳥小鳥羽。

一一尻二尻と書也。

油火の事。

一御灯油は式こくの時。おもてむきへハ出ぬなり。女中方にては。御との油と申さるゝ也。

觀世太夫は四座のうちにても賞翫也。

目錄之書様之事。

進上

白鳥 一  
鯛 十

以上

大内左京太夫

義興

進上

御太刀

一腰。銘。

御馬

一疋。毛云々。

百疋

已上

大内左京太夫

義興

進上

御太刀

一腰。銘。

御繪

二幅。筆云々云々。

御香合

一帷。云々。

金襴

一端。色。

御盆 三枚惟云々。

以上

稱號官

實名

此一卷。大内左京兆義興。

大友匠作義鑑。對貞陸被

相尋之條數返答之跡書

少々書加之進之候。正文

披見上者被秘置之聊爾

不可有外見者也。

元龜參年七月四日

伊勢三郎

義興花押

主人御光儀の時。罷出畏可申所柄の事。

一門の外へ罷出。いつかたにても。門柱の間

はかりのきて。つくはい候。さて門のうちへ

御出之時。御跡よりまいり候。御座定候て懸

御日御禮申候。御成之時。如斯次第也。口傳。

貴人奏者之事。

一門まで罷出事もあるへし。又門のうち縁のきハほとくによるへき事。

太刀口録請取渡之事。

一つねのことく太刀を右にもち。折紙を左にもちて。折紙をしたに置。太刀を上置。そとをしやるやうにして渡す也。口傳。

太刀折紙は文箱そへわたす事。

一太刀に折紙をとりそへて右にもち候。左に文箱もち。まつしたに置。さて太刀折紙つねのことくとり分可渡候。口傳。

太刀披露の事。

一太刀折紙を。主人の左の方のたいみ間中ほとに置候。太刀折紙をく時。太刀のつかかしらに左の手をかけて。おし出すやうにて罷立。其外口傳也。

日録注文折紙可相替哉の事。

一同かきやうの事。口傳申也。

持參の太刀の事。

一主人をしやうくわんの事也。御座敷にあり。又人によりほとらいさたまるへからす。太刀折紙つねのことく置て。すこしのきて御禮申口傳也。又さのみ下輩なる人は。持參あるましく候也。

刀を人にわたす事。

一さけ緒を刀にどりそへ。左の手さきへ。兩の手にて渡候也。小刀のかたを上になし。人のかたへはをなさぬやうに渡候。口傳申候也。

主人より御腰物くたされ候時の事。

一拜領仕候て罷在つきの間にて。我刀を同名えんきん又は無等閑人にわたし。被下候をさして參。御禮申候也。口傳。

御能之時。酌とる様の事。

一御肴まいりて酌出候時。御能はしめ候。しき  
三はんわき能はて候て酌罷立候。御酒參り  
候こしつ。口傳在之。

折かはらけ物の事。

一先まんの折。魚物の折つかいにて參候。  
きそくのおり。まづはやく參候。いさひ口傳  
申候。かわらけの物。公方様にて御とりすへ  
と申也。又三ツをき五ツおきとも申候。口傳  
申候也。くきやうにこりちらす御さかなを。  
くきやうの物と申なり。口傳申候也。

御酌とりやうの事。

一銚子のさきあけて。つまかくしのきは。右の  
手にてもち。左つねのことくそへてもち罷  
出也。盃とりにくゝ候ハ。銚子下におきて  
とるへし。口傳申候なり。

御盃出すやうの事。

一こかくとかわらけとのあひに。ゆひを一ツ

入。大ゆひを盃のはたに。そとかけてもちま  
いり。主人貴人の御座の間の上座におく。其  
内にてもうやまひ候人のかたへ。すこしよ  
せておくへきなり。口傳申候なり。

銚子請取渡候事。口傳申候。

主人の御目にかくる事。口傳申候。

御盃とりかゆる事。

一まれなる事にて候。自然とりかへ候はゝも  
ちて罷出て。まへの御盃をわきへおしのけ。  
その跡におき罷歸るへきなり。口傳申候。

はい膳の事。

一公方様の御前をはいせんと申候。其外大名  
衆のは。かよひと申候かよく候。

御膳まへあくる事。

一いきのかゝらぬほとにもち候よく候。御膳  
をすえ罷かへり候時ハ。右へ歸り候か木儀  
に候。但し御座敷により左へにてもくろし

からす候。

御膳五目。七日。八日の事。

一近年ハ八日まで參候事まれに候。八日のすゑやう口傳有之。

御膳あくる事。

一末より次第々々にあけ申候。口傳申候也。

めしのくひやうの事

一別儀なく候。めしをくひ。まつ大汁をくひ候。さいの事。中に候物又なににても。てよりなる物をくひ。なによりとはさたまらず候。口傳申候也。

かんのくひやうの事。

一いつれのかんにても。はしをとりくひ候て。汁をすこしあいにくい候。すさいなとは。たへ候はぬかよく候。口傳申候。

まんちうくひやうの事。

一右にて先はしをとり。すなはちまんちうを

とりあけ。左の手をそへ。あんのこほれ候はぬやうに。二ツにわり。右にもちたるをは膳におき。ひたりにもちたるをくふへし。はしもちたるにて。其儘汁をもすひ候。又わりたるを。もちたる上にも置候。

さうめんたまはる事。口傳申候。

一同そへさかなの事。すへかへ候もよく候。又そのまゝわきにおき候か本儀に候。口傳申候。

盃の臺の酌の事。

一臺の前を。人の前へすへ申候。條々口傳在之。

まはり酌の事。

一我のみ候て。人にさし申候時。しやくにかはり候。次第々々同前に候。口傳申候。

せこの酌の事。

一てうしの上にかはらけを置て罷出候。すへ

座へよりも。御酒のとをきかたへ參候。又たれにても見はからひ。若衆などへ先はしめさせ申候。其後おもひさししたひたるへく候。口傳申候。

### 食籠の事。

一 公方様へは不參候。其外大名衆へは參候。こしつ口傳申候。

### 鷹の鳥くいやうの事。

一人のはさみ候て給候は、兩の手にうけとり。いかにもうやまひいたしき過分のよしを申てたへ候。又物にすはり候て。面々の前へ參候は、ハしすはり候とも。ゆひにてつまみいたたき候て。同前に忝よし申たへ候。口傳。

一 献のうちのさかつき。もし再返まいり候事候とも。献數に成間敷哉之事。

一 勿論盃あらたまり候て。献かすにはなる

ましく候。口傳申候。

御湯つけも献の數にはならず候。おりの物あつかひの事。

一 かうよりにてからみをかけ候を出しさまに。みなとり候て出し候。もし失念にて。そのまゝ出候は、そへこをぬき。そと上をきり候て。おしひらき參候。口傳申候。

### 馬上盃の事。

一 御馬の上へ御盃參候事候ハ、銚子にすへ參候。もし馬上に御弓なともたれ候は、右へ可參候。其躰にしたかひ故實可在之。口傳。

### 神前の酌の事。

一 神前と主人とのうしろになさぬやうにきつかい肝要候。其外口傳。

### よめ入の酌之事。

一 女中の事にて候間。くわしく書わけかたく

候。

移徙のやうたいの事。

一よろつあかきものを禁制なり。馬もくり毛をは進上仕らぬものなり。火しやうの馬同前。ひはり毛同前。

とりちかへの事。亂酒に成ての事也。數なともいくつともさたまらぬ也。中のみの事。

一大なか小中。それよりかなたこなたへまはるゝもあるへく候。亂酒になり候へは。いくたりなとゝはさたまらず候。口傳。

三星の事。

一盃の臺にかはらけ三すはり候。のみやうは順にたへ候。たいにおきやう口傳。五ほし。これ又口傳在之。

主人貴人よりおさへ物くたされ候事。一こつちや。とうちんこう。あんにんちやうし

なと。いろ／＼にこしらへ候て出候。くたされ候時のかくこの事。いかにもかたしけなきよし。別て謹て頂戴仕たへ候。口傳。

等輩よりをさへ物給候時。きつかいの事。

一さしてしきかはるへからす候。口傳。

主人貴人へをさへ物進上の事。

一人によりしんしやくあるへきか。きつかい口傳申候なり。

らうそく出しやうの事。

一そくたいの中ほごよりちご上を。右にてもちてまいる。一の足を主人のかたへなしてをき申候。口傳。

らうそくのしんとる事。

一しんどり候へは。あるうゝり別儀なく候。しんどりなき時は。はしにてもとり候。かわらけに水を入。はしをそへて出し。此時はとり



おろして。しんをとり候かよく候。おろし候は略儀に候。

らうそくをとりかゆる事。

一らうそくをともして。右にもち出候て。ひたりの手にて。臺にあるをとり。右のを其まゝさし候。まへのを右へとりなおしてまかり歸也。口傳申候。

舞臺にらうそく出す事。口傳申候。

舞臺の庭にかゝりたく事。口傳申候。

舞臺にらふそくつむ事。

一左右の手にて五百疋ツ、もちて出候也。

公方様にてハ御供の衆の役なり。其外ハこれにおうすへし。

御こしの内へ御太刀を入られ候事。

一主人の御左のかたへ入候。太刀を左に持候て。なかへの外より入候。公方様の御儀。此分にて候。

制札之事。

禁制。

山城國西岡諸神社

一軍勢甲乙人亂妨狼籍事。

一剪採竹木事。

一相懸非分課役事。

右條々堅被停止訖。若有違犯之輩者、速可被處嚴科之由所被仰下也。仍下知如件。

長祿元年十二月十二日

信濃前司神宿彌判

前大和守三善朝臣判

諸家制札事。

條數可爲同前。但當年軍勢亂妨狼籍事。如此可在之哉。

馬にて供をめしくする次第事。

小方

小

小

よし興

手  
中  
あ  
間  
き

長  
刀

手  
中  
あ  
間  
き

手  
中  
あ  
間  
き

手  
中  
あ  
間  
き

手鏡以下諸道具。

口録事。

しん上

御かうはこ

一云々

御ほん

一かなの時は。枚の字あるましく候。  
數に進上時は。一二とあるへし。

三千ひき

以上

大うち左京大夫

此一卷。大内左京兆義興。

大友匠作義鑑。對貞陸被

相尋之條。數返答之。斯書

少々書加之進之候。正文

披見上之被秘置之。聊爾

不可有外見者也。

元龜參年七月四日

伊勢三郎

貞興花押



兼

又小者

一かみかいしきこちうの時は二寸五分。大ちうの時は三寸五分たるへし。すみをたて、仕候者也。

三献わたいり



しきのこいにきりて。あつきゆにきりて。とりて下に入て色なかりたるかしらに。中をとりてへらを一の方のほうへ尾さのそいて中ほねを人て。その上ひにすきしの上か。にわらけハ三と人。たるへしハ女中衆。ハ右ミのひれを上に。もるへし。

一公方様の御まへは。三せんながら御四はうたるへし。大名衆はひらおりきたるへし。

一上さま御四はう同前。

幕の事。

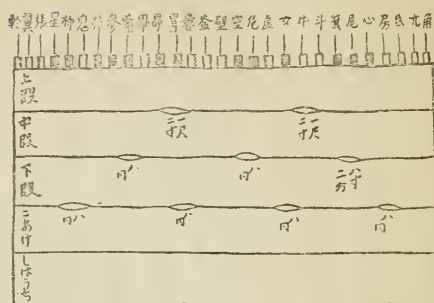
一まく一てうとふは。二てうをいふなり。まくのなかさ三丈三尺五寸。のゝひろさ一尺二寸。但近來は長さ布たけ。ひろさは布はゝを用ゆ。

一まくのもんつくる事。五ところ也。いかにみしかき布なりとも。五所に付へし。五のあれとも。ちいさきもんなれは。中の三のに付へし。大なるもんならは。五のにもんあるやうにすへし。

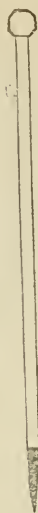
一大將ハ日月の物見より。そとを見るへし。

一まくゝしはすはさたまらず。大かた長さ八尺はかりふとさは八寸はかり。

一まくゝしあるひはまろく。あるいは八角。



かみはきりこいしとも。きにくろかねを入。  
 一はうのかしらより五寸下に。ひちかねをう  
 ちて。手をかくるなり。



一まくと地との間五寸。

一まくうちさしておくには。まくゝしのハき  
 につなを一ツまとひて。うちかけて。すゑの  
 緒をは。其まゝむすはておくなり。

一まくのつな。又手ともいふなり。

一もんのそめ色は。かちんなるへし。

一ちのかす。廿八又三十也。いづれも可然。

一ちのそめ色は。黒白あさきたるへし。同つな  
 の事。まくのなかさにしたかふへし。兩方の  
 あまり五尺はかりたるへし。

一つなのそめ色も。黒白あさきたるへし。

一まくのうちやう。天の七星のことくくしを  
 たてゝうつへし。但すくにうつ事もあり。大  
 將の座せらるへき所をは。すこしうちまは  
 してをくへし。

一大將はまくのもとに座せらるへし。幕のも  
 とハ陣取のやうにしたかひ。もとすゑさた

まるへし。家陣などにまくをうち候は。座上のかたをもときためて。大將座せらるへき也。野陣などにては。惣大將のかたを陣頭として。まくをうつなり。

一まくの出入の事。ひるはまくのもごを出入へし。夜はまくのするのかたを出入へし。まくのあけやうへ。表左右の手にて。しはうちを我かたをうちこして出入へし。さきへあくる事有へからず。夜の出入の時も。此分たるへし。まくのもとを出入事は。仁牀により斟酌あるへし。其時はまくの中程しかるへし。但時の儀にしたかふへし。

一まくしたつるには。ぬいたてゝのちに。ちのぬいめのうへに。水にてあたらしき筆にて。殊勝なる行者にかゝすへし。ぬいてもしやうしんけつさいすへし。廿八宿は角宿よりはしめて書へし。まくのするよりかきはし

むる也。

一物見のあけ所。上二とおりのぬいめにあくへし。あけやうは上に五。下に四。以上九なり。

此一卷。流々雖在之。

記置通加筆を之候。

聊爾不可有外見者也。

元龜三年七月四日

伊勢三郎

貞興花押

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

## 武雜記

正月元日之祝の事。年始月始日始成ゆへ。元日と云也。祝之事ハ。昔涿鹿山と云所に。蚩尤と中鬼有。人を服する事かきりなし。されはしたかへんとする事。度々たりと云とも。つうをえたる者なれば。たやすくしたかへる事成かたし。爰に有はかり事あり。酒をかめに入。こなたかなたへ隠し置。此酒を取吞醉臥つれば。人間にあたをなす事を忘れ。□石の上に前後を不知居たる事折々也。又或時。どくの酒を囊に入隠置。如早晚吞醉臥。大木の木の下に臥居たるを。鉄のくさりにて四方をつり。鉾をそろへ。よくく四足を切離す。口より火を出し。鼻より風を出す。人を多焼うしなふ。其後。骨のつかひ切はなし見れば。なつきハ角にして。面は三ツ。眼

ハ八ツ。正月一日也。二日三日。以上三日にしたかゆる間。正月三日いわふ也。一年の正月三日。三月三日。五月五日。九月九日。十月亥日。皆此とき之蚩尤調伏のため也。

一正月元日。三位の御まつり事に。内侍所にて三種のしんきとて御政あり。しんし。ほうけん。内侍所三ツ也。しんしと申は。國の繪圖也。ほうけんは。出雲國をさのおの尊のとしやの尾より取給ふけんなり。内侍所と申は。御影をうつす鏡也。是は我朝の寶也。扨國の繪圖をひろけ。鏡にうつされぬれば。其國に惡事あらんとてハ。此鏡にあらはる。能事有へきとてハ。無殘所見得たり。此けんをもつて惡事をちうふく。尤以大切。是ハ王位の御政忝き事也。其ゆへ公家にはまりをけられ候事。しゆうか國の玉を學ひけられしなり。みなちうふくのためなり。



一正月始に八眼を打小弓にて射事。しゆうかハノ眼色々に變し。人間にあたをなす。はまとな付射事也。又はこ板とて。五色に色とりはこを打事。これハはをまなひ仕儀也。

一正月七日。鬼火と申て燒事。是は蚩尤を燒たる所をまねたる儀なり。しゆうを燒たる灰。風に吹かれ。人間にかゝり候へは。悉煩死うせ。又草本などへかゝり候ては。枯うせける間。水になかしはてたると也。其後。皆はひかひるなどに惡き虫となり。今又も人にあたをなす也。

一三月三日。桃子のゆはひの事。是は蚩尤のまゆをかたとれり。まゆのうへに。桃の花のことなるいろこ有。是は夜ひるわかすひかり。夜はつほみ。ひるはひかり有。こくの酒をのみて。一段赤くなる。桃花のこつく見得候まゝ。其時をまなひ酒に入替調伏之儀也。

一五月五日のちまき。是は頭をゆひたる所をまね。たへ候てちうふく仕事也。其故かやの本より喰候事。尤の儀にて候。ほとき候事惡敷候。引切てたへ候事。此心得にて候。

一九月九日菊の花。是もしゆうか耳のあたりに。菊の花のこつく黄色にひかりて有を。菊のはなによそへ賞翫候。耳のそはにあたる間。きくの花と申儀なり。

一十月亥日の餅。是は鼻を學。三角にきり。かみに包。御なりきりと申てたへ申候。包様一段の秘事也。口傳之儀有。

一男元服之事。大略十二にて御座候。御元服いにしへは兒髮前三寸結たると申候。近年ハ髮のまん中に結候。けんふくの後の方へ三寸程寄結候てはやし候。人の手三束にくらへ。先を三かたな程はやし申候。其故三そくはやしと申習し候。

一髪はやし候あて物は。わらを一にきりほとに杉原か引合の一重にて包。水引にて三所結。新敷折に添子を。わらの本の方を先へなし出し候。又はやし候て。此わらを髪の□□に取添折に入罷立候也。昔の事也。當世は柳板を用られ候。

一わらの結様 無別儀候。二重に仕。兩わなにむすひ候。結たる方は下になすへきなり。

一烏帽子の事。なりこゆひの烏帽子たるへし。すわう袴には。鶴龜松竹などのいわひの所を付へし。すわうの色の事。淺黄空色。又若き人に似合たるを。かやうに染候ても用候事也。

一袴にはちうみあけ申候 露紐之事。色革なども能候。また紫革にても仕儀也。

一髪を三そくにはやす事萬口傳有事也。人毎に傳事ハなき由。伊勢守代々申傳候也。

一銚子の事。伊弉諾尊より始て用事也。或時。

伊弉諾尊。大和の國をつくり出たまひくたり給時。天よりつれてくたり給也。天にて一周龍と云龍也。一年に一度死する故に。ひとおごろへの龍と云て。聲にいつしうりうご云也。伊弉諾尊。大和の國に此龍をつれくたり給ひ。一女三男をうみ給とき。龍の口より出水にて。産血をそゝき參らせ候也。此龍手足はなふして。口二ツ。目一ツ持なり。銚子は此龍をまなひたる器なり。酌取とき。右の方に成口を。ゆひか口といふ。是より出水を以。産血をそゝきたまふによつて。ゆひか口と申也。又左に成口をよろし口と云。是より出す水にて。産火晴のよろこひあり。さるにより。左を常に用ひならはせしと也。

一蛭子をうみ給に。ひるこは生れたまへとも。練貫などのことくにて。産血などおりさり

しとき。龍をひることもに海に入らる。其後。蛭子をあまてる御神といはれたまふなり。此龍は龍宮にとゝまる。彦火々出見尊。豐玉姫とて龍神の姫にちきりたまひ。此國に出たまふとき。この龍を引出物にえて歸る也。其後。仁王十一代垂仁天皇のまねて。金にてつくられしより用也。銚子とはなまりことよむ。則女の名也。彦火々出見尊。契をこめ。此龍を久敷つかふ。此名をかり銚子と申也。

一提子。もろこしより大伴の宿彌か持きたりて。つたへたりとなり。

一式三献の事。垂仁天皇第四の御子大和武の尊。東のゑひすをせめ給ひ。都へ登給とき。輿の國のあるし國の鮎川の庄よりまふけたりとて。鮭の魚と云物を獻けるを。都へ持登けり。又間守の大臣。常陸國のあるしよりま

ふけたりとて。まなかつほと云魚を持のほる。然を仁王十二代景行天皇にたてまつる。此魚賞翫のために。鹽鯛をそへて。式三献と名つけて。藏人に仰之調也。是よりして始めて用らるなり。

一式三献を御供にてたふる事。三献目の土器をのまさるは。間守の大臣のしつけを申傳也。御門を賞翫して。初の盃を尊吞給ふ。二献の盃は間守の大臣の吞けり。大君取給し故に。大君と同盃のみ侍る事。いかゝあらんと思ひて。三献目の土器を上置きし事。よくかんかへたりと諸人申傳たり。

一式三献をすゆる事。をもきは初献とひとたひに盃を參らする本也。添肴とてあり一度に居る也。三献目をまいらせ候とき。二献目をあくるなり。おけは數四ツに成ゆへに。あくる時盃の供卿をうへにおくと申傳也。

一式三献。加冠のときは。各土器初献を吞て。二献よりは主人のおこひて吞なり。いかにとなれば。二献吞てもと二いして。三献目にていわふ也。加冠の時の式三献は。左は黄皮。手本は梅干。元服には橘中名土器前中渡前に箸臺。並土器。右の手本垣つはさき海月なり。是は菅家朝臣。仁王六十代延喜十二年二月一日より雷となり。帝の御妨と成給ふ故に。延暦寺の座主に仰有て。官をおくれり。贈太政大臣正一位の加階ありければ。相善したたひ。七歳の童子と現して御祝ある也。式三献は始也。黄皮をするは。座主の一字千金にあたふとのたまひぬれば。千兩の金をふらせらるゝを。帝の御目にたまひぬるをは。土器にもられたり。されとも一默多生をたすくといわれたまひて。座主の都を菅原の朝臣のうけたまへり。天神ハ梅との

たまひて後までも。梅を愛し給故に盛也。引渡ハ。鹽の鮭を大和武尊持て登。帝に献し給ひてより。式三献と云。事始は昔を忘こゝる也。海月を仕は。菅原の我思の程を知せ奉らんとて。座主の方に立たる障子に。柘榴をかんてはきかけたまへは。障子もへたる也。其紙のこかれたるを。大裏に献し給ひ。菅原の朝臣の思程如此。童子と現して語たまへりと申給ふ。鹽囊は障子のもへぬるに。鹽をかけたるによりきへけり。扱式三献と名付て。童子と現したまひたるとき。御前に居り。贈官をよろこひたまへは。帝も出。對奏せらる。其とき。童子も座主に禮し。帝にも盃の禮有れば。論言惱禮の酒なれはとありて。菅家の初たまへり。故に惱禮の盃を客の初也。惱禮とは。帝の御惱有けるときなれは。なやむ禮と書也。それよりして初献を。

惱禮と云也。されとも天曆の御時より。納禮とかゝるゝ。おさまる禮といへり。是は初献の盃の土器を。藏人頭紀「望申請。藏におさめて。雷の時ハ公卿殿上のいたゞき。延喜の菅原家をおそれ。其後。世しつまり候也。されは昔より初献は客の吞也。二献はまなかつは。三献は鹽鯛。昔よりかはらす用ゆる。何も器はあれともとらさるもの也。

一御輿入之事。御座に置鳥。置鯛。仁重へいし。御箸染御手拭。御飭御座候也。御輿入御座敷へ御待上臈御さしす有て。御婚子御祝之座敷になをされ候て。殿の御方へ御左右御座候時。殿御出被成御祝出中也。其次第の事。

一御箸初とて。熨斗のけつり物。待上臈成共。こなたの上臈御參候て。御箸にてはさみ參らせられ候。また殿へも參候。

一式三献御婚子殿。本二三寸わり御銚子出。御嫁子一ツの御盃にて。三度ツゝ。三ツの御盃にて九度參候。又御酌。殿へも同斷御さし引なし。くわへは座に出て加へ申候儀なく候て。御膳さけ申候。

一御むねの守。殿へ御取候物にてゝこなたの御局請取。色なをしの座敷へかけ被申候事也。

一御盃一ツ出。御雜炙參。御夫婦へすはり。さて御銚子出。御婚子へ一ツの盃を被進。加へるときむすひ。二献目殿參。三献目御嫁子參り。四献目は御待上臈。又五献目殿參り納候也。

一盃一ツ出。羹濃者出。雜炙に取紙。御夫婦に居り御銚子出。殿參り。二献目は御嫁子。三献目は殿參り。四献目ハ待上臈。五献目ハ御婚子參り納る也。



一御吸物出。御盃一ツ參。御吸物は右之羹の膳に引かへ。御銚子出。待上膳參り。二献目は御婚子。三献目は殿。四献目待上膳。五献目は殿參り納也。

一御盃一ツ出。餐膳本二三。御夫婦共に御すわり御銚子參。御嫁子參り。二献目は殿參り。三献目ハ御嫁子參り納也。三の膳の下に。湯のかはらけ御座候を。殿の三の御膳を御嫁子へすへ。御婚子の三の膳を殿へすへ。御湯入御湯少參り。御膳さけ申候。

一御菓子出。殿御くつろき被成。御婚子も御けせう間に御入候て。御色有物を着被成候。殿様も御熨斗目の御小袖着被爲成候。

一此とき。奥よりも御左右次第に殿御出被成。三献の御祝相濟。七五三之御膳參り候て。相濟の由中ならはし候なり。

一御成切拜領之事。主人御取りて御心にあて

被下候。左の手の上に右を重ねて拜領候て。頭の間か又御縁などにて能被下候。懷中なと候事惡敷候。

一粽拜領之事。是も主人より被下候は。いかに高く頂き。下座に罷立。かやの本の方よりとき候て。ほとき方よりたへ申候。かやを兩手方へわけ。手にもちてたへ。其後罷立へし。

一女房の酌の事。銚子を持立參る事惡候。唯いさりよりてとらせられ候。御酒參候時ハ。かた手にて。物よはく御取候。御酒御請候ハ。應て銚子をおかせられ候。

一女房衆御酒之事。腰まきをめされ候やう成時は。左にて候盃の臺と。腰まきを取添へ。また右にててうしを御取いさり寄。物よはく召候也。

一數の御盃の事。御盃頂戴の人衆多きとき、盃

二十も三十も重て出し申候。さやう成ときは。上の盃一ツ御膳に上。きこしめしたる酒をつき。残土器に入候て。次第々々に拜領させ申候。これハ正月など。かならず公私共に如斯に候なり。

一さいこしの加への事。さいに手を掛けて加へ申也。是一入秘事にて候。酌も加へも此分にて候也。

一臺の表裏の事。足の一ツ有方表にて候。兎角足の三ツ有物は。臺にかきらす足の有方。おもてと心得らるへくなり。

一大臺の酌之事。先臺を兩手に取。貴人の御前に參。また貴人御禮候は。主人へ持參候。御禮相濟候て。其後。てうしを取。酒を可申候。初てうしを持て出候とき。座敷に置候物に。いろいろはぬ所に置物にて候なり。

一はそき臺にて候はし。如常臺を左に持候て

ちうし右に持候。こなたかなたへ參申候。酌として主人貴人へしい申事有間敷候。盃の上をひきくつき申事しかるへくなり。

一壹具弓掛披露の事。左のゆかけの上に右をかさねて。手のはらを上になし。二ツの緒を一べに取。てのはらの上に二ツ三ツほどまけて。右の手のはらに。たおいの方を主人にむき。そと左の手を添て披露申也。

一同人に渡候事も。披露のときのこつく仕。右の手のはらにすへ渡申候也。

一同請取様之事。無別儀。渡人前のこつく仕。さし出候は右の手のはらに。前のこつく置候て。一禮候て罷立へし。流により相替つるか。

一女房の食物大切にきる事。これは食切故に如此。僧侶のをは。一口に食候様に可切なり。猶心得有へし。



一菓子の中に柑子をは。最前に取て可食。四に破て可喰。今川流如此。また柑子を三ツに破可能也。菓子に龜足あらは。其より取可喰也。

一破籠之食を喰にハ。底をあらはすやうには不喰ものなり。心得あるへきか。

一けうたくと云事。凝濁と云。靈山と云同志法橋之下道と云なり。

一酒を給候盃を。高は上ぬ事也。迷惑なれは脇へはつすか。下へさくる事本儀なり。脇へ引候も能候なり。

一人のから名を喚候事。賞翫之儀候歟。是或は殿文字添て申候へは。恐ある座敷にては。大輔殿。少輔殿などゝは申か聞能候。餘所へ使に罷出候とて。わか主などのから名を申事ハ。有間敷事也。いかにも我主をは卑下して。治部少輔申せと申候などゝ可申候。寄合

の時は官途を自他可申か。左様に候へは可然候。また他所の御狀中務之事をは。中務如此被申候などゝ可申候なり。

一熟柿はすゝるもの也。實なと出す事はせぬ事也。

一笠掛の矢道ハ。八枝のものにて候也。

一瓦硯はきらふ物也。除目等には被川也。右をぬりたる硯ハ。晴に不出。つら箱もぬりたるは不出。只其まゝは晴にも出候なり。

一硯を自然折敷にすゆる事有之。切目を前にむくる也。喰物はすへす。やなひ箱の時も。すゆる時は立さまにすゆる事也。

一主人の御前にて仰出するときは。硯をは主人へ向て書也。不審の時は御顔を少守也。奉問事ハせぬなり。

一輿よする時。上手と云ハ左也。女房のときは。上手右なるへし。

一何にても餘所よりの肴の大成物ハ。兩人にて持事可然なり。一人して持候事惡敷仕付にて候。

一人の御前にて使などの時。庭より扇をぬき候事不可有之。多分は縁にて拔。又は物申時として拔。立時は扇をさして立。座の間はぬきて可然候といへり。當時は人により可依所なり。

一人のかたよりの使は。其名字を可聞事也。

一傾城に馬を給事。御座敷の前に馬を引立ては。傾城の美女あひて。我仕たる帶をさきて。馬のとうに投かくれば。則馬を引て傾城の宿へ遣もの也。又くつわの橋かねへ。帶を引とをす共同前也。

一大口御直垂袴被下候ときは。直垂ハ上。袴ハ中。大口ハ下なるへし。是はさるかくに被下を取事。

一主君より御直垂かへなと、仰あらんときは。疊より下て可畏。さて敬人の御直垂を被下候とき。順て御座敷を立て。かけにて我直垂の上にきかさねて可參候也。

一馬より可下在所は。狩は。的は。鷹狩。犬追物。笠掛。又はやふさめの在所也。

一油の役事。二人して遣る也。一人ハ灯心と油と。一人は灯臺。是は添てなり。

一主人又は去ぬへき人の前にて。茶給候時。臺にすへなから吞ても。大方は不苦候へとも。是も被下吞候ハ能候也。

一一國の守護に合て不通之侍。御乗合すへからず。せは道などにては片へ可下。廣き所ならは遠打のくへし。

一出陣の時。敷革敷様は白毛を前へなして敷候也。

一荒皮を引様。二に折て白毛をきやくしんの

方へむけてひくなり。

一腹巻を遣時は。兩方の袖を取。わたかみに取添。むな板の方を。人の方へ進るなり。

一出陣の時。敷革くひかみを左になして敷と云人有之。くらにかくる時は。白毛左へなるやうにすへし。是は敷時のことなり。

一引出物給らん時ハ。御盃をさし置て可給。但ふところに入へき物は。扇。藥。香となるへし。その外の物には。御盃をさし置て。手をかくへし。

一貴人の御女房衆。御酌御加などにて。上様より御服なと被下候時は。盃の二盃目に下され候を取申頂き。三盃吞申て。まつ盃をすへ持て罷立。戸の際に置。扱て參候て。兩の手にて御服をかへ持て罷出。扱前の盃を右の手にて取。御服をは左のうてにかけて持て可罷出。若廣蓋なから取て罷出たらは。御

服をは殿原に持せ。廣蓋計を持て罷出。御女房達に渡申て。御禮被下へき也。

一自我上之貴人。盃を召上られん時は。中座に出て首を傾て參り。聞召はてゝ後。本座なり候也。依人御太刀進上申也。

一筒の酒を次事。口をぬかんまへ。帶をときて。口の上に手を覆て。扱口を可拔なり。

永正十五年三月十七日。畠山式部少輔所へ御成時。御一献之次第。

初献 龜甲

雜煮

二献 冷麥 添肴

鶉の羽盛

三献 こそし くらけ

鯛

四 御湯漬

鹽引 燒物  
一大あへませ  
香物 蒲鉾

ふくめ  
このわた

二 からすみ 焼鳥 御汁集  
すし にし 蛸 御汁くらい

三 海月 かさめ 御汁鯛  
鯛子 御汁鯉

四 かれい 足打 海老 御汁えい  
はむ 足打 御汁えい

五 いかはらゝ子 御汁鯨  
鮎

四 献式三献より御湯漬まで

四 献 熨斗 くらい  
たこ

五 献 つまかさね 鯉  
はまくり

六 献 つくみ こち  
ゑい

七 献 饅頭 御添肴 鮎の筏

八 献 からすみ つみ入  
いか

九 献 鮎 鮎  
はい

十 献 卷するめ ゑひ  
はい

十一 献 かまほこ 鱸  
はらゝ子

十二 献 鯉のさしみ 鮎  
羽ふしあへ

十三 献 かさめ いるか  
くるく

十四 献 羊羹 梨子添物

十五 献 赤かいさくら煮  
ぬの子

十六 献 いりこみくちら

十七 献 すいせん 添物 梨子

十八 献 鹽引 鳥  
このわた

十九 献 はちたこ なまつ  
あいひしほ

廿献 ひはり  
こうつる

雁

天文七年七月廿九日。細川殿へ御成献  
立。

初献 かくしの物  
かめのこう

雜灸

二献 熨斗  
海月

すしき

三献 まんちう

添肴筏

四献 こさし  
たい

ゑい

五献 冷麥

添物なま鳥

六献

あい一物

七献 やうかん

八献 こんきり  
うほの子

鯉

九献 はく魚かん

十献 卷するめ  
鮎のすし

ひしほ灸

十一献 からすみ  
みつあへ

いか

十二献 はひ  
酒ひて

十三献 くま引  
鱒

鯛

十四献 ちゃん  
かまあへ

かも

十五献 けつり物  
あいひしほ

ふか

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

續群書類從卷第六百八十九

武家部三十五

伊勢加賀守貞滿筆記

書札之事少々。

一書札の事。公家方におゐてハ。弘安禮節とて被定置事在之。武家の事ハ不及其儀。被用成様牀在之云々。

一武家にも。もとは御役をもせられ候方へは。少會釋在之。御晴の時。六位布衣に參勤之時も。御役せられ候方々の事ハ其用捨在之。乍去御事かかれ候時は。參勤之例も度々在之。一謹上書之事。武家には肝要之様申習し候。我

よりも上手へも。又等輩へも。又下手へも書之候也。たとへは上手の方へは。謹上を眞字に書。等輩へはさのみ眞にもなく。又下手へハ草字也。ふらせすして禮紙あるへし。

一無官の人は名字計可書之。敬かたへハ名字の上に。その氏を書候事も在之。

一名字をうら書に書たまふ人々。或細川。又ハ畠山などとはかり。うら書に書事ハ可有利用云々。是謹上書のうら書の時の事なるへし。

一付狀に恐惶謹言と書事。常に在之。賞賚の様

にハ候得共。直札ニ准之。就此儀種々様躰在之。

一醫藥陰陽官外記などへは。同様之心得云々。清外記などハ。少かある歟のやうに承候。しかやうの人々も。官位にもよるへし。

一社家方之輩。大畧同前歟。吉田はかとあるよしを。先手と共沙汰候し也。如此衆も。時にしたかひ。又はやうにもよるへし。書狀給候人。こなたを賞翫とへは。此方よりも賞翫に認事。法の外の故實也云々。惣別公家方に于今御宿所なと、被書事ハ無之。相互に相付書の様に取調候也。所詮留所に子細有事也云々。

一諸太夫衆事。大略同前。諸太夫方よりは。醫陰官外記をは。少下手に被存候歟。其段目先に相互に意趣在之云々。

一女房衆へハ。我名をは上の字をかなに。下を

まなに可書之。又法躰になり候てハ。上の字まな。下をかな可書也。女中へも大かた次第在之。

第一。御女房達宿所にてまいる。申給へ。

第二。あて所にてハなくて。御名をかきてたれにてもま

いる申給へ。

第三。まいる申給へ。

第四。申給へ。

第五。まいる。まいるへし。

第六。まいる。

第七。まいらせ候。

大かた如此可有分別。

一女中かたへの文言。女房衆の詞に書ことも在之。さりなからおどこかたよりの文には。男の言葉をかなに可書云々。然れども男の詞とて。めんはいをもつて。

一諸家共に。其位ほとに書狀を可被認。縦我官



被官人の子たりとも。俗姓にハよらず。其位に可被認事也。

第一。付狀。

第二。人々御中。參と一字書加ハ猶敬事也。

第三。進覽之候。

第四。御宿所。參字同前。

第五。進之候。

第六。打付書。

此次第大方如此。但眞草行。墨付等に故實共有之。

一聖家へ何之御坊とはかりも在之。脇に御坊中と書よりも。御坊とはかりは。さかりたる方へ也。

一觸折紙に點をかくる事。常の儀也。敬かたへハ。てんを懸るはらうせきなり。我か名の下ウケタマハルに奉と可書之。又女中よりの御ふれには。かしこまりて。うけたまはりぬ。またはうけ給りぬ。位により

如此も。

一連署の事。右筆人。日の下に官名乗まで可書之。さて判形は名のとをりのうらに可在之。其人數上下の次第は。おくを上首と可心得。右筆の輩ハ。上首たり共我調進候間。日下に可書之。又無官の人は。名乗はかりも書之。又氏をも書事も在之。

一連判事。名乗を書て。かたへ名字官を可書之。無官の人は。名字ゑはし名まで書へし。次第ハ連署と同前。又宛所とめ様は常の如。書狀上書。此方の名を可書。ソハ連判の一の奥の上首一人可書之。但右筆一人書事も在之。法意ハ上首一人可書之也。

一下知狀事。假令所領なと家人に申付ハ。在所以下ハ如常書て。任申付旨可仕令知行。仍下知此件とも。又可令領知。仍下知如件と書留可。さて年號日付如常。家人なとは判計も

在之。又名乗計にて判も在之。又官歟受領計歟書事も在之。さて遣候人跡の名を可書之。折紙などにハ肩年號付可在之。

一公方奉行衆の甲乙人など。人の下知には。其名をおくには不書して。文言の内に書加へ。てに／＼の宛所はなし。其名を書加候共。殿文字ハなし。管領などの公方様爲御代官。下知狀被出共。其人の名。御文言の内殿文字に不及して。被書入之也。

一申狀之事。杉原の端にたとへは。

### 三上因幡守謹而言上

右子細何々。此段爲預申御沙汰。粗言上如件。

永享三年三月日

御奉行所とも。又奉行の名をも書事。在之。一申狀。人によりて某代謹而言上と書事。在之。如此代書事。例式之諸侍ハ不書之。過職の心

なり。

大内殿より被申上候寫。

左京太夫雜掌言上

如此被申上たる事も在之。

一ふうかみに判形の事。引合杉原何々紙にも不相定候。廣さ不定。又ふうかみ一ツに兩判之儀にてふうする事。在之は。其時。兩人の判の頭を合するやうに可仕之也。

一進覽之候と書に。參と云字書事。重言之様に候得共。參之字書たる事も有之。不可及不審。

一文の墨つきの事。口傳在之。貴人へ進候書狀をは。墨くろに眞字に可書之。上書の事。貴人へ奉をは。貴人の御名を墨うすく。人々御中などを墨黒に可書之。條々墨の厚薄に口傳在之。

一御内書之事。

猶々可申候。恐惶謹言。

何月日

義一

天龍寺侍者御中

一勅書案。

中院宰相中將加州知行分の事。一日も内々申され候。可叶懸命奉公の事にて候へは。いかやうにも相違なく。きと申付られ候て悦入まいらせ候。あなかしく。

御うはかき  
室町とのへ

就中院家領之儀。勅書拜領。謹頂戴忝存候。心底之趣可然候様可被申入候狀如件。

十一月廿八日

義一御判

御うはかき  
廣橋殿

一謹上と書たるにも。一段賞翫の方へは。人々御中と書たる事も常に有之。不可及不審故實也云々。上卷のひねらすして。かいおもて進候儀も有之。

三月四日

左衛門太夫宗清

謹上佐藤筑後守殿

三月四日

藤原宗清無官の時ハ如此

謹上――殿

謹上何かし殿人々御中。如此も在之。

一書札の事は。謹上書にきはまりたる由。貞藤などは申由と也。恐惶なと、留る事も在之。條々子細在之云々。

一今川貞世法名俊事。探題を存知之儀勿論也。其身一段の人たるにより。雖非惣領。彼職をも

被仰付之。其外。侍所をも存知けるとなり。歌道なとにいたるまですくれたりし人なり。毎篇彼被中趣を。上意にも御賞翫候なり。又書札禮節等をも。彼被申し事をもとゝして被相定なり。大草子と申物を被書置也。

一攝家の御事ハ不及申御賞翫也。清花も御賞

翫なり。但しまた四位五位にて御入候得は。又ハ差別も御座候。又清花の息女は上臈に御參也。攝家の御息女ハ無御參也。

一御内書之事。

當寺事。由緒異他之上者。彌可被抽懇祈段肝要候。隨而滿中寶殿造替儀。各令馳走相調之者。可爲神妙候也。

四月十四日

多田院

一奉加帳に判形之事。官を書て判形あるへし。無官ならは。名字を書て可有判形。口傳在之事也。

一御觸のとき。扇をぬかざる事可然之由。先々も申習し候。近代ハ如法ぬかれ候。瑞松軒なとは。さもあるましき旨被申由傳かね候畢。常興なども。さやうに覺中候由在之云々。

一十月五日より明年の三月二日まで。きやは

んを走衆被仕法意云々。

一御精進ほときとて。諸家より美物進上候。然るに御精進ほときは可中。御精進ひらきとハ不申なり。

一進上に。四足の物にハ兎より外ハ不及見候。一諸道に付て人の弟子に成事。面向の弟子。内儀の弟子と云事有之。差別ある事なり。

一法量物之事。永正十七六廿日。

爪打刀七寸。ヒラ二寸。ツカ九寸。

同ツテ二寸三分四方。エノ分七寸。

同板二尺三寸。ヨコ一尺五寸。アツサ一寸二分。

竹刀二尺五寸。或三尺。節ハ不定。

藥ツ、一尺二寸。節ヨリ上四寸二分。

馬船長二尺。廣サ一尺七寸。深サ一尺三寸。厚八分。

ハリヒシヤクエ五尺五寸。口七寸。深サ八寸

五分。蠅拂エ二尺七寸。馬ノ毛ノ分二尺計。  
ねこかき二枚伏草ニ用之。二枚ヲ一間ニ用  
之。

右大概此分。但定法儀者無之歟。爲船用  
也。

一細川家年寄衆方如此。

御書謹而頂戴忝存候。殊御太刀一腰。御馬一  
疋致拜領候。畏入存候。仍御太刀一振。御馬  
一疋進上仕候。此旨可預御披露候。恐々謹  
言。

吉良殿

高橋、殿

島山殿

丹下、殿

山名殿

垣屋越前守殿

澁川殿

島匠作

温井、殿

武衛

織田、殿

石橋殿

一色殿

延永、殿

東條、殿

北島殿

垂水、殿

尊書殊御太刀一腰拜領仕候。畏入存候。仍御

太刀一振致進覽之候。此等之趣宜預御取合  
候。恐々謹言。

赤松殿

浦上、殿

六角殿

三雲何かし殿

大内殿

杉、殿

富樫殿

、殿

今川殿

矢部、殿

丹後仁木殿

、殿

安藝殿

小早川、殿

一謹上書衆。但文言ハ賞訛云々。

伊達左京大夫殿

芦名修理大夫殿

南部、殿

漆 民部大輔殿

大友、殿

京極殿

若宮、殿

土岐殿

齋藤、殿

栗屋、殿

土杉殿

長尾、殿

伊勢仁木殿

、殿

備後殿

宮下野守殿御宿所

石見殿

福屋、殿

、殿

大寶寺大膳大夫殿

小林寺左衛門佐殿

葛西、殿

嶋津、殿

松浦、殿

、殿

、殿

、殿

、殿

菊池、、、殿 少貳殿

伊東、、、殿 原田、、、殿

阿蘇、、、殿

一伊勢祭主殿人々御中。返事ハ貴報御報云々。

日吉樹下 松尾神主

松梅院 春日御師

平野神主

中東殿此衆ハ御宿所。又ハ進覽御報貴報云々。

賀茂社務 住吉神主

一山門使節。御同宿中。又者進覽御報貴報云

々。

一當方御家子衆へ者。可得御意候。參人々御

中。御報貴報云々。

一守護代衆并年寄衆。御宿所。御返報。

一御馬廻衆其外攝丹之國人。むかしハ進し。近

年はさう字の御宿所是ほとに候。

一公方様御供同朋衆へハ。何阿彌陀佛。御宿

所。御返報。

一當方之同朋衆へは。何阿彌陀佛進之候。

一家ノ子衆。守護代衆。被官。其内のおとなほ

との衆へは。さう字の恐々謹言進候。

香川内 樋藤、殿進候。 内藤内 弓庭、殿進候。

安富内 高木、殿進候。 藥師寺内 夜久、殿進候。

此外長鹽 奈良 香西 兩寺町

内者にも。都の代官などには同前。

一觀世太夫其外四座へ恐々謹言。觀世太夫殿。

打付書也。

一田樂へも同前。

一上池院 竹田 清法印 社乗坊御宿所。御返報。

一同 長野 神戸 梅津はハ同輩。

一千草伊賀守殿進候。

一醫藥 陰陽 官外記大略相輩御宿所。又進覽。

一諸門跡之出世。

一高野根來寺。粉川末寺。山門三井寺等之衆徒



の方へハ。何院。御同宿中。又ハ進覽。

何も細川家年老衆々如此爲分別。正文ニ

テ寫之。

從番方對諸家書札法様之事。但於番中も家之勝劣在之條。不可有一篇。雖然。以大方之趣令注申之者也。

一青蓮院殿 三寶院殿 聖護院殿 若王子等事。

御門跡何も不可爲直札。出世坊官又ハ侍法師何にても。一人に對之可爲付狀。次に若王子之事。聖護院門跡下之人也。不可有門跡之類。依可爲直札若王子殿人々御中。又ハ御坊中なと、可有之。當官僧正多分は恐惶謹言可然候。

一攝家。清花其外。勸修寺家。廣橋家。冷泉家。

伯家。日野家。飛鳥井家。烏丸家。阿野家。坊城家。中御門家。藤兵衛督家之事。攝家清家

之御事は。右如く申候。可爲門跡之類。不可爲直札。其内に殿上人にても。諸太夫にも。又ハ侍にても。其方へ可爲付狀。次に日野殿儀者。公方様依御外戚。以世被賞翫之間。清花程の意得故實也云々。其外勸修寺家以下之事者。直札にて人々御中と被調之方も可有之。又進覽なと、書給ふ人もあるへし。又清花などのことく直札ならず。付狀に被認輩も可有之。何も恐惶謹言。

又其時の官位にもよるへし。大納言。中納言。なと何も公卿の位へハ。一かと禮義有之事也。又一向末之五位六位之殿上人之位たらは。其用捨可有之。冷泉。飛鳥井兩家之事ハ。哥鞠之爲師範之條。取分賞翫申儀。古今之故實也。

一吉良殿。石橋殿。澁川殿事。直札ならず付狀たるへし。但人跡によりて。直札歟人々御中



なと、取調之儀も可有之歟。此内吉良殿御事ハ。公儀にも別而御賞翫有之義。仍其用捨可有之。何も付狀たるへし。

一女中衆への事。大上臈。小上臈。中臈。御下。御美女の事。大上臈。小上臈へは。直札にてはなくて。めしつかはれ候女房達への宛所にてまいる申給へ可然候。女中方への書札も。名乗を可書。女中方へハ。上一字をかなに書。下の一字をまなにかくへし。法躰よりは上の字をまな。下の字かなたるへし。次中臈へハ。大かいに上臈と同前に取調之候。然共直札も勿論也。又ハ人にもよるへし。直札の時は。縦令春日殿へ被進候は。かす日殿御局とは。重言之様に候へ共。賞翫の心得也云々。まいる申給へにてあるへし。又里の名をつ□のへ御つほねへまいる申給へともあるへし。里の名をかく事は。慥に其御名をか

くよりも。少しやうくわんの義と云。次に御下への事。縦令はりま殿への書狀ならは。はりまとのへ申給へとあるへし。御下の事は中臈へも。うちつゝ事あり。まいる申給へと可在之。又人によりまいるへしとも。まいるとはかりにても。取調之方も可在之。次に御美女事。其内にても御うハ美女と申ハ。御下に打つゝく事に候。しら川とのへの書狀ならは。しら川とのへ申給へともあるへし。又はりるへしとも可在之。白川とのへ御局とも書たまふへし。惣してつほねといへる事は。女中かた上下によらす申詞なり。然るに御美女へは。局と云字の事。御下知などには不認之由。右筆方は被申候由承及候。然とも御下知には可相違歟否之段。慥に無覺悟に。又人によりてはりるとはかり書たまふ人もあり。またはりるとはかり在之事ハ。

るへしとあるよりハ。少おとりたる書やう也。又るへしよりは。るとあるは。少うへたるよし申方も候得とも。るへしよりも。るとはかりは下たるへきよし。申習し候。るとかき候は。いちの下手たるへし。

一長老。西堂。首座。書記。藏主。侍者等之事ハ。

長老たらは其寺號を書し。侍者御中。侍者禪師。衣鉢禪師。衣鉢閣下など可書之。恐惶敬白とも恐惶謹言とも可在之。西堂大方同前。少者差別可在之。床下。足下。書記。藏主へ可書之。玉床下。尊床下と書事は。少敬義なり。參と云字書事勿論なり。惣て出家の上には俗生は不及沙汰事とは申ならはしたる段ハ。勿論たりといへとも。かやうの藏主。侍者などの上にては。殊更俗生によりて賞翫申義。其例古今在之。出家と申なから

も。猿樂。田樂の子などには立合ましき由。先年於相國寺一山の被申事在之。又侍者藏主の位たりといへとも。聯輝万松軒などの御事ハ。其御身既に竹園にて御座候て。然も公方様御連枝御分たる間。各一段と賞翫御事也。かやうの御方へは。直札にてはあるましく候。

一三職之事。付狀たるへし。但人鉢によりて直札にもあるへき歟。大畧は付狀なり。おくのとめやう可預御披露とも。又宜預御意得共。又可被申入存上候事と留る事常之義。猶書やう共可在之。

一山名方。一色方。讃州能登守護などハ。大略同程の被調やうたるへし。大方三職にも准之。然れ共。人によりて直札たるへき歟。三職よりハ差別も可在之也。人々御中。謹上書なとも有へし。

一土岐方。淡路守方。京極方。武田方。大内方。富樫方。大宮方。菊地方等の事。直札にて人々御中。又は進覽。又ハ謹上なども勿論也。但又直札ならず。付狀に被認義も可有之。惣別さしわたりたる法様ならねとも。或は其人の知行分の國の守護。又は別の子細ありて令賞翫。付狀に書給ふ事。古今のならひ。又は故實とも在之由を。

一仁木方。上杉方。其外外様衆への事。仁木殿事ハ其かごある間。人々御中。又ハ進覽などもあるへし。其類は外様衆之内にても可在之。其餘の方々の事は。大畧御宿所などなるへし。

一御供衆中の事は。様躰同前。御供衆にも國知行の方もあまた在之。淡路殿も代々御供衆なり。典厩之義。別而御用之趣也。伊勢守方より右馬頭殿ハ付狀なり。以之可有勘弁な

り。

一中次への事。大略外様衆と同前。

一右筆方への事。大かい御宿所書也。進之候と被調候方も有之。

一同朋衆事。大方同前。

一御末男衆事。進之候。又ハ御宿所も在之哉。

一在富卿。有言朝臣事。御宿所など勿論候也。

一上池院二位法印事。大かい同前。

一善法寺。松梅院事。御坊中など、可被調候。

勿論候哉。但善法寺事は。むかし御外戚かた／＼別て御賞翫なり。御相伴にも參勤候。又

息女しこう候へは。小上臈分めしつかはれ

候。法住院殿様御代には。大上臈分候つる

間。例式の社家方よりは。其かと候つる。若

王子と同前に可。在之哉。善法寺覺悟ハ猶以

是よりは可爲上候様に被申候つる。然とも

若王寺ハ大僧正にも被成候事。各如此候也。

善法寺ハ御相伴にも被候候間可相替也。

一三職之内年寄衆人の事。進之候にても可有之。然れとも當時多分御宿所と被調候。また人は人にもよるへし。

一同馬廻衆事。大かい同前。

一評定衆事。外様衆と同前。惣別評定衆と中は。攝津。二階堂。波多野。町野等也。何も外様衆之分也。

右條々。斟酌雖不少。御懇望依難去。令書進之候。定相違之儀可有之哉。一切不可有外見者也。

天文二年七月日

加賀守貞滿

常怡在判

右同氏加賀守貞助自筆本寫之。

以東京帝國大學史料編纂掛謄寫校合畢義

# 伊勢貞助雜記

一御内書之御文言。常にも認事在之。

可抽忠節

可抽戰功

可擢籌計

可勵戰勳

可致軍戰

可據軍功

可擅忠勤

可專戰忠

可嗜軍忠

可遠計畧

可加誅戮

可存勝功

獎獎努

可挺戰功

可勉戰勤

國之興亡を見るには。政之善惡を見るには如す。政の善惡を見るにハ。臣の用捨を見るには如すと云々。

殿中一献之時。御縁之御通之事。二三度も御座候。一番の御酌ハ必々伊勢守也。二度ハ藤中納言殿。御ひさは御供衆中に故實之衆

參勤也。御□をは。御□千の三に置候て被罷出候。次の間より庭上へおりて。御前にて手をつき。其まゝ御縁へ罷上時。御相伴衆。公方衆次第に如常被參候。此時も庭上へ御おり候て。さて御縁へ御參候。其時一番に御參候方へ。御てうしの上なる御盃を取て參候を。如常御まいりにて。御盃を被置まへ。御參候様に庭上へ御おり候て。さて御縁へあかり。御祇候衆へ次第にさし可被申候。其様躰如常別に仕合は無之候得共。昔より大事の由申傳候。

一 同時御折を被出候事も候。是は御簾あかり候て。御前より被出之候つる。自然依御氣色の儀まれなる事に候。

一 同時御盃臺被出事。度々御座候。御供衆被持出。御縁に被置候て以後に。御酌被罷出候。様躰は如常にて候。さて一の後にたへ候人。

まやを持て退出候。其時は盃をハ臺に直候ハて。臺の下に置候盃三ツも又は五ツも候へ。一ツたへ候て。御下におきくして。さて臺の下に重候て持て罷立候。則其臺をは被拜領候。大略ハ伊勢同名若輩の役にて候。此儀は御縁の御通に不限事にて候。

一 一番には公家衆。御相伴衆。御供衆。二度目御部屋衆申次上他院攻衆走衆も被參候時在之。三度目同前。奉行一兩人被參たる事も有之。これハ不定。上様の御供衆被參たる事も在之。希事也。

一 公方様御酌候て被下儀も。度々御座あり。御座敷の内に御座候て。被下候人は御縁にてたへ候。

一 同時かへの御ひさけの事。心得在之儀也。他名に無御改知事也。

一 於御前殿文字之事。御連枝井吉良殿御事ハ。



よくきこへ申候様に可申也。三職の御衆ハ申けすやうに中也。四殿も同前とは申候へ共。なを申けすやうに可申也。女中方には。上臈の御名も同前たるへし。同中臈衆ハ。殿文字不申之。然共女中かたあまりにふつきりに申もいかゝにて。少其分別可然よし申習候なり。

一御服を被下候上。御かたひらの時分。御小袖ならは。いかゝにて。觀世太夫などには。何時も御小袖被下事勿論にて候。自然遠國なとへ中出着下拜領させ候事は。常有之事候。一於御前本練を被下候時ハ。小刀にてわり候ましき由申人も有之。いかゝの事。御仁躰にもよるへく候歟。式々に沙汰には及候ましき事歟。惣別わり候ても不苦候歟。其故は堂上の御前にては。ふたつにわりて用之由。申ならはし候時ハ。わたくしゝにてはわり

候事不苦候歟。

一於御前爪をむき申事。此儀何共不存候。又しるしたる物にも不及見候。常につかまつり候躰たるへく候歟。

一具足を。書狀等に具足と書事は如何候。其故は。具足とは物の惣名なり。樂器具足。女の手具足。又射手具足。三具足などゝ申候也。腹卷と可申事可然候。勿論鎧にて候へは。鎧と可申。腹卷と調可然也。

一公方様へ御樽進上の時。御折式荒肴魚鳥備上覽候哉事。何にても候へ。備上覽事ハ無之候。目錄を懸御日計なり。二月朔日。七十二自皁山殿御進上之外。備上覽事は無之。

一公方様より自然誰々にも。御折御樽被下事可在之時には。やう躰如何事。ケ様の物被下儀。定てハ無御座候。自然被下時分。申次之方より可被遠下候歟。然ハ御目錄に遣も。又

私より申遣書狀等にも。御折樽と御文字あるへし。八朔などの御日録に可准也。

一攝家御參賀の時。諸太夫并御侍など。殿中御縁へはあかり不申之由候。如何。攝家之御供の時。諸太夫御縁へ祇候の事は無之候。自分  
に御禮被中時候祇候勿論也。御侍衆の事不及申候。御門跡方坊官も同前。坊官衆の事。

持公事白尊氏公四代目

時代にもより可申歟。勝定院殿様之御母儀様ハ。勝髮院殿と申て。其俗姓ハ三寶院殿坊官大谷安藝法眼息女にて御座候ける間。他に異なる御威勢たるに付て。坊官安藝一段之立舞。諸家の譽非大方。其例を被引事も在之。此段ハ格別子細之由。古人注意之。隨時儀事也云々。

御侍衆ハ。御對面も於御殿ハ無之由候。然

家衆之侍也

るに。攝代近藤山城御通に祇候。各不審被下之。是は上様御里かたゝるによりての

事也。不可洩自余由。其沙汰在之。さもあるへき事歟。

一殿中へ足なか木履の事。不苦歟。然ハ誰々も行合候てもはき可申歟。あらなるほくりに禮ハなき由。古より申習し候へ共。見しりたる人には用捨候て可然候。貴人などへはぬかれるやうに。此方より用捨尤候。かやうの事は。法の外の心持專用候。

一諸大名之家子御對面ハ。いかやうに候哉。家子御對面とて。相替事は無之候とて。御禮被申上衆も在之。然共當時斷絶候歟。不時御禮申勿論之事也。又諸侯衆と參會候。各存分共有之。御供衆とも次第被申事在之。又家子にもよるへきよし。先々よりも其沙汰在之候事也。

一折筋の小袖に紫のましりたるは。殿中へは如何哉。色繪にまちりたるハ不苦候歟。かた



みかはりなとは不可然候。

一しはらさる鞍を人に遣事はいかゝ。御意なき事候ぬりたるくらたうは。かみゑりにてもかりにしはりて可遣。木地にききはるを入ても可遣。こりくらなとは。しはらさるも不苦歟。人に遣事ハ不苦之由申候也。

一諸人進上の御腰物をは。やかて取候哉事。御腰物進上候も。御太刀そひの事本儀也。然者可有御持參。御前御退出候時。申次罷出。御氣色を伺。御座敷の指合申候はぬ方の角に可被置。左右之御かたの事ハ不定。又御かけへとり申事も有之。但御腰物は。一かとの様候間。御前にをかれて可然歟。又ハ時宜にもよるへし。

一五ヶ番御禮之次第之事。何にても候へ。其日の當番衆。ことく御禮被申て。其次に一番衆其次に二番衆と次第に被參候。自然惣

番人御通被下時も同前。

一若君様御若年之御時。御成に御乳人御こしへ被參とも。御供下ハ常の御成に相替事は無之哉事。御弟御所様之御成は可相替。各別の事也。

一御紋御着用之諸大名。人の子に名字をわけられ候ハ。其人も御紋着用有へく候歟の事。名字を被分御方の可依御存分候歟。又は被臣出次第にもよるへき歟。近頃も畠山殿の名字を被分。御紋着用ありて。御供に參勤之例連綿在之。

一進上之目錄。同常に用目錄并折紙注文認事。此三同事の様に候へ共。各別之義候。能々可有口傳。

一同料紙も。人々によりて可相替也。常式は引合可然候。又一重相調事も在之。一枚に認事も在之。諸事より進上候にも。一枚に調進の

衆も有之。一重の事ハ通法なり。ならひおか  
ては難認事也。

一於御前大上臈に上臈之盃をいたゞき候ま  
しき事也。但又事之躰にもよるへき歟之由  
候也。

一御内書に覺候との御文言ハ。御自筆の外に  
ハ調進候ましく候。御自筆の外ハ。用捨の事  
也。此外にも御自筆と調進に相替事多し。

一御裕をは。御肌ご可申。御あわせとは不申。  
御はたと申へし。はたへの事也。御ふく所よ  
りの注文にも。御はたと認候也。

一吉良殿御參の時。御さかな四方にて參候哉  
事。御四方勿論之事候。御盃二ハ參候へは。  
二ツ日之盃をも。吉良殿はしめさせらぬ事  
は候。

一石橋殿。澁川殿御相伴の時ハ如何事。三職な  
と相伴と同前。替事はなし。

一御相伴衆。三職并四殿御事ハ不及申。其外ハ  
參次第にて候。御供衆も同前に候。雖然近代  
細川奥州など御供衆に參勤之間。其扱も在  
之由承候。惣別は參次第觸折紙なども認事  
にて候。

一御服被下候時。自然御はたとひ申時は。別々  
にたゞまれ。裕也御はたと下。其上に御小袖をお  
かれ候。又御成などの時。五重共進上之時  
ハ。一かさねツ、かさねて。袖の下をとち  
候。御ねりぬきも同前。其時は惣之ちをも仕  
候。

一御小袖。御はたと。御かたきぬ。御はかま被下  
候事ハ。まれなる御事にて候。自然御座候時  
ハ。下に御はたと。其上に御小袖。其上に御は  
かま。其上に御かたきぬと次第候はん歟。御  
服所より御進上之時。如此にても。

一御小者。或御庭者以下御かたきぬ被下事。何

共沙汰不承候。惣別御かたきぬの事。誠に  
かき御事にて候間。先規之御例ハあるまし  
く候。□□たる物にも不及見候。

一鞍の修桐の御紋を付候はん事は。いかゝあ  
るへき哉。御紋の御衆さへ打任て被付候事  
ハ不可然山。先々も其沙汰候。況御紋御さし  
ゝなき御衆は。不及之儀候。拜領之鞍に御紋  
於有之者。乗用不苦候。

一御字御拜領仕事ハ。折紙にあそはされ候て。  
御太刀御刀にそへられ候て。御盃頂戴の時。  
ちきにまいらせられ候を。一ツに御座候て。  
御いたゝきに。御字をは左の手にもたれ  
候て。御退出候。御腰物出候事ハ。まれの儀  
候。先は御字御太刀計出候。御腰物の時は。  
御太刀に取御そへもて御持候。御もち候所  
は。おひとりの間たるへし。

一同わたくしさまにても。大かた此分。又二字

書候事も有之。まづは一字書遣事通法なり。  
一御酌の時。際こしにハくわへ申ましく候。御  
酌のかたよりも。又御ひさけのかたよりな  
り共。そこさいへ手をかひて。くわへらるへ  
し。何事にもさいこしを嫌事にて候。殿中に  
て同前たるへし。

一廣蓋の事。縦雖爲新調。私の紋のつきたるに  
ハ。御服をハ入ましく候。諸家へ御成の時  
ハ。必々御紋のひろふた用意の事ハ勿論也。  
然其古人物語の事有之。不及注置也。

一公家衆路次にての御禮の事。輿にはたれ候。  
此方も馬にて候時と。路次をよけ候事可然  
候。但し難成候ハ。自此方下馬候へは。必  
こしより御出候。能御禮を申。少行過され乗  
馬可然候。かちにて行合申候時。しきれなど  
はき申候ハ。あしなかにはきかへ申へし。  
惣別しきれの事は。はかれ候事は無之候。

一殿中へ諸侯の女房衆祇候被申時ハ。いかやうに候哉。御はゝに御なり候て御參の時は。御はゝの御こし臺屋の御つまへよせ申。殿中の中薦衆おむかはれ。御かいしやくの事にて候。自然御相伴にも御參候へは。三方にてまいり候。其外の女房衆しかう事。何の局にても。かしみのミはん房の下口よりしかう候。北の御門よりこうに御おり候。また伊勢守女房衆ハ。代々御はゝに被成候てよりは。是も何の局の下口まで。こしにのり申候。東山殿様の御代には。諸侯の女房衆もあまた祇候候つる。奉行飯尾元種母事外の老左にとへるも祇候申候者。近頃は貞陸母祇候申候。それは御母之被成候て後にもしかう申候。御はゝに被成候へは。其名をよはせられ候事も。御はゝとめされ候。又其外の衆をは。其子へ候得は。たとへは兵庫助はゝと

被仰候之御心安。内々へしかう申事ハ。非例之儀候き。

一進上の御樽の御肴に。鷹の鷹。或たかの鶴なと。五種十種の内へくわへ申ても進上候哉。たかの鷹鶴進上の御肴に成申事は。勿論候事候。但し我かたかのとりたるをは進上候て。人の鷹のとりたるは。進上にハ用捨候。惣別御樽の御さかなの内へ。たかのとりをくわへ候事は。いかゝのよし候。其ゆる。御さかなをは。何も不備上覽候也。無念之由候て。御さかなの目錄の外に。別に鷹の雁又ハ鶴なと進上候由相見へ候。是は進上のこと。またわたくしハ不苦候歟。

一御折二合參候時。まんちうを一番に參り。さて魚物の折可參歟事。先々よりも此御沙汰あり。前後何も不苦之由。各被申之。惣別昔は御折の物を。御主御前様御はしよきこし

めしたる御事の間、誰人も被參事はもと  
候無御座由、慥に注たる物にも相見候。  
然間、まんなの御おりには、御はしをすへ  
不申由候。こさしも同前の事にて候。同御前  
の御出りをすへらかし。御通ニ被下事常之  
儀也。やう躰共、又心持有之由。

一御鎧并御腹巻進上の時、かふとのしのひの  
緒の事、他家にはわたかみにかまれ候。此  
方にハ、からむ事無之候。わたかみの上に甲  
を置。しのひの緒をは、わたかみのゝひへ入  
候。まてにて候。

一公方様御酌にて、誰々にも御酒被下候時、御  
ひさけは誰人御さたあるへき哉。事、公方様  
御酌にて御酒被下事は、常には御座有まし  
候。御成の時、はての献の時、御酌にて其  
亭主に御盃被下候。其時ハ御相伴の公家衆  
の御役に候て、於殿中て同前。一献の時ハ。

献數をおはれ候。御相伴衆御酌御參候後に、  
次第に三首御參候。御ひさけも。其次へした  
かひ御參の事にて候。

一公方様へ御さしたる或はごつくり鈴など進  
上に成候哉。指尊之事不及見候。進上には成  
ましく候。ごつくりすゝも不及承候。但新調  
の銀瓶御食籠。御局にて自然の時、御前へ參  
候。おもてむきの進上には成間敷候。

一御小者を。人躰により御小人とも申哉。御小  
人共可申。平人も其心得あるへし。同御下部  
を御下男と申も同前。公家方にては、下男を  
仕丁とて申。同笠持をは白丁と可申候。其品  
共在之事也。

一御縁の御通の時、御ひさけハ庭上に祇候候。  
御酌庭上へ御おり候て。御くわへ候。就其。  
伊勢名字の者。心懸之義在之。他名に無存知  
事也。



一於御前御くわへ申時ハ。御ひさけかりそめにも。下に置ましく候。

一わたくしにて。女房衆ハ主人のさかつきを。は。いたゝき候はて。しくちをそへ候由申いかゝ。何ごも不存知候。常にはまついたゝかれ候て。さけをうけられ候。結句口をは御そへ候はす候かと存候。但女中かたの事不分別候。

一雁又は鶴など鷹のとりにて無之候はゝ。かけ候はて臺にすへ進上仕候哉。臺のとめにするへられ候て可被懸御目。又ハふせ鳥又ハかけとりなどを射て。當座に懸御目時ハ。かけて臺にすへ候はす其可有進上候。私宅より進上候はゝ。臺にすへて進上あるへく候。又ふせ鳥は。雉と鶉と此ふたつにかきりたる詞也。何鳥にてもふしたるを。ふせ鳥とは申ましき事也。かやうの鳥。御目にかくる

事。矢所の心持もあるへし。能々可分別事也。

一爲御使諸家へ罷向時。發端の詞。所により可相替。或被仰出趣ハ。或上意之趣。或公儀之趣。或禁中などにて。對傳奏申てハ。仰候趣しなゝと。所によりて申渡候事。故實之由候也。

一參會之時。自然亂酒に成て。觀世太夫。或左様之類。盃をさし候事。若在之ハ。そといたゝきてのみ可申歟。たゝそのまゝのみ可申歟事。觀世太夫以下盃の事。何共沙汰不承候。時儀様躰にもよるへき歟。

一御服と申ハ。御小袖以下御かたひらなどの惣名にて候。吳と書申哉。吳服之字の心は相叶て候得共。未及見候。たゝ御服と候て可然候。

一御亥子の御けんてう。觀世太夫にもつゝま

れたるを被下哉事。觀世太夫にも諸大名拜  
領のことし。繪をかきたるを被下候。又上つ  
ゝみに御かき付はなく候。御書付候て殿文  
字をあそはし候は。御紋免され候御衆。同御  
供衆へは殿文字候。その外ハ無之候。もと  
／＼御供衆へは御かきつけ候はぬ由候。  
近年ハ御座候。

一御なりきりとも。又御嚴重共申候。嵯峨川親元など

書狀には。御なりきりと認たる由。慥に注置  
候。かなにて御なりきりとも。又御成切共調  
進候也。

一みすゝたれかけ候とも。はるともと哉。かけ  
候とこそ申ならはし候へ。はるとは不及承  
候。さる人の申されしは。心敬の連哥に。お  
しはるミスにしたふおも影と候に。さおし  
かのあとをおふのゝあつさ弓と候。然は。は  
るとも可申由。申たる人候。それはとも候

へ。聞なれさるよし被申候き。歌連哥には。  
あしき詞ハあるましき事なれとも。常に申  
つけさる事ハ無用に候歟。但かやうの事を  
もとめ出し。物しりかほに珍しく申出さん  
とふ人も在之。尤用心あるへき事歟。

一御成の時。草歌うたい申事ハ。式三献の後。  
御さかな參て御盃時。かならず被申候。其時  
はゑほしかけを仕候て。うたい申され候し。  
金山家のやうに申候。近年は齋藤甲斐守。朽  
木信濃守など。細川殿にてうたい申候し。

一御内書に御君印出され候事候哉。おもてむ  
きの御内書に朱印の御事不理覺悟候。又古  
府案候も不及見申候。琉球國人御朱印を出  
され候御事は。勘合と申て。各別の御儀にて  
候。大唐。琉球。高麗。此三ヶ國へは勘合と號  
して。彼三ヶ國より調進申。其を出され候事  
候。下々にわりふなと申やうなる儀候。此



將軍義澄公ノ事。自尊氏公十一代目。

勘合。法住院殿様御代に紛失仕たるによりて。式々の唐船無渡海候。然を大唐の勘合はかり大内義興再興被申。其勘合ハ大内家に被預置訖。是は各別之儀候。御内書に被捺御朱印儀者。面白に如何と不審候。自然之御用に御印をは。東山義政公事。慈照院殿様代に渡唐船の時。大唐にて調進候を。貞宗致進上たる旨注置訖。御内書に被捺段ハ不相見候也。

伊勢守金山寺事。

一進物に御太刀御腰物唐物以下。前後之次第候哉。進物前後大畧相定候。先御太刀より前に進上候物ハ無之。古進上之記録に相見候。能々可有御分別候。披露の事は。目錄次第ニて候。

一禪家へ御成事。入院などの御成之事ハ。其寺の故實有之事也。又御作善に御成の時は。御ぬりおしき御わんに候。僧衆のことくに御ときも參候。大衆と御相伴は候。四のかしら

のかゝとのわき左の方に。座頭の屏風たてられ御座之由候。近代如此御事ハ無御座候。御配膳も喝食參勤候。俗姓により無參勤事候。御事かけ候へは。諸侯之養子に成て被勤之。然者其人ハ禪客免除之由候也。昔は二節の乗拂には。御成御座候由候也。

一於禪家者。縦攝家清家の雖爲御息。四方三方を御用候事は無之。自然御連枝にて殿中へ御參の時は。依時儀四方三方御用歟。

一紫衣黃衣によらず禪家の長老へハ。四方三方にて何も不參也。

一禪家御衆御禮被申入時も。扇を被持候。扇を被持候事は御禮にて候。同喝食御禮の時も。扇をもちながら御禮御申事にて候。

一御服を人に被下に。二ツなとハ被下事ハ無御座よし申方候。如何候哉。御服二被下事ハ。常に在之事は。一重二重と申事は。御は

たのそひ申たる事は、御服二三も被下事。其例不可勝計。もと／＼ハ年始にハ三職并諸大名御供衆少々一重二重被下事無紛候。二ツ被下候事は、あるましく候と被申方ハ。古記録無披見存候歟。

一主人の御馬を、誰人も庭乗の時ハ。庭上へおり可申歟。主人見物なく候ハ、おり申ましく候歟。主人御見物なく候共。おり可申候。又私々の馬にて候者、御見物なく候ハ、庭上へおりましく候。

一はたせ馬を。はたか馬とも申哉。はたせ馬。はたか馬同事にて候。

一とうゆいの事。別にも申哉。つくら詞轉軒つくらと申候。簡信の事也。

一ひつしきを敷候に。常にハつけたるやうにくひかみをうしろへ成て敷候。又自然佛神の御前えしき候には。くひかみを前へ成て

敷候よし申。如何。さやうに申ならはし候。其子細者不存候。

一殿中にては。初献の御ひさけの人。二献口の御酌御座候由は、かやうに次第候。乍去定たる御法にてなき由。伊勢備中守貞藤瑞笑なと申候つる。度にあればれと候へは。手間も入候間、故實の由候。

一大内家には。初献の酌とりたる人。二献口の盃を持參由候。如何。さも候哉。其家々に仕つけたる儀在之事候間、可爲不定候歟。

一貴人御さかな被下候時ハ。右の手を上。左を下に重て。手のくほに請申候由候。如何。此分可然候。さやうに候へは。懷中も仕候にかつてにて可然候。

一於殿中しけき御能候時ハ。太夫に御おりかみいかほと被下候哉。細々の御能にハ三千疋被下候者。又不被下候て。かくやハ御折御

たる計被下候之時も在之。又正月の松はやしには。しやういに万疋。當日万疋被下候也。御臺様よりは御服十重被下候也。何も時儀による事候。不定に候。

一殿中にて御蓋臺は。いかほと參候哉。もと／＼ハ一二しひて三には過中さす候つる。當時ハあまた參候哉不存候。

一御走衆に諸大名の同名も參勤候哉。畠山左近將監。今川。關口など參勤候。彼被申置たる儀無以申傳候。近年之儀者不存候。

一同□けひの時も參勤候哉。藤民部。駿河守。伊勢。上野なかにゆひにて參勤之由候。其外も可在之。

一殿中御厩へ馬の毛によりて不被入由候。如何。馬の毛被嫌之儀者無之。

一佐目は御厩へ不被入之由如何。左様之儀不承候。義興在京之時。佐目に一段御馬御座あ

りて。被申請たる事有之。其家々に付て嫌きたる儀は在之。丹後國に知行持たる人ハ葦毛を不持由申也。左様之儀ハ各別也。

一殿中御火爐ハ。九月晦日に開爐候て。三月晦日にふさき申也。御作事方奉行申付之多分常始被申付之。惣別御ゆるりハ。常御所に一ツ御座候。御對面所にはちうしやくの御火鉢を被置候。十月朔日より火をおき申なり。御立炭なり。三月中も置申也。但年によりて三月三日より。火をは不置申事も在之。

開爐。閉爐。塞爐とも申云々。閉ハとつる。是は不密也。

一殿中御蚊帳つり申事は。四月蚊いてき申時分。陰陽頭に申。御蚊張釣申日次勘文進を。其日伊勢名字兩人。右京亮事下總守貞行。肥前守盛種參勤。ちかき比は貞遠參勤申也。毎日のあけおろしは。女中上臈之御役なり。又ハ月中

文進

に徹却之日次を。陰陽頭に彼勘進の口。兩人致祇候おろし中也。いまた蚊御座候へは。掉をはとり中て。ひつつりと申て。何にてもかりそめにつられ候て。九月までひつゝりにて御座候。

一殿中御障子をたて申事ハ。十月朔日よりたて申候て。三月朔日より明中也。

一公方様御小者も、ひき脚半をハ。十月五日北野御經へ御成よりも仕申。三月三日まで仕中候。又雨もふり次渡あらく候へは。走衆も御小者も。脚半をはとられ候。大名の内衆も同前。御供衆も、ひき、やはんをめされ候。又大口ひたたれの時は。誰も脚半をく候。惣て赤脚の見へ候事ハ。尾籠之事にて候。

一御靈御神事に。兩社へ御神馬の事。上御靈ハ別當。下御靈ハ若代丹後守かたへ。社家奉行

七月十八日祭禮

より渡也。七八月兩度の御神事御神馬參候。自然と候て。七月には不參候へ共。八月には必々參候。大略兩度參候。自社家も御神供早天に參候。於今川還幸御拜之事。常御座候伊勢守ノ御き。御幸之刻は柴を燒申也。社例也。貞宗宅へ細々御成事有之。

一御前へ自然瓜參候時は。いかゝ御座候哉。御かけよりむきたる瓜參候へは。めしの御茶碗に入申て。こりさしそひ中。御四方にすはりまいり候。又ひやうふねにひやされ候て參。それをめしの御ちや碗の牀に入。於御前むかれ候つる事も在之。於御前各々被下候事ハ細々に御座候。其時は同朋衆むき申候。御前への事にて無之候。如此の時も。うりはうちやうの沙汰は無之候つる。宅たる法ハわかましく候歟。同朋衆ハ御かけの事也。一端午に菖蒲入。重陽に菊を御酒へ被入事候

哉。御前向にて候。不被入候。御内々にては  
いり申候。女中方にては被入候。おもて向に  
ハ無御座候。

一重陽にきせわたと申事御座候哉。御庭に菊  
をうへて。菊の上にわたを置候。其わたも。  
五色にそめ候。御庭の者の役にて候。多分御  
對面のまへの御庭に仕候し也。

一七夕に梶の葉に御歌被遊候御事候哉。七夕  
の御會は。面向にて御座候。梶の葉に御歌被  
遊候御事は。内々の御事候哉。梶葉七枚に御  
歌をあそはされ。やねへ後向れて打上られ  
候。何も内々にての御事にて候。

一三月三日烏合の事は。何方より勸被申候哉。  
鶏は五ヶ番より被參候。御對面以後被御覽  
之候。彌童子烏を合申。御太刀を被下之候。  
別に様躰ハ無之候。殿中日記にハ。闘鶏とも  
烏合とも認之。

一五月五日に。粽を上に成申候哉。先規は方々  
より進上候つる。近年ハ。粽百眞木嶋次郎。  
同百伊勢守進上之。此外も可有之候。五月五  
日之外には。御樽の御さかなとには不成  
進上に候。八朔に宇治大路竹のかわにてつ  
ゝみたる粽のひの籠進上仕候也。

一素麵御肴に進上に成候哉。御門跡かたより

自然は御進上候。一乘院白爲御生見玉七月五日也御樽

の御肴素麵一折。蓮若根一折。御樽三荷御

進上候つる。又能登より輪島素麵箱能登ノ名事に入て。

通作御進上候。其外は不及見候。但精進方よ  
りの御肴に參候哉不存候。

一各大勢參會之時。盃ニツ又銚子ニツも出申  
候哉。略儀にて候。但急事などの時。心安衆  
參會には。さもあるへき歟。其も二篇目など  
より銚子ニも可被出候歟。おもてむきの參  
會には。あるましく候。



一 赤飯。御前へも參候哉。何共不存候。宅て參ましきかと存候。

一 御扇一包とて。進上に成申哉。扇一包には十本の事にて。其をいかにもうつくしくたゝみたるうすやうのかさねたるにてつつみ。金銀の水引にてからけ。れうしの上に置いて進上に成候。かなめの方を御前へなして披露可申候。又つゝまさる扇を。人に參候も。かなめのかたを可參。一束一本の時も同前。

一 大鳥羽小鳥羽も進上に成候哉。引合にてつゝみて。上を水引にて結。臺にすへて。くきのかたを渡候ハ、しりも重てつゝみ候。眞鳥羽にハ色々の名あり。一尻二しりと可申。

一 鳥二とりとも申由候歟。

一 御對面の時。以申次御太刀被下時ハ。弓の録のことくつかの方をさし出候。其時は左の手をそへ候。又座敷のやうによりて。つかの

方を持て。拜領之人の右の方よりさし出候處を。其まゝとりていたゞきて退出候。何もさしきの手つかひによる事に候。

一 主人御參會の時。御酒半に御太刀被遣候時。持て罷出。主人へ渡申刻も心得候。同前たとへに主人の左より進上候。つかの方を可進候。又右より進候ハ、つかを持て。さやの方をさし出可申。是則被遣かつてたるへし。

伊勢守勝蓮院ノ事  
此段貞陸白筆にも在之。

一 御てうしを渡申事。男衆へは如常。又自然女房衆渡時は。てうしをよこに。左にててうしをかゝへ。右にておりめのはとりを持候て。よこにわたし可申候。是則御こり候よつてたるへし。又つねのことくも人によりてわたすへし。

一 主人の御盃をは。能々頂戴申て。口をそへ候て御酒をうけ申事不珍。又誰人の盃をもち

たゝきて。口をそゆる事ハ。いかゝに候。口をそゆることは。御したをたへ候心得にて候まゝ。人によるへき事の由。貞家は常に被仰しとなり。

一藤はなしの弓十張或廿張。田舎より進上之時。披露の事。藤はなしの弓。てはり弓のごとくに懸御目候。數は何張も同前。結やうとはあるましく候。大内家より八朔之進上如此也。

一そへさかな是はむきまたはやうかん  
なこのそへさかなの事也。をすへ申候ては。前のさかなに引かへ申候哉。又前の肴の脇にすへ可申候哉事。まへの肴の右にすへらるへし。引かへ候事は無之候。自然すへくゝに成候て。座しさもせはく候得は。配膳の人にあけて被渡事も候。是は略義にて候。

一物によりて一丁二丁の丁の字乃事。琴一張。

弓一張。鼓一張と書也。又鋤鋏等の類ハ。丁字にて候。或は繩或緒なとある。

一五色の内に勝色と申事ハ。三ッあり。一にハ白毛なり。二にはかちんをかつ色と申也。今一ッはあり物によりて申詞なり。

一太刀を渡候時。如常横に持ても渡候。又右わきを豎て持。口上をも申候。何と哉らん豎ては目に立候間。横に持候事にて候。

一目録渡候時。奏者故實にて御使のまへにて。披て見候事も不苦候。人にもより。時儀にもよるへし。

一奏者可仕事。殿中にて可申次と申候。常には奏者と申候。攝政家井門跡出仕をは。殿上人披露候。不參の時は。申次其役を仕候。長老をは蔭涼軒申次にて候。是も不參の時は。當日之申次。其役仕候。

一進上之御太刀目録。御前に置申候は。御對



面所の内。すへのさいのきわに。左の方に可置。口録のおりめの方を御前へなし。其上に足間を少すちかへて可置申ことくなる事はなし。

一御鎧などをは。兩人してかきて可罷出。具足着右をかきたる人は下手。左は上手也。右をかきたる人は。やかて退出候。左かきたる人。そと御具足に手をそへ。押なおして可罷立候。然に細川殿御家にかきりて。一人して御持參候。御くそくは如常。からひつのふたへすへ。其上に御かふとも如常あるへし。私にては同前。

一金欄。段子。繻子などのなかき物の類。盆にすはり候をは。なかき方を御前へ成申候。かけ繪も同前。外題の方我方へ成へし。何も此心得たるへし。又香合又香爐つは花瓶など。引合の上にすはり候ハ、紙の切口を御前

へ可成。又香合つは袋に入候をはとり出。懸御目。ふくろをは。別に同朋衆などへ可渡申候。但内々之時は。袋に入候て渡候。略儀にて候。何も盆にすへ候か本儀にて候。

一對諸人來臨の時。扱やうの事。殿中にては公家法中之西之衆。東の衆に申て。御對面にも樣躰御座候。攝家門跡禪家の長老をは。御送にて候。其品種々在之。不能注。文人の内衆猿樂田樂をは。於庭上御目にかけて候。又人の内衆進物などを。申次請取て如常披露申也。一於私客人に對面の事。一段賞翫の人をは。まつ座敷へよひ入申て。亭主被出。大方の人に。先亭主被出。人により座敷を立て。縁にても出合請之入候。又座敷の内にても座敷を立て色躰候。又一段敬人をは。庭上までも出合請し被申事も有之。常にはわれより少上首にも。まつ亭主被出候て。客人をよひ入

申事可然候。又客人より亭主上首にて候得は。座中へふる／＼と被出候て。太刀などを被進候て。御禮候て可然候。等輩の人に。常に座敷のすへにて。太刀を被出御禮可然候。かやうには申ならはし候。時儀により被扱候て可然候。正得の心得此分に候。

一 自他所上使たらは。奏者も兩人して可承。兩使の時も。其内に言口を兼て可定。及當座あなたこなたとあるへからす。然共一往は禮を中事ハ。大法なり。又自殿中自然諸家へ被仰出儀には。奉行兩人被仰付。又ハ伊勢名字の者一人被相添候こと常儀也。申詞は奉行仕之。

一 各御參會の時。大御酒に成候て。うたい申事はいかゝの事。猿樂祇候申候へは。太夫うたい出候を相待。太夫のうたいに付て。座者うたい申候。太夫祇候候ハねは。座の者も次第

候て。一人とり／＼出して。うたい申候。あなたこなたよりうたいたきまゝにはなき事になく。又うたいをとりかけて。うたい候へは。物着にもなり候間。時分をみはからひうたい申事。猿樂も故實之由申候。當世ハ舞一せいはや六鼓など酒盛に聞候。いにしへはさやうの事は。なき事にて候。殊更奉公仕候者などは。せはとも候へ。たしなみ可申事也。或は何となく一さしまひ申。或は順の舞など御座候時は。そとあり／＼しくまい申たるは。見よき由故人申おかれし也。但さるかくなとは我藝能之儀候まゝ。いかにも嗜うたい申へし。

一 御折の事は不申。土器物食籠などにも。おもてのやう躰あり。然間。おもてを御前へ可被參由。古信濃常に申候し。當時ケ様の事まで氣遣ある衆無之由。信濃申候き。三峰膳又は

うはんなどにも。四季をかたとり。當季を御前へ成申候由。慥申候つる。當時如此事中候へは。物しりかほに聞候まゝ。不及是非自然の爲覺悟注置也。

一はうはんもおもて「向へ參候哉。はうはん」と申も。美みのよし申候いかゞ哉。式のはうはん被中は。常式のはうはんのやうには無之由候。未及見候。かんたくひの由承及候。くはしく可被相尋候也。芳般と書にハ。はうはんかも四季の様在之間。當季を御前へすへ申へき由中之。

一火打ふくろは公界へもさけ申候哉。四十以後ハさけ申ても不苦なり。然共。殿中へは御案内申入。さけ可申候歟。不斯被召仕候衆ハ。病者などは四十より内にもさけ申へし。はれの時などは斟酌あるへし。大きなるはわるし。乍去老若又は入道などは不苦也。

一足なかに禮はあるましく候。殿中へも皆々めし候。辻堅又ハ御門役のまへを通候にも。あしなかはき申也。

一於洛中乗馬をさきへ引候事は如何。三職御相伴衆土岐六角なども。こしのさきへ被引候。其外も輿御免の衆引かれ候。

一同乗馬の時。乗替をひかせ候事は如何。路中にては無用にて候。遠路などへはひかれ候。それもあとにひかれ候て可然候。御供の時乗人をはひかせ不申候。伊勢守は子細□てあとにひかせ申候。

一諸人の祝言の引出物にも。用捨故實在之由如何。尤其心得在之。元服の祝儀に。弓征矢を遣に。切符の羽付たる矢。又ハ移徙に火性馬衣裳などにも用捨あるへし。引出物の聲のひゞき等も。氣遣在之。御移徙以後肥用瀬は三ヶ年御いとま被下。不能出頭問。ことは

以下に用捨肝要之由申習し候。

一御成の事は不及申。貴人を招請申時も。兼て召仕者又猿樂などさせ候どうたいなとに。禁句以下を能々申付へし。自然者禁句をも申候へは。主耳のきかざる故と申成事常有之。可被心得也。

一諸人御禮等被申上時ハ。申次萬事に心掛あるへし。自然前後の通に候へは。其申次の可爲越度候。吉良殿など御太刀御進上候時も。其日の申次御太刀取次可申。自然直に取に被取事ハ。申次の故實なきに可罷成なり。殿中にかきらす。その心得あるへし。

一諸社之社人等御禮之時も。其位によりて前後あり。縦ハ權大輔の權少輔たらは。權大輔可進之。余も准之。然間。官位をも不知は。兼て相尋事故實也。

一御足袋を參せ候ハ。右より可被進之候。踏

皮又沓は。左よりめされ候也。

一香爐持參之事。急度法意無之歟。但前を御前へ持參可申。譬ハ御前足のかた前へ可成。定て盆にすはるへき間。盆の紋の草木の根の方。御前へ成。梢の方さきへ可成也。

一主人貴人へ物を申時ハ。ちと我顔をそはへふかて。いきなとのかゝり申さぬやうに可心得。又客人なとは。かみ小袖などにも。沈香をたき可然候。のみにほひ候は。又ひろうの事也。又男衆。焼物をは不用之。老若ともに丁子くわつかうを四季共に用候。それもこと／＼しくにほひ候は。ひろうの事にて候。若ともにあせのこひをたゝみて可被持候。惣て奉公人は。あせのこひを二可持事と申候。一をは新して持。自然の時可用立。一ツは何方にても手をあらひ候時可用也。老たるも若きも身持をたしなまるへき由。故

人堅中ならはし候也。

一奉公仕候人。そのみ利根たてなるも不可然候。さ候へは。卒爾なる事も可任之。ある文にも。血氣の勇者。仁義の勇者といへり。仁義の勇者をはいかにもほめ。血氣強力の勇者を嫌ふ事は。利根なる人は。必々過たる事あるといへり。能々可心得事なり。

一奉公人にさま／＼の心得ともあるへし。まつ第一には正直廉直にして。極信なる人。二には奉公の忠をいたし。私をかへりみさる人。三には弓馬の道に達しいさみある人。四には和漢の才藝ある人をよしとすへし。又惡には。第一胡亂猛惡にして欲心にふける人。二には無奉公にして。人のとかを言事を好人。三には武藝に拙して臆病の人。四には狂言綺語をもつて人に咲を面目にする類。皆心あしき事なり。

一惣して人は。身ほとよりも過分にふるまふ事不可然。末重き物は。必々おなしといへり。根ちも枝葉のかうたるは。ついにわるき事と申なり。かまへて上は下のまさる事不可任之。上をかるしめ。おのれをさきとするたくひ。尤不可然。返々可被得其意事也。

一何にても色物に上手たらん人を。上下をいはす賞翫すべき也。いにしへは奉公の人。も晴の役を勤し。さる人をしやうくわんありしなり。又物ことに上手と言人もすくなかるへし。わるき事のすくなくて。よき事のおほきを。當世のよき人と申へきなり。

一手綱腹帶染やうの事。人々色々。以今案不審被中間。注物撰候處。別に相違事は無之。但長短の事。人々の可任所好。雖然。大浩ハ手綱は七尺五寸。御服之尺を定。腹帶は八尺五寸。或ハ九尺にも仕之。手綱も七尺五寸は



通法なり。此外ハ八尺にも。又八尺餘にも可任所好之由有之。染やうの事。はしをは何色にてもあれ。一尺二寸ほとそめて。其餘をはたん／＼にも。またかうゑり筋などにも。このみ／＼にそめられ候。

義政公大將御拜賀御俱之時之事。

一貞家。大將御拜賀の時。そめさせられ候は。

伊勢守金山寺事。

地をくろくそめ候て。五分あまりなるしろき筋を。六七寸あいを置候て。そめさせられ候。

一同犬追物などの時は。二重腹帶などにハ。一尺計のたんを。あさきとひわこのたん／＼にかうよりすちをそめさせられ候。

一梅しほりの事も不苦之由。常に被仰候つる。さりなからもきつとしたる時は。そめられ候つる。

一とりそめの事は。しさいある事にて候間。れうしにハそめられ候ましく候。

一紫の手綱腹帶繩の事は。公方様より外ハ。御用あるましく候。毎年正月二日。御乗馬始に

は。伊勢守進上之仕候。延徳四年二月八日に大津の御陣之時。三井寺光淨院にて。聖護院御門跡道興御參賀候時。紫の御しりかいを被參候。御門跡仰には。しりかい以下はいかやうのを御用候ても不苦候。其故は備馬たる間。色にハ不被立入候。又門家中の人々御などのとき。あかきしりかいかけ候事は。努々あるましく候由被仰聞時。各承。尤のよし申上たる由。慥に注置のよし。其外不及見申之由申之也。

一吉良殿は。むらさきしりかい手綱腹帶御用之儀。勿論之事候。

一昔山名殿。かけられたるよし承及候得共。慥には不存知之。

一近年伊勢國司北畠殿御事。種々御懇望にて



御拜領之由候。慥には無之。

一右京大夫高國朝臣へは。大永一年三月五日に。公方様よりならの御ひたれとむらさきのそめわけの御しりかいを拜領候て。則其日。大追物外檢見ありし事。希代の面目の由。尤有其沙汰事也。内檢見ハ小笠原民部少輔於高國馬場百疋有之。

一かたくつの禮と申事は。馬上にての事也。左くつをぬきて。手に持。馬をなおして禮をする事なり。大かたの時は不可仕之。猶口傳に在之。

一轡を人に渡候は。手綱を右に持。くつわを左に持て。人の馬にめしたる時のことくに可渡之。

一互に馬上の時。貴人をは我は右之方へ打のけて禮可申。よほとの時ハ下馬にてかれ申へく。若於御馬上御禮申候は。

一諸大名并諸侯衆。或忠節或奉公人の勞によりて。高位高官に被成。或ハ其家を再興の例不珍。然時ハ諸家よりは其被成たる位ほとには可被扱事勿論也。然者先々よりも。けんかくに可相違事也。其時は縦他所よりは。さやうは被扱候とも。此方は其分別可然候。其一代之儀ごいかにも其用捨も尤可然。二代とも候へは。被成たるほと□いに進退を被持可然之由。古人申習したるとなり。或は申次は御供衆に被成。御供衆は又御相伴に參勤也。例非無之。其時の心得之趣。仍古常被仰事也。又貞親之注置たる物にも在之。可分別事也。

一進上に駄もなり申候哉。同宗は何と書申哉事ハ。打任て進上は御無用にて候。内々にては進上不苦候。文龜元十一十七。越前へ御所望にて。栗毛の駄四騎あまり。十九を進上に

て。御厩被立置。野山への御成に者。細々被召候つる。駄の字之事。先々も色々沙汰候つる。此刻被對朝倉被成御内書候には。駄と調進候。然共。本々の御内書には。毛付はかりにて。駄とハ不書申也。

一攝家諸門跡堂上の御事は。何も雖相定。又は御官位によりて。殊之外相違候間。申次勤役之輩なとハ。御官位之分別なくてハ。越度のみたるへき也。御對面之時。御送之事も御官位による事なり。又公方様之御官にもより申事ハ勿論也。上意准三宮にて御座候へは。近臣之面々は殿上人に被准。例之廼拭集に相見へ。具中次之記に可相見也。惣別官位之事。口傳無之ハ難知。能々可相尋也。

一法中之事。僧正は可准參議なり。然に於山門者。中納言に可准由之綸旨在之云々。雖然。披見に不及間無覺悟候。堂上各御存分にて。

右泉院大僧正ハ。參議の下に着坐なり。又或時貢勝院僧正と被仰事ありしときも同前相果畢。爲後證注置也。

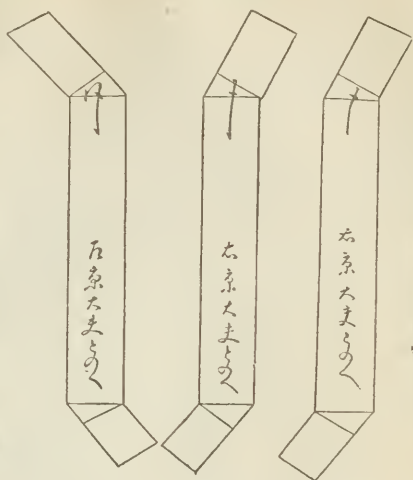
一法印。法務。僧都ハ。可准四位殿上人也。

法眼律師ハ可准同五位。法橋可准六位。上人同之。凡僧可准同六位也。弘安八年十二月記可相見也。

將軍家御官位調進之事。

征夷大將軍從三位守權大納言臣源朝臣義一の守の字の事ハ。賤官貴守の字を置也。縱ハ正三位ハ權大納言と相當なり。、、三位たる間。守の字あり。餘ハ准之。又行字を置事ハ位は貴。官賤の時。行之字置也。

一御内書之事。條々口傳抄に在之。御料紙は檀紙たるへし。殊に半切之御内書無口傳ハ難致調進之由。被仰置訖。然に近代者寸法以下の不及口傳。調進不可然之由。汲古常之仰云



々。軍中之半切一段の秘書也。分別之輩稀たるへき也云々。

一年始の御内書又は急度仁たるをひもをたちて封申事。無御座候也。惣別上卷御座候をは。封不申也。御上卷無御座候をは。封申へき也。

一御内書之御料紙ハ。高檀紙なり。たんしハ大

かた一尺二寸はかりのたけ候歟。然を半分ほとより宛所を緒申候得は。六寸さけて筆をたて申候を。一二字さけて認事口傳也。條々口傳在之儀也。

今日日

伊勢加賀守

貞助

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

續群書類從卷第六百九十

武家部三十六

常照愚草

貞陸法名常  
照ト號ス

料紙之事。武家たる衆引合を用事は無之。烏子の事は田舎への小文には不苦也。惣別分際よりあつき杉原も斟酌可然候。

一公方様へ訴狀の目安を捧事。武家は杉原也。

公家門跡ハ引合を被用。然に常德院殿様御代關東管領上杉四郎と。仁木兵部大輔<sup>丹波仁本事</sup>

相論之時。目安何も引合也。汲古へ不審申處古今引合にも被調云々。又杉原も被用也。三職山名なども。又一色なども。引合ニ目安の

例在之云々。書狀などは引合斟酌たるへし。

二三職并御相伴衆共ニ立文たるへし。三職の御間は何も進覽。又進し互此分。畠山左衛門督政長より細川典厩政國朝臣への狀。赤津加賀守以事次正文ら見候つるは進覽と在之。右馬頭殿は御供衆中にても別ての儀たる如此也。事之次ニ沙汰ありしは武州管領より三寶院門跡へ書狀に進し云云。左様には有るましき事なから。其頃は進しと認事無禮の儀にて無之。其證據あまた在之。至近代者人々御中とあり。當職の御時は毎年可

相替候也。赤松以下よりは當職によらず人々御中也。恐惶也。又恐々の時も在之。是仰敬之儀也。可心得事也。又山名一色互進し候。又進覽候。互之事也。細讀品修同前。大内赤松京極などへは大略互謹上書也。

一御供衆より三職へは可爲付狀。又山名一色殿などへは。人々御中又は謹上たるへし。如此本來正理を心得候て。時々の様牀を被見合候儀古今の通法なり。惣而心得之事は其國に知行分在之守護へは其用捨在之。昔よりの掟也。謹上書ニ調ニて人々御中などゝ書等の心得成へし。

一山名一色方の被官より。奉公方へは御宿所と書く。恐惶などにてまさらかして書。先ニより多く先年安富秋庭かたよりの汲古へ恐惶謹言と書く。御宿所と候し事も在之。非例の由仰事ニて被留置候事も在之。

一杉原を祝言の時ハ。たんしと申候由申方在之。あるましき事云云。一束一本と申ハ扇杉原を中也。但公儀にては十帖一本と申事可然候。口録などにも杉原十帖と。八朔の口録にも調遣候也。

一目貴人に書文箱に入て給候は。返書申入候は。文箱をは只返し申也。愚報を文箱に入して可遣也。

一一段の貴人などへは。此方より捧書狀など理連ニ文箱へ入候事は可有斟酌。密々の子細などにて候は。文箱に入符をも可付也。同文箱之事。なしち。ひたまき繪などのをハ可有斟酌。まさるも草木一本などハ不苦也。一諸出立もそれ／＼に出たちにて可然也。貴人などへ可致祇候にあまりにいてたち申。又金作の刀などさし申事いかゝにて候。又あまりに見苦しき牀又不可然候。などは何

と仕たる不苦候。於彼等ハ中々非制限事也。  
昔右大將頼朝の御代などには年頭の出仕  
には立廻ほしの風躰に水干を着用之段等  
の事射禮記にも慥に在之。其以後は大口ひ  
たたれなり。それさへ略儀になりて諸大名  
の外ハこすわふの躰にのみなりし也。如此  
趣ハ其御代の御掟によりて。末代迄も用來  
事也。今も年頭の御的始などには風折に水  
干なり。又ハ晴なる御時ハ風折に布衣など  
供奉候儀不珍候。

一被成下御内書候に對。其御使御請申上事勿  
論也。然に御文箱へ御請をは不可入候。御文  
箱ハ別に返上可中。御請をは其まゝ御使へ  
被渡申也。御内書不限高家の御衆へは如此  
なり。

一烏帽子長くしの事。いにしへハ年齢廿計ま  
て用候。匠作義直朝臣舍弟義遠ハ。廿五六迄

長くしたりし。惣ていにしへハ如此ありし  
也。近代ニいたりては何もかも不入躰候。  
然間更可屬靜謐躰無之候。むかしは長くし  
も兩方ハ三四寸つゝ。ゆいめ共にハ七八寸  
計也。近代政元などは悉皆に一尺計ありし  
なり。應仁已前ニ一色五郎政氏ハ。二尺五寸  
ありし。此等は人の目にたちて。申ならはし  
たる事也。諸大名の内衆などは心にも可任。  
又ハ猿樂風情ハなかくもみしかくも仕候  
也。惣而最初元服の時ハ悉皆々五六寸にて  
次第に長くありしなり。鹿園院殿様わかく  
御座候時はおり御廻はしにて御座候。御く  
しなく御座候とて。伊勢禪門松禪柱にを  
しあて中て。御こゆいのまへを小刀にてき  
り奉りし事を。諸家にしるし置。又申傳し事  
也。

一一跡を子息ニ渡。隱遁の身躰にて諸家へ參



會事。かミしも可着用事本儀也。はかまかたきぬなどの事は可爲略儀。次に黒衣御免の

事面目之至なり。其例數多在之。衣にも禪衣又墨染。其品は其身可任心。衣又ハちきとつ何にても御免にしたかひて着用あるへし。昔はまつ衣を御免にて。以後より然ちきとつ御免ありし事も在之。尤可依時儀歟。又頭巾御免の事。もどくは鮪頭巾を專用候し。又升頭巾同前なり。たこつきんにかきりて紫色を用也。萬にむらさき色をは憚申候へ共。たこつきんにかきりて不苦云云。升頭巾の事。典廐様昌院常に被用候。かミにてこしらへ。うるしかはぬりたる物なり。やかてたゝみて懷中するやうに調候し。

一もとくハ急度黒衣御免ト申事は無之。其身發心仕趣なりし間。捨身求菩提の上にて。不及御免なりしを。假令被召返候刻。其まゝ

御免にてなとの事也。定候て御免之事は近代の儀也。

一ぬりこし御免の事。三職ハ不及御免。其外國持并大名なと乗つけられ候。家々代替の時御免を申されしなり。其時はすたれを上て乗用也。大名國持にても無之衆ハ。御免申上候ても。すたれをおろしても乗用也。奉公方ハいかに分限ありとも。乗用候事は無之所勞なとの時いたこしニ。すたれをろし乗る事は法外。非制限なり。入道ニては不及御免山候へともいかゝ候哉。赤うるしにもこき赤うるし。くりいろなと次第有之事也。自然忍て乗用の時ハ。ちりとリニのり候てなと。ひけの詞申事も在之。

一火打袋之事。四十以後はさけ候ても不苦候に瑞笑なとも書をかれ候。然共晴かましき時。五十之内ハ用捨も可在之歟。堅固若輩も

御旅の時分不苦云々。

一法舨の人軒號院號之事。大かたの人をは軒號院號斟酌候事也。讃州を慈雲院と申候し事は發心の舨にて。然も其仁舨一かとの儀にて候つる間。院號常に申したる儀也。軒號も同前なからも。院號よりハあさく候はん哉。何ニ兩號之事。常式は其憚可在之。慈雲院は常徳院殿様伊勢守亭ニ御座候し時分の出仕ハ冬ハモウヌニテシヤノ衣ニクワヲカケテ被懸御目候し。諸人なき跡に。寺院號を稱する事其例數多在之。

一帝皇をは後鳥羽院なとハ申也。攝家をは後成恩寺殿なとハノチト申也。

一人之家の事。亭宅兩様申詞何も同事。當に時よきやうに可申歟云々。家内に亭をあけ候事人によりて可有其憚様に承及候き。打任てハ如何としる也。

一先年龍ある勝元朝臣を。赤松左京兆政則へ被申時は。庭上へ被出向請し被申し也。但此段に如此候間。然其又縁まで被出向候はん哉。庭上可然候哉。門外へは御出候ましく候。御成の時門外へ被罷出候間。其次第あるへし。

一猿樂の盃を自然さし申事在之ハ。御いたゝきあるへき歟の事。あるましき事也。川樂同前。次に遊女なとは。又事によりて相かはるへき歟。時儀によるへし。

一於貴人御前は。家人を殿文字をよひ候事はあるましく候。殿文字を申けすやうにもあるへし。たとへハ於細川殿は秋庭か香川かなとは候ましく候。自然事によりて殿文字被申儀は可在之歟。惣而はあるましく候。自余も准之。

一三職之内の衆。何も御對面ハ於庭上なり。一

人にて於御座敷御對面の人ハ。自昔代至于今無之。甲斐一人に限て三間の御厩の板の上にて懸御目也。

一參次第と申事。之事によりて御用之儀也。先御相伴衆の次第の事也。三職の御上は當役先の次第相定之間不及異論。其外は參次第也。然ニ先年大津の御陣の時。大内左京大夫義興朝臣公。其比は未新介にて若輩なり。又京極治部少輔持光。其比ハ御相伴衆なり。是も若年なりし。然共三井寺の御陣已前よりも御相伴衆に被召加候し間。義興より着座可進之由言上候し。義興言上は未在國中より御相伴衆ニ被召加旨被下御内書所持候段言上候條。參次第之上はとて。大内新介すすミ被申し也。京極治部少輔は被成御内書候段ハ無存知。在京の趣にて及相論。治部少輔大内下に着座ありし也。此御内書者。慈照

院殿様より被成下たると云々。又根本之儀を被申立候つる人も候へとも。御法被相定置候とて不及取沙汰。

一根本は三職。是も管領職を被持候ての事也。其次に御紋の大名。其次御紋せられぬ大名と可心得なり。

一諸家より進上の目錄古實共在之。進上の通より御の字少上て書流も有之。以上をは進上より少さけて書流もあり。可任心云云。

一吉良殿は進上も又名乗も不被認。進物の進はかりニて以上とはかり在之。

一澁川殿石橋殿兩家と。三職のことく更不可相替也。

一國持に被准衆細川陸奥守。佐々木加賀守。

一外様。畠山次郎。米野。赤松新藏人。佐々木鞍智。土岐民部大輔。攝津修理大夫。赤松中務大輔。同名禰次郎。佐々木黒田。右人數は正

月一日計出仕御盃被下之。

一外様。丹波仁木。伊勢仁木。伊賀仁木。山名攝津守。北野二宮。新田大嶋。北畠小原左兵衛佐。新田岩松。姉小路左衛門佐。里見。吉見。山名。伊豆。山名宮田。山名河口。山名麻野。山名有道。麻草。細川觀音寺。細川上野介。細川駿河守。桃井右馬頭。四條上杉。赤松上月。赤松葉山。土岐佐良木。佐々木多田。

此外數多在之。如此候方ニは正月御盃之人數にては無之。出仕之式日も相替て參賀也。

一尙以目錄調事。諸侯衆も大名之内衆も。公方樣進物奉獻候。ほかの衆御同前。次に同朋衆も同前。縦令名乗の所に何何と二字書うかたかきのなきまてなり。山名彈正少弼にかきりて。名乗をは不書して。名字官計を認之云々。

土岐家も同前云々。

一御太刀持千疋と調進候事は。知行分安堵之御判申請の時。御禮ニハ多分如此。但人の分限ニより。過分ニ進上も又ハ御太刀御馬計ニテモ御禮在之。大略ハ一腰ニ千疋也。

一細川殿より大晦日ニ進上之注文。引合一枚をしおりて調進也。上ニ一何くと調いちのおく炭五十と被調候て。以上にて名乗はかり如常あり。次に要脚進上之万疋之進は百貫と被調候。たゞ三千疋五千疋にて候ハは疋とかゝれ。万疋之時は百貫とありしなり。古は何も百貫之内をも。貫の字ありしとなり。中古以來疋と被書候と也。細川殿舊記をのこされ貫と被認云々。是も定てより後は給申へきと諸人申事也。

一吉良殿御目錄ハ。杉原一枚ニ被調事勿論之儀也。彼御家のならはしと云々。但又引合ニ

被調し事も在之。

一料紙之事。大高たんしハ公儀にも御用捨也。然共禁裏へ御進上の御日録をは。たかたんし一枚に調進なり。又事により八朔などの御日録をは小高たんしにも調進申也。次に就御佛事御寺への御日録ハ小高なり。

一和歌懷昏なども 禁裏様關白などあそはし

候歟。其外ハあるましき事也。かやうの事は其時代を承合可致分別事云々。次なから注置也。ある人訴狀を調しニ。いかにもくうすくとしたる杉原に認て。奉行所へ付て披露候時。申上所の理非ハ被打置。餘疎早鹿相なる料紙不可然之由ニ候。是非を被打置。不及御裁許の由之沙汰有し也。いかに其身は不肖なりとも。公儀をかろしめたるかたへ相似たる由其風聞也。諸事に付而此心得肝要也。

一杉原にて日録認事。古は公儀わさへも杉原にて認しほとに。大略國持以下之事は不及申。諸大名の被官等の事は勿論也。和歌懷紙ハ武家よりとも引合を可用也。

一千貫の時は。十万疋と認たる事も在之由古記録にも見へ。細には無之間不慥。兩様不苦候由は慥に在候事也。

一常徳院殿様御代ニ。奥州伊達兵部少輔上洛之時。御太刀御馬五十疋千貫進上候。御馬をは各被下之。千貫之事は黄金にて進上候つる様に覺申ニ。文明十一年の比かと存候間。さのミ久しき事にても無之候。各可爲存知追而可撰之。其後日越外も千貫進上。其時は十万疋と候つる。其段は慥に各令存知事也。

一諸人尊代ニハ。いかほと可持參とは不定。人の分限ニよる事なれば不定。公儀へは千疋



之内進上は不可然。千疋之内にて候は、御馬代歟。不然ハ御ねりぬきの代か。此二色は代々ニ進上なれば近代三百疋なり。是も古は千疋。其後は五百疋。近代二百疋ニ減少之事也。

一御折など、御字の事は、御所などは不及申。大上臈小上臈までも。御字にても可然候。女中かたの事は、少うやまう事故實也。それも又人によりて。さまでなき事も可在之。

一送狀認事。

送進納申。

御用脚事。

合千疋者。

右爲被成下安堵。御判御禮物。

所奉進納之狀如件。

年號月 いく日

伊 右京亮貞一

御奉行所 惣而ハ官名乗書つゝ見も在之。

名乗のかたに官を書事も不苦候。

一こまかに認時は。知行から何國何在所事ニツイテノ御禮ト書事も在之。自身ノ送狀にて無之。被官などの送狀の事も在之。おくに進上御奉行所ト書事も在之。

一御倉より請取ノ事。又御禮錢となれば其趣加書也。

納申。御用脚。

合千疋者。

右爲何かし殿進上所納申如件。

年號一

正實 名乗

宛所ニハ不及。但其被官ノ名字等書事も在之。

一進上之用脚請撰候事は。於御倉在之。其様躰の事者。十疋ノきつかけを仕て。其きつかけニかけて之儀ニ。若一錢も不足候をは惣人打之。百疋ニ十錢加之。余ハ准之。

一諸國へ段錢被相懸時ハ。奉行衆圖を取て其



國ハ誰々ニ被分之。是を國分之奉行ト申也。  
其國ニ守護ヘ御下知書出し申也。

一諸侯知行分或京濟或免除之在所古今有之。  
然者奉行より其守護ヘ。御下知を成スニ事  
書を一紙相添なり。其事書に。

御下知ニリキラス  
御即位要脚 何國段錢事年號  
月日

以彼要脚被附其定畢。早除三社領并北野社  
領諸五山諸塔頭等持寺等持院領。以下先  
ニ免除。京濟之地令支配畢。段別五十文先於  
公田來何月十日以前可被究濟之。若難澁之  
在所者。爲有異沙汰云領主交名云出貢員數。  
共以可被注申之矣。

如此認て。うらに國分の奉行一人判を仕也。  
是をうらを符スルト云也。名乗も不書して  
たゝ判計也。さてくるくゝと卷て。上書には  
さし上て事書と二字書也。

一守護ヘ奉書之文言。

御即位要脚何國段錢事。早守事書之旨相  
□之。來何月何日已前嚴重可被致執沙汰  
之由所役仰下也。依執達如件と書て。如例  
式年號日付ありて。國分の奉行日下ニ宮と  
判を仕て。其時の御即位奉行三人も四人も  
あれ加判也。如此之時は評定衆之内一人同  
奉行を仕也。縱令攝津二階堂等之類也。如此  
輩も奉行のをくに加判之時の頭人とは是を申  
也。

一諸侯之知行。或免除之地。或京濟之地事。其國  
分の奉行人の方ヘ以訴狀申處。証文を披見  
して。其時の頭人へ披露して。訴人方と守護  
へと成御下知也。其文言ハ先々免除共。京濟  
共地タル上者可被止催促由被仰出候也。日  
下より奉行加判如常。折紙之奉書之様躰也。  
立文事も可有之。御爲知之文言は先々爲京  
濟地上は被止。守護便院早相懸之。何月何日

以前可被究濟之由被仰出候也と留る也。如此御下知をとりて。其に隨て守護之遵行を取て執進納也。

一如此之時の御倉をハ別にと被仰付。又いつもの御倉へも納申事也。請取には諸侯へは何かし殿と殿文字在之。

一番文之事。是は五方引付の番文也。それには土岐。佐々木。伊勢。大和をも被入候。又攝津。二階堂。波多野。町野など事も番文ニ入候。正頭權頭とて二人ハ一段賞翫也。第一を正頭と云也。至近代ハ正頭と申。かた／＼は吉良殿。石橋殿。山名殿。一色殿。細川奥州などなり。畠山匠作被召加し事も在之云々。次權頭には攝津。二階堂。伊勢。波多野。佐々木加賀などにて候つる。第一に正頭の人を書いて。其次に權頭を書候て。其外ハ位階次第にもしるし候哉。又は舊參新參の差別も可在之。此

外右筆輩數多書加候。此番又と申事。昔は其時代之公人奉行。一代ニ必申沙汰仕て。人數を注たる事也。近代は無沙汰云々。古は天下の諸公事を。此五方の頭人令存知。評定を成し理非を分申定畢。應永年中までは。さやうの事も有之。其後は五方の人數計は公人奉行も書立候へ共。不及御沙汰なりはてし也。一諸家の御内衆御禮の事。於庭上懸御目事勿論也。然ニ甲斐一人ハ。三間の御厩の立場の板上にて懸御目也。余衆は皆以庭上也。次に遊佐一人は。もうせんの鞍覆日かさ袋御免也。是又自余不混事也。

一山名金吾殿内鹽屋事。於彼家別而賞翫也。山名殿父子。其外奉公衆參會之時も。二献目の盃をは鹽屋に初させられし也。奉公方衆參會の時も。金吾各へ詞をつかはれ。いにしへの事々御免候て。始させ候と被申しと

也。御禮被申上時は如惣次於庭上の事也。

一大和家の事。御父ニ被成候事ハ。等持院殿様被成御判云々。本は足利大和守とも。証文等にのせられしとなり。御守りの役仕事也。彼知行ハ被准神領云々。

一大和家に桐の御紋事。足利大和守せられたる。其かにより御紋ニ哉。但大和一人のやうに承及候也。そのゆへは常徳院殿様江州御陣之時。佐渡守御紋のかたきぬ着用候しをは。不可然候由被仰出候事。定各可爲存知。但被申分候つるか。其段不存候。近年は佐渡守子孫は御紋を着用なく候し。兵部少輔政郡と申候しは。常徳院殿様御方衆に被召加。其後は申次をも被勤候つる。應仁亂中のかたきぬにきりの御紋を着用候事無之候哉。但自然者着用も候つる歟不慥候也。

一奉行衆を右筆方と申事は。奉行と申事諸大

名にも又萬の事奉行と云事は在之間。右筆方と申事可然候。殊ニ引付方又評定衆ニ被召加ハ一段の事也。

一盃をかくにすへしとくきやうの事。カクハ公卿の臺の事。公武の差別可在之。武家衆三階候へ共。

三方之不及沙汰也。

一吉良殿一人の事は。位階の沙汰に不及。四方也。

一宰相。中將。少將。侍従などの事は公卿たる間。いかにも三方たるへし。いかに淺官なりとも。大中納言の息なる間。其家々を賞翫の間。三方同前ニ在之。是も武家の私宅にての事也。

一攝家。清花の諸大夫の息を。六位藏人ニ參候て。殿上人の分にて。禁中ニ祇候させ候事。古今在之。其時いかに堂上の息なれとも。大中納言の息の上ニある事も在之。左様ニ

候へは。只をなしことに三方可然也。又六位の藏人五位に成候へは。則殿上を退て地下ニ立かへり候。然は殿上人の准據に地下ニ被成候也。一階もすゝむニ至りては。猶こそ殿上ニありぬへけれ共。地下の諸大夫の息は。如斯ありたれり。奉公方にもいにしへハ。藏人を經歷の方在之。三番衆千秋駿河入道と申たりし其祖父千秋高範と申せしは。殿上の藏人に被成。六位の間は殿上に祇候候て。五位ニ被成候時。殿上を被退候。其時高範の歌に。

位山のほる我身のいかなれは雲井の月に  
遠さかるらん

とよまれ候は集に入たるところ。

一諸門跡の事。事外高下在之事也。何も三方たるへし。四方にてまいる御衆も勿論在之事なり。僧正の事は參議被准事也。參議は中納

言の下也。然共位中の上にて最上也。准后ニ御成の事は。又別段之儀也。其門跡ニ候廳務と申は。坊官の事也。坊官なとゝ出世と位の事。官位次第之由在之。出世は大僧正ニ不被成候哉。打任ては僧正にも不被成候へ共。其身の行徳に依て。僧正ニも被成。大僧正迄は不被成候哉。此衆へは足付たるへし。但時宜ニよるへし。

一院家衆事。青御門ニては定法寺尊勝院。聖御門ニては住心院伽耶坊などの類。大僧正ニ御成なくとも三方可然候。

一公家衆參會之時。盃を奉公の輩。公家へさし申候はゝ。如常下を能く捨て。たゞミに置候を酌三方へすへられ可然候。但又様にもよるへし。如常式たるへし。

一地下堂上之事。堂上とは攝家清花以下の公家の事也。地下とは外記。官務。醫師。陰陽。

諸社之神主以下の事也。諸大夫等同前。攝家清花に在之。公方様御晴などの時は。攝家の諸大夫を有御屋被召具事も在之。然に攝家の諸大夫ハ腰刀をさゝれす。清花已下の諸大夫ハ刀をさすなり。此差別にて可知也。

一宮々とは伏見殿。常盤井殿。木寺宮。

奉行竹園云々。御對面之時も御縁迄送り申也。攝家よりもふかき御禮也。

右伊勢守貞陸自記也。常照者即貞陸事也。

伊勢法眼

供笑

以宮内省圖書寮本謄寫校合畢

# 道照愚草

道照ハ伊勢下總守貞久之事。始ハ六郎左衛門尉伊勢六郎左衛門尉貞順之親。

一群參之時。進上之御太刀多候へは。中次取て次之間へ置之。いくふりとは不定。所つまりせはく候へは。みはからひて取申。つかの方を前へ打當て。取申候か可然候。

一御酌仕たる人。次の献の盃を可持參歎事。可爲不定候。別人可有持參候。御提は酌の所能ミへ候所に。祇候候て可然候。

一御盃取被申事。別の仕合あるましく。前よりの盃を。あとなく持て可罷立候歎。別事は無之。

一燭臺之事。竹のふしの台水臺何も同事候。然共水台本儀にて常には同事候。

一うら打着用之事。先大口を着て。其上にうら打を着候。帶の留やう。前腰は如常繕て取そろへ。後腰の帶。よひのひろきにし卷て留



候。又其まゝ置事も在之。紋之事は家々の紋を付候方も候。大略松竹鶴龜などを付候。いさうなる紋などとは不付候。色はあさき付候。又其外の色をも着用候。つゆひもの付様も同前。袖の下に三四寸つゆをむすひさけ候。かわハ大畧紫かわ付候。腰の留やう□大かた如此。

一 ゑほしの事。年れいによるへき事勿論候。一本ニ

なかみゆいかくミわの事は。大方十八九までもめし候。

當時ははやくめし留候。さひのかわり候事もきわはらはすことも。年寄のまねきなくそりたるは不似合候。當時はむかしに相替事候。

一 よめ入の時。ゑほしもそひ候かの事。何共不存候。別なる事は候ましく候歟。

一 よるの物持て出やうの事。常の小袖のことくおるへく候。宿直物ハたゝみやうもひと

つ事候。

一 夏なとしとミの下をとる事。雖然出入候事は嫌事候。

一 御酌何に献々に相替申哉事。献々ニ替る儀ハ有間敷候。献の末にも成候へは。度々にくわへ候ハね共不苦候歟。其も一篇には候ましく候。惣別酌の覺悟さまゝ在之候。

一 大名衆輿之内に太刀を被入候。外ニ又被持事も候哉。まつ太刀は可被持儀候。自然又輿の内へも可被入候歟。其外の事は可爲略儀候。但用心所に可被持候ハ法の外候。

一 猿樂田かく等に太刀被下様之事。相替候事は有間敷候。組様躰ハ少可相替候。太刀刀一度に被下候。其も扱ハ同前。

一 よめ入之時の長からひつに。はるひと申事候哉。はるひと申事何共不存候。但革緒はかりニてよはく候まゝ。たすけをに。はるひの



やうに仕候て用事も候哉。打任てはなき事に存候。

一御かよひ。御酌。御通の時。扇をぬきて可参事候。ひもかわも小袖とすはうの間へ押入候事候。

一各初て御参會に。式三献の盃取ちかへて。きこしめし候歟の事。何共不存候。有間敷事歟。一御能の時。猿樂に折かミ被遣様躰之事。殿中ニては。舞臺より庭上へおり申てうたひ申間。於庭上一人つゝ召出て被遣候。替事無之候。

一御能の時。鞆打腰をかけ申事御座候哉事。腰をかけ申事は。ひろき御庭の舞臺にて候へは。不及沙汰かけ申候。又御ゑんちかき御庭。又御前ちかき舞臺にて候へは。腰をかけ不申候。其時かけ申候へと。被仰出はかけ申候。御供衆の役ニて候。伊勢守なとも申聞候。

一猿樂に御酒被下候事。惣て御酒をりて末を盃ニ座敷に被置。召出て可被下候。如惣次さるかくのまへ候盃持向事ハ無之候。當時ハ以外緩急ニ候間。御酌の仕合もむつかし候哉。

一金の扇平人も可持哉事。金の扇平人ハ持間敷候。又字書たるも公界へは不可持候。扇にも色々次第候。平氏はそさうなるしつめおり可然候。

一壁書。

何國何庄事。有致訴詔輩者。尋承爲子細申披壁書如件。

年號 月日

一移徙之祝儀事。何にても火赤色を嫌事候。

是迄伊勢六郎左衛門尉貞順存分也。

一殿中之日記を付中に。三職をは御名字を不書之。殿文字の事は書之。又四殿の事は御名

字をは書之。殿文字をも書之。縦ハ次郎殿。畠山殿の御事也。又能登の守護をも元服名をは次郎殿と申。是をは畠山次郎殿と書之也。是以可有分別也。

一諸家へ爲御使罷向時。上意之趣申渡時。發言に被仰出と申出ニてより其子細を申渡也。但爲御使或傳奏。或攝家などにては被仰出とは不申して。仰趣ハ。又ハ上意之趣ハと申て子細を可申渡也。但時宜にもよる也。是を發端の詞と云なり。式上裁なとゝも可申之。一公家方ニては。叡慮叡聞叡感動定勅命勅使勅許勅勘勅答勅撰。如此詞可心得也。

一繪を進上之時。なかき繪をは盆に横にすへ申へし。繪のおもての方御前へ向可申し。然ハ外題ハ御前の左たるへし。持參申者の各に外題有へし。又短繪をは盆に豎にすへ可申し。然外題の方我方へ成可有持參候。二幅

三ふくの時同前也。

一秀譽御對面の事。永正十三年十月十六日未刻。五合五荷進之。目錄貞久調進如常。御折五合御樽五荷しん上と又名も不書之如常也。於御前は。與へかはゝとめされしとなり。御服むらさき拜領。御いのこの翌日云々。近代の面目之至也。

一常胎黑衣御免ニて出仕。大永八戊子四月廿一日。於万松軒御對面。申次大館兵庫頭殿。御太刀持進上之黒衣出仕。邂逅之面目之至也。衣は聖道衣戻なり。老年十四之御時也。

諸道具數書事

鞍 一口 イツク 鐙 一懸

手綱腹帶一具 テモノカワイ 鞍 一懸

胸懸 ムネカワイ 鞆 ツモ 面懸 オモカワイ 押懸 おしかけともいふへし

手繩 一筋 鞭 一筋

沓 一足 行騰 一懸

射鞬 一具又ハ籠手又は小手

馬面 一懸 切付 イック 一口共一具共

馬衣 一具 馬膚 イック 一口

鞍覆 一懸共又一共轡 一口

泥障 一懸 鼻革 十間

弓非弦 一張 矢 一手

矢 一手と云は。内むき外むき 一手あるを

云。不然候は、一二と云。矢一こしと云は

此事たるへし。

ゆかけ 一具 一具ゆかけ 引目 一束 さは廿二腰

鍵 一本 一本 さは不中候 鎌鍵 一本

薙刀長刀共一柄 太刀 一腰共一振共

打刀 一振共一腰共脇指 一腰

うつほ 一又は一腰とは 一本とは不中候

籠 一腰 尻籠 一腰

具足 腹卷 鎧 何も 一領

甲 一刎 ハナ はねと云字はきりと云間忌也

喉輪 一懸 右ゆかけとは云さもかた

筆 一對一管 墨 一挺

硯 一面 机 一脚

繪 一幅 蠟燭 一挺

屏風 一双 船 一艘

香合 一 盆 一枚 かなの時一

香爐 一 共色を書く 花瓶 一 共色を書く

箸 一膳 食物のは 香筋 一對共一膳共

三具足 一飾 食物の事 香匙 火筋臺 一鞍 一口

銚子 一柄 枝 銚子提子 一對

敷皮引敷 一 菅笠 一蓋

傘 雨 一本 椀 一流 折敷

薙 一枚 疊 一疊

馬荷 一駄 沈香 一炷

鳥 一番共二 鷹 一

魚 一喉 鮭 一尺

狸 一疋 其外何も四足の物を何疋と云

日録などには。狸一兎一と書く。狸ハ進上には不成。

鷹 一連一居一襪何も一もとゝよむなり。  
モト モト モト

旗 一流 一幕 一疊  
一疊とは二ツの事也

御代始

一御乗馬初には。御鞭二筋小笠原殿より進上之由候。一すじぬり御鞭一筋は。紫竹の御鞭云々。先年々御乗馬始は只一筋也。

一御成之時。めしかへの御馬をは。あらひくつはにて引申。御乗くつわをは。御厩屋の者わつそくにかけ申候て。此兩條佐左入御物語。

乙亥九廿三。

一永正八年四月十二日。於吉良殿御所。大内左京兆中沙汰にて犬追物有之。御日記を文臺には不置之。今日貞陸就申て文臺にすわらさる由。貞久之注置犬追物日記に慥ニ在。

天正三九廿六。 令披見問寫置て。常には文臺御硯を

も雖申出。今日は御硯はかり被申出之由之注置候也。

一公方様檢見させられ候時。常に檢見を書所に。一字あけて御とはかり書之也。  
文明十五二月廿日の日記在

一同朋衆を日々記に書には。夏阿と二字書之。

一公方様御檢見の時。御方御所様とも在之。  
文明十四八月廿六日日記に在之。

一公方様御手組の日記調進事。

犬追物御手組事。

一御方御所様。 管 領。

一色五郎。 伊勢左京亮。

おくは如常。 文明十年三月七日在之。

一浦上美作守則宗。已時所司代六角油少路に馬場在之度々犬追物在之。則宗檢見  
文明十四六月二日。

一座敷に繪を掛候刻ハ。卷緒を繪の左の方へなしてかけ候。又二幅の時ハ。左ハ左ヘ。右ハ右ヘ成様にして可然候。又卷緒のゆるかぬ様なるも可在之。

一軍陣ニて旗をささへやるをハ。進すると云。後へ歸るをは。鶴ケキすると云也。則鶴退の心なり。

一梅壺。藤壺などゝつほと云事ハ。舍を申也。雜舍。なごま 同前。

一廣蓋の事。其家々の紋を入候也。然間雖爲新調候ニ。私の紋を入候間。御服をは入不被申候。諸家御成之時者。御紋之廣蓋用意在之。就其古人之物語在之。不及注置。

若君様御ふくのもくろく。引合たつに調進年始の事也。

一御おり物 一 一御ぬい 一  
一御はく 一 一御おりすち 一

一御そめ小袖一 一御はた 二  
一御おひ 二すち 一御ゆかた 一

以上

一於人前こせう。さんせう其外も受用ありに。くき物用捨あるへし。點心の時のこせうも同前。

一御くつ御たひをは。左より可參。私にはく時も同前。

一文箱に狀を入事。不依貴賤事也。私ニては人に渡時に。奏者に箱の緒をときて。見せて渡事も在之。不及其儀渡事も在之。年始に爲御使右京兆へ勢州被參時。馬之前へ右方の中間持て出。京兆縁へ上りて。御文箱を被取。奥の間へ被參。奏者秋庭又は別人にも御使之由被申時。御文箱を乍持被申之。御文箱を被渡之。先ニハ京兆へ直に被申之也。至近代奏者に被渡之。高國之御時にて直に頂戴也。

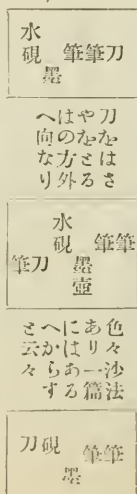


其時右京兆對面之時。文箱之緒をとぎ。御内書をは蓋をとりて。直に渡申之。蓋ともそへて參候つるなり。扱御内書頂戴ありて。致祇候御禮可申上之由。御返事候時太刀を給て。そと手をそへられ候也。昔は御使の時給太刀をは不頂戴之由ニても。近代はそといたゝき候也。退出候太刀をは秋庭被持出。中間ニ被渡たる事も在之。緣までの御禮なり。秋庭は庭上へおり不申候。然に別の所より庭上へ下。就他事物を申様にして。門外まで貞宗を送申之。近比の仕合なりと申傳也。常住不斷御物語なり。

一進上之披露狀に謹上書。進上書にも調事勿論なり。進上を除事も常之儀也。二三月に進上候も。正月の日付可然候也。但又所中にもよるへし。八朔の日付も同前。  
一何殿様之様之字事。正得はあるましき事也。

但事により書事も在之。様の字實儀のやうには聞候ても。正得なき事也。能々可被加分別云々。様はためしとよむ字なり。  
一殿中より觸折紙備上覽。相觸には殿文字不書之。然間奉と書之。私より相觸には點をかくる。てんをかくる事は。事により自由の儀なりと云々。

硯箱之圖色々在之。猶別の双紙にも在之。



一對諸人禮節之事。上中下在之。蹲居日禮平伏之三品也。又兩手をつき御手をつく差別等在之。

一鐙をかいへ申とある本も在之。押るとある本も在之。かかへ申とある儀は故實也云云。



一段の賞翫の詞也。他人不知之。

一小袖の下かい上かいとある本も在之。又上かへ下かへとも在之。所詮上かさね下かさね。上まへ下まへの事なるへし。然は上かへ下かへと申て可然歟云云。猶可相究歟。

一日笠をさしかけ申事。左右は不定。日をもてよりもさし可申歟。雨笠をは左よりさし申由在之。是も不定の由あり。風雨の時は雨かゝり不申様にさし可申云々。

一二重腹帶の事。常のはるひの長さ一倍にはかるなり。

一重にとりて輪の方真中を。鞍の上敷の上にあてゝ。腹帶とをしへ兩の腹帶さきを入て。馬の下腹にて取ちかへて。腹帶さきを又はるひとをしへ。とをして能々しめて。上敷の上にて如常。一ゆひしめてねちて。兩の前輪の手形にかけて。前輪の前は。むなかいにか

けて如常とむへし。當流にはさして不用之。然共爲心得注置也。

一今爲決後世之疑引舊勘聊記之耳。非愚所謂也。書物之奥書に在之。

一産所之引日射る時頌文。此段他流の説歟。

引日射るうふやの前のふるたゝミ

三の的ともなりぬへきかな

引日射る時。弓をかたに引つけるべし。扱歌のかなと云所にて。矢をはなすへし。

一夜墓日射る時の歌。

墓日射る君か前なるふるたゝミ

神の心をとりに射るかな

一宮々と申ハ。伏見殿常盤井殿本寺宮。此御衆は竹園と申也。御對面も送御申事也。

一諸太夫の事。攝家の諸太夫ハ刀をさゝす。清花の諸太夫ハ。腰刀をさすなり。公方様御晴の時ハ。攝家の諸太夫を雇被申也。

一樂人の事。豐筑後。山井安藝。豐筑前「申狀に是ヨリ別

ノケ條ナリ證文を出帶するを別進とも書之。

一訴論人の事。本解狀ホンケとは初の訴狀。此答をは初答と云。又初陣共二問狀重訴狀共申之。此答をハ二答共重陣共云。三問狀二三ケ度の訴狀也。此答を上答と云。三度の陣狀共云。

一綸旨。帝王之奉書。天氣御氣色。

一院宣。院御所ノ奉書。

一令旨。親王ノ奉書。

一封紙。兩判ヲ仕事。判ノ頭ト頭ヲ向合テ仕之。封ノ廣サ不定。

一狀ノ奥ヲ折事。一寸八分トハ申候ヘ共。ふかく折は尾籠ナリ。可相計。

一日付ノおくニ宛所ヲ書事。一行半計置て可書之歟。さのミよりたるも見にくき也。日付よりおく遠も尾籠ナリ。可相計歟。

幕下トハ大樹ノ御事。大樹トハ將軍御事也。

バツカトニゴルナリ。又大守トハ其國ノ守護ノ事也。

永正六年十二月廿八日遠行云々。永正六己巳年ナリ。

金仙寺全室常安大禪定門 貞宗

大永元年八月七日遠行云々。辛巳年ナリ。

勝蓮院光岳常照大禪定門 貞陸

天文五年十一月廿四日遠行云々。丙申年ナリ。

法蓮院太盛常隆大禪定門 貞忠

春日同詠陪住吉社壇松有春色和歌

前下野守平常緣

加須免登毛千代農御ストモ 字くはりは

登利農奈トリノナそた賀き波名ハナ 九十九三と

外津氣外之湏美與志ツギトノスミヨシ 書なり。

能ハ鷹ハマ

一懷紙に端作に和歌兩字の事。哥の字は賞翫可斟酌。平人は歌の字可書之。倭和の兩字同字ナリ。

一短冊本草に付事。中より二に折。作者の方を

内にして又二にたゝみ。又二にたゝミ。本草の枝に付候。枝のしけりたるかけに。そと結ひ付る也。萩薄のなかきをは。本のくきにも付へし。たゝミやう四になるなり。三にたゝむへし。

一文に卷てそゆる時は。文の内によこ。たんさくの子かしらを。文の端へなして。作者文の奥になるべし。又常にたゝミて。つゝミても遣候也。

一自他所文に歌をかきて給候は。返歌をも給たる文の。かきたるやうにかくへし。給たる文と返事の。ちかひ候はぬやうにあるへし。

此段は東下野守常縁トヤ ツチヨリ以自筆寫置之也。

一女性衆の懷紙調事。端作不書之。勿論季題名を不書して。歌はかり三行七字に。おくさかりに。ちらしかきのやうに書之。猶口傳にある。

り。

アツマヤ

一東屋。四阿とかきて。あつまやとよむ也。西下と書て。まやとよめる。四阿ハ御所造りに四方に軒ありて。あまたれ四方へをつるなり。

催馬樂の歌

まやの此三字アルヘシ

あつまやの。あまりの。あまそゝき 我立ぬれぬこの戸ひらかせ

一きんらん。とんすなと進上ニ仕時は。記録に在之ことく。ふるく候とも唐包可然候。あまりに損候は。上を引合にて包ミ。水引にて可結候。五端とも十端共進上の時は。一端つゝ。せんかうなとつゝむやうにして。其をもとゆひのふとさほとに。二筋紅にして。惣を結て盆にすへらるへし。昔のとんす。きんらんハ。まさ候へたゝミたるにて。いままきとんすにし候間。一端ツ、包ミテ。惣ゆひをし候也。惣結ハ兩わなたるへし。一端つゝ

ハかたわれたるへし。からいと三斤或は五斤など進上候時は。ねちたる方を下る成。豎に盆にてすへ候へは。ねちさるかたふつさり候て見立よく候。一斤などにて候へハ。如常横にもすへられ候。

一三物の遊とは流鏑馬。笠懸。犬追物なり。然を近代ハ。流鏑馬稀なる間。犬笠懸歩射を三物と云なり。又五物とは流鏑馬。笠懸。小笠懸。犬追物。歩射是を五物と云なり。

一腹巻を書狀などに。具足と書は惡なり。具足とは萬の物の惣名歟。或樂器の具足。或は射手具足など、申之間。具足一兩とは誤歟の由申習す。一領は是なり。非<sub>ニ</sub>兩字<sub>一</sub>。

一白楮白麻魚綱。此三は何も紙の異名也。

一鄴瓦。陶泓。馬蹄。此三は硯の異名也。鳳味同前。

一毛穎。兎毫。鼠鬚。鼠尾。黑頭公此五色ハ筆の異

名なり。

一麝煤。松烟。二は墨の異名なり。

一弓をはる時ハ。うらはすの弦わを能見て。すくにかゝりたらは其まゝ置。ゆかミたらは。なをして角の柱に弓のうら筈を押あて。左のひさにあて。右の手にて弦輪をとりてくわへて。弓をひさに押あてゝはり。右の手にてにきりの下をとり。左の手をはそのまゝ置て。次第く弓をうへに取あけてかほを見へし。わるくは其まゝ弓を下に押あてゝなおすへし。押なおす時は。立なからも又ひさまつきもなをすへし。北へうらハすをむかひてハはるましき也。かけよりはりて可出。但御前ニてはれと所望あらは。御前にてはるへし。貴人の方へ後を不成。たとへ貴人の方へ後をは成候とも。北へ向て張事あるへからず。はりて後すわうの袖にて。

弓のほこを押のこひて可出。弦音すこし二三とすへし。

一弓を貴人又は主人に可出には。ちどひきて見て扱可出。ひきて見る時。我顔を引として肩までは引ぬ事なり。主人立てあらは。畏て可出。又は立なからも可出。是は不定。但畏て出したらんはよかるへし。式の御的の時は。立なから出事法なり。當座に時としては。りて出は。等輩の人にも弦音をして。少ひきて可出。他人の弓をひかされと云事ハあれとも。此方よりはりて出てハ引て可出之。

一弓をはりて弦をくひしめすと云事。末はすよりまつくひしめすへし。三寸はかりくひしめして。扱其口にてやかてうらはすのかたへくひしめすなり。それもまつ二三寸はかり先。にきりの方へして扱とむるなり。上下共にそとへしてとむるなり。其後さくり

の下をくひしめてゆひて。弦を下へこきさくるやうにするなり。

一常の引出物に弓計も可出也。こしらへたる弓ならは弦をもぬるへし。にきり七八寸上をかミよりにて。弓と弦との間をちかへて。弓の前竹の方にて。ひほ結のことくに結なり。にきりをはまくましきなり。たとへまきたるともほとくへし。但當座と所望あらは。はりても可出也。にきりをも可置。白木そはしら木。ひらこきなどを出は。弦は白弦たるへし。

一弓懸に弓をかくるに。はすの方北へかけぬ事なり。又かりそめも北へ向間敷也

一下人にうつほをつけさせて。弓を可持様の事。弓をたて、弦を前へ成。にきりの下邊を右の手に可持之。肩にかつきても可持之。馬の前に右の方にあるべし。又馬の後にも可



持之。

一弓袋に入たる弓を。下人に持せ候事も。はり弓のことし。又外竹をさきへ成て。かたにかつきて持事も在之。略儀なり。

一大的。丸物。草鹿。笠懸などのをも。あつちと可云。まとはと云事は有間敷也。但大的なとはかりの時は。的はと云也。それもあつちと云事猶可然也。

一常に人物かたりに弓返と云事。いはれぬ事也。弓をいかへしてと云へし。

一庭乗の時。貴人御乗馬ならは。庭上へおり申て見物可申。又たとへ誰人乗馬候共主人之御馬にて候者。庭上へおりて見物可申。縁の上にて見物申事有間敷候。

一御主の御走に參勤申時。遠路などへは刀の下緒をとめ可申。留様は前へ引まはして。腰の真中にてとめへし。自然太刀など帶候時

も同前。又さけ太刀の時は。下緒をそのまゝもをくへし。後腰にかい候人も候歟。其は見苦敷事也。

一人數を書たるを讀時。ひとりふたりとよむへし。一ツ二ツとは不讀。又首の注文をよむ時は。一ツ二ツとよむ間。常にはひとりふたりとよむへし。

一弓をたゞしら木とは不可申。しら木の弓と可申。白木とは色々に白木ある故也。曲高弓太平記にあり。

一小鷹のへを三十尋。廿五尋。廿一ひろにも用之。ひねり掉五尺二寸。一尋とは八尺を云歟。一大鷹の鞭一尺八寸。或二尺壹寸。

一犬餌の枝は其主の目の下に可切之。(餌)

一こつちのを大かた二寸。足皮六寸六分。

一架の高さ四尺壹寸。横七尺條。六尺六寸。或五尺五寸。何も白鷹。

一慈惠恩問。塾懷。國の興亡を見るは。政の捨を



見にハ如すとあり。太平記の詞なり。

一藤の花をは。しなひと申たるか可然候。藤のふさなどゝはいかゝにて候。いせ物語にも。花のしなひ。三尺六寸はかりなんありけるそれはとあり。ふしんもなきことは也。

一定家。家隆の兩説かはる事。双紙をかくにまつ定家ニハ。一丁を引返してはしより書之。又家隆には。一丁を引返して中より書之。彼兩説のあひわかるる事難心得。其故は家隆は既に俊成卿の弟子也。定家は俊成卿の嫡子なり。仍定家爲正統の上は。家隆は其末子として。肩をならふへからざる物なり。雖然今兩流を立て。一双の哥仙といはれし事は聊故有事也。然間さうしを書にも。兩説在之事也。

一大永二六十日。青蓮院殿ハ和ノ内山へ御退座付て。貞充爲御使御内書持參御文云。

今度御進退之儀驚入候。早々歸室可目出候。猶貞充可申候。恐々謹言。

六月十日 御判

青蓮院殿 殿文字如此也

御上卷 青蓮院殿 義晴上御座あり

御内書直に被渡申之云々。室の字も付て被仰出在之。三日致滯留畢。貞忠御調遣也。

一爲御使諸家へ御内書持參の事。先對奏者爲御使御内書持參之趣申渡時。則申入其主被罷出時。御文箱共に直に渡之申也。或緒をときて渡申事も在之。又其まゝ渡申事在之不定。攝家清花諸御門跡同前。又以奏者御對面なき子細被仰聞は。御奏者へも渡之。文明の頃御詠爲御談合。後成恩寺殿へ細々成御内書時。御使に參上の時。相待申御詠草をは。御文箱へ被入。直に被渡下御返書をは。以御使被渡候し事も在之。又御參賀ありて。可有

御申候て。御内書箱をも被留置罷出時も在之。又文明十二年の八月五日。樵談治要の外題之儀ニ付而被成御内書候をは双紙箱へ被入候つるを致持參候。暫時待中。彼外題を被遊御双紙箱へ被入。御返書ハ別に被渡候を請取申由貞仍懇に注置也。貞元聞書に可相見也。

一 永正十七庚辰五月二日。從阿州澄元爲御使者。三好筑前守之長出仕すわう上下今度澄元御禮之事ハ。赤松兵部少輔義村執被中堇保左衛門太夫を被相副。貞陸へ入魂なる澄元進上御鎧御太刀御馬。貞陸への披露狀也。義村一札之在之。於庭上三好堇保兩人貞陸へ渡申也。御塀中門の内北方にて。申狀兩通は貞陸直に御請。御太刀は貞遠請取。甲御鎧をは唐櫃共に。御番所の東の御縁にて被取出也。如常拵貞泰貞遠持參。御太刀と中狀貞

陸御持參にて御披露。暫ありて貞陸庭上ニ被御覽之趣被仰聞畢。彼兩人御對面の事は。當日の申次たる間。貞遠披露也。依三好御太刀御馬万疋之目錄於庭上請取之。御前へ致持參披露申。庭上へ罷下。如常御目につけ申也。其時は申次一人庭上に祇候。さて又堇保進上候御太刀目錄を請取。御前へ致持參披露仕て。如前庭上へ罷下候て。堇保を御目にかけて。さて又御前へ致祇候もうと如常申上也。其間に進上之目錄御太刀をは。貞泰取被申也。御鎧をは如常拵申也。進上之万疋車にて。北の御門まで參候を。直に御倉玉泉坊へ納之。

三好御禮に付て。申次攻衆少々祇候也。  
一御奉加帳調進事。

眞如堂御奉加帳。

表紙に表ニハ日裏ニハ月あり日の字の上より書之。

慈照院殿様

准三宮

妙善院殿様

從一位富子

常徳院殿様

征夷大將軍

一字さけて

一折に御ひとかたつゝ書申也。

慈照院右大將とはかりも被遊也。

日吉社御奉加帳。

此表も同前。

御同前。相替事無之問不注置。

一細川家よりの奉加帳。

東山眞如堂奉加帳

上に如此也。

大心院之御事。

右京大夫

右馬助

一おもてに御一人つゝ書之。

城州東山眞如堂奉加帳。

是は表紙ニハ不書之。  
内ノ一折の端に書之。  
中に御名書也。

右京大夫

右馬頭

晴元の御事也。

一佐々木定頼播磨守。

六角定頼之事。  
内ノ折の表に如此在之。

城州東山眞如堂。

彈正少弼

天文十六表に如此書て

眞如堂奉加帳。

前丹後守。

内の一折に一人つゝ書之。但  
横の筋より下に書之。筋より  
上には何も不書之。

別注置也。貞遠日記在之。

一御末衆スエの事。もとくハ御末男衆と申之也。

當時御末衆と在之如何。但至今て御下知以下には。御末男と被書之也。

一公方様の御矢をは。おんてうつとも。又おてうつ共申へし。おん共申出とも申へし。習のある事也。殊犬追物の時。檢見御てうつとよりはり申事在之。甲乙の習是なり。

一勅定勅語綸言綸旨宣旨。何も禁裏様の御事也。令旨とは親王家或法中之御事を申也。

一 公家門跡には。御判をは草名と被仰之なり。

親王法親王御草名の事。御書に被遊事は。被遣人之官位ニよりて被遊事也。御書之上卷の表に御判ある儀も。御草名と可申也。

一 仙洞とは院之御所の御事也。兆御殿之名也。

一家門と稱事は。攝家に祇候之殿上人。又は諸大夫御侍等。攝家を家門に被中也。或は清花と諸大夫。又は侍衆被申也。其外の御公家を家門とは不可申也。其をは本所と可申也。

眞如堂奉加帳。

貞宗之事

伊勢守

貞陸之事

備中守

一 無官の人は氏を書。たとへは平貞清など、

書之。

一 上の銘は或は。太神宮正遷宮奉加帳。

太神宮造營奉加帳。

何も其所の名を書之。

眞如堂供養勸進奉加帳。

一文龜二癸亥七月三日。加賀國白山長吏より。以使僧御禮被申上。彼使僧御對面の事。可爲御座敷歟。可爲庭上歟之由各被申事在之。申次大館刑部大輔自殿中貞宗へ被成御尋。彼言上には。於可有御對面は御座敷たるへき歟と存之旨御申也。先年出雲國鰐淵寺より御禮之時も此御沙汰在之。其身之出性には。不寄解脫<sup>ラ</sup>憧相の衣を身にかゝれは。其を被敬事なりとて。於御座敷御對面あり。貞親なとも。常に衣鉢へは可相替之由申き。但可爲上意次第之由御申也。依今日於御座敷御對面なり。申次之衆爲分。

一家と殿との事。大概無差別歟。但將軍家とは申共。將軍殿とは不申也。又和歌鞠などの事ニ。冷泉家説。飛鳥井家説と申也。是も書狀

等には。冷泉殿など、書之。家と殿とは事に  
よりて書之。

一禁中へ諸大名祇候申事も在之哉の事。雖爲  
三職御衆庭上迄御參なり。大心院政元法住  
院殿様依御執奏。御前の御縁迄參拜。希代之  
初例也云々。

又御參内の時。長橋殿局御直廬たり。其日は  
御局之傍まで上意。御氣色によりて。御供衆  
中之少々祇候也。又大内左京太夫義興朝臣。  
三位の忠節によりて。長橋御局迄參上。貞宗  
相引て參拜不紛儀也。此外更無其儀事也。此  
旨高倉正三位範久卿被注下畢。

一就入院等儀、布衣之役者參勤之事。五位之輩  
ハ無參勤候。自然役者に御事かけ候時は。五  
位の當日計六位に鶴退候て。參勤候ても不  
苦候。然に彼役者被相觸事は。伊勢守かた  
より奉行所へ被仰達候へは。又奉行より役

者へ被申觸候。被申送一行をは號<sup>ヌ</sup>短尺<sup>ト</sup>。杉原  
四切等分にして如此書也。杉原にたてにつ  
ゝみて以<sup>テ</sup>公人<sup>ヲ</sup>被相觸之也。

就相國寺入院

布衣

本卿宮内少輔

年號月日

一就入院并堂供養等之儀。御成如常。布衣兩人  
殿上人兩人御出。奉行兩人。但五山により可  
相替歟。雖然役者は此分。面々も祇候也。

一諸家へ御成之時。亭主に御太刀被下候ハ。  
被持候御劔を被下候歟の事。御劔御座敷に  
被置候儀被下之。然ハ又一段之御太刀を進  
上候。其を則還御に被持候。又伊勢守別之御  
太刀を持候て。被下之事も在之。一篇にはあ  
るへからすと也。

一御劔を右にはき申事。馬上にて持中心にて。



然間又御供之時。うつほをつけられ候ても。御劔之役者は。うつほを御付候はすは。右に劔はかれ候故なり。

一殿中へけいせい。しらひやうしは不參候。おなし遊女にて候へ共。加賀女は殿中へも參由候。傾城白拍子事。殿中へは不參候。自然御陣などへは參候歟之事。其段は何共不存知候由在之。

一遠路へ御成之時。御供衆乗替引事候は。ほとををき候て後に可引候。御供衆なとの中へ引ませ候事不可然候。馬數事。遠路にて候は。さもあるへき歟。然共さのミあまたハ有間敷候。

一御配膳と中は。御膳をすへ申事にて候。殿中にては。御供衆之御役にて候。御末より持參御供衆へ渡す。是を御末の御かくこと申候。近年は御格勤と申者無之間。御末男同朋

へ渡す。同朋衆より御供衆へ渡中。昔はなき事にて候。又御祝言の時は。上臈中臈御ミやつかひ候間。御手長の役參勤候。碗飯之時ハ殿上人御配膳の間。是も御手長參勤也。

一御供衆弓うつほ御付候事は。鞍馬高雄八幡大原野大原。此在所へは必々御付候。於洛中也雪野へは御成之時御付候。御供にてなき時も。雪野へは御付候事。

一大かたひらの時は。つゝら切付を可被用候法にて候。家々の紋又は何にても。うるしにて黒くかき候。鞆はお尻かい本儀にて候。一同朋衆は太刀をば不持候。打刀計持たせ候。小太刀をば不持候。小者は馬之さきへ走候。打刀をは。馬のわきに中間に持せ候。當時は相替事候間不存候。法は如此候。

一ゑはしかけの事。くミにて仕候か本儀にて候。其故は御はれの時てうつかけと中は。ゑ



ほしのこゆひをときて。てうつかけに用たる躰にて候。こゆひは常のことくはなく。五分またうに打たり組にて候間。馬尾本儀と中人は難心得候。あせをはしき候とて。近代故實にて候。用候人も候歟。略儀にて候。一刀のつか。いとにてまき候事ハ。ゑほしかみ下の時無御用候。かわにてまきたるは。中々不及是非候。自然當時いとにてまき候を御さし候歟。略儀にて候事もさけ候へは。一段の晴にて候はすはいとをば用候歟。一馬之脇に太刀二振被持候事は。山名方に限候事の由うけたまわり及候。自余にはなき事にて候。めしつかはれ候太刀は。各別の事にて候。

一諸家へ御内書の副狀申事。種々故實在之。常式には。何々御進上候旨令披露畢珍重ニ候。或御鷹又は御馬などの時は。御自愛不斜候

なと、在之。又嘉例などの儀をは。不易之儀珍重候。たとへは御鷹一連御進上之旨令披露畢。仍被成御内書候。御面目之至御祝普令察候恐々。大かた如此。或御祝志之旨相心得可申之由。なと、當時被認方も在之由。太不可然候。源重可分別事也。難注置也。

一御内書之御請の事。御文箱へ不可被入之。御内書箱をは。御使へ別に可被渡申也。御内書持參之時。自然於座敷疊の上に置申事はありとも。縁なとにて縁に置申事は不可在之。難去儀も在之者。扇等の上に置可申。縁に直ニハ不置也。

一御車にて御參内の時は。御車の後に打刀を持て御供衆祇候也。

一花御所。御寢殿に後土御門御座より。於彼御殿は。萬之御祝言參也。椀飯も此御殿にて參也。就時は御酌以下は殿上人參勤也。御手長

參役御供衆もうら打にて祇候。三めの御盃を。其日中沙汰の人頂戴なり。

一此御座敷の御たゝミは。まはりしきなり。此敷様を存知たる人も有間敷由。御所侍直見ナウミ常に申たるとなり。此御殿をは直見ハからい申云々。御掃地以下をは。御承仕つかまつる也。承仕は今に在之。伏見殿に石見と申者御承仕の子孫なり云々。

一殿中之禮節并諸人宵ミヤツカヒの事。勿論昔よりの御法度雖在之。猶以被定置法則ハ。鹿苑院殿様の御代ニ以條數被定置訖。爲御物殿中不出の御式目也。應仁一亂に紛失云云。此段常々汲古被仰聞しとなり。貞仍も同前に物語申たる由貞遠注置内に在之。

一禁裏様へ御進物の事。一かとの御時は。御釵一腰。砂金十兩共御目録に調進勿論なり。當時砂金まれなる間。黄金にて納申之。御目録

に黄金と不致調進云云。

めてかしらと言。

一三

かり屋

〇 檢見

是を四のかさ、申也。  
猶以子細在之。

二四

弓手かしらと言。

一犬追物の繩。四かしらと言事。如此自然見物仕候。かやうの事不心得してたちまち失面目事在之。

一やまはりの日記の事。八廻と書なり。朝倉に被遣候奥書に。八廻と被遊被遣候也。

一矢しるしの事。うるしにて名乗計を。ちいさく可書之。しるしの所は例式のごとく。羽中三方にすへし。又ハ本はきと。おつとりのふしとの間。走羽のとをりに可書之。又はくつまきの三ふせをきて。是も走羽のとをりに可書之。名乗の下の字と書ごめの間。くつまきのきわより三ふせなり。羽中には三方に

可書之。其外一所也。走羽のとをりに可書也。又宮途氏などは不可書之。名乗計二字可書之。惣別矢しるしの在所は三所也。何の所に可書共。其主の心に可任之也。我おい矢以下の矢しるし同前也。

一御前へ打かけゑるはしの事。俄の儀又おろ次ひたひつけなとはなれたるをへ。被御覽分間敷間不苦。かねての出仕定たるに。打かけゑるはしハ。努々あるましき事なり。此段慈照院殿様度々被仰出しなり。

一御成の時御座の事。兼てしかれ御座には御さなく候。女中衆の御局へ御成の時も。御座の上ニハ御座なく。慈照院殿様如此也。

一御能の時。太夫に上へ罷上候へとの事。毎々直に被仰出候。また誰々に申候へと仰の時は。御座敷より仰事も候。御こひ能の時も如此。此段も同御代の御事也。猶一卷に具被注

置候歟。

一御折二合參候時。まんちうを一番に出候歟。又魚物を出歟の事。前後不苦。惣別先ニハ御おりの物を。御主御所様きこしめされたる由誰ニも被參候事ハ。昔は無御座候。然間まんちうの御おりとござ候には。御はしをすへ不申候。此頃は御はしすはり申哉由。貞辰不審候趣。貞孝かたへも相州より申上候つる也。猶別紙在之。

以上百四拾貳ヶ條。

道照之事也。貞順之父。

伊勢六郎左衛門尉

貞久

全室高老奥書に在之。

全室は伊勢守貞宗之事也。

此等子細未弁之由。古人の抄にも載られたり。たやすく人の弁しるへきにあらさ

るにや。しかりといへとも。かやうの名目ある事をしらねハ。時によりてはいまうの事あるによりて。いさゝかことの次にしるしつつけ侍なるへし。大かた萬の道。名目をなりとも。せめてしり侍らては。其道にたつさはりぬる甲斐も。あるましき歟。されと此道におきても。更かきり有ましき事なるへきにや。世間流布せる諸抄をたにも見わたさて。此道の有職あるやうに申侍る事あり。色々冥覽恐あるへし。さりかたき所望によりて。事のはし／＼を。意得かほに筆にまかせ侍る事。厚顔きはまりなき子細にて迷惑し侍りぬ。

一 永祿八乙丑正月五日。午刻に細川兵部大輔亭へ爲北野還御御成在之。御馬なり。御供衆歩行也。御能在之。御手長之分也。御盃七ツ参る。進物三ヶ度進上之。不及注之。御能始申事

大館伊與守様牀相違之間。爲後見如何候間不注之。御通御部屋衆中次番方少々舞台のらうそくしんもしんとり一ツ在之間。一人ツ、三ヶ度に被取之畢有ましき也。御相伴衆。近衛殿。久我御方。久我入道殿。御侍者御所。廣橋殿。飛鳥井殿。新宰相殿。武田入道。

吟繪

あり明

あり明

紫雲

近衛殿  
武田入道  
飛鳥井殿  
廣橋殿  
新宰相殿  
久我御方  
久我入道殿

御供衆以下祇候  
梅久庵  
仙入寺  
仙入寺  
仙入寺  
仙入寺  
仙入寺  
仙入寺

一御能九番大夫三番仕。其外ハ三郎仕之。わき  
 大和宮内大輔。一色式部少輔。春何歳何祭主  
 以下仕之。御手長とは中なからも。庭上に舞  
 台をはり。既親世大夫仕候上は。奉公の者わ  
 きを可仕事。前代未聞あさましき事之山心  
 ある物はかけ事に申候。此分候は、世上彌  
 おとろへ。久しかるましきなと我人申沙汰  
 し。あさましき時分に生あひ候よと。とりあ  
 つかい候つるに。同年五月十九日に。辰刻に  
 取つめ申。午刻に御生害に及申事。たゝ事な  
 らざる儀共。中々後見もあさましく候ま  
 々。不及注置者也。南無阿彌陀佛々。無余  
 事者也。

伊勢兵部少輔

貞昌

貞信 伊勢守

嫡男 貞行 伊勢守

貞經 伊勢守

二男 貞長 因幡守

貞直 因幡守 加賀守

貞勝 因幡守

貞誠 因幡守

嫡男 貞榮 因幡守

二男 貞久 六郎左衛門尉

嫡男 貞順 六郎左衛門尉

下總守 法名道照

二男 貞種 與七郎

以宮内省圖書寮本謄寫校合畢

續群書類從卷第六百九十一

武家部三十七

中嶋攝津守宗次記

正月一日を元三といふ事ハ。年の始。月のはしめ。日のはしめなる故に。元三と云。又五ヶ日と云事は。正月三ヶ日。七日。十五日。これを五ヶ日と云。

一すわうはかまの色は。春は柳色。夏は水いろ。秋はひは色。冬は黒いる本なり。

一四月一日よりあわせをきるなり。新しき袷をきる時はあわせ計を着るなり。ふるき袷をきる時は。したにかたひらをかさねてき

る也。若き人はゑりを巻なり。しゆくらうハ折てきる。わかき人ハ下にきる時ハ。おりてもくるしからず。

一五月五日よりかたひらをきへし。もしさむき事ありとも。あわせをきる事なかれ。但ししゆくらうなとハ。下にあはせをきて。かたひらをかさねてもくるしからず。

一ゑりをおりてきるものと。まきてきる物と分別すへし。帷子あわせをまくなり。又うす小そてなとも。一きる時ハまくなり。織物わたいりのものは折てきるなり。



一 いくつもきて。二ゑりか本なり。むかしハき  
る物の數ほとゑりを見せてきる事もあり。  
當世はきらふなり。

一 九月一日より八日迄。袷をきるなり。同九日  
よりもよきのうす小袖をきるなり。

一 十月一日よりわたりの染小袖本なり。御  
前ニてあかねつむきを上えきる事。くわん  
たいなり。但ねりのあかねに染たるハ苦し  
からす。

一 かたきぬはかまにて出仕の御ともと有時  
は。かちんのかたきぬはかま本なり。善惡に  
御はしりの時のよのはかまに。別の色ある  
へからす。かちん本なり。

一 あかききる物と。しろきもの重てきる事有  
へからす。惣してあかき物をハ下にきるな  
り。女房衆ハあかきを上に着もくるしから  
す。

一 御はしり時。あわせをきるに。下にきるもの  
有の口傳。

一 はかまをきる時。かたきぬの事。袴へあしを  
いれて。のちに肩衣をきるなり。きるものの  
ゑりと。かた衣のゑりとをなし物にきる事  
本なり。はかまを着るときは。左の足よりふ  
ミこむへし。ゆめく右のあしよりきる事  
なかれ。又足を人ぬさきに。前こしをあつる  
事。大に嫌ふ事なり。色をきる時。足を入  
して。まへこしをきて。後に足を入るゝな  
り。

一 同手をとむる事。前後のひほをひとつに取。  
右のかたの前の帯に。下より上へおしこむ  
へし。左のかたには。ふさを一殘へし。これ  
も前の帯に。下より上へおしこむへし。はか  
まの上の刀の事。前こしうしろの帯に。一す  
ちにさすなり。但きうしの時ハ。ほを帶一

と。前の帶とにさすなり。

一御前にかしこまる時は。我左を貴人の御覽するやうに畏る事本たり。努々右のかたを見せ申事なかれ。然といへ共主人の御座によるへし。其時ハ主人の御方の手をつく事本なり。

一座敷にて参合の時。座敷の上の方のひさを立事。努々あるへからす。

一座敷にてはなをかむ事。引合より紙を出して。直にむかふを見るやうにかむ事本なり。脇へかほをふる。くわんたいなり。但座敷の下に人なくは。少座敷の下へかたふくやうにかむなり。はな紙をおほくたゝむ事くわんたいなり。十枚はかりより内を四に折てもつなり。國の守殿ハ。杉原一條折て。御持有一條とは十二枚のことなり。

一座敷へ主人のはなかみ持て参る事あり。き

りめを我前になし。右手にもち。すわうの袖の内より。貴人の右の手へ参なり。

一座敷にて貴人に物申事。貴人の右の方へ寄て申なり。又我聞時は左の耳に聞ものなり。

一主人に扇を持て参様。左の手にかなめのあたりをもち。あふきを立て参るなり。

一扇のさしやう。太刀と脇差との間にすくにさすへし。扇のする二寸はかり見ゆるやうにさしこむへし。

一あふきに物をすへて参らする事あらハ。あふきのうらにすへへし。重きものならは。左の手を。下におき。貴人の前にかなめを我前になるやうに置なり。

一御まほりなどを持て参時。あふきの表にすへ。まほりの緒をもちて参なり。ゆめ／＼左りに扇を持事なかれ。

一扇にやうしそへて参る様。柳枝のかしらを

せうの粉をしるへ入 かきまわし。是ハしるをすひ。其後身をくうへし。

一 うどんをくう事 箸をこり上 右の手にてこせうを取上 汁にいれ 箸にてかきまわし。うとんを二はし三箸いれて喰へし。是よりおりくしるへ付へからす。

一 湯つけを喰事 右の手にて湯をうけて下に置 其後 右の手にて箸を取上 飯を少むかひへおしのくるやうにして喰へし。汁すわり候ハ、箸を取なをし 右の手にて取 左へとり渡し うは置をおしのくるやうにして 扱みを二口三口喰て しるをすふへし。汁はいくたひも請取。さのみ汁すう事なかれ。

一 湯つけの御まはりの喰やう。何にてもあれ。一番にしるのたらぬ物を喰へし。のちはいかやうにもくうなり。

一 あほそハあほもみふりなます。此外いづれもしるのたる物をハ。湯つけならハくうへからす。

一 ほし飯をくうやう。水を請。其後。はしを取上ケ。ほし飯をかきまわし。さらくとなかし入て喰へし。鹽をのちにくふ事本なり。一番に大口にくふは。必ずむする事あるなり。小くちに水に副てくうなり。

一 はうわんを喰事。右の手にて汁を請下に置。はしを取あげ。うハ置を向へおしのくる様にして喰へし。いきをする事なかれ。

一 ちまきを喰事 左の手にて取上。ふとき方の上のむすひめをとき。其次のむすひめを下へおしこくる様にして。前より喰へし。

一 まんちうをくう事。まつしるをうけ。そののち箸をとり。左の手にてまんちう取上て。二ツにわり。右の手のかたを下に置。左の方

を喰へし。汁すう時ハ。箸をとりなをし。し

るをすう。右の手にてすうへし。若人ハ其ま  
ま丸なから。手に持てもくうへし。

一餅をくひ様。二に引わりて。左のかたを下に  
置。右のかたをくうへし。

一赤飯をくふ事あらハ。箸を取あげ。一箸計  
喰。そのうち手にて喰へし。御前にてハ初メ  
より手にてくうへし。

一かむをくう事。てうにもりたらハ。てうにく  
う。はんならハ半にくうへし。

一さうにをくう時ハ。貴人の御前なり共。まつ  
取上す。あしうちになら喰へし。其時左  
の手を。せむと我どのあひにゆひさきを。右  
へなるやうにつきて。うは置よりくうへき  
なり。但所々より其座の主人に隨ふへし。去  
なからうは置なりとも。取あけすして喰。後  
にハ人なとに取上てくうへし。惣別さうに

のしるすう事なかれ。

一にし本せんに有時ハ。取上すして。其儘喰へ  
し。ふたをハ。かひとときそくとのきわに置物  
なり。又引物に有時ハ。取上てくうへし。

一惣して飯を喰時ハ。さひこし。せんこし。は  
しなまり。さいのさい。しるの又すひ嫌ふな  
り。

一膳こしとハ。二のせんをくひて。三のせんを  
喰をいふ。さいのさいとハ。菜をくひ。其箸  
もて次のさいを喰を云。箸なまりとハ。いつ  
れをくはんそとするを云。さいこしとハ。は  
し一ツ置て。わきの菜をくうを云。

一しるいくつありとも。大しるをかけてくふ  
へし。其外の汁かけて喰事なかれ。但しうし  
ほにのしるは。かけてもくるしからす。

一ひやしる請て。やかてすう事なかれ。飯をく  
ひてすう物なり。

一すひ物はいくたひすわり候共。まつ箸を取あけ、みを喰。置さまに汁をすうへし。努々一番にしるをすう事なかれ。但物によりて一番にすう事あり。口傳有。

一二の膳。三の膳のときは。左の方をハ左の手にて取。右の方をハ右の手にて取上るなり。一御前にてやき物をハかくの折敷ながら取上てくうなり。これは鮭の魚之時なり。

一鷹の鳥あらハ。箸を取なをし謹て禮をして。扱飯を喰て。銚子出てあらハ。はしを下に置。さらともに取あけ。手にてつまみくうへし。努々飯に副て喰事なかれ。但心安所にてハ。禮をして飯に副ても喰へし。貴人などハ。箸にて喰てもくるしからず。

一御前にて肴に鷹の鳥。たかの鷹など下さるゝ事あらハ。いかやうのしやうしなりとも。さしいたゝきたる事本也。

一座敷にて盃をしたむ事。さしきの下の方へしたむへし。

一めし出し時。まつ右の手をつき。左の手をあけて。其後。盃を右の手にて取上。酒をうくる時は。兩方のひちをつきて請。のむ時は兩方のひちをあけてのむなり。御酌などにて下さるゝ事あらハ。肘を付ながら吞へし。

一軍陣にてめし出しあらハ。左へまはるへし。又右へまはる事も有。酌くわへの人もむすふことなかれ。

一三幅の繪かくる事。中をかけ。次に客るをかけ。其後。主るを掛るなり。佛は軸をそろへ。ゑさんハ上をそろゆる物なり。

一鞍を御目にかくる事。くらの跡輪より右の手をいれ。左の手にて前輪の山かたをおさへて。鞍の右を御目にかくるなり。

一尺八を人に渡す時は。吹かたを我前になし。

うた口を下に成様に左の手に持。すくに渡し申なり。然れハ出して上になるなり。

一笛を御目に掛る時ハ。御前にて家より取出し。右の手にて横に持。かしらの方を。貴人の左へなるやうに渡し申なり。

一らうそくのしんを取事。若しんとりなくは。小刀のもとにて。五分程残して取へし。みしかくとりかへは。かならずとりけつなり。かうかいにてとる事あらさきにてつき。さてかうかいのさほにてうつすへし。

一あんとむに油さす事。まつふたを取。横に置。客人の方へかけのならぬ様にさすへし。一主人客人。碁すく六あそはす事あらハ。まつ盤を持て参り。其後。こけのふたをあけて。白黒を見分て。晝ならハ黒を客人の方へをき。夜ならハ客人の方へ白をまいらすなり。すく六も此心得同前なり。

一具足を御目に掛る事。唐櫃の蓋をあをのけて。其中に置。持出るなり。然れハ具足のむないたを我前へなる様にするなり。御目にかくるときハ。射向の方を見せ申なり。其後。右を見せ申ものなり。

一甲を御目にかけて。左の手にのせて。右の手にては。見あけのいたをとらへ。主人の右のわきに置。射向の方を見せ申ものなり。

一喉輪を御目にかくる事。輪を右の手にて持。貴人の左の手へ渡し申なり。努々手先を持事なけれ。

一常に矢の取所と云事ハ。射付の節の事なり。一ほうとうはいたて御目にかくる事。左の手に前後をひとつに取。貴人の前に置申時は。前こしの方を。貴人のかたへなる様に置なり。

一籠手を御目に掛る事。右の手にて手崎の方



を。貴人の方になるやうに持出るなり。見せ申時は。手さきのかたを。貴人の御覽しらるゝやうに置申なり。

一進上の鐙の事。唐櫃のふたをあをのけて。其上に左右のまされぬやうに置。はとむねを。貴人のわきへなるやうに披露申なり。鐙を引そろへてハおかす。

一硯を持て參事。左の手に硯とる。右の手に紙のきりめのうちになる様にもち。少硯よりあけて持て參り。貴人の右の方にすゝりを置。料紙を左のわきに置申なり。

一あふきを五明と云事。あつき時つかふ。第二に祝言に持事なり。第三に御座敷にて物をすへて參らするなり。第四に刀なくして。敵をしりそくるなり。第五に天照大神なり。其故に扇を賞翫する物なり。此外に五明といふ事口傳あり。

一小刀を渡様。右の手につかをもち。はを我方へなる様にすくに立て渡すなり。賞翫ハ左の手にさきのことく。はを向て渡申なり。

一主人に笠をさしかくるやう。貴人の右のかたよりさしかけ申なり。左の方より指かくる事なかれ。然れ共馬の上へ笠さしかくる時は。主人の左よりさしかくるなり。是秘事なり。

一脊をはかせ申時ハ。左よりはかせ申なり。はく人ハ。右の手にて。はかするものゝ左の方をおさへへし。右のかたをはく時は。左の手にて右の方をおさへへし。

一風呂に在る時ハ。左の足より人へし。出る時ハ右の足より出へし。惣して風呂にて横にいて。あかをかく事なかれ。

一女房衆こしに乗る時は。右の足よりいゝゝ風呂もおなし事なり。

一路次にてこしに行會たらハ。右へ退て。我左をこしをとすへし。馬乗たらハ下馬をすへし。あきこしならは。右を通すへし。下馬なくともくるしからす。

一用心する人のうしろをハ。とをらぬ事なり。とをらハあん内を申て通るへし。

一夜はさきへ行事賞翫なり。橋なども用心する人ならハ。一たん禮をして。さきへわたるへし。

一刀を渡申事。つかのかたを。人の右へなし。はのはらをむかひへなし。請取時。我かたへひねりなをし渡すへし。さけ緒をちぬやうにいたすものなり。

一野かけにてのくきやうの事。さかなをとりてまいらす事あらハ。各の前へ持て。くきやうを參らす物なり。

一あかきあわせをきる時分の事。男ハ廿五の

年にてうらこうはい。又五十五よりきる。其時はうらの色かはる。口傳あり。

一刀のさけ緒ハ。ほんなうのきつなをへうするなり。それによりて我下緒を切事なき事なり。

一枕をなをすに死生の事。まさのかたをいきまくらといふ。いたのかたを死まくらといふ。口傳あり。

永祿元年閏六月十四日 中嶋攝津守

宗次

相傳 國木原

春□

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

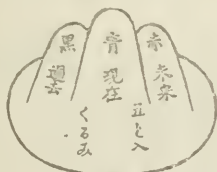
# 河村誓眞聞書

女中衆へわたり申候てうしひさけハ。わたし申やうに取なをし。下に置可申候。手をそへ候事いかゝの儀なり。

一馬上にて傘さす事左なり。大指にかけて笠のゑを取。弓をはさミたるやうに持なり。弓杖をつく時ハ。絃を馬のかたへ向候て。左の手にて弓に手綱を取そへ。左の手にて鞍をかゝへ乗なり。

一さんほうせんの事。殿中にてもまれなる御一獻にて候。さして調るにさうさなく候得共。三季膳の出候ほとなれハ。一段大奔走不及自然候。先四季の色の山を造り。一季を残して。三季を造り。過去現在未來をかけて喰様兩やうに申候。一にハ當季を残して。餘の季をくふへしと云。三季なからくつしてあ

けられ候。いつれをくつされ候哉。人にしらせしとの故實と申候。あけられ候時。そゝとさきをいろひたるやうにしてあけられ候つる。喰様を人にみせるために候。汁をハ座敷にてかけ候。すい口前へなり候方にぬきくるミあるへし。



色々口傳有。

此時は秋を捨黄と前へ此時は冬を捨

春 春現在 青

冬 過去黒

當季を前へし候

此時は春を捨

秋 秋現在 白

夏 過去黄

夏 夏現在 赤

春 過去白

此時は夏を捨

冬 冬現在 黒

秋 過去赤

一 飴飯の事。

夏赤

春青 土用  
玄黄 冬黒

秋白

はうはん如此もり候。飯の上に此色なきミて置なり。精進本なり。又魚物にても候なり。御まへにて汁をかけ候也。

一 かんの名少々。

三ほうせん

ろちやうかん

へつかん

こんせんかん

ちくやうかん

はきよかん

すいせんかん

けんひんかん

すいきんかん

さとうかん

さとうやうかん

やうかん

うんけつかん

此ほか有へく候。まんちうハ點心のよし。但難定云々。

一 れうりの物少々。かまほと鯰を本と云。是蒲

の穂に似せたる心なり。

一 なまつのさゝら切と云ハ。尾のかたよりはしめて。一刀つゝ切のほせて。とりなをしかしらをたてさまにわり。切つゝけてにたるをいふなり。

一 かけいりハ。鯛の身をすりゆるめ。おしきにても板にても付て。板を上につて。かへらけてゆてゝ。すいせんのことく切てすへ。みそをかへらかして。鹽さかしを心みて。青みを入れ。其後。魚を入候なり。

一 鯛のくわんさうハ。せのひれなり。串にさしあふ様なり。

一 打海老とハ。ゑひをなまのかはを引て。板の上にてこまかにおしねやして。上にくすの粉をまき候ておしまハし。うとんのことくなるを切て。みそをかへらかし。さと入まいらせるなり。

一卵の花なますハ。なに魚にて。ぬたにもと  
ころくゝに作りたる身を置たるを云なり。  
一羽ふしあるハ。きしの鳥のはふしをこまか  
にたいきて。しやうかすにても。わさひにて  
もあるて參るなり。れうりの事種々有之。

一まな板の寸法の事。

一長さ三尺一寸八分。一廣さ一尺七寸貳分。

一あつさ二寸。

一足の高さ二寸八分。

足の付やうハ。切目より内へ一寸八分入  
へし。平より内へ八分入て作なり。但流々

多之。

一貴人の御前にて。れうりに金輪すゆる事あ  
り。足一貴人の方へ向てすゆるなり。

一主人貴人の御前にて。烏魚焼事あらハ。先炭  
の火にて。火鉢等にてやく時。おきを前へか  
きハけて焼はてし。其やきたるおきをハ。お  
きかきにて取て。なまくさき分を取て。きよ

きおきハ炭を置つきて可罷立なり。故實な  
り。ちん香なとたき候事一向不可然なり。又  
はまくりを焼候ハ。とちめを取て焼へし。五  
六度あわをふかハ取あくへし。

一鷹の鳥の喰様。同かいしきの事。

なんてんをしく事ハ。不苦といへ共無子細。  
かななかけにすゆる。ふか／＼といったゝき。  
過分のよし申。箸もちたる方の手にて。箸持  
なからつまみて喰へし。二三喰て其後ハ。は  
しにて喰候てもくるしからす候。

一客來の時。火はちゆるりに火を置事。陽の火  
陰の火と云。きハ候てハ陰なり。おこりたつ  
ハ陽なり。置てしやうし入申へきなり。

一門跡ハ御成にハ。御見御宮つかひ候さけも  
とゆひなり。

一狀を主人貴人へ參するハ。左の手に持て出  
可申候。右の手をつくへし。又軍陣にてハ

狀をたてに參候となり。申事ならハ先申入  
ての後。狀を披露可申候なり。但可依時宜な  
り。

一裝束の事。若き人も。年のほとよりくすミた  
るハよきと申候。わか／＼敷ハ田舎人しく  
候。又大名の内衆ハはたこうはいなと不苦。  
是もゑりしほり候へし。奉公の人なと着す  
る事不可然。とほとふミあかねハ年よりて  
不苦。惣してちいさき紋。かのこなどゆいて  
着せられ候。無紋の小袖狼藉なり。入道なら  
てハいかゝに候。犬追物の時ハ。いかやうに  
もわか／＼出立れ候てくるしからぬ由候。  
但射手のやうによるへし。

一いしやうの事。

三月中ハ。裕うす小袖たるへし。四月一日よ  
りあわせ着候事定候。惣別おり色ハ。ゑりを  
も袖をもしほりたるを着する。紫色公家衆

ならてハめし候ハす。絹のあわせを本と申  
候なり。昔ハそめて着候。きぬの時ハしほら  
す候。五月四日まで裕。五日より男衆ハかた  
ひらなり。女中衆ハ五月五日も。ねりぬきを  
めし候。こしまきもすゝしからん。六月一日  
より七月中かたひらをめし候。八月一日よ  
り又ねりぬきこし巻染付の小袖をめし候。  
男もむかしハ八月一日より裕を着し候とな  
り。今ハ九月一日よりあわせを着し候。九月  
九日より小袖を着し。又十月亥子にハ。男女  
共に紫の小袖を被用候。殿中も如此候。又ぬ  
めのこうはいの事。内裏武家の御所に宮つ  
かひの女中ハ。御とし廿一の五月五日の午  
時までめされ候。又云。廿五とわたく男ハ十  
五歳迄着候。それも年よりもせいたけによ  
り斟酌有へし。是ももとハ。ゑりをしほり申  
候となり。



一北けんつむきの事。もんの付たるハ。上へも  
參候。出家入道同朋勿論に候。ゑほし上下の  
時。かりそめにも無紋の小袖不可然候。又猿  
樂ハ不苦候。既にからおりも着候事候。又武  
家に大かたひらの事。此時又白き小袖を被  
着候。絹たるへし。又むらさきうらの事。し  
んしやくあるへき儀と候。

一公方様御ふくとハ。織物の事候。色御紋ハ不  
定候。白きあや子細ある事候。おりすちハ慈  
照院殿御代までハめされ候ハす候山候。又  
から織物の事。公方様の外ハ。御臺様めし  
候。又日野殿。三條殿女中。管領の御母御免  
にてめし候。又三職へ管領御存候てハおし  
おしめし候。

一たゝのおり物の事。御免なくてハゆめく  
着候ハす候。又すちとんすなどハめし候。か  
うしをハ。是も御ゆるし候はんハ。女中もめ

し候ハす候。

一御ふく拜領候てハ。久被着候をき□と申候。  
一嶋おり物の事。地下人着候物にて候。

一かけもゑきと申候ハ。こんやにてそめ候。色  
色の紋のつけて。もゑき黒にて染たる小袖  
にて候。又加賀梅染の事。面むき被着候事く  
るしからす候。無もんハ可有斟酌。

一丸すゝしの事。御ふくハ不及申。大上らふ。  
小上らふハめし候。中臈はめし候はす候。た  
まゝもめし候事不可有之候。又一重すゝ  
しの事も。一段の賞翫の事候。

一公方様へ色つかひ御申候。大上らふの御も  
一重疊にて候。小上らふうらつき候。

一いにしへの帯ハ六ツわりにて候。慈照院殿  
御代より八わりに被成候。

一三つゑりの事。兒若衆同朋又年寄たる人ハ。  
自然くるしからす候。惣別あわせをハ。數に

不被入候。二ゑりらうせきなり。一ゑり裕と小袖との事なり。

一つしか花又はゝの事。女房衆兒などの被着候。男衆も着候はん歟。二十三までハ男も着す。成人のほといによるへし。

一男の夏のはれハ。白きかたひらなり。こうちしろハ。これも若衆の時ハ着候。

一かたひらに裕のりんを付候事。もゝたち取よきとて。又ハ身にあせのつき候ハぬとて。御はしり衆なと被着候事なり。

一はれの時はたにかたひら着候事ハ無之事候。裕の下にかたひら着候事ハ不苦候。

一はれの時ハ。うらうちすハうはかままへの日よりゑもんとり候て。當日に着よきと申候。大かたひら同前。

一ひたゝれの染やう。先以あさきたるへし。もん白きなり。ぬいめつけなり。また彈正判官

ハ地をくろく。もんも蝶を被付候。餘の官人ハ其儀有へからす。常のうら打ハ。せいかう。又をのどめやう。前にて常のことくむすふ。さきをひろけ。かくのことくのおひを丸くつゝみて。上より下へおしかひ候なり。□  
□如此なり。公家ハ一重ひたれたれなり。此時ハ御下すかたと申候て。常に武家のはかまかたきぬのこゝろなり。

一大かたひらの事。一重ひたゝれに。下にかたひらの白きを。こしより上に。のりを一段こはく付てきかさね。ゑもんを取なり。惣別白きひたゝれを被着候。是ハ公方にても御元服など一段の御祝に被着候。また薄にて家々の紋を付て被着候事も。昔ハ有之事候。きくとちハかうよりたるへし。刀ハさやまき引めさけを。年寄も火うち袋ハさけへからす。又昔一段のはれにひたゝれを。金みかき

にもせられ候て着するも。大かたひらにか  
さねられ候。とほしかけも一寸またらに。白  
黒かちませて被用候。ちとほそきほとにこ  
しらへ候。惣してゑほしハ。こゆひなきもの  
ならて。うつかけを打かける心なり。それを  
こゆひと云なり。大かたひらの時ハ。白太刀  
を被用へく候。太刀うち刀にもうてぬき入  
ましく候。返しも、たちとるへからす。道の  
しるき時ハ。とさすへからす。つゝら切付お  
りゑりくひを可被用候なり。

一すはうはかま。かたきぬはかまのもん(マ)のる  
目にたゝぬか可然候。上下かはりたるハ畧  
儀なり。但十四五六までハくるしからす。又  
奈良御参詣におのゝからまき并ひやうも  
んの上下を被着候。惣別ひやうもんハ。御禁  
制の儀候。其故へハ御はれの時。可被用ため  
に候。ひやうもんは。三色に色へたるを申

候。又たゝす河原の勸進能の猿樂共。一日は  
からまき。一日ハひやうもんを着候。猶々草  
木の葉色々に色とりたるを。ひやうもんど  
申候なり。

一すハうハ越後布。六月七月兩月の儀候。八月  
一日よりあつすはうにて候。すきすハう御  
免とて。常に越後布にて被用候ハいかゝに  
候歟。惣別昔も御免候ハてハ越後布にてハ  
無之候。犬追物にハ御免候はねども。すきす  
ハうを被着候。冬も可然候。

一十徳の事。昔ハくすを白くても染ても着候  
て。上に帶をし候つる。うちかけは御きんせ  
いにて候つる。むかし犬追物にも。ゑほしを  
もたせ候て見物申候つる事に候。

一太刀打刀作りやう。金作ハ御きんせいにて。  
金作と云ハ。おりかね。くしかた。つかうち  
なとも。金にてこしらへたるを。金作と申候

なり。うちさめのしつけの事ハ。中々もと房小者以下もちいたる事なり。

一公方様御こし物。金の所をうるしにて。ひやくたんのやうにぬられ候。惣別金のやき付にて御座候。御さけを。紅と茶一寸またらきも參候へ共。さのミは見及申候ハす候。普廣院殿富士御覽にさゝせられ候御こしものハ宗近にてハ小刀同作。さやハ具と金石たゝみ品のやうにて候つる獅子作りにて。おりかね。くしかた。つかゝしら。ふち。めぬき。かうかい。こしり以下に獅子五十疋すハリ申候。金にて候つる。

一公方様御打刀ハ。さや帛入申候。かなくやき付。めぬき桐。卷糸茶こん。又ハあさきにて御入候つる。同御劔もさやふくろ入申候。寸ふくろと云候歟。柄琴の糸。ぬりかなく。帶とりあしあいかんさう。惣ハ淺黄の布。い

くふりも此分に候。御ひらさやと申候ハ。御しやうそくの時もたせられ候。是ハ金作にて結構なる御劔に候。公家たちもひらさやをハ。分限なと結構に御こしらへ候。

一公方は御はしり衆など金作りの太刀取可然候。覆輪なども黄なるいかゝのよし。金仙寺被申候し。

一わたくしさまのうち刀をハ。ふんるいなとにけつこうに拵可申なり。

一烏帽子上下の時。つか巻たる刀ハさし候ましく候。

一我刀を人々見候ハんと候ハ。小刀をぬきておき可出候。又主人貴人へハ其まゝまいらすへし。

一曲水酒宴の事。人數ハ不定。流遠き十間ハかりも可在之歟。河端に丸居候て。詩歌被詠之。先題を取候て。則河上より盃を流され

候。其間に詠歌を詠置を取上候て。短冊に調候て罷退。一人ツ、次第に此分なり。悉如此候て。又河端より少別の所に。座敷を構候て披講候て酒宴有之。管絃も有之事。尙以盃をハ盆にすへて。酒を入れてなかれ候。河上酒を入所をハ。木ふかくみえぬやうに被拵候なり。

一扇は甘本を一包と云なり。但十本とも。細川殿より公方様へ年頭に進上と十本なり。

一鶯。貴人へ御めにかけて候事。籠桶のさまの方を御前へむけて。左の手にてふたをあけ。籠桶の上にあをのけておくへし。さて籠おひを取へし。こさしハ板めにたすへし。奏者に渡候時。取出みせ候て。丸輪の方をさまの方へなして。籠桶に入て緒をゆひて可渡なり。一造り花の事。梅。かいたう。白桃。からも。仙翁花。すいせん。花しやくやく。せき竹。き

きやう。姫ゆり。菊等なり。公方より禁裏へ御進上の草花。定て一枝花瓶に入參候。

一人に名乗の字を出事ハ。上の字貴人のならハ。下を一字出へく候。上の字別儀なくハ。二字書て出へし。人数によりて上下の字をつくなり。但下の字を出候事ハ。下手人の儀候なり。

一火うち袋ハ。四十以後よりさけられ候。それもはれの時ハ可有斟酌。

一禮儀の事。しきたい三度までハ無子細。それ過てハ還而狼籍なり。

一若人ハ弓。鞠。歌道。兵法。包丁。又當世はやり候つゝみ。大こ。笛。尺八。音曲等の事稽古候て可然候。うたひハ文字のあつかひ。口の内の口傳肝要なり。覺へ候四座ともに。謠ハ觀世又三郎せうせいと云なり。又太夫三郎ゆうけん。其兄に四郎八郎。此四五人無比類お



もしろく候し事に沙汰候し。そのほか色わ  
日吉源四郎虎菊などゝて。古き猿樂のめい  
人候し。田樂にハ榮阿。聲にて音曲も能よし  
申候つる。尺八にハ文阿字阿などゝて無類  
よし申候つる。又若人ハ酒宴に一さし舞候  
も。其興有し。しろうとにハ一色の匠作。又  
ハ秋庭など座敷舞興あると候し。又犬笠懸  
の事ハ。たれも存知有へき儀候。人によりて  
稽古ハいかゝのよしに候。馬ハたれくも  
稽古有度事候。馬達者なるまで人によるへ  
く候。又手習第一と候。手もわろく餘に人文  
盲なるハ。せうしに候。學問肝要候。又立ふ  
るまひのふつゝかならぬやうに心かけ給ふ  
へし。兵法なと心にかけるへく候。萬無油  
斷てよく候。又連歌うとく候ハ口惜候。碁將  
碁以下も一向しり候ハぬと興なく候。双六  
ハ知候ハてもくるしからず。諸事ははしく

候ハぬやうに。何事も仕たれる、然ハ形義  
本にて候。

一あしなな禮有まし。

一よめ入に。さる毛馬。さる皮うつほ。海なし  
の鞍不可用。

一妻むかへの事。色々申候へ共。先初日より二  
日まで男女共に白色を着せられ候。三日め  
に色なをし候。當時女房方より男のかたへ  
引出物有之儀候。

一元服の引出物の事。本式ハ弓。征矢。鎧。馬。  
太刀の事中に不及。矢に切付の羽をハ不用  
候。いづれも祝言の時。聲のひゝきの惡敷ハ  
斟酌候。わたましの時ハ。赤色ハ不用候。火  
性の馬もまいらせす候。

一から笠の事。公方様の御日笠ハ。御小者にさ  
ゝせられ候。雨笠は随分の衆ならてハさゝ  
せられす候。私のかさハ中間小者ニさゝせ



候。又傘の骨を赤うるし。帯にハ墨をさし候事。人の内衆たる者ハ不可用之候。小者中間の事は無是非候。是もしきしやうの時ハかゝるへく候。其時ハ墨笠ハさすましく候。

一傘袋のこしらへやうの事。ふくろの長ハ笠によるへし。上ぬいのこす分一尺二寸。しやうそくかわの長さ同前。かわのさきをけんさきに切へし。ぬいのこしたる所に付へし。布ハ三の又ハ二の半にもすへし。少さき細かるへし。しやうそくの事。黒皮上五めん下に成へし。竹をわりて穴をあけ候て。皮へとすへし。しやうふかわ本にて候。もししやふ皮なけれハ。黒皮にてもすへし。是畧儀なり。

一傘袋口傳有之。(圖在下)

一公方様御こしの時。御劔御輿に入候なり。走衆六人左右毎度鬨取なり。左の角さき賞褹

なり。中くほにて候。



しやうふ皮五めん  
三野也

折かへして一尺袋のやうに布二ツをぬふへし

しやうそく皮は  
あまりたる布の  
上に付へし

しやうふ皮にてぬふへし  
この一のはかまのすその  
とくぬふへし

又御旅の時は。路次名所をも御尋候間。不斷參つけたる人。左右に可參候。御手水なとも參らせ候。角きハは佐々木名字の衆子細候て參られ候。角さきハ赤松名字の衆。又ハ伊勢名字參勤候。第一つのにハ。第二つのさきまでハ中たるへく候。

一雨ふり御時。御こしにゆたんかけられ候事ハ見及不申候。但一段風雨の時ハ。かけられ候由候。其時御供衆も笠を御さし候なり。

一 大方にてわうはんの時。殿上人一人御參候

ハ。御前の御宮仕へ三獻めの御盃は。其日申沙汰御頂戴候。又此時の御酌とられやう。その御供衆覺悟ありかたき由。常々金仙寺佗言候し。又御主殿をハ御所さふらいと御承仕としつらい調申候。又碗飯の時。御たゝみの敷やうの口傳。人もなく候間絶候はん由を。御所侍の直見と申。古き者申候し。

一 輿よせの妻戸の上重ね下重ねの事。武家にハ御こしのよる左を上と候。御成の時。御劔のやく御妻戸左に祇候なり。又私にてハ御こしそい。兩人の時歟。妻戸の上木うちたる方賞飭の事なり。是左也。右ハ下手なり。女房衆ハこしにめしてかいしやくの衆。こしを。そと御たゝき候。其時。御ゑんより兩人かき下し。こしかきにうけとらせ候なり。但公方のハ。御こしかきハ。かりあつかひ申候

なり。

一 車にめす時。車屏風とて。くるまの内にたち候。女房衆の時如此歟。

一 御幣參する事。神前にて神主の手より立なから請取。左の方をあけて。右をさけて持。御前にて畏。御へいを取なをし。我右を高く持。上の方をとらせ中へし。御座のかたへかみのなひくやうにいたゝかせ。請とらせ中へきなり。また給候時ハ。ちうにてまた取なをして。もとのことくに左をあけて持へきなり。

一 太刀折紙にて禮者の事。うけとりて對面候へハ。太刀折紙も。人の左の前に置て。禮者に申さきへ立て行。ゑんに畏て見參させ申候。貴人なれハ太刀折紙請取申候て出向取中。座敷へしやうし入被申候時。太刀折紙かくと申を。御仁躰によりうけとりいたゝき

被巾を。取て入候事も候。次第仁により申へく候。また人にわたし申とき、先意趣を申候て。其後、祝義ばかりにて、太刀折紙をわたす折紙左。太刀右なりたるかたを、人のかたへなし。しる紙を置て。其上に太刀を置、古實多之、貴人へつかハすも、左の手をそへ候なり。また折紙をそとひろけてみせ申事古實なり。主人へ披露も其分なり。

一歳暮に公方へ諸家より進上の魚物ハ。もくろく一度に。十二月晦日に披露候。めい／＼にひろけて御目にかけられ候事。古實にて候。

一式三獻三のさかつきの時ハ。片口の銚子本にて候。公方には節朔にもかた口にて候。白めつきなり。御祝にハ白酒にて候。私にもかた口の事無子細。口つゝむ事ハ。かた口なき時の事なり。三々九度の心にて入へきなり。

此時。提ハ出候へとも。くわへ候事無之。但家によりて候てかハり候か。

一てうしわたし候事。貴人へハ銚子をとりなをし。長柄のかたをさし出申時。てうしのかしらを持なり。わか身をしつめわたし申候。てうしの頭を右に取。なかへを左の手の小らにすへて參候。また兩の手にてかゝへてさし出申事も候。又等輩へハ銚子のかしらをとり。かた手にては長糸のつまのくしの下もちて可渡之。また女房衆には。兩の手にて。てうしのかしらをかゝへて可渡由。貴殿被仰候。色々口傳任事なり。

一めし出にハ。扇をぬきて置。あゆみやう少しさしうつむきて。さかつきを上引なとすハからす。したをすつへからす。いたゝきておかす。そのまゝ置て可立なり。貴人の方を一目より外ハ見へからす候。もし貴人ものを

被仰候ハ、盃を下置て承へく候。

一主人貴人の前にてハ。親兄弟の盃にてもいたくへからす。

一貴人に折かへらけのもの。肴をとりて参事。

たとひわか盃を御まいり候とも。若輩の衆ハ貴人へ肴とりて参事。斟酌あるへし。惣別肴ハさし候人次第にとりてまいり候なり。めし出なとのときに。さかなつかハされ候人ハ。こしつかましき宿老。またハさもとある仁たるへし。肴ハはさみよく。またハくひよきやうなるをはさみ可被遣之候。又右の手に左の手をそへて被遣候。また左をハたミに付て。右にてまいらせ候事も。大畧は同前たるへし。かた手を付事と。かたてをそゆるものとなり。

一殿中にて攝家門跡大臣家ハ四方なり。公卿ハ三方なり。武士の衆ハ三方申に不及。もと

ハ公方にて家門跡渡御の時、武家の衆ハ御相伴に参勤無之候へし。武家は足付可申候。

一近衛殿。一條殿。徳大寺殿。花山院殿。轉法輪殿など、和歌または。鞠の御會に、武家衆各まいり候時。攝家門跡ハ四方にてまいり候。大中納言ハ三方にて候。武家の衆ハ足付にて候。攝家門跡の御前ハ。殿上人御はいせんにて候つる。又大中納言以下ハ。諸大夫またハさふらいもせられ候。武家衆へハ御さふらひはかりはいせんニ而候。官務なども参られ候。又清花の御前をハ。殿上人諸大夫にて候。又日野殿。三條殿。内大臣に御成候へハ。殿上人御はいせん。冷泉院殿。甘露寺殿。飛鳥井殿。高倉殿。宰相事なり。御會にハ大臣家御出候へハ。前のことくなり。又八幡善法寺被出候時。三方にて候つる。めしもかハらけにて候つるなり。

右一冊者。伊勢守貞孝之家臣河村權之助  
正秀人道誓眞之所記也。誓眞者天文永祿  
年中之人也。

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

## 河村誓眞雜々記

### 祝言の事。

いづれも本式之儀ニハ。先式三こんまい  
へし。其後。一こんに成候て。さらにまい  
候て三獻過。ゆつけまいり候。献々にはゆ  
つけハ。献のほかにて候。御ゆつけ過。中酒も  
不參候て。あかりくわし出候て。其後。御さ  
かつき出候て。こん／＼まいり候なり。

一常の祝言にハ。初番に三のさかつき。これハ  
引わたしと云なり。其後さらに三こん過候  
て。めしにてもゆつけにても參へし。よめむ  
かへなとにハ。湯つけハ出ましく候。めした  
るへし。惣してハ此時も本式ハ。式三獻たる  
へし。手かけ又きやうしるかけと申て。餐ハ  
五ほんたて。三本たてまいり候て。くこまい  
り候なり。

一をくりむかひのよめ取にハ。色々いむ事あり。先かへしも、たちとらす。すそをひきいたし。はかまハかりをひにてとるへし。さるけの馬にのらす。うみなしのくらにのらす候なり。

一きやく人しやうし可被申時。長老西堂ハゑんへも。又ハ家のかまへによりて。庭へもおりてしやうし入申へし。又武家も貴人にをき申てハ申に及す。庭上又ハ門外へ出ても。謹て請し可被申なり。

一送り可被申事。一段之貴人にて御入候ハ。たゞ御跡に付て出申。門外までも送り可被申。其外ハ座敷にて一度。ゑんまで一度。又其末へ三度をくり可被申。又座しきにて一度の座も可在之。又貴人へは兩の手をつき申候て。ゆひをかゝめ。たゞミに付。いたにても庭上にても如此。其ほかハかた手をつ

き。かた手をつき。かしこまり禮儀有へし。左右の事ハ。其むきによるへき也。

一いつれもかよふの時。つめひらきかん用なり。左右へハその座しきむきによるへき手をつき。ひらき申時。少しにしり候てひらき。さてかた手をつき。かた手をつきてひらき申へき也。

一對面の時。かほもちハ凡一間ハかりさきを見るやうに。あふのきもうつむきも候て向申へし。又立ての時ハ。二間々半ハかりさきを見るやうに。かほもちあるへしと也。惣別かほもちかくもつ事。見くるしきことなり。又貴人へまかり出。御禮等の時ハ。さしうつむきて參。御禮可申なり。

一他家衆へ禮儀之事。たけよりの使者へは。其人たいによるへし。常式にハ。かた手をつ



き。其趣を申わたさるへし。

一 攝家清花の御つかひは。一段しやうくわん勿論なり。門跡等の事。同前たるへし。攝家の御書を。いたゝき拜見有へきなり。

一 さかつきの禮儀ハ。先三度有へきなり。但平人へハ一度。又ハゑしやくまでも可有之歟。時宜によるへし。

一 貴人の御さかつきいたゝき。口をそゆる事ハ。一段之貴人の御さかつきたるへし。兒わか衆のハ別儀なり。但人により。ちこ若衆之盃をも。いたゝき口を御そへ候事ハ有ましく候歟。

一 女中衆之さかつきをいたゝき口をそゆる事。貴人のにても有ましきなり。

一 他家の使者に太刀を被遣候事。大名等の御つかひならハ。自身太刀をとりて可被遣候。常式之人躰へハ。内之者もちて出候て。禮儀

可在之なり。

一 一段の貴人より御使にて。御太刀等被進候ハ。御つかいに候へ。參候て其太刀をとりて。御いたゝきあるへく候也。其時。先そうしやにわたされ。對面之時そうしや持て出如此と申時とりて。そといたゝき。又別人其太刀をとりたるかよく候なり。

一 貴人御つかひへさかつき出候時。禮儀はて候ハすハ。かならずしやく候て可在之。其時御ひさけハ。家老の衆又ハ同名衆たるへし。又さかないたされ候ハ。てうしを下にをき。亭主取て被進候事。無子細事なり。又さかなとたれにも被申候事も可在之。其時。内衆うちまかせてさかないたし候事も。不可在之候也。

一 さかなハさかつき御さし次第に被出候事可然候。但下はいより進し候事。しんしやく有

へきなり。

一少路を馬にのせられハ。主人もつくはひ候て可被御覽。但時宜によるヘシ。

一人前にてめしをくう事。きとしたる所にてハ。さはとる事有へからず。是ハわたくしの事なり。もし寺にてハ。さはをとり。又せんへわけぬ。といふ事あり。これも時宜によるヘシ。さ候てもくるしからぬ事なり。

一同めしの汁すう事も。二口三口過ての事なり。

一同はしに飯の付たるを。はしをよこにしてくう事。見くるしきなり。

一あつきものを。口の内にてくひかね候やうにくひ候事。見くるしきなり。

一物をくひなから物をいふ事。見くるしきなり。

一同ものをくひてのみ入候ハぬ間に。酒をの

ミ候事。見くるしく候なり。

一同一番にやき物なとくう事。如何候なり。

一かまほこハ。本に手もとなどにて候ハ。右へきそく有へき間。はしもちたる方にて取あけくうヘシ。又二に左へきそくむきてすへ候ハ。左の手にてとり上くうへきなり。一同このわた桶ハ。左にてとりて。はしにてくうヘシ。おけなからすう事有へからず。一段の年老なとすう事あるか。似する事有ましきなり。

一同手とをき物くうましきなり。

一同はさみにくき物。しんしやく有へきなり。

一のうのしはいにて。少たかくさうたん有ましきなり。

一酒をも。のうのしはゐにてハ。いかにもよ所へ見へぬやうにとのむヘシ。見へてもくるしからねとも。うちまかせて酒などのむ事。

しはいにてハ不可有之事なり

一同時口わるなどの事ハ。ゆめく有ましき儀なり。

一同時きやうけんなどわらふ事も。いかにもしのひてわらふへし。殊座しきなとにても。うちまかせわらふましきなり。惣別雜談等も此心へなり。一段くすみたる。さやうの時あしかるへし。たゝ心をゆるすと見ゆる事。ふきよふの至なり。

一又はらのたつ事を。色に見せぬもふかきにて。一段と見ゆるなるへし。

一恭しやうきの勝負。手を見さしど。一段とからかひ。見くるしきなり。

一同少もすたう事有へからず。石をよせ馬のすちをちかへ候事。見くるしき人の心得候なり。

一第一人ハ。自筆の狀を他所へつかはし候事。

一大事と心へらるへし。もしおちと候へハ口おしき事なり。人ハ曲事出来ある物なり。一書狀に人にしたゝめさせ候を。よく可見事なり。よみ候はん判形書候事有へからず。判形ふたくと有へき事不可然。判形たしなまるへきなり。

一人に字をつかハす時ハ。引合我字を二字書て出へし。中ほとに可書。もしすい分の人ならは。中ほとより字をさけて可書なり。

一攝家門跡等へ不慮に路次にて參あひ候時ハ。かうへを地につけ御禮儀候事は。人によるへし。奉公之あとの仁躰ハかしこまり。ひさに手をおきて。いさゝかかうへをさけ。御禮可申なり。

一長老など座しきにてハ。一段うやまひ被中とも。路次にてつくはい申候程にハ。有ましきなり。其時ハ一段とこしをかゝめてうや

まい可被申なり。いづれも座敷にての事か  
ゐるべきなり。

一めしつかひ候さふらいに。足なとあらはす  
る事。もし自然いそく時なご可有之事。たし  
なみなき儀なり。分別たるへし。

一一段之貴人。御こし物を見せられしをぬき  
候て見中候へと候はん時は。左にてつかを  
もち。ぬき見申へきなり。平人のハ右にてぬ  
くへきなり。主人のハ左にてぬくへし。かけ  
の事ハくるしからず。御前にての事なり。

一馬上にてこしに行あひ候ハ、馬をふかふ  
かとのりのくへきなり。

一同なにてても。のり物ハ馬と馬之事ハ。高下  
により其あつかひ有へし。こしハ下輩のに  
てものちのくへし。不然ハ下馬すへきなり。  
一せむる馬にハ。禮義無之せめ申候ともいふ  
へきなり。其時。あしたはき候ハ、ぬくへき

なり。

一あしなかにハ禮義なし。人のしきかわに座  
して候共。とをる時。あしなかハぬくましき  
なり。

一馬上にて笠さす事。左にてさすへし。目とを  
りにゑをもつへし。わすれて右にてさすま  
しきなり。日かさも同前たるへし。

一笛ハかしらより出へし。尺八ハあとより出  
なり。

一太こハひらに可出候。つゝミハ人のうつこ  
どくに可出なり。

一花を人に進し候ハ、其まゝ本草をすかし  
候ハて可出候。草花も古柴を取候へは。ふる  
花に成候ゆへなり。

五十ヶ條有之。

右御聞之内。又者今川了俊之大草紙等各五  
十ヶ條寫進上之候。聊急申事在之。殊夜中書

寫仕候間。不可有其實。可被停他見者也。

天正五年十二月八日

河村入道花押

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

續群書類從卷第六百九十二

武家部冊八

澤異阿彌覺書

伊勢守殿御系圖

桓武天皇

五十代。  
號柏原帝。

葛原親王

文部卿。

高望王

上野介。  
始賜平姓。

國香

常陸大掾  
平將軍 始良望王。

貞盛

陸奥守。  
鎮守府將軍。

維衡

從四位上。

正度

平將軍。

季衡

正五位上 下總守。

盛光

右京少進。

盛行

兵衛尉。

賴宗

伊勢守。

賴俊

兵庫頭。

俊經

肥前守  
義兼御代ヨリ。

俊繼

伊勢守。  
自是名字異伊勢。



盛繼 左衛門尉。  
法名禪勝。

賴繼 彈正左衛門尉。  
法名照本。

宗貞 九郎左衛門。  
賴繼弟。法名道可。

貞繼 十郎。伊勢氏。  
照禪廣禪寺殿。

鎌倉より建武元年尊氏將軍御供候て。貞繼御上洛。御父御母と成給ふ。此時御供之大名悉御供衆と號するなり。又大坪道禪と申す。鎌倉侍鞍作名仁伊勢守殿へ相傳。又公儀御法度。同鞍直弟さは伊勢守之事也。

貞冬 孫七郎。

貞信 七郎左衛門尉。  
五位。侍從。伊勢守。

法名常貞。道號松洲知光院。

貞行 十郎。伊勢守。尾張守。兵庫頭。  
法名思恩院殿。

貞經 十郎。兵庫助。伊勢守。  
吉野殿下中。

貞知 十郎。勘解由左衛門。

貞國 七郎。備中守。伊勢守。  
兄貞經養子。住心院殿。

心たに立しちかひにたかはすハ  
世のいとなみはさにもかくにも

貞親 七郎。伊勢守。兵庫助。備中守。  
梅松院殿。

貞宗 七郎。伊勢守。兵庫助。  
金仙寺殿。汲古齋。

貞陸 七郎。兵庫助。伊勢守。  
勝運院殿。

貞忠 七郎。兵庫助。備中守。伊勢守。  
寶蓮院殿。

貞孝 又三郎。兵庫助。伊勢守。  
梅竹院殿。

貞良 小法師。十郎。兵庫助。  
建孝院殿。

貞爲

虎福丸。始貞景。兵庫助。  
號空齋瑞芳院殿。

貞興

一郎殿。  
卽心院殿。

貞

貞長

七郎左衛門尉。因幡守。又加賀守。  
法名照心。因州のはしまり貞行の弟也。  
御供衆ニ被召加也。

貞清

左衛門。十郎。

貞安

與一。左衛門尉。  
上野介。

貞祐

孫九郎。

貞弘

與一。左衛門尉。

貞則

與一。左右衛門尉。  
上野介。

貞直

七郎。左衛門尉。  
加賀守。

貞勝

七郎。因幡守。  
後仲ニ改。

貞誠

左衛門尉。備中守。  
因幡守。

貞榮

因幡守。左京亮。  
後泰ニ改。

貞倍

因幡守。

貞常

傳五與十郎。  
左京亮。因幡守。貞重傳左衛門尉。

貞房

下總守。次郎左衛門尉。加賀守。  
貞長二男。貞直弟。

貞枚

次郎。左衛門尉。下總守。

貞賴

次郎。左衛門尉。  
下總守。始貞仍。

法名宗五。大双紙作者。

貞彌

又七郎。左衛門尉。  
貞長三男。

貞熙

七郎。左衛門尉。  
備後守。

貞雅

五郎。駿河守。  
貞長四男。照安。

盛經

八郎。

教經

肥前守。

經久

因幡守。  
法名心光。

盛綱

孫九郎。左衛門尉。備中守。

盛景

彌八。

盛久 太郎

盛秀 左衛門尉 遠江守 盛行平次郎 左衛門尉

盛信 平三 左衛門尉 下總守

盛長 平九郎 左衛門尉 信濃守

・貞藤 新九郎 又貞辰 貞親弟父貞國相模國ニ伊勢名字手

貞職 又七郎 兵庫頭

・貞勝 後ニ貞仲 左京亮 因幡守 父貞直 前ニ見タリ

貞誠 因幡守

貞榮 左京亮 因幡守 後泰

貞久 六郎 左衛門尉 下總守 法名道照 中次也

貞順 六郎 左衛門尉

貞種 與七郎

・貞遠 八郎 右京之進 右京亮 貞陸弟

貞助 加賀守

貞和 勘解由左衛門 七郎 左衛門 號向庵

貞俊 七郎 左衛門尉 又七

貞仍 千松丸 北小路山城守 公家ノ養子ニ成ル

薩摩國に伊勢名字長門守殿と申。

私に云。右の外伊勢名字御名乗も數多御座候得とも。ゆかりを不存候間打置也。

右之外。伊勢名字類多御座候へとも。枝流存候者皆死果。誰ニ可尋之情無御座候云々。

又云。按作法者直弟習御名字御衆被遊候證據有御杯書等。追而致進上之者也。又私ニ云。伊勢因幡守貞長様。御同名頭也。又下總

守殿後ニ入させられ。宗吾と申。大双紙之作筆集也。又六郎左衛門尉殿貞久と申。何れも御申次なり。五ヶ番之帳々被遊。此御舟人ハ萬御意者なりと云々。御わかく候間申置候。古記録も御覽ニて可被思召合候。度々亂ニ失果申。自然又ハ流布之物はゑり可申候なり。

公方様御名乗 御當家御代々。

尊氏 等持院殿様

延文三年四月廿日薨。五十四歳。

義詮 寶篋院殿様

貞治二年十二月七日薨。卅八歳。

義満 鹿苑院殿様

應永十五年五月六日薨。五十一歳。

小山殿  
稱光院之御時。

義持 勝定院殿様 同御時。

應永卅五年正月十八日薨。四十三歳。

義量 長得院殿様 御花園院御時。

應永卅二年二月廿七日薨。十九歳。

義教 普廣院殿様 御花園院御時。

嘉吉元年六月廿四日薨。四十八歳。

義勝 廖雲院殿様 後土御門院御時。

嘉吉三年七月廿一日薨。十歳。

義政 慈昭院殿様 同御時。東山殿と申。

延徳二年正月七日薨。五十六歳。

義尚 常徳院殿様 後柏原院御時。

長享三年三月廿六日薨。二十五歳。

義尹 後植。惠林院殿様 後柏原院御時。

大永三年四月九日薨。五十八歳。

シマノ御所様と申。  
私ニ云。大智院殿義  
視と申公方あり。或  
人中ハ。御家督ニハ  
御すハリなくとやり  
入申候。

義澄 法住院殿様 後奈良院御時。

永正八年八月十四日薨。卅二歳。

義晴 萬松院殿樣 後奈良院御時。

天文五年九月四日薨。四十歲

義輝 光源院殿樣 同御時。

永祿八年五月十九日薨。卅歲

義榮 正親町院御時。

永祿十一年九月薨

義昭 靈陽院殿樣 又法光院殿  
正親町院御時

慶長二年八月廿九日薨。六十一歲

細川殿御元祖

賴春

賴之 武州管領

賴元

滿元

持之

勝元

政元 七代  
人心院

高國 常桓

晴國 六郎殿  
道永

澄元

澄之

晴元

細川殿

氏綱 尹賢御子。

某六郎殿。

晴元御子

典經 細川右馬頭殿御事。

持賢 政國

政賢 某

晴賢

尹賢

藤賢七代。

一大館殿。尙氏。常興。

伊與入道殿。御供衆也。

一藤孝。一色式部少輔殿。御供衆也。

一信孝。上野民部大輔殿。御供衆也。

蜷川元祖ハ不存候。覺長申候。

親元

新左衛門尉。不白卜號。

親孝

親順

親當

智溫と申候、身はいつのけふりのたねにのころらんといふ名歌を作りし人なり。北野天神末社けふりの宮と申候。

親俊

親長

道標卜申候。

親光

一むかしの 御内書。同副狀案内付。

連々被仰出候。朝倉彈正左衛門尉事。此時馳參御方致別忠候様。早々計畧肝要候也。

應仁

九月卅日

御判

伊勢とのへ

前文欠脱歟

參 御方致忠節者。可有御褒美由被仰出候。恐々謹言。

九月卅日

伊勢守 貞親

朝倉彈正左衛門尉殿

一同 御内書之事。

越前國凶徒甲斐八郎以下沒落云々。連々



計畧合戰尤神妙。彌殘黨等可加誅伐候之也。倒置殿

八月十五日

御判

朝倉彈正左衛門尉とのへ

越前國凶徒甲斐八郎以下没落之由。併忠儀神妙候。猶以殘黨等不日可被加誅伐候。依成下御内書候也。恐々謹言。

八月廿二日

細川殿

勝元御判

朝倉彈正左衛門尉殿

一此兩條之文書者。御文章等可有御覽候。この文牒在之。細川家書札方貞親へ御談合世上之御一卷。わたくし留所持して候を。空齋様の御時かし上申候。いかにもくるきほうこのうらニ書申候。御らん有へきよし仰候間。まへの大さうしのおくに。只今のとく料紙あまり申候間。御筆にて寫候事は。御なくさみにと申上候。しかればほとんどなく御死去に

て候つるまゝ。その淵底をかみさま御存知之事候間。於妙ゆう尼まで本の事中上候。なにと哉らん。御申のまゝかみさま候て。御すきなされ候まゝうちおき申候。只今ハ書札方ハ不人事ニ候へ共。古法被望候者も候はんか。又露命不存候間。若後に御らん候はゝ。さためてうせハ申ましく候。御物のうちに御座候半まゝ。むしはらひの時。おほしめしいたし候へく候。

一不人御事ニ候へとも。ふるほうく撰申時。見當候間如此。

政所方條々引付。

文明十四  
閏七月

親元

一同前本郷與三郎申借錢之事。就五分一收納被成奉書之處。錢主寺町不能承引。お國若州。譴責々々重而可被成奉書之由。以書狀申。

親元日記大帖御座候を。古筆先年はやり申候時。きれくニ取くつし如此ニし。私

もやうく是を取申候。

一御判の物留。

御判

伊勢守貞親被管人等事。不慮罪科出來之時。雖非給思。於彼跡者所宛行貞親也。自今以後宜相計之狀如件。

康正二年十一月十五日

一貞親之一札と申へ。貞宗へ被爲參候御教訓之御法度之御一簡也。おくに御歌あり。

子を思ふ親の心のやみはれていさむる道に迷はすも哉。

是貞親様の御歌なり。

此御双紙二冊まで。空齋様に御坐候つる事。

一冊は福山に被仰付。惡筆ながら寫上申候也。是切ニ可被成御覽候御事。

一貞國御自筆の中に。水花といふ題にて。

かち人の渡るもすそや匂ふ覽櫻なかるゝ

山川の水。

惣別之櫻のにはふと云名歌證歌のあるよしを。連歌師世捨人も申せしか。古歌ハ不存候。さためて此御歌の心なるへし。御代々御歌人集歌つくはなとも入させられ候まゝ。御歌なともあそはされ可然存候。憚御免。

一空齋様より福山ニ被仰出。祖父澤巽阿に御尋之時申上之記。

于時壬子七月十五日巽阿八十四歳爲留寫置者也。古反古撰出。此空地ニ書之。

正月朔日。

一御扇御繪福祿壽桐鳳凰御進上。

一御出仕御うらうちなり。御小袖御拜領絨物也。

一御中間ゑはし上下なり。御黒太刀被持歟

一御刀者長刀不持。御雜色御弓うつほ等不著

也。此時節御小者七人有之。番智<sup>替カ</sup>ニ二人ハ被殘置。五人被召連歟。公方様御小者六人參候故なり。諸家此分也。

二日

一御出仕同前。三日如此。

一御乗馬初御手綱腹帶鞆各紫。御沓。此三色臺にすへ御進上。横河掃部助調進之。

四日

一御出仕御小素袍御小袖染色。又ハ織筋等也。

一御中間常御太刀被持事。

一御刀者長刀持之。

一雜色御弓うつほ也。

七日

一御出仕。三ヶ日のことし。

一御吉書案御調進杉原正文御用意ニて御參候。御判御申出されて。細川殿は御使として御出の時は。小すあふなり。

御内書箱。御中間年寄分ノ者持之。御馬ノ右ニ參。

一細川殿御見參候て。御太刀を被參候。

一細川殿則御禮ニ御出仕。是又御小素袍也。

私ニ云。御參候て御太刀御進上のよし承及候。又私ニ云。御判始御吉書。貞孝様御自筆御調進を見申候。御内書御料紙引合一紙ハ上卷也。上下如常たゝみ折て。上ニ長々と。



新年嘉慶雖事舊候。不可有際限候。祝義期面候。猶貞孝可申候也。

正月七日 御判

細川右京太夫とのへ

むかしハ不存見不申候。是は見申候間如此。八日

一御精進ほとき御美物御進上鷹一。鯛五。

御日録蛭川新右衛門調進。御使當番毎月何にてもあれ兩種如此。法住院殿御代ニ。八日と廿七日ニ御進上也。

十日

一御參内御供。

一御打刀少うてぬき有之。御敷皮覺悟之事。

一還御殿中にて御太刀金。御進上之事。

十三日

一御節ニ御美物兩種御進上。

十五日

一御出仕。

一二月十五日遣教經御捧物百疋御進上。ボウブツ檜葉カラバ殿へ渡申。請取狀折紙也。

一初白瓜數十折ニつみ。せんたんの葉しきかさり申候。御使當番近年は巽阿。

一同色瓜同前。日は不定。

一五月五日粽百美濃田。相河田。取合御進上。御末女白川殿へ渡申候。巽阿。

一七月十四日御燈呂御進上。粟田口へ御詔也。但代百疋。

一十五日。蓮供御折一合。五寸紙立白。カウダテ

一鯖一さし。鱒一さし。蓮の葉につゝみて臺にすゑ繪有之。松井鶴龜。

一御箸。引合ニ包て臺繪同前。

一六寸四方御折十合。紙立白紅。御美物五合と御精進五合ハ。御まな御まはりたるの間。花にてかさらす候なり。此色々信濃調進注文有之。

一柳三荷。巽阿持參。

右惠林院殿様御代。兩三ヶ年御進上也。

万松院殿様御代。始兩年參候つる。

八朔方事。

一御太刀一腰。糸。御香合一。御盆一枚。御日録御

自筆。御香合一。御盆等千疋にて仕合セ申候也。横川掃部助宗興承之調進。

一於殿中御點心料五百疋御憑かたの衆へ御振舞也。

一鮎すし數廿。熨斗鮑三百本。八朔方より信濃へ渡。

一御酒事入次第。八朔方より出。御屋形八朔奉行蜷川藏人陸忠横川掃部助。宗興。右筆横山雅樂助。陸益賄方諸下行役者。

林次郎左衛門。中村三郎左衛門尉。自阿彌。

節分方事。

一御太刀一腰。金。御馬一疋以上。御自筆也。

一式三献料 百疋 中島調進之。

一御一献料 三百疋 太田彌左衛門ニ渡之。

鴈一。鹽引一尺振。海鼠。但到來次第。蠣到來次第。太田かたへ渡之。

一御らふそく大三丁。小十丁渡之。

一御土器物と御四方信濃調進。

一柳三荷。

一御船事。上意大引合。其外小引御下迄ハ引合。御未女ジヨ杉原也。

一御すへりの供御々膳御拜領也。

一歳暮御美物七種。永正比木村奉行時。

蜷川新右衛門へ納申。其後五種巽阿。近年者三種宛。御日録御自筆。

丑未御徳日御進物事。

一丑の日ハ。餅大折一合。大豆粉を引合に包。わきに置なり。信濃調進百疋。未の日ニハ。

御太刀一腰。金。杉原十帖御日録無之。

一御所々々南御所御案文御進上。

諸大名御供衆御進上之義也。兩年つゝき申者也。毎月五ヶ日在之。兼而御人數を書立られ。番を定られ御案内有之。御同名六郎左衛門尉殿貞久御馳走候歟。

右雖御所役多。巽阿拙者執沙汰申分。思出次第記之。又御服方年中御進上分。別紙調置者也。

永祿六年四月五日

澤巽阿判

福山新五郎殿

此正文。祖父巽阿自筆。空齋様之御時上申き。是また只今留を寫候て進上申候。自然ニ御覽候へく候。

一御ふた所さま御なのり。蜷川道標の付中され候。たうへうへも。御ふみ御さかなつかはされ候事候。私ニも御ふみくたされ候事候き。又しきてうのへうしおほせ付られ候時。御書之上つゝみに。

またたうへう御はて候よし。かすゝいもしニ思ひまゐらせ候。これにつきても。こたちのなのりの事も。そもしの御きもいりて。きとくなる事とかんし入申候。か

しく。

うは

ふく山殿参る

定徳政之事。

一けんふのるい。ゑさんの物。しよしやく。かつきのくそく。かく。さうく等をき月の外十二か月たるへき事。

一かうせんたりといふども。利平くハへゆくへし。但伊勢講はゆくへからさる事。

一ほん。かうはこ。茶わん。花ひん。かうろ。かな物以下廿か月たるへき事。付ふくのたくひ廿四月ノ事

一米こくならひにさこく等。七ヶ月たるへき事。

一あつかり状たりといふども。文言のさたりひやうのうけ取等によりてゆくへき事。

右條々ため置るゝ所也。所詮十分一をさたし。はく中におんひんにとるへし。か



うゝの儀に及は。をきてといひ。とり  
てといひ可被處嚴科者也。依如件。

永祿五年三月十八日 左衛門尉在判

沙彌定秀在判

貞宗様御書に。

夏菊贈給候。驚日候。賞翫無比類候。猶以  
御芳信爲悦不少候。恐々敬白。

六月十一日

貞宗御在判

河原院御報

此正文。空齋様に進上申候。定可有御座候。

一又節分方之事 一通。

節分方御一献之事。

一御太刀一腰金。代二百疋。

私ニ云。金さハ金ふくり  
んの事。そさうなる御太  
刀にて候。又糸さは。い  
と卷之事。

一御馬一疋

御目錄御自筆。

一式三献料百疋

中島渡之。

一撰御料三百疋

太田方へ渡之。

一鴈一

一鹽引一尺

一蛤 一桶

一振海鼠一桶

何も到來次第

一土器物 五色 但臺二 信濃調進八百文。

一柳三荷 代九百文 中奥かたへ下行。

一らうそく 大三丁 小十丁

一舟之事。但大引二小引其外御繪繪蜷川新右衛

門方。

一殿中御うちまめ 代二百文 但下笠渡之。

御要脚方合六貫百五十文

大永五年十二月日

一德政高札一通。右ニあり。惣別政所方之御法

度之條數大事物一篇有之。追而撰出。一二年

も存生仕候者進上可申候歟。但今晚も不存

候。か様に申出候と可被思召出候。

一吳々御物ニ何申殘申候を不存候間。心ハ殘

申候。しかれとも右大双紙は。天下ニかくれ御座なく候間。御秘藏可被成候。おもひのこし候事無御坐候。切ニ御覽めてたかるへし。  
一御料所攝津國富田庄御公用事。近年有名無實云々。太不可然。所詮田畠公貢員數并諸人組等之儀。忝掠庄内輩有之者。速加成敗。如先規於公物者。嚴密可沙汰渡伊勢守貞孝代旨。對木津芥川被成奉書歟。被存知之可被加下知由被仰出候也。仍執達如件。

五月廿七日

盛秀 在判  
貞廣 在判

右京兆代

一正月の御ふく。十二月晦日ニまいる。目錄かなにあそはし候也。

御ふくのもくろく

一御かう

一御おり物

一 三

一御をりすち 七

一御そめ小袖 三

一御はた 三

一御こをんそ 一

一御かたきぬ御はかま 二く

一御ゆかた 一

一御おひ 二すち

一御あかふくろ

一御はたのおひ

以上

女中衆へまいらされ候也。近年ハとう

なう衆ニもたせられ候て參候也

御もくろくは御自筆なり。近年ハ大略右筆正秀調進。引合一枚ニたてに書て。上を杉原一枚にて横に卷中候也。

御方御所さま くはうけん院殿様御事

御ふくのもくろく

一 御切り物

三

一 御ぬひ物

二

一 御はく

二

一 御そめ小袖

三

一 御はた

二

一 御ちやうけん

一

一 御ゆかた

一

一 御あかふくろ

一

以上

いづれも御女中衆へわたし申され候。まへへ横川掃部助もたせ候て御局まで参る。すみかはことて。竹にてあしるくみたる物に入也。二おりに入候也。

一天文九 十二 卅

御ふくのもくろく

一 御かう

一

一 御おり物

一

一 御おりすち

七

一 御そめ小袖

一

一 御はた

三

一 御こほんそ

一

一 御ゆかた

一

一 御かたきぬ御はかま

一

一 御をひ

二すち

一 御はたのおひ

一 御あかふくろ

以上

私ニ云。御あかふくろと申は。きぬのはの廣きを。四かくに四はうニ一重にて御坐候つる。おもしろくねりくりにて打たる物にて候。口にぬひくみ候。ひきしめかやうなる物に候。今は寸法知たる見たる物もまれニ候か。

一 武具を着する次第の事。

一番 なしうちゑほし

二番 鎧ひたゝれ

三番 御はゝき

四番 御はら巻御はらまき取て進まで也。主人のする事也。依子細有なり。

五番 御すゐあて

六番 御籠手

七番 御脇立

八番 御鎧

九番 御つらぬき

十番 御刀

十一番 御劔

十二番 御帶也

一御旗指の事 他家には。多分中間雜色等さ

ゝせ候哉。御當家にハ可替候。

一御供衆御觸折紙

次第不同

細川右馬頭殿

畠山次郎殿

大館兵庫頭殿

細川九郎殿

一色下總守殿

細川駿河守殿

伊勢備中守殿

伊勢左京亮殿

來五日晝時分

私宅に御成御座候

可有御參勤之由

被仰出候

七月廿九日

伊勢守

一御元服以下條々攝津殿さ中ハ。御元服の御役御家也。

一御前御倍膳理髮打亂酒杯。等役人被勤。各白直垂。

一御手長井管領御倍膳。先度注巾分各裏打。

一御判始御硯役人。直垂。大帷。

一就御元服。伊勢守殿御取役無之候。但猶可被相守候。

一評定始御沙汰始并御判始當日可被行候。

一將軍宣下廿四日廿五日廿八日未定。大畧可爲廿五日候

歟。追而可申候。

攝津殿より注來。大永元十二三。

此正文正筆。于時天正十三年三月十八日兵庫頭樣空齋樣御

事也進上申候也。定而可有御座候。但失申

候歟。重而留如此。

一節分方之事

節分御一献方之事

一御太刀 一腰。金。代二十疋申付之。

一御馬 一疋。但近年ハ代三百疋也。在富方ヘ渡遣之。

以上

御目錄之次第如此。但御自筆。

一御式三献料之事百疋。近年は中嶋に申付也。

一供御料事 三百疋。太田孫右衛門尉方へ下

行也。

一鴈 一同太田かたへ遣之。

一鹽引 一尺。同太田かたへ遣之。

一蠣 一桶少。同太田かたへ遣之。但到來次第也。

一ふりこ 一桶。同太田かたへ遣之。

一御かはらけの物數五。但臺二也。信濃へ申付

之。

一御樽 三荷定。但御用次第申付之。中奥かたへ下行也。

一御らうそくの事 但三丁 小十丁

一御舟の事。但大引二小引其外杉原數ハ不定。

御料紙。蜷和州へ遣之。説調進例年如此。

一殿中御打大豆事。於供御所調進。御下行代二

十疋にて。下笠次郎左衛門尉ニ下行之注文

等在之。供御之御すへり御拜領也。

大永元年十二月十三日 巽阿判有之。

右正文。兵庫樣御進上之定可有御坐候。うせ

申候歟。小記留共略之。

一貞孝之御調進節分御舟繪所ハ。一兩年上京小川扇屋にて被書之説。又其後狩野法眼弟子ニ峠右近已下仁御被管人御扶持人候。其峠にかゝせられ候。又そのうち。公方様光源院殿。御代に。某福山新五郎時御舟の繪の事。公方様朽木より御上洛。二條妙覺寺ニ被成御坐候。其時貞孝様ハ御宿妙蓮寺と申所に御坐候。公方様と御臺様ハ大引合御舟二ツ。又御造子御所々々様へ小引。上臈中臈御末女までハ。杉原ニ入。次第およそ調進。或時節分御伺公候て。御入候へは御所々々様の御舟不足にて。俄に福山繪筆持て參れとの御使被下。二條春日局さま御ゑんにて。不足の御舟を書申候。彼節分御舟圖。相阿むかしゑつ有。それにて調申候事も候し。一節分方御一献も。伊勢守殿御役にて候。豆御うち候事御座間計。殘る所ハ御同朋衆の御

役にて候よし承及候事。

一白紙少餘空地候間。ふるき反古之留書若落字候半歟。

此御法度。むそう國師より尊氏將軍様に。

武士人倫可覺悟事。

慈悲 正直 堪 思案 等

和合爲城 油斷爲敵

一不漏貴賤。可愛人間事。

一學問書筆嗜兩道可知金言事。

一專合戰軍配可嗜弓馬事。

一不亂主君父母禮儀可存忠孝事。

一哀愍百姓可致憲法沙汰事。

一詩歌管絃蹴鞠亂舞大概可存事。

一辨生死無常因果可念後生菩提事。

一尊崇佛神修造堂塔可願家運事。

尊氏守此義治天下。近年大内政和守之治

國畢。



一反古之留ニあり。不入事に候へとも。文牒御

聞なされ。

就都鄙借錢。近日洛中洛外猥之由言語道斷候。所詮向後非分儀申懸族有之者。支置可令注進候。以其上堅可申付之候。恐々謹言。

十一月廿七日

三好下野入道宗渭

石成主税助友道

三好山城守康長

上京地中

今度退散諸候之衆被管人并伊勢守牢人。京都徘徊之由。有其間問。隨見合可被加成敗之上者。足弱等拘置。<sup>拘歟</sup>預物以下渡遣輩在之者。爲町衆相支可注進。若於令用捨者。可被行其罪之由候也。仍狀如件。

永祿八

八月廿日

元治

上京中

長清

一ふるき抄物もちたる人候間。何にても見當候ハ、重而書寫進上可申覺悟候事。一惡筆付憚共可被成御免候。進上申度ニより。慮外又人のあさけりもいかゝと存候へとも。如此ニ候。仍如件。

辰

月日

書寫之上

此一冊者。京都將軍之同朋衆澤巽阿彌之覺書也。慶長年中迄存命ニ而有りし老人也。伊勢兵庫貞衡若年之時。京都將軍之故事共尋問ニ付而。此一冊書記贈之者也。

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

## 懷妊着帶之事

一月水止り。五ヶ月日に。吉日を撰ひ着帶すへし。其前に局かたより。里へいひ遣し用意さするなり。是垂乳母の方より遣す法なりといへとも。時宜によりて。子孫繁昌の老女をたのみ。調用る事もあり。

一帯仕立様の事。生緋八尺につき五にたゝみ。七五三又ハ三針刺にして。糸の端をとめす。尊者を添遣也。秘密の傳に。米八十八粒。され石五ツ。大豆一粒を二ツに割。内の左右に文字を書。口傳。糊にて合。三色を紙に包其上に。

摩迦盤若孕女の子を産而

多經卷第産の紐解。

如此書付。帶の内へ人事秘事也。扱祈念所へ遣之。吉祥如意の法を修し入なり。極秘の法

也。條々口傳あり。

一帯する方角之事。女は玉女へむかひ。男は聞神へ向ひ。男帶を取結品をして。左の袖より女房の右袖へ渡す時。三度唱る祝歌有。女房うけ取結。祝儀あるへし。



一祝終て。此時より慕目の役。簞の役人。乳母なども定置もの也。

一着帶の後。參宮せぬものなり。

一誕生の後。右の帶を練形にかにとり小紋を付。紋に鶴龜松竹を付。裏にも右のきぬをつけ着する也。是は産着にはあらず。かにとり小袖と號して。態と着初さする也。世にかごりきぬ共いふ。染たる紺屋等へも。引出物有へし。

初産着仕建之次第。

一初産着の事。地は白綾練。紋所ハ鶴龜松竹。家の紋を。銀薄にて五所紋にすへし。

一長二尺七寸。身は一幅。襟は袖より取へし。袖の長ハ身半分。紐ハ身のたけ。幅は二寸より三寸の間。何もくけ紐。友裏三疊。三所閉るなり。

背中の三の推の通に。



如此二寸五分四

方

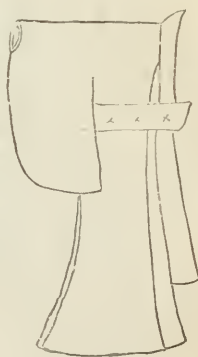


かくのことくにも。友地を作り。

内に五佛の御名と。五穀の糊にて。貴僧に書しむへし。針目の數十三。閏月有年にハ十二男針。女針。男女に隨て用へし。

端は縫放し。間五分宛五寸程縫へし。右何も綿入なり。三重もあらは。厚板一重も可然な

り。



一同疊やう。背通を常のことく豎に折。左右の紐を一ツに合。右へ廻し。袖の間より左の襟まで。圖のことく廻し。又跡へ袖のきわまで



戻し。襟の方にて納。三所閉へし。閉やう口傳。

一初産着包白綾生絹五幅五尺。或ハ三幅三尺。表に鶴龜松竹。銀薄にて大形に書也。

一同包やう。角とくを取。左右にひたを六ッ宛どり。女結にして又角とくを取。男結ひにして。上に紅粉を付へし。左右のひた十二なり。

### 胞衣納之事。

凡簞の役人は。母方の者勤來るといへとも。近代に至てハ。其家の舊人果報伊美敷人を。用事を。故實となせり。是又時の宜に隨ふは。いにしへの教なれば。をのつから禮にも叶ひ侍る歟。餘も可准之也。

一公卿に散米山椒をませ敷て。中に五斗入の土器を一重にして。其内へ青のうふ石一ッ入。前にハ陰陽の簞先に。熨斗。昆布。麻苧へ

むすひ紙に包。右に搗栗。左にハ男女の蝶を。畫し紙一重。かくのこことく調置。臨産之節。後見の女中へ渡すへし。

一子出胎の時ハ。此文を唱。又産所にも書押へし。中央利益堅牢地神許出胎哲女子の時ハ。被子一決好父愛敬如此唱へし。又衆人愛敬不背我育と。此八字。盃に書て洗飯すへし。又誕生の時。口の内を綿にて能拭ひ。黃連甘草等分にして。絹に包含すへし。

一取あけの老女。其日の玉女の方へ向て。臍の緒をつくへし。男子ハ左の足。女子ハ右の足懸敷に膝へ麻を以て二所ゆひ。陰陽の簞をあて。結ひし間をつくなり。玉の緒より出る血を指に付。子の唇にぬり。その綿にてぬくひ取へし。其時。老女。嬰兒の長命果報伊美敷昇を繁昌と唱る也。老女。此となへをしらさる時は。後見の女中。側にて唱へし。其時。散米

を坐中へ打蒔。のし。こんふ。かちくりにて。何も坐中の面々口祝有へし。若難産之時は。押桶を出し。幾度も底をぬくへし。押桶は十二又七ツ二ツも有へし。

一うふ湯水没方角の事。其年の生家の水あるは。生時より七ツ日の方の水。又は東方より流水を用へし。湯の中へ金銀の箔を入へし。

一うふ湯ひく方角の事。天醫か福德の方へ頭を向へし。湯舉の時ハ。東へ備へし。

一湯舉の身敷拭の事。摘綿五袋兩の端を能のし。三所に紅白の糸を以て。鶴の羽。菊の葉をつゝり付へし。若葉のなき時は。枝を用へし。是を湯舉のさせわたといふなり。其後。かにごり縮をきせへし。口傳調様別卷に有。一胎衣納様の事。水を以て洗ひ。其後。酒を以そへき。蝶紙にて包。土器に入。蓋をして青

緋にて包。桑の小弓。蓬の箭。昆布。かちくり。熨斗を添。胞衣桶に入。白布にてゆひ。又箱に入納る也。

一初産石籠ハ。闔下に深く納る也。是重ての繁昌を傳と云儀なり。(待む)

一胎衣納る方角の事。其年の玉女の方の地三尺六寸掘納也。男子ハ左の足を以て三度。女子ハ右のを以て二度。地を踏て。天長地久。御願圓滿。此士安穩。男子ノ胞衣 女子ノ胞衣と唱へ。其少脇をほり納へし。

一何れの傳とはしらね共。産所の下に胞衣をも埋と云傳有。然といへとも。家流にあらされはわきまへかたしといへり。

一獸のほらぬ所に納へし。若堀出せは。其子。顛狂ならしむ。虫さし喰時ハ。惡瘡たえす。又獸烏鵲食すれば死をにくむ。神社墓所に竈なとの邊に納る時ハ。其子盲となる。流水の地

邊に納る時は。必水に溺て死。井邊水出る所に納る時は聾と成。道の邊は果報つたなしといへり。然るときは能々所を撰むべき也。一上古の傳に。大人高位の胞衣は。桶箱に納め。高所に置。誕生の日。神酒供御を備る也といへり。

一人王十五代神宮皇后。異國退治の御時。筑前の國三笠の郡にをゐて。應神天皇を降誕したまふ時。胞衣を箱に入納給ふと也。今の箱崎の八幡宮是也。誠に濁世末代の凡下たりといふとも。妄に納ましき胞衣也と云々。穴賢秘すへし。

右一卷者。小笠原長時公。信州御沒落以後。予此道畫心緒。於御側御傳授令書寫訖。不可有他家類書。雖然。依不御執心淺懇記進畢。妄不可有外見者也。

岩村意休

重久

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

## 宮參之次第

男子なれハ。誕生の日より三十一め。女子ハ卅二日めに宮參なり。

一一の先へ騎馬一騎。其跡にゆみの者十人も廿人も立へし。弓をかたけ。鞆を付て。はをり袴を着し。返し股立を取。あし中をはく也。

一次に引馬。卷髮梨地之鞍鐙。紅の大房を掛けて。手綱ハ紫也。熊ひやうのあをりをさすへし。式々にはあをりをさゝぬもの也。兩人口をとるへし。

一侍一二人も。上下を着し馬に付へし。

一次に持鍵何本も。次に長柄のから笠。白き袋に入持へし。次に挾箱二ツ。

一次に弓一張ニはつし。袋に入て。次に墓口一本持へし。是は誕生之時。射たるゆみひきめ



也。<sup>士殿</sup>被兩人。上下を着し返しも、たちをさるへし。

一次に局乗物。若子より先に□□侍二人。脇に付へし。

一扨若子を御乳の人抱て。乗物に乗へし。若子ハ白小袖。乳母ハ色小袖着すへし。左の脇に刀。右に脇刀を可持。役人上下を着し候也。乗物の上ハ守箱を可入。

一乗物の上に。<sup>朱殿</sup>米傘を指掛る事也。

一若子乗物の先に。歩立の侍十も廿も可立。

一乗物の左右にハ。騎馬侍歩みて□多付へし。何も上下を着。返し股立也。

一次に若子ので分の人。騎馬にてともなり。

一醫師藥箱を爲持。騎馬にて候也。

一次に騎馬五人も十人も乗へし。

一次に家老分の人。跡に一人乗也。其跡に足輕十人も廿人も。押へに立へし。

一宮にての次第。門の口々に警固の侍を爲立。社壇の左右も。辻堅めを置渡し。舞殿にも新敷疊うすへりを敷。それへ若子ともし上。神主出合。さま／＼の規式有へし。

一神主所へも。樽肴。小袖。金銀にても遣すへし。吸物にて三寸を。若子にいたゝかせて歸るへし。

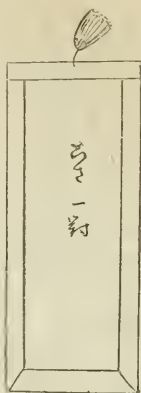
一宮參り戻りにハ。祖父の方へより。それにて献献のいわひ有。祖父も引出物を出すへし。祖父なき人は。其家の先例の家老の方へよるへし。我家に歸うへも。又色々いわひ有之。

婚禮之時。姫之寢道具仕立様。

一夜物一ツ。地白りんす。後に蓬萊龜を縫。かめの甲の上に。鶴龜松竹をぬひ。家の紋を散し。色々の糸にて縫候也。又一つは唐絨也。如此夫婦の分四ツなり。

一ねまき地。黒へに。色々の紋つ敷をくし。是二ツ。  
 一こさ二枚。四方を段子ニて縁を取也。羽二重  
 かさらしにても。地を濃淺黃に染。其に松竹  
 鶴龜を縫。

一紅梅にも染候て。裏に付る也。  
 一へり取様。如此枕の方に房を付るなり。



堅横のへりを  
 すしかひに取  
 合候なり。

一上下をまきらかすまきため。房を付る  
 也。裏を表に敷ましきため。裏をつくるもの  
 也。

一枕二ツ組もの也。鏡板兩方に有。其間をくわ  
 んせよりにて。こまかに組。中をつゝみのし  
 らへ掛たるやうニ。りうこなりにする也。其  
 上を朱うるしにて二篇はかり塗る也。兩鏡

板は。眞黒塗にして。横をまき繪する也。是  
 は其夜いわ井までの枕也。此外に色々の枕  
 有。

一其夜。枕本に立る屏風。白張にして白あやも  
 て縁をとり。胡粉のゑのくにて。鶴龜松竹を  
 白く畫也。

一奥にていわひの終を則床を取也。北枕本也。  
 男ハ東の方。姫。西の方に床を取るへし。各  
 ふとんを二ツつゝ敷て。其上こさを可敷。男  
 のは上の方より敷。姫のはすその方より敷。  
 枕本に守脇刀を置。刀は床上上置也。

一よるのもの并ふとん疊様口傳有。

一夫婦の小袖疊なをしやう。男のハ上かひ上。  
 姫のはけかひ上にして。三ツにて疊倒置敷。御脇に  
 置へし。

一おくのいわひ終と。則姫へ手水を進す。たら  
 いに裏白小松の枝をしき。青小石をみつか

なわに置。其上  
 に湯次を置。持  
 參して懸る。手  
 拭は手拭に<sup>かけ脱敷</sup>かけ  
 て。わきに置也。  
 此うら白ハ里よ  
 り持參すへし。  
 一局さしつして。  
 まつ姫より先に  
 御枕成する也。  
 扱男の方へ奥へ  
 御入候得と催促  
 すへし。朝ハ男  
 より先に起るも  
 の也。  
 一傘袋并弓袋之圖  
 之事。

世に置る。り。御。ひ。の。入。人。の。口。に。二。つ。并。て。置。す。



うたれと入るす  
 ひと十二取也  
 先下を張あよ  
 け早よめ以候  
 らなり

ふの頭の勝寸のた  
 分なや一に八  
 草也壹分御合に免  
 出但黒す也計  
 引候こま革せな



ふの頭の勝寸のた  
 分なや一に八  
 草也壹分御合に免  
 出但黒す也計  
 引候こま革せな

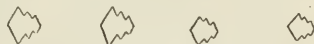


愛より縫  
 初るなり

一。包。入。ひ。の。口。に。二。つ。并。て。置。す。



うつたれ一尺。裏表にひた十二取也。  
 ふうたひ笠袋と同前也。



如此菊とちのきくハ。縫初次第に縫也。

緒ハ。黒革にても。又ハねりくりにても  
 付へし。

但革にてする時ハ。劔先にする也。

一菊とち兩房一寸宛。中は八分。合て二寸八分也。

一廣サ一寸也。

一くゝりあまし六寸也。又八寸にもする也。仕立候て。出陣の看組にて酒献々あるへし。

唐笠之圖。



一唐笠はね六拾本式也。日本を表す也。

一唐笠かみハしゆたるへし。ゑの長さ拾壹尺。

上下を藤にてつかふへし。上之數二十八。是

天の二十八宿を表ス。本は三十六。是は地之

三十六儀也。是を表す。右之色ハ黒うるした

るへし。石付ハかねに而はるへし。紋ハ石付

計なり。

一上のかしらのはゝニて。九七五と簾つかふへし。

一此笠ハ公方様計之儀也。可心得。

張弓之大事

一人前にて弓を張事。北にむかひて張事を凶。東南を本とすへし。

一主人の御前にてゆみを張事。我後はしをぬやうに心得へし。

一主人の御弓。又平人の弓なりとも張事あらは。張所何方とうかゝひてはるへし。是道なり。

一立居直なるゆみ。にきりを取て張也。別而手の内覺あり。

一弓のはの事。木中六寸と定る也。但射とさくりの間なり。

一弦をかみしめ。すへの裏筈をかゝる候者の

やくなり。本筈ハ。張手か又は弦かけのやく也。

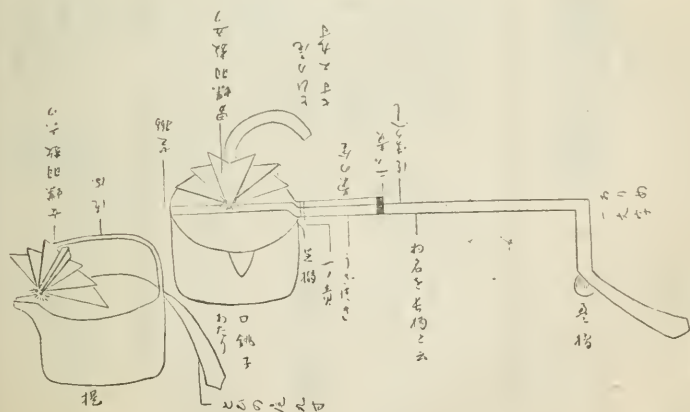
一 張手弦かけ指渡りて。三人して張也。此身なりの事肝要なり。四五人して張事も有先ハ弓によりてなり。

一 ゆみ幾人張と云事。いわれなきやうに申ならはし候。たとひよはきゆみなりとも。一廉ある弓をハ。女三人して張なり。分ある弓ならは。四五人にてても張なり。

一 いかによはき弓 人数入と云とも。あら木の弓などを張と云事如何にて候。弓はりにてしなひつるを以はるへし。

一 さしわたして人の知事なれとも。他人のゆみを不可引と云事。第一の心得なり。すひき二三目する物也。張おろつき候故なり。心得へし。

一 銚子包様の事。一のせめに。ゆつり葉一枚。





男てう

瓶ろ

松のは少重て。葉元をわたりの方へ出し候て。其上を紙にて順に可卷。松の葉の上に装束紙有。

一卷目の數。廿七も又ハ貳拾八も卷

也菊の金の上に。卷目一ツあるへし。

一沙りの結目の事。手前より男結。扱女結に可結。十二月の時は十三。十二月の時ハ十二結なり。結目のはし五分宛置て切へし。ふくさこうより也。但長柄のこうよりは。水こきをするなり。

一とひの尾付候口の卷目數三卷也。餘はこうよりをより合。わたりに結付る也。こうより何も二すしなり。

一提包様之事。ゆつり葉松の葉。右同前。卷目七ツ。又ハ九ツも有之。松の上に装束紙有。

一瓶子口つゝみやう有口傳。

一銚子包口傳の事。

一公家衆御來臨。又將軍家御成の銚子ハ。渡りを六ツ。長柄十二留尾五寸。逆口九寸。提子十二留八寸。

一眉直。黒齒目。其外の諸祝儀にハ。長柄十二。渡り十二。長柄の留六寸。逆の口七寸。提子十二。留八寸也。

一出陣ハ長柄廿七結くさり口傳。留尾七寸。渡り十二。逆の口七寸。松柏椿などを飭付る提子十二。留一尺二寸也。

一飯陣ハ長柄七ツ。結様口傳。留七寸。逆の口一尺。渡り十二提子九ツ。留尾一尺五寸

一血祭の時ハ。長柄十逆結。此時ハ順の口を包ふさく。留尾七寸にして付。其上に紙を五寸



に切ちゝみ。刀を九付る。五佛と九字の表相也。疊摺ト留尾なし。渡ハ九ツ。提子八ツ。これを留尾なし。留尾付る所へ。釧形紙を付る。松椿にて飭る。

一佛事移徙暮目の時ハ。長柄ハ五。留尾五寸。渡り十二。逆の口九寸。提子十二。留尾一尺也。一堂塔供養の時ハ。長柄九ツ。渡り六ツ。但下を紙にて此時は包なり。疊摺の留一尺三寸。裝束紙五寸。長柄の方へ出す。提子結目十。留尾ハ一尺。裝束紙六寸。口の方へ出すなり。一正月ハ。根松。裏白。藪かうし。紅葉を付る。

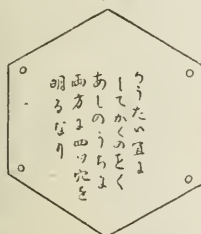
正月七日の節句初には。柳の枝。梅。藁のみこを付。三月三日ニハ。桃の花。椿葉。南天の葉。五月五日には。蓬。あやめ。いはらにて飭。七月七日には。梶の葉。五葉の松。撫子の花を付る。八月朔日ハ。稻穂。野菊。九月九日には。菊。紅葉にて飭。十月家には。銀杏葉。菊紅葉を付る。

十一月十五日には。根松。根笹。椿。山橘などにて飭へし。

### 貝覆之次第

一貝覆を第一の賞翫とする事。唐の詩人白樂天。日本の智恵を計んとて來朝す。住吉の浦に着時。明神翁に現し出給ひ。樂天と詩歌の間答有。樂天。感に絶歸唐せし時。明神。磯のかひからを以。もうこ退治の戦をまなひ。神變を見せ玉ひしかは。いよく肝を消し歸帆せし也。是より此業起る。樂天渡りし日甲午也。故に年始貝おゝひ。午の日を合とす。

貝桶一野。同じ  
大ききなり。角  
にもすへし。



紅ハツ打の緒  
一筋を入違ひ  
にして。一方ハ  
わけ也。それに  
一方の緒一筋に  
かけ。上にて引  
ときに結ふ。口  
傳あり。緒すき  
し。大房を付へ

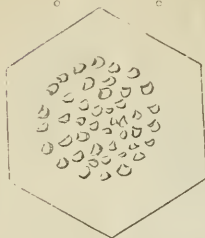
此緒通しの穴に。金めつきのしと、  
め坐あり。

一 貝桶大小有。故に寸法不定。よき恰好にすへし。やろう蓋にして。中高く鏡の家の蓋に。間口の合目に。少玉縁あり。塗様ハ眞墨塗。梨地好次第也。蒔繪有へし。住吉の景をよきゑにするも故實なり。

一 上家は四角にさし出し。かふせ蓋にして。四方より緒を通す。上に唐織の覆有。一對ともに入わく有也。

蓋ノ内金。

身ノ内銀。



かた／＼つゝへ分て。おかひ一方。又めかひ一方の桶に入。如此ふせ丸く幾通りにも井。段々重へし。かひの數百八十也。陰陽にわけ。以上三百六十たるへし。

一 貝の外をよくみかき。内に金銀の箔をおき。源氏のゑ。四季の草木の繪などを書也。身と蓋と對のゑからに書へし。

一 上薦貝覆の時。疊の上に并るも。右繪圖のこ

とし。并初ハ正中より并出し。段々順に并へし。中のならへ出しハ十二貝。丸く并始也。閏月にハ十三并出也。

一 疊の上に并るかひを地と云。雄貝也。雌貝を桶より一ツ宛取出し。地の眞中に置也。たし貝といふ。中の明る處に伏て置もの也。

取様はたし貝の對を見出したらは。地の貝を右の手にて取。甲を外へ。内を掌の方へな

し持。たしかひをすへひて取。片手にて合するもの也。數を多く取たるか勝なり。對にて

なき貝をとる事。大なる耻なり。其貝は又地へ戻し置へし。是にハ過錢を掛る約束有。

一 納る時は。雌貝より納め。出す時は雄貝より取出すなり。おし貝ハ客人の役也。客不見出前。唯の人は斟酌すへし。

小笠原大膳大夫

長詩

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫接合畢

續群書類從卷第六百九十三

武家部卅九

豐記抄

從他家申樂。田樂等來事。使節ニハ可相替。  
さのみ慇懃ニハ在間敷候。如此類大形相定  
る。奏者之時もたゞ可意得候。申樂之内にて  
も。公方申樂。又太夫座衆に深淺有へく候。  
一出家奏者同宗によりて可相替。就可依御仁  
躰。宗々によりて替ましく候。位に寄て崇敬  
之淺深有。宮仕も出世之内に高下有。心得同  
前也。

一太刀折紙ハ。先折紙を請取。後に太刀を請取

候。

一折紙と目錄に注文聊替候。常に馬太刀之は  
目錄也。

一腰之下に銘付參御馬如常。糸窓なれば糸と  
付候事候。又奥に仁躰によりて。名字計も書  
儀候。要脚を被參。万疋より書候折紙之札違  
候。馬太刀之目錄に。要脚なとあらは。千疋  
万疋より認候。是を折紙と申候。書札に仕。  
烏目千疋。鵝眼万疋書加計候。それはおも  
はしからす候。公方様御成時。進物を翌日  
送り進上之注人にハ。數を認候へは。要脚を

も書加勿論候。申樂舞に目錄注文にて遣候

事如何候哉。折紙は千疋万疋と認候。折紙ハ可爲引合。小高檀紙などは努々有間數候。

一折紙とは。千疋万疋被認候を申候。注文とは。一何色々と認候。目錄とは馬太刀など認候を申候。折紙如前申可爲引合候。

一太刀折紙を。他家貴人より之太刀折紙ならは。使節にも候は。奏者可渡申候。又自分ニ可進候ハ、見參候時可持參。又奏者披露候て。後に懸御目儀も可有之。可依時宜。

一太刀折紙餘多。主貴人へ參候時。持參之樣躰如前申。太刀廿振などに成て。所狹やうに候は。申次など次之間へ取出候。公方様にては。百。二百人御太刀進上之時にハ。申次。次之御座敷へ取候下々之心得も同前に候。奏者申たるは。其まゝ後迄扱候事も。奏者申次替候事も御入候。公方様にて奏者と申儀な

く候。申次と申候。

一女房のかたへハ。折紙かなに認め。高下ニ替事勿論候。料紙 是も可爲引合候。

折紙如此。

上さまへならは。如斯あるへく候。

しん上

くゝゐ

たい

一をり

のしあはひ 千ほん

御たる

五か

以上

さた清

從女房目錄折紙意得同前。男よりの折紙ならは。千疋万疋などかなませに書へし。

一女房衆より申樂田樂へ。折紙認樣不可有別紙儀敷。千ひき万ひきなと有。引合たるへし。

一御膳ハ如昔は參候。近年不及見候。

七

三

三

五七

五

御前一

同一

四六

四

二

二

六

七め二様に候へとも。此分可然候なり。

一主貴人江銚子渡事 長柄の方指上可參。提も此心得なり。廻酌などにも。銚子たゝみに不付參候。

一召出に參候に。扇を拔。紐をは小袖と素袍の間へ入。御□次第ニ可參候。御酌銚子に酒なくは。何時も加候。さいこしに加すまじき候。せはくはうちへ手を懸候事候。

一前々御酌之仁。次に盃持出かきらす不定。前

之提之人加之。酌同前。献數參候て御盃可參時。御酌もくわへ。餘仁も可仕候。不可有別義。又提は同坐中又せはくは。別之間にも。何れに酌の見へ候所にあるへく候。

一御盃取替時前ニ。盃何となく持出也。

一惣別折等をは。四五献めに可出。但時宜に可依候。一度數をもいたし候。賞翫の人餘多候へは。其御前へ御盃參候時參可然候。

一臺にすはり候盃たへて。いさゝか時宜を仕りすへ候。理運には有ましく候。下に置は酌取て居候。此時召出候て別之儀なく候。

一三□貴人の御前のよりたへ申候。但三さかつきの臺と申も。是有事候。

一取違之事如常。不有別儀候。

一配膳は諸侍之役なり。たい所之役ニはあらず。於公方様も御供衆隨分之役也。國々之習不存候。

一廣蓋之事。無別儀候。小袖上下一ツ宛入候。

先袷。其上に小袖うらうちと次第有へし。小袖袷の下閉候事。數餘多候時之事。

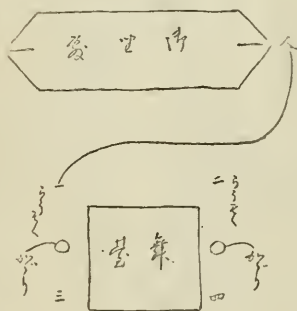
一何も中樂舞ニ。田樂等之遣樣色々にかはるましく候。公方様にて御服以下廣蓋なれば。御縁よりおりて被下候。蓋にすへす遣候か可然候。又上下裏打候ハ、つゝみ様小袖同前なり。公方様にてハ□服迄にて候。上下之沙汰は、自餘之在所にて之儀也。又能半には。何も遣候ましく候。前後可然候。座敷酒之時可然候。

一らうそくの臺。右之手に持。有明なとの大成は。諸手にも可持。しんハ臺ながら取候。とりにくきならは。おろしても取候。非一篇候。

一竹の節之臺と申事。そく臺と申蠟燭之臺之事候。此内にて竹之節又木の臺なと申。何も

同事候得とも。木の臺本儀候。有明の臺重々ある事候。

一能のろうそく。先御前座敷へ參。扱舞臺之先御前の方より可參候。しんは臺ながら取候。取かへ候ハ。左にて扱。さしかへ候をハ。とはしなから持罷退候。



蠟燭臺しんの次第此分なり。御坐敷の左の方より取。次第に如此。又御座敷之様により。二の方一にもかへて取なり。坐敷へ



うしろ不向。

一舞臺のかゝり在所庭之様によるへく候。大畧左右。此分たるへし。

一貴人主人に刀渡申候様。うやまひ柄の方を貴人の方へ下緒取添參候。被下ハ給候様に請取戴申候。則退出。前之刀ハ下人に遣候て。指申候被下候とて。さし刀人に出儀不可有之。等輩請取渡准候。可心得候。

一太刀刀は。太刀之上に。刀下緒取添有をも。同ことくに可參。注文ハ太刀刀之次第すへき歟。

一折紙に。太刀刀代物事加認候事も可有之候。細々にはなき事に候。太刀も刀も銘付之作様までハ。餘こまかなる様に候歟。但注文なとにて。遠所又奏者などに渡候ハ、小刀なと迄も可注候歟。

一他家へ使者に參。御盃被下時。太刀折紙等可

進時分不定候。盃參由申參儀もあり。可依時宜候。又能過。申樂小袖素袍遣候事も時分不定。使者として遣候ハ、申次又知音の人となにかし遣候と申可遣候。直に遣儀如何。時宜によるへく候。

一式三献酌給仕不可立。別儀也。

御前 一ひきわたし 式三献

二うちミ

三わたいり

一式之引出物とは五種なり。御成之時は。只前よりおかれ候。たゞ披露之時は。目錄を以て被申入候。御馬引渡すを請取なり。御太刀。御弓。御征矢。御鎧。御馬目錄之次第此分。但流に依て聊可相違。先馬を渡候。御鎧なければ腹巻をも進候。目錄にも腹巻と書。御馬も鞍置申候へは。御馬一疋毛付印。御鞍置と書候。

御成之外又座敷に置申事も可有之候。置所難定。惣別之引出物には數不定。式々は如右也。

一うら打。先大口着。其上ニ着候。帶前腰は如常結。又取そろへ。後腰の帶さきの廣さにて卷留候。又其儘結下置候も御入候。又紋不定。家々の紋松竹鶴龜も御付候人候。いさうなるは不可然候。色不定。大畧淺黄なり。露紐付様如常。袖の下に三四寸露結下候。



腰のとめ様如此。但革大畧紫革。

一輿よせ様躰。よめ入とて。其時も同前候歟。但家によりて。舊規を其儘用事。何にこしよせ役人に。女房より引出物有儀候。一馬上の御供の時。うちこみの騎馬勿論候。つ

かひ騎馬と申事候哉不存候。公方様大將拜賀時。在之事候。騎馬もさやうに候歟。不及見候。小者中間房雜色次第如此。

輿敷  
轡ゆかけ  
小者 雜色 弓うつほ

房 馬同同 中間同同 厩者傘持

小者 中間 太刀  
打刀

馬上にて召具此分大方此分ニ候。

一 小者餘多申候へ心得同前事候。但四五人迄不苦候。六人過てハ有間敷候。當時大勢不可然候。雜色弓うつほ付候。中間よりは下。厩者よりは上り候。公家方には中間を雜色と被仰候。式装の時は役者餘多候間取替候事候。主人うつほ御付候へは。雜色所に弓袋可有之。中間餘多も意得同前。次持具足。主人御供之時。大太刀までは不苦。鑓は遠路へは

不苦候。用心は別事候。當時は近き所へも御持せ候。走衆之儀不可有別儀。公方様之六人之内、左殊になかえのきは上り候。次にさき、次ニ中下り候。御車は角きは上り候。御輿同意得也。立所と高外は鬪取にて被參候。一書札之事。貴主も依仁躰也。何れ直には不可參。出家一同前門跡ならは、坊官方へ付狀たるへく候。字によりてなり。

一申樂舞ニ田樂等に。御小袖十かさねも五かさねも給候事。廣蓋に入てなり。只も別儀有へからず。たゞみ様以下如前。左に持上候。被抱候なり。

三皇

伏羲 神農 黃帝

五帝

(昊)  
少康 顓頊 高辛 唐堯 虞舜  
一從大名。申樂へ直書仁も有へく候か不及見

候。自然依忠感狀ならは。遣候事勿論か不及見候間。文躰無覺悟候。

一主人御酌一家一族に被參候は御提。一家の内者などは随分儀ニ候。

一亂酒之時分ハ。高下不同候とも。後にハ人々如御座敷へ御看すへ可申候。いつくニても不苦候。

一押物の事。勿論ニ候。御酒するつかたに出候ものにも。貴人主人より被下時。受用可申候。時宜不可有別儀候。

一鎧<sup>左</sup>跡ニ出る。<sup>右</sup>下<sup>手</sup>。さきへ後様ニ歩み出やりて退出。左の者引直す。左の御方二三尺のけて。少御前へよせて置候。又座敷により心得事。

一高砂勿論候。積すなど申候儀。さも候歟。不存候。橘の木大名方庭に植事。是又不存知候。

一紅梅之事。男十五歳。女房衆ハ廿八。五月五日之まん時まで着用。近年々寄めず。不謂候。ほうたん色は。四月一ヶ月ニ限る。女房衆廿歳迄召候。練貫ほうたんは。男ハ十四五。女房衆ハ練貫いつまでも召候。柳色。淺黄空色。檜皮。紺。萌黄等限りなく候。乍去年寄ハ紺淺黄など相應か。惣別。衿もかたひらも。白か難なく候。衿にも小袖も。下に帷不苦。汗をはちく爲なり。

一烏帽子なかくみ。大形十八九迄さひのかはり候きはもなく候へは。年寄へり高くまねきなかくそりたるは不似合候。何も當世かはり候。

一あふきかなめの方可參候なり。

一よめ入の時。せうめいたきやう。何共不存候。同小袖。袷上下。烏帽子カ出事。勿論なり。小袖以下たゝみ様如常。烏帽子置様。何

とも不存候。渡様別儀在間。以下圖文

一おんそ筵枕など持て參様とて。別儀在ましく候歟。手ぬくひ鏡なども同前。こかんそ如常。下へゑり成へし。何となく持なり。

一社參事。神主出。御幣立なから取。左を上て紙を左に指上。右方を下て。御前に畏り取直し。我右を高く持上。御請取候貴人の左方へ紙成るなり。御三禮の後。請取直と。左を上て神主ニ渡也。此役精進也。又御酌取様もさかなの儀も不可有別儀。神前へ後共向ましく候事也。

一申樂に小袖上下被遣候儀。酒之座敷にてぬき遣し候間。たゝますに人數餘多有時も持様當坐ミて可爲時宜候。貴人などの上ニハ可有斟酌段故實候。坐中にて遣ス人を取次申候ハ、左ニすへ右にてかゝへ候。素袍ぬきて後。別之を不着。下計にていつ迄も有へ

く候。

一通り様に。貴人之方の手をつくへし。兩手もつくへし。双方に貴人あらは。勿論もろ手也。

一みす。さいの内に懸る内へ。まくやかき内に有て。さき外へなるなり。神前は。さいは外に有て。内へ卷。かき外に有て。さき内へ成中候。おろす無別儀候。

一都出入。大に嫌事也。妻戸不苦。つまとしとみあくる事不可有別儀。夏など都はつす儀も有也。雖然。出入不可叶候。

一硯料紙ハ硯の上に紙を置候。文臺あらは。その上に硯料紙可置候歟。

一目録に。手綱なと書候事不存候。

一書札ニ馬太刀注文なと書加候。毛付印も勿論に候。手綱なと書加候事如何にて候也。

一御酌覺悟。二献三献之内にては。替儀あるま

しく候。自然献々末に成候てハ。度々に加候はぬ事に候。それも一篇に非す。惣別心持にて候。

一馬上御供時。公方様にてハ。御劍役者右に御帶し候。又右ニ如常々御持候。今は近所へも御帶し候。不謂候。御輿へ入候事も候。只可心得候。大名は輿馬中間持候。御とり候へハ□人被持候。此中間は輿馬何も左方少先へ走候。中間にも少腰をかゝめて可渡候。持候外用心に。輿に太刀入事も有。是は法外に候。一女房衆の小袖。申樂以下ニ被遣候。さらに不替候。いつくにても。同舞臺へ女房衆ハ持て被遣ましく候。

一主貴人。申樂に太刀被下時も如常。但様舁可有用捨候。左右不可有別儀候。太刀刀一度に被下も。扱同前なり。

一乗替御供之時も。遠所へは可引候。騎馬餘多



可有之中へ引せなと候て不可然候。猶遠く跡に少引候馬數之事。參宮などはさもあるへく候。近所へハ如何にて候。

一よめ入になかもち腹帶と申事。何共不存候。但くわんにつきたる革の緒計にてハよはく候間。布にてたすけ緒を。腹帶のやうに仕候を申候か。是はつねにさやうに候。よめ入には同前に候。又よめ入式之用意。家々舊規用付たる事候。女房方委不存候。

一主貴人光儀に亭主出合可申所之事不定。互可然仁躰也。庭上又門外までも可出候。御成にも依亭主淺深有之。進物献にもはさめても進上なり。披露仁躰ハ亭主可有持參事。門役辻固は大名にては。守護代等隨分之仁物候。式と進物之事ハ。前に如注候。其外ハたゝ進物迄に候。

一寺家へ貴人大名等。しやうたい被申ハ。寺家

之喝食給仕候。雖然。さやう之仁躰なき所に候ハ、御供衆公方様ニは無御座候。かた口之事も御祝儀之時用候。

一式三献之御盃とりちかへ聞召候と申事。何共不存候なり。

一太刀はきの次第。前に如申候事。左なかえのきはあかり候。大名之太刀はき可爲同儀候。一申樂に。折紙以下被遣事如前候如常候。又千貫なれは十万疋とかき申候。公方様にて音曲申候時は。從舞臺御庭へ下り候間。庭上に被下候。代物積候は。持て出たるまゝ舞臺之はしよりさし合の様ニ。在所ニ可然候。持出仁躰人數不定。御供衆など隨分之御方御持候。五百疋千疋引さけて御持候。若年の人ならず候。又上役にて候。

一能初め候へと申事。樂屋ニ向はやハしめ候へと申迄に候。同ハ能乞候事も。今一番と申



までに候。公方様にては御供衆庭上へ御切り候而被仰候。又御椽より被仰身も御入候。床机ニ腰懸鞍仕候ハ。廣き庭上之舞臺ハ理運に候。御前又御椽ちかき所ハ。かけ不申候を。かけ候へと被仰出かけ申候。

一年始之書札之事。種々可任之候。普通ニハ爲年始御祝儀。何々致進上候。宜預御披露。改年。年甫。新春。青陽條々可書候歟。主貴人ならは。可爲付狀。於等輩者重疊可有意味。

一申樂等に御酌當座末座に伺公申候間。御肴參盃通申候。申樂之前へ。盃を持たへさせられ候は。あやまりに候哉。御待候へは罷出たへ候。今は緩急に候間。仕合六ヶ敷候也。

一行事。行。普請奉行ハ。公方様にては奉公人御沙汰候。門役奉行ハ右筆方之奉行仕候。作事奉行ニも。自然材木等ニ付て。奉書なとなさる。儀候間。右筆方之被加候。但作事奉

行。普請奉行と計御尋候。

一よめ入之時。惣奉行付御物奉行事。此奉行之事。何共不存候。家々仕様可有之候。是非を難申候。

一どうぼう扱之事。とうほうの事。二利ともに其作可有存知候由。扱之事是非難申。高下之事も同前候。

一他家へ以條數可申渡覺悟。不可有別儀候。頭書不然者意趣をことく注可申候か。時之便故實文從主人被注遣へきか。人々可爲覺悟。是非難申候。貴人へ直に可申事ハ。可依子細。文箱取扱不可有別儀候。

一足袋之事大名諸家の人はかれ候。不可然候。無御免誰もはくましく候。若年の人も不可然候。病者は不及是非候。色々染革不用候。まきふとんと能候。諸家之儀も。主人ゆるされ候へは不苦候。

一みかきつけ扇。平氏之人ハ無益候。字書あふきの事。御かき候仁躰によるべく候。事の様なる人の書たるをおし出可被持事如何候哉。但うちく不苦。參會之時はさも有べく候歟。

一家之棟上之時。式之祝儀付て太刀馬以下可渡仁躰。時宜によるべく候間。是非難申候。太刀馬被下仁躰により。直にも可被遣候。馬ハ厩者も可引渡候也。御成之時は。御馬鞍置一家之衆又家之子被懸御口候。棟上之儀者可依時宜候。一途ニ難申候。名代之儀も同前。御さかな次第不定候也。

一長道具披露無分別候。奏者。次の間なとに立置披露申候。主人被御覽と被仰者。可懸御口候か。せはき座敷へ長具足用捨可然候。等輩同然候。

一諸大名御出仕次第と申事。あるましく候か。

御出仕候て。あまたも着座之事は。高下次第是非難申候。御相伴衆と中は。御參次第と申候。

一三職ハ上ニ當職。次に前職。其次御着座候。

三管領計此分候。當職ハ御判。初評定始等時。

一人御着座候。同頭人奉行もうら打にて着座候。

一公方様にて御一献之時。御肴參り候者御配膳と申候。御供衆隨分御沙汰候。御人數不定候。御祝儀之時。上薦。中薦御宮仕の時ハ。御手長に申て。奉行方御沙汰候。御手長までハ又御末の者共取次中候。

一御供衆次第御名字之事。公方様御供衆御名字。古今數十人御入候。委ハ申かたく候。右御參候て。當時無御參方もあまた候次第之事。各意趣被仰候間。是非難定。

一御わうはん。朔日管領。二日七岐殿。三日京

極殿と六角殿隔年。七日赤松殿。十五日山名殿也。寢殿において式三献參候て。御盃頂戴候。御禮進物式之進物。御酌殿上人ニ候。

一雜色公家にてハ中間を被仰候。其時は。高下の沙汰に不及候。武家ハ雜色下り候。

一奉行衆着座の事。披申様可依事。難申候。

一女房衆へ祝義ニより文之事。不可有別儀候歟。文章めいゝに難申候。先かな書勿論

候。女詞を男より書まし候。男の詞をやはらけて可書候。常の文も同前也。高下の替不

及申候。上書ニ申させたまへとは敬人にて候。同儀なるしらるへし。次ニ候。計ハ

下手へにて候。是ハ大形にて候。高下淺深様々之事候。上卷之事二卷用申候。一枚を折用

候。略儀に候。捻めに墨一筋長々と可引候。

遠所へハ上卷のうらに月日少々書日也。

一式のたて文。様々可有心得候。たて狀。何を

さして可申哉。謹上書披露狀も候。又直書も候。申定かたく候。

一從大名三管領へ被進御狀。依仁跡可相替候。折紙同前候也。目錄も仁によりて。御太刀に御字を取調候。奥に名字名乗書方も候。

一御成之時。普通之仁。門外へ御出候。又献數ハ不定候。進物悉持參候。手長之儀御配膳之御供衆迄。内衆隨分の衆手長可申候。

一折紙に馬代送ハ。一疋と計書も前に如申候。取次候仁も。能々此馬は代と申たるか能候。

一すき素袍六七月着用候。兩月の外。公方様御免にては公方人御着用候。又内々にてハくるしからす候。

一番帳書様之事。付壁書之調様之事。國々庄事は致訴訟輩ヲ以尋承爲子細。猶申披壁書如件。年號月日奉公書札等之事。奉行之事ハ。常に諸奉行調候不及申候。制札同前なり。

一御移徙。様々意得あり。衣裝馬以下之儀。前

々如申候。又人の名字も可有用捨候。公方様ニ而も肥田瀬ヒダセなと申人は。出仕もなく候。祝之儀式。家々により可相替候歟。公方様にては式三献三本六立五集折なと色々參候。同禁句等可意得候。

一受領官途被下候時書出。急度書出以下の事無之候。自然田舎遠國へは内々書出事候。又直書にて被仰事も候。其時は受領之事。依望任因幡守候なり。如此令任候。受領を被書候て可被遣候。月日因幡守殿内者書出准之可心得候。大畧は何に被任申候得ハ。其御禮申計にて候。中間等に同前なり。

一領地被下時。御書調様之事。公方様之義。奉行人奉書にて被仰付候。又御判之物御内書なと被下事も候。普通之儀ハ奉書にて候。

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

## 故實聞書

御成の時。御さの事。兼てよりしかれ候。さりながら其上には御坐なく候。但又しきによるへし。また。女房衆の御つほねへ御成の時も同前なり。

一御能之時。御前にて大夫に御折かみ下され候時。公方様よりくたさるゝ時は。なにとも申さつつかふなり。まためんゝよりつかわさるる時は。たれゝよりたまわり候よし申事に候。

一いつそくきりにて出仕候へは。上下たるへし。御くしはやされ候わぬ前は。ちやうけんもちいられ候事は。人により候。しゆつけになるへき人は。人によらずちやうけんにて候。

一折かみには。千疋。二千疋。五百疋。万疋とし

たゝめ。又しよさつ等には。青銅。鵞眼。烏目と調申候。折かみと書札とかくのことく替り候。さたまる様之義者誰々も存事。

一御能之時。大夫上へまかりあかり候へど仰らるゝ事。まひゝのきに。公方様直におほせらるる事も候。また誰々申候へと仰候時も。御さしきより仰らるゝかたも候。くけ大名して仰らるゝ事はまれに候。たひりやく御供衆をもつて仰出さるゝ。御供の内よりにも。しんたひにより。御庭へをり候て申さるゝ□□方以下一行半脱文。

(脱文)

一てうしのゑつゝみ候事は。公方様には御坐なく候。御ゆはいの時は。かたくちを御用ひ候。

一御はうの物之事。面の一こんにはかならず参候。

一みなゝさんくわいの時。大勢候へは。兩ほうへ盃出る。きそく殿中に御坐なく候。

一御供之時。かたつなにてめし候事。ゆめゝあるへからす候。

一主人の御前にて。今日はしやうしなと申事。これあるへからす。御たつね候とも。一往ハしやうしにては御坐なく候よし可申。かさねて御たつね候は。有様に可申候。

一御にしみ左を参候者あかり候。それにより久しくめしつかわれ候物。左を参候。

一御供候時。さきうち二三きをかられ候時之事。やかてのられ候へは。のこりの衆はみなゝおり給へは。御こしにをくれ候間。たゝ乗り候て。あとしゆハ参候かしかるへく候。さりなからさきより二三き下馬候て。其間久しく候へは。残りの衆も下馬候。これハほそ道などにて。十き廿きの事にて候。



一 公方様よりをり物の御ふく御たまわり方は。御しやう衆<sup>く駄</sup>たるへく候。御供衆などのうちにもはひりやう候事。一たんのきはにて候。

一 正月二日大めい出仕候。御太刀參上のかたハ。われとちさん候。御太刀參上のかたは。三くわんれい計御參上候。其内は山<sup>たけ</sup>な<sup>脱カ</sup>との正月十五日御參上にて候。

一 たひのさかつきのたへやう之事。左へ候て。やかてたいにすへ候。只しりうんにすへ候へは。何とやらんしきもいかに候間。まつたゝみにをきゝ様につかまつり候て。扱<sup>し脱カ</sup>又。たひへすへ候。かやうたひなをし<sup>し脱カ</sup>かるへく候か。又さかつき二ツ三ツも候。それをは二ほし三ほしと申。其時は。まつ主人の御身ちかきかたよりたへはしめたるか能候か。したひにはしへたへ候。たゝしりうゝによ

りてあひかわるへきか。又こんくたされ候。すゑゝの人にくたされ候時も。御さかつきはなく候。又貴人等は御參候てすなわちたいにをかれ候。皆置候て。心を仕候てしき能候事ハ。平人の儀に候。

一 太刀かたな一度にひらうの事。太刀にかたなを取そへ。太刀の上に刀をおくへし。太刀の出し様はつねのことし。刀も太刀<sup>衝カ</sup>ものそのりのことくそへ。この方うへになるへし。

一 はしりしゆのかうけ之事。御こしくるまの時も。左を參る人あり候。御くるまにては。くるまのさきはあかり。つきにさきあかりには。したいに中はかりにはしりしゆに高下はきつとこれなく候。さひしよに高下是有事か。それによつて。まいまいくしとりにまいられ候。御成之時之儀に候。

一 貴人の御前をまかりとをり候時。手をつき



御禮申事。つねの義候。兩方に御坐候中をとり候はし。兩の手をつき。御事うけたまわり候ていなをしかるへからす候。かやうのきは。誰々もかくこ候へとも。しやくはいの人に。なか／＼申きかせへきか。

一しやくの時も。めしたしのとさきも。扇をぬきて。ひほをおさめてすわうのあひへおしいれ候。かたひらの時も同前なり。

一御盃をちさんしてをく事。貴人の右のわきに置へし。但座敷の手遣によりて。あひかわるへきか。兩方に御坐候時は。兩のあひにおくへきなり。

一御しやく仕候内に。物仰らるゝ時は。御てうしのなかへを地につけ。さきあかりに持。うけたまはわるなり。又久しくおほせらるゝときは。右にてうしを持。左の手をは。つきてもくるしからす候。すこしの間ならは。左

右にてもつくへきなり。

一そく一本披露之事。主人の左のわきに置て。さて巻數なと候ハ。いた／＼かせたてまつりて。もつて去て。つきの間に置て。さてたいめんの事をさた申すへし。くわんしゆを御前に其まゝ置事。くわんしゆのさき。御かほなとにあたらぬやうに。是を心得へし。いた／＼かせ申て。やかてくわんしゆのさきをおり申なり。

一進上の太刀をおく時は。さしよりて。右の手をは。さやの下へ入。左の手をおしあひのへんを。さかてになるやうに持。左のわきにかいこうて。つかの寸をいかにも／＼。たかたかともち候て。まかり立て。つきの間におくへし。さやはしり候はぬやうに心得へし。一主人を申入時。ていしゆに太刀を給る事。さか月をたまはり候時。たいりやくつかはさ

る。又ていしゆ。さか月をしんしめしあけられ候時。聞召て後に。御太刀にて御禮申候。

一御成之時。御けんのやく人に。弓うつほはつけられす候。さつしま又は馬屋の者。御さしかさもちのいてたちやうの事。只々いつもの人ふまてにて候。但御はれの時は相替るへし。

一ゑほしかけは。馬のをか本にて候よし申。くみにうちたるは。きんねむの事なり。

一刀のつかまきたるは。はれにはさゝす。まさたるかたなをさし候事は。りやくきにて候。

一うらうちなどの時も。すそをはくつへ入候ましく候。ひたゝれのすそのくゝりをは。一すん四五分ほとしめしたる能候。

一うらうちの時。しゆつしのとき持參する太刀。くろ太刀にてあるへく候。同もち候ちう

けんは。主人の左の方身とをりにてあるへく候。

一大かたひらにてしゆつしの時は。中間まへぬ左右をねり候。大みやうは十人。其内ハ六人あかきひたゝれにてねり申候。此時も太刀ハ可然候。たゝ一ふりもち候。六人中間之内。一人もち候。

一大かたひらの時。さし候わんする刀ハ。さやまきにてあるへく候。さやまきなくは。中間などは。禮しきの刀もくるしからす候。主人はさやまきしかるへく候。

一公方様の御前へ。大名の内の者めし出され候時は。しらすにて御目につかけ候。其時。御馬太刀進上候也。おゑんなどへめしあけらるゝ事。一たんかたしけなき誠に候。御さかつき被下候わんするほどの義にて候は。御ゑんにてくたさるへく候歟。此時はた

とへいさん御禮申上候とも 御さか月くたされ候へ。かさねて御禮申あけられへく候。

一公方様の御はしり衆は六人。又小者も同六人にて候。其したゝの人は。小者は三人四人の間。しかる義なり。但しんたいにより。五人はかりもくるしからず候歟。

一ゑほしかけの事。大かたひらの時は。かならずめされ候哉。

一つゝらきつ付に。ゑをかき候はぬをは。晴なとのときはめされんはいかん。ゑのくわぬにはうるしにてかき候て。つねにめし候むもんのはしかるへからず候か。

一門屋具さしかためこしそへなどには。小太刀もちたるか可然候。つは。かたなはめにたち候。なかきもあしく候。只小太刀かよく候。

一もとゝは。ぬりたるくつわをもちいられ候。きんねんはしらみかきにて候。

一貴人の御さかな被下候て。則いたゞき候て。はやくもちいへきなり。たへ候て其まゝくわいちうする事。らうせきなる事。又一たんのしやうしときは。たへ候ていをつかまつり候て。ふところへ入候か。よきほとんらは。はやくもちいられへく候

一御前へうくひすの事。ちさんの様躰は。こをけのさまの方を御前にむけて。同うくひすのまろわのかたを。こおけさまのかたへなして入候なり。同こをいを仕候。さて御まへにて御目に懸候時は。そとこおけのふたを取ておきて。さてうくひすへあけて。左の手にてこおけのふたをあけて。こおけのうへにおきて。まろをを御前へむけて。ひすをこおけのふたのうへにおきたる時は。こをお

いそと取。さてこおゝいおは。おしたゝみを  
き候也。又そうしやに渡候時は。まるもふす  
ことぐこをけより取出して。ふたのうへに  
おきて。まるめをそうしやのかたへむけて。  
こおおいを取て。うくひすをそうしやに見  
せて。やかてこをけへ入。ふたをしておゝむ  
すひて渡し申候也。此外はさして時宜無之  
候。但色々やうたいこれあるよし。

(以下闕文)

一きよけんのやくは。うつほは付す候。太刀を  
は右にはき候間。かくのこどくに候。残り之  
衆ハ。皆々つけられ候也。

一長たうく之事。出仕などにはいかた。さやう  
ちうすき候ハ。其時はもたれても苦しか  
らす候歟。又野太刀之事。奉公衆なともち候  
事々存申さす候。面々の内の者はもち候。  
一御供之時は。のりかへひかせ候事。遠所へ之

事なり。くらをおきて。あとに引せる。くら  
おゝいをするなり。むなかひをもつて。くら  
おひをからむ事。これはくるしからさる事  
なり。但ありてもなくてもなり。心にまかす  
へきか。同のりくつわをはつして。あらひく  
つわにてひかせ候事も候。いづれもくるし  
からす候。

一うつほをつけて夜に入。遠道山中などにて  
は。そてひほを。うちたちのことく。其さま  
あるへし。うつほのふたおもあけて。うしろ  
へこすへし。

一下馬なとくるしからすといへとも。さすか  
いかかのやうに存候へは。乗馬なから左の  
くつをぬきても。持て禮する事も有。

一とうはいの人。こしにてのり馬の人にあふ  
事有。ゆるしなき人。こしにのること。しゆ  
うなるゆへて似人のり馬にてゝともこしに

參たる人より。おもく禮をせられ候て可然。わけて禮をする人あらは。乗馬の人、其まゝ禮すへし。

一路次にて女房衆。こしにてかへらるゝにあふ事まいゝ是あり。其時はうちよけん方あらはよくへき事可然候。同道をかへらぬやうにすへし。

一かたゑみのあふみの事。いつれの人も被用候。但しらきのなどには。用捨あるへきか。くるしからすとは中なから。むやくに候哉。一つほをつけ乗馬の事。いぬをものゝ時のことし。ひきめとりそへぬはかりのちかいなり。弓つへをつきて乗候也。

一つつほのみのさしやうの事。七ツの時はそこに二ツ。中三ツ。かり又二ツなり。いつれもみよりあかりなるへし。とを矢をさす事あらは。そこにみよりのかたにさすへし。し

せんにしめをうつほに入事あらは。ほかのかたに一人て。又九さす時は。そや七ツ。かり又一ツ。みよりあかるなり。十一さす時は。かり又三ツさすへし。三ツつゝしめとをりにさすへし。かり又二ツさし候はゝ。そやは三つゝ。三ツとをりにさし。かりまたをは二ツさすへし。十三時は。一ツさしかくして。かり又も三ツなり。いつれも三つゝとをりにさすへし。又かふらをさす事あらは。ならへてさして。其上にさすへし。此儀はさるかた中わけられ候間。しるし候間可然事とも。又はあしき事とも中。かなゝも候か。されとも如此候也。

一つつほのみの數事。七ツ矢。九ツ矢。十一。十三。七矢の時はそや五ツ。かりまた二ツ。九ツ矢の時は。そや七ツ。かりまた二ツ。十一の時は。そや九ツ。かりまた二ツなるへ

し。十三の時は。そや十。かりまた三ツなるへし。是も人申わけ候をうつし置候間。中々さういたるへく候。くわけんあるへからす歟。

一あかね手綱之事。つねもちゐ候。本しきの時は。うちませ又はしろきをもちゆる事も。これ又有。事によるへし。

一馬上にて人にあひてれい義の事。賞翫には我馬をはやく留て。道せはき所にては。わか馬をうちのけて。道よきかたをとをすやうにあつかふへき。禮をする時は。手綱をくりよせて。馬をなをして禮すへし。

一うつほにそへてしんとうさす事。一ツ。三ツ。七ツなり。又あまたさす時ハ。ひとつにとりてもさすへし。一ツさす時は。とむへき羽をもちゐへし。三ツさす時は。とむきうちむきくみませて。内き三ツさけへし。此義。

九州の人。かくのことく申されし間。まつしるしおき申候。

一貴人ごをり有時。弓うつほつけてかしこまり候時は。左の手にて弓のにきりのうへ四五寸ごりて。つるをさきへなして。本はすをつきて。左の手をつきて。かしこまり候なり。にきりより上五寸計左にとり。つるを右へなし。とたけを左の方になして。ひきに弓を御置候てかしこまり。うらはつまへゝむくへく。つるを右へなす事。一たんひしや又うちなからやすむ時は。むねのそのをりに。右の手を上へなして。本はつをつきて。弓にすゝてうちかくるやうにして出るなり。九州のしん申わけられ候。

一しんとうを三ツさしたる時。しせん一ツぬきていたる時は。二ツ有へし。二ツハさゝぬ事といへとも。ふちさしそへ候へ。三ツのし



ゆんにて候間くるしからす候と申され候。  
一ツぬきてうつほに入なり。うはさしには。  
一ツ有やうにさすへし。なを口傳有。此儀も  
同前之由被申候。

一うつほをつけてあゆみ候時は。弓は左にき  
りより上を取。つるを下へなして。ひつさけ  
候やうにもつなり。

一はり弓を貴人へ參上の覺悟之事。左の手に  
て。にきりの下を取て。貴人の左の御方にめ  
さるゝやうに立て。さしいたすへし。いな  
か  
らめすには。わか右の手を下へとりさけて。  
まへへうつふくやうして參上すへし。たち  
なからめすには。左のひさつきて。右のひさ  
をたて。弓をさしあくるやうにいたすへし。  
又立なからもまいらすなり。人の中をし  
るし候間。定てあひちかふへく候也。

一はり弓をもつ事。にきりの上をとり。つるを

下へ成やうに。ひつさけてもつなり。又つる  
をさきへなして。立てもゝつなり。又みなへ  
つるとき。たつてもつ事いかゝ候哉。

一はつし弓の事。たてゝ持には。にきりのちと  
下をもつなり。袋に入て候時も。同前と竹も  
ちてのか一人なるとおほへ候へは能候也。

一矢を貴人へまいらせ候する覺悟の事。左の  
手にて。なか程をとり。右のかたへ。ちとな  
ひくやうにもちて。さし出す時ほとをめさ  
れは。御きしよくをみて。左の手をこりさけ  
さし出すへし。いなかからめされは。たゝみに  
つけて。おしやるやうに。まへかたふきにく  
くみて出すへし。立なからめされは。左のひ  
さをつき。右のひさを立て。さしちくるやう  
に出へし。人の中をくをしるし候間。是又相  
違有へく候也。

一弓はかりの時は。出す物は左にて上を取。右

て下をとり。うけとる物は。右の手にて出す人の左右のあひを取。左にて又下を取。そやまとやしんとうの時も。先弓を出す。その時は右の手にて。弓のうへをとり。左にて下をとり。請取物は。出す人の左右のあひを。左の手にてとる。右にて下を取。さて常のことく矢を出す。左右の手にて中をうけとる物は。左の手にてはかりとるなり。是もさる方中わけられ候をしるし中なり。又かうけにより。左右を持ても可請取也。

一公方様御弓うつほの事。御弓は右を参なり。御小者もつへきなり。御うつほは左を望。御小者つけへきなり。御ゆかけの事は有へし。いかゝ候哉。但是も御小者くひにかくへきなり。御ふちは御馬屋のものさすへし。公方様よりさたむねへ御尋の時。此ふんあひしるし参上候也。

一公方様とをく御成之時。御弓袋もたれ候。ふし御らんの時。御弓袋のいろは。あかねにてましましつるよし承り及て候。

一公方様御さんくうの御出立の事。御十とく。御こはかま。いつも色々むらさき。御もんはきり候。御供衆出立之事。同十とく。こはかま。十とくの上におひをして。こしあてをして。太刀をはき。うつほをつけて弓を持。れんし。伊勢の貞親は弓にしめを持そへたる由承及候。

一弓袋の持様の事。そうしてはり弓をは。つるをはさきへなしてもつなり。そのことく袋に入たるもと竹の方を。我かたへなしてもつへきなり。是は常の事にて候。

一うちこみの御供之事。もとくの御成には。さいく御坐候。今はまれに候。うちこみと中ハ。そうの小者をは。いづれも皆々先へは

しらかされ。中間をは各あとにめしくし候。  
したいふとうにまいらせ候。

一着座すへき様。主人は身をゆるく心をつめて持候得は。ゆふけんに候て無越度候。官人は身をも心をもつめてもちへき事なり。

一着坐の身なり之様。股にひちをもたせ。片腹を股とひちとにうけて。さしきには居り候事なり。左右とも同前にて候。直に居候はんする事は。兒喝食之外有間敷候。たとへは主人にて候とも。終日の會の時。さのみ皮よう計ハ居かたく候間。心得候てふるまひへきに候。心をしつめて可承事にて候。たゞ左様之時は。目の前のたゞみを見候て居候か見よく候。或は窓戸口より眺望に心をかけ。或は坐敷の顔を見なとして。御句遊候を承留ぬやうに。早々に候はんする事。第一可然候。万これを以下闕文。

一座敷之出入之時。ゑりめひろく板敷落などふまぬ事にて候。ひちをひさにそへて。こしをすこしたわめて。もつとつとすり合様に。心を持てあゆむか能候。左様に立振舞候へは。はかまにけつまつき可有を。けほこしなとする事有ましく候。そのうへ見所もつき候。至て身をくことことしく候なり。

一貴人の前にて。若衆高物語申さぬ事にて候。御尋事候て。しつくとかたり申へきなり。めくちを引て。大口あけて雑談などは。若遁世者の能にて候。若衆のうち合候て。一言も物を申候はんする事。比興第一候。宿老などはくるしからす候。

一惣領より一家一族の方へ書札の事。各別の庶子にて候は。何殿と書候て。わか官計書度候。同名字ハ不書事にて候。

一從主人友人の方へ書札の事。何某殿と書候

て名乗計を書候様。又折紙とならば。何所よりなとも上に書候か能候。

一惣領へ名前之庶子より書札之事。いろ／＼

□□と書て。上には遠州へ參。武庫へ參人々御中と書て。名乗裏の家計をいんきんに書て可遣候。中書様參。御返事ならは。御報と右へ寄て細書と。左へ寄て人々を少大に可書候。君名をも不書。只御報と計もよく候。

おもひ外には繪に書候女の様に候へく候ハ。人と暗にても。毎度田舎人はか／＼しくふりしく。況や男たてをして。直垂の袖をせはくして。刀の櫛をあらかはりてゝとして。劔の柄を引合よりさし出しなとし。わらひし者切候はん。切候者笑候はんするなどの目様其粧して。氣色こ／＼しき人候時。金吾様常に仰候て御笑候き。味噌のみそく

さきハ。魚の腥はくわれぬ物にて候し折々仰は。氣心は百千さし候て。眼をいと／＼けひちをいか□かし候へはとて。更に人それハ急ぬ物にて候。只おそろしき仕儀にて候。返々後生を心にかけ。身のほとを心得て候へは。いかなる難所も通り。さらにしやうたいなき人は。心得ぬ事にて候。金吾様仰候し。

一長擔之金中通らぬ事にて候。ハしくより候てあゆむへし。

一貴人の御そはを通候時。またしき所にこゝみ候事。みくるしく候。鶴のあさり仕候時のことくに候て候。いつもの様に番候て心あたりニて手をつきて。やかて立候て。あゆみ候こそ見よく事候へく候。只人にまかせて着座しるこそ見よく候へ。

一さしよりて物を云も。座敷の上下の禮を仕

候も。京人御禮仕候は。柳の枝の風にしたかふ様に候。在京なき人の禮仕候ハ、榎の木霜折し、やうに、ふり風情より物云聲、及さしちかへ候はんする様に無興に候。如此の事共ハ。ちと嗜候者、聽て京の人以下圖文、一傍輩之方へあまた參會候時、たいしゆへの禮を持參候て。客人としてさま／＼の禮を申合。物いひ禮儀仕候共。目禮計にて、其後。座敷もさたまりていしゆの禮も申承候てのち。物をしらぬ人へ禮以前の返事を申か能候。座敷も定候ハ、亂座之時は。人にひそかに禮を申。物語なご申くるしからす候か。貴人の御前にて。ゆめ／＼有へからす候。一禮ハ貴人親方に任せるこそ禮にて候へ。いんきむにふるまふは。かへつて無禮にて候。惣て禮は三度に候。過へからす。一男のおごこ立仕候こそ以外見くるしく候

へ。おごこは内にて鬼神をねちはさみ候はんすると。

一女子の庶子より惣領への書札之事。恐惶と書候て。上に北方へ參。高木へ參。其所を書候て。人々と書事も候か。貴報と計以前之様にも書候。親類兄弟え書札にも。是にてれうけん之事。いかにも散候て可書候。禮番なく候者。裏をのそきて。又官をこそ裏に書候すれ。らしい様候としらへへく候。書とゝもに御披露を申上候狀にて候者。奥及こと／＼く私の文様書候て。一かう上の字を畧にて書候て。恐々と書て。時分代官又ハ近習者名字書候か能候。其時は此むね披露とも不書事。

一從聾舅への書札之事。ゆめ／＼家など片腹いたくおもひ候共。聾になり候上は。恐惶と可書候。



一其女房は吾女に候へく候程に。書札をしとけなく書候か能候。聲の方へもむこの父の方へも。我姫之事書候て遣る時は。子にて候物なと書候はんする事。不學候へく候。御前と書候事。殊女中（脱文）可有候。聲之父方へハ何某所御前と可書。

一主人親方之前にて。私としてとかく禮を一中さぬ候（闕文アラシ）

一物を食候時。口音高く不食事にて候。但亭主などのをと料理候て奔走候時。口音たかくたふる事にて候。其さへ若衆などは。時の義によるへし。

一小路金中不通事にて候。若中を行候共。人に逢候は。はしへより候て。禮をするなり。

一ひや汁給様にすはぬ事なり。それをひやしるこほしと申也。

一ゆつけに汁を添候を。口傳に申候へとも。さ

せる様なく候。只汁をすわぬ事にて實計食候。

一疊紙折て進候はんする時は。三に折て。又よこに折て。折めをしかとハ付ぬ事と申。猶折様候歟。

以東京帝國大學史料編纂掛本膳寫校合畢



群書類從卷第六百九十四

武家部四十

鳥板記

一鳥を板にすゆる事。惣別包丁の事は。進大。  
大草雨流あり。鳥のくひを。鳥のひたりの方  
へ折てすゆへし。出候同じ事成へし。又雉子  
鴨などの類ひを。飼臺にすゆる事あらは。い  
くつもならへてすへし。同事成へし。鷹の鳥  
又は鉄炮などにて打たる鳥は。田の物山の  
もの何れもかけて出すへし。其時は前にあ  
ることく。かいくち矢めを。人の方へなして  
出へし。

一笛を人に可出事。別條なし。然ともふえは  
古物にて。一段をれやすきなり。如何にも  
とりあつかひを靜にすへし。家に入たらは。  
家ともに出へし。若ぬきて見るとき。主貴人  
それを見んとあらは。うしろの方を我。已下  
闕文。  
一小鞍出す事。是もむさとしらへなごを持て  
ありく事。一段嫌ふ事也。しらへちともちか  
へはならぬ物也。持所を上へなして。うつか  
たを主人の方へ成様に。うたぬかたの輪を  
もちて。そご御前へ置也。かりそめにもかわ  
しらへいらふへからず。

一大鞍の事。是も小つゝみと同前。乍去はしらへなと持ても。しめて置ものなるあひたくるしからず。然ともたゞ小鞍のことく持たるかなんなき也。筒繩を掛てもつへし。

一太鞍の事。太鞍を右の手にひつさけ。はちを二つなから左にもちて出すへし。扱人の前にはちを右に。太鞍を左に可置。又我太鞍を持て出る時は。右の手の太鞍に。はちを持そへても出るなり。但舞臺へ出る時は。ひたりの手に前のことく。大こにはちをもちそへてもちて。右の手をははし掛りにてつきてとをるへし。

一ひわを人に出す事。人のひく時の様にいたきて。くひをひたりの手にて。たてににきりて。右の手。はちめんのうへこして。いその方をかへて。たいの方をたゞみにたてゝをしまわし。ひわをあをぬけて。海老尾の方

を。左に成様にわたすへし。

一まんちうのくひやうの事。先惣なみに汁を請て先待へし。扱そうへしるをうけわたしたるとき。右の手にて。はしを二つなからもち。まんちう一つとりて。兩の手にてわりて。ひたりにもちたるを下にをき。右にもちたるをひたりへとりわたし。わたして。右にてはしをもちなから。左に持たるまんちうをくふへし。いまたくはんどおもはし。前に下におきたるを。又どりあけてくふへし。はれくしきときは。明たやうにくひたるもわるし。扱てうしの出たるを見て。そうのもの。はしを下に置いて畏り。ひさをなをして。酒をしきたひあるへく。年のよりたる人などは。しるにかうとをも入。又は事によりしるなとすふ事もあれとも。わかおさなき人は。しるをすふも。何と哉覽見にくし。又



下かへを上へなして。二つに折て。ゑりを人の方へなすへし。二つ折の折め。我右へなすへし。あはせあれば。かさねたるかよき也。小袖計なれば。いくつあれとも。かさねすして。おなし様にたゝむへし。又臺につむ事あれとも。少こゝろにゑりめかたへよせておめらかして。かさねてつむへし。又ひろふたもしはからひつのふた。なとに入て。出てわたすへし。其ときも。先ひろふたからひつのふたを下に置て。上なる小袖計とりていたすへし。右の手にては。ゑりの方の下をかゝえて出すへし。さるかく。てんかく舞まひなとに出すときも同じ事成へし。又帷子なともかはる事なし。同前なり。又はかま。かたきぬの事。はかま下に前こしを上へなして。二つに折て。よこに置。その上にかたきぬを。小袖のことくにゑり

のかたを。我ひたりのかたへなして。はかまの上におきて出すへし。是も物のふたにすへたらは。ふたをは下におきて。上はかりとりてわたすへし。かたきぬ計を出すときも。是もおなし事違ふへからず。はかま計出事有れとも。おなし事なり。又野山などにて。何もすゆる物なきとき。あふきにもすへて出すへし。但あふきにすへたらは。扇をは下にきて。上なるかたきぬはかま。或は帷子。とうふく以下の物計をとりてわたすへし。

一着樽披露の事。まつしやうしんの物より上におき。次に烏を置。さて魚を置て。つきに樽を置へし。かやうにならへて置て。つかひをもよひ。又はその主をもよひて。けんさん有るへし。たどひ状文にてもおくととも。披露の仕様同事たるへし。

一湯つけのくい様の事。是も先。湯をかけて惣を一合先下に置いて。さしきの衆ことくく湯をかけ渡し。扱はしをとりてくふへし。めしをくひて。扱ひたりの手さきに。かうの物有物也。まつそれをめしのくちにくふ。それより後は。いつれのさいをくひてもくるしからず。しるをくふ事。年などよりたる人は。すいてもくるしからず。わかおさなき人は。しるをすふ事わろし。しるのみをくふ事。それもくるしからず。さてさいしんを。如何程も我こゝろまゝにかけへし。しやうとくは。ゆつけにかきりて。くひはてやうあとに残さす。皆くふ事本なり。さりながらそれも年のよりたる人の事なり。若き人なとは。残して更にくるしからず。

一めしのくひやうの事。是も別條なし。さりなからめしをくひては。まつさいの真中なる

をくふへし。さいは如何程あらんとも。一番にまん中なるをくひては。後にはいつれをくはんともまゝなり。いつれに是も前にしることく。くひにくきものはくはぬかよきなり。二三のしるありとも。餘り手遠なるを。及越にてくふはわろし。さやうの事は。しるすに不及。たしなみに有事也。

一鷹の鳥のくひやうの事。はしめを一きれば。しにてはさます。手にてくふへし。のちくははしにてくふへし。それも鷹の鳥とことはをつかわねは知かたし。ことわり有ときの事也。忝といふ禮も。年のよりたる人などは。禮をいひてよし。わかき人はなとは。あまり禮をいひたるも。こひ過てかへつて見くるしき事有也。

一すひ物くひやうの事。銚子出たるを見て。扱持上て人ことに。先しるをすひて後にくふ

也。是もわるく。先しるをすはぬ先に。そと  
みをくひてのち。しるをすふへし。是もわか  
きものなとはあまりすふ物なとを。つよく  
みなくふ事もわろし。見計てよき程にくふ  
へし。

一かたなを人に出す事。むかしは下緒を。折か  
ねの上くりかたの下まで。まきて置いて出し  
たり。今はさやうに仕たるはわろし。たゞ其  
まゝなりながら。かたなにもちそへ出すへ  
し。置やうの事。太刀のことく。むねのかた  
を人のかたへなして。よこさまに置へし。も  
し又主人などの人に遣はさんとて。こわれ  
は向ふより出さは。右のこどく又主人の左  
の方より出さは。むねの方を主人のかたへ  
成やうに出すへし。又右の方より出事あら  
は。はのかたを。主人の方へなるやうに出す  
へし。是ははやすくにさゝるやうに出す心

なり。太刀もおなし事たるへし。惣別何を出  
すとも。中にて人に物を出すときは。ひたり  
の手を先になるうやに出すへし。但前にし  
るすことく。右の方より太刀かたな出す時  
は。右の手先へならぬはかつてわろく。ひた  
りより出すときは。必々左の手先へなるへし。  
一わきさし出事。是はむかしは。ちいさかたな  
たるなり。わきさしなき物なるあひた。かた  
など同じ事なり。又刀脇さし太刀かたなの  
ことくくみて出す事。是又昔はなき事也。乍  
去當時かたな脇さし一度にいたさは。太刀  
かたなのことくくみて出すへし。脇さし上  
に可有。これも無定法間。何としたりともく  
るしくも有ましき也。

一御簾かくる事。神前の御簾は。かきこまるそ  
とにあるへし。人間のかくるみすは。かきこ  
まるうちにある物なり。然間。まく時も内へ



卷て。内のかきに懸る物なり。若かきなき時は杉原にても、別の紙にてもたゝみて。御簾の間へ入て是も内へ卷て。其かみにてゆひて置なり。えんへ出て。そとより内へまくへし。つくはひて卷こむへし。

一人の前へ出て禮をする事。先扇子はぬきて出へし。座敷をありくに。餘りねりたるも見にくし。又餘り足はやに歩も見にくし。よき程に歩て。扱主人を見付て。頼てつくはい。主人との間近くは。さいよりこなたにて禮をすへし。主人との間に座鋪もいまたへたり。程とをくは。さいより内へはいりて禮をすへし。年のよりたる人などは。兩の手を合せておかむやうにして。ゆひ先をくみて禮をしたるもよし。去なからわかおさなき人は。左様にしたるは。餘りこひ過てわろし。兩の手のひらを。たゝみに付て禮をしさま

に。兩の手を我か前へ少引て。扱禮をすへし。たゝみにあたまをつくほと。いかにもいんきんに禮をすへし。餘又久しく禮をするもわろし。又あまりしやつぎやくにあたまたかきもひろうにわろし。能々心を付て慇懃にすへし。歸る事は。前に注す如く。いつ方へ成共。近きかたへまわるへし。左右何方へ成共。まわる方のこなたの手をつきて退へし。右へまはれは左。又左へまわれは。右の手をつきたるかよし。立様かん要也。書のせ難し。

一まな板かきて出る事。賞銜の人きよとうの方をかくへし。いた紙も先折かみのことくよこにおりて。其折めをは前を前へなし。それを又二つにたてにおりて。その折目は。きりての右へなるへし。きりての左の方に。はしを手かたを上へなし。二ツならへて置。かたなのうらを上へなし。箸の右の方に

ならへて置なり。又流によりて。板紙のたてのをりめの内へはしを入て。其上に。かたなおもてを上へなして置流もあれとも。大草流にかきりて。其儀なし。扱兩人して。板をかきて出。魚かしらの方。先へ出すへし。さて跡かきたる人は。頓て退なり。魚かしらの方かきたる人。板のゆかみ又は板のかたひくなるを直すへし。かたひく成るなをりかぬれば。鼻紙をかいて能々ろくにすへし。此ときも。のきさまに手をつきてかへるへし。左右の手の事は前に同じ。いつれもときもちかうへからず。

一板紙の事。大略杉原なるへし。若引合なとする事も有やらん。近年不及見也。或は鶴白鳥の時も。別の事なし。去なから此時も。先かきたる人賞翫たるへし。

一包丁はてゝ後。本のこくとく兩人して。板をか

きて歸る時鼻かしらの方かく人。まなはしをとりきたる魚又は鳥なりとも。よくくつしてかきてのくへし。是はいたくはりを人に見せしかため也。それもあまりことこまかに念を入過たるもわるし。大□能程にすへし。

一御とをりも出。又はおり臺の物などを持て出たる時も。かえりさまには。貴人などの前のとをりならは。かならず手をつきて通るへし。いつれも役にしたかふ時。斯様には手をはつかぬ也。かへり番の事なるへし。

一こしそへの事。左の方賞翫也。左のうちにてもつの本とて。こしのきは。なを又しやうくわん也。

一神前にて御へい請取。主人にいたゝかせ申様の事。神主のかたより立なからうけ取。左の方をあげ。右の方をさけて持て。御前にて

かしこまり。御へいをとりなをし。我右をたかく持て。うへの方をとらせ申へし。主の御左の方へ。へいかみのなひくやうにうけとらせ申へき也。御拜過て給時はちかにて又取直し。本の如く左をあけて持へきなり。

一願敷いたゝかせ申事。さきの御主にあたらぬやうにいたゝかせ申て。扱頓てさきを折て持て歸る物なり。くわんしゆのさき惣別人にあてぬ物也。きをつかふへし。

一すゝにて酌する事。當世の兩の手にて。下をとらへてする事。一段ひろうの事也。右の手にてすゝのほそき所を持。左の手にては。下のふくれたる所を持てすへし。是も先は右のひさをたてへし。但ときによるへし。

一碁はん將碁盤持て出る事。何時も先あかりをよこによく見つくりて置へし。碁はんの上に。こけを置なから。わるくもてはすへ

りておつる物なり。持にくきとおもはゝ。碁はんを先持出て。後にこけを持て出。上に置へし。上に置とも。北東に向を置様にするといふ説有。但それもあまり物しり顔にて。貴人などの有時はわろし。たゝ何となくなき方に。たてにこけを二ツならへて置へし。將碁のはんもたてに置事同し。馬の箱置やう別の事なし。上に置て退へし。馬をたてよとあらはたてへし。

一巻物臺にかゆる事。とんす。きんらむ。しゆすなとの類をすゑて出すには別條なし。たてに常の如くすへて出すへし。丸はんなどにすへて出す事あらは。其時よこにすはらてかなはぬもの也。

一杉原の上にあふきなとすゑて出る事。常の儀也。別の事なし。乍去杉原にはひほ有へし。杉原をたてに三ツに折て。なかくつき

て。上にて常の帶をすることく。兩方にわなの有やうにむすふへし。其上に扇子を包てすゆへし。何ときも上の杉原の紙の折目。人の右の方に有様に置たるかよし。必定法にはあらね共。如此したるかよき也。

一御手水かくる事。先はんさうに水を入て。つ  
のたらいの中に置。その上に御手ぬくひを  
たゝみの置<sup>(てカ)</sup>へし。その手ぬくひをとりて。扇  
に打かけ。御手水をかけ申也。かけはてゝか  
たをよすれは。その手ぬくひをとりて。御手  
をぬくわるゝ也。公方様御手水は。女房衆上  
臈の御役也。御成などの所にて御供衆の役  
なり。其内にて御もんなどさた有人のや  
くなり。

一太刀折紙を披露の事。人によりて相違する  
なり。客人を賞翫の時は。まつ客人をよひ  
て。後に亭主出る也。其時。太刀折紙を持て。

いて、披露すへし。常には亭主出て居て。太  
刀折紙を前に置て。扱客人出て禮をいふな  
り。太刀折紙にかきらす。惣別にしやうたい  
の時も。此心有へし。貴人をはよひ入て後  
に。亭主出るか能なり。

一具足鞍あふみなと。人の給る時の事。よの物  
のやうにこゝろやすくいたゝかれぬ物なる  
間。等輩の時は。たゝ忝と禮計をいひて禮を  
すへし。主貴人の給りたる時は。それに手を  
かけて。手のきはにて禮をすれは。則いたゝ  
きたるになる也。そのもやうかん要なり。

一刀。わき指貴人の給時は。いたゝきて取て。  
退なから指たるをぬき。そはに置て。則拜領  
のをさして。又置由を申て禮云也。

一小袖。帷子。袴。かたきぬなども。主の給りた  
るときは。いたゝきて取て。立かけにて是も  
着して。頓て出て置由を云也。

一 敷皮しく事。すそを我前へなして。毛のかたを上へなして。よこさまにかしこまるへし。  
一 ひつしきの事。是は尾の付たる方をうしろへなして。毛の方をどへなし。うらの方をしくへし。結の付たる方を。少し内へ折返して敷へし。前の時敷様は各別なり。  
一 ゆつけの時は。必先へ出る。食の時はのしはてて盃いつる。扱酒はてて銚子をとりての出る也。

一 御つけのごきも。かならず後に湯出すへし。當世いてぬといふ沙汰もあれとも。必いてとてかなはぬ事也。

一 鷹の請取渡し様の事。流々あまたあれども。先誠訪流の事は。鷹をすへて居る所へ。うけ取人來る時。先餌袋をときて。緒を右の手にまといて渡す也。さて鷹をわたし。扱其後。むちを渡也。鷹の渡様の事。大緒のふさ

のある方より。右の手の内ににきりて。ふさの見へぬ様に持て。右のひさの根に。右の手をうつむけて置也。うけ取人來る時。渡しはせて人の請取まで待て。うけ取ごき。その儘渡す也。其後。むちを餌こみの方より渡す也。うけ取人。平人なればむちをあてぬ也。但右につすめく。或はせいらい流以下又もやう可替。

一同請取様の事。餌袋を出すを。先うけ取てこしにつけ。さてわたす人のそはへよりて。右の手に大緒を持たるを。右の手にてとりて。扱鷹をうけ取なり。次むちを取て。先わきへのきて。扱大緒先をするなり。其後むちをあて。則こしにさしてのくなり。

一 主貴人などへ渡ときは。是も大緒右の手に持て。左の手のきわへ。右の手をちかくよせて。鷹を大緒を一度に進上するやうに渡也。

如何にもしんたいやもふへし。

一むちの當やうの事。大鷹は身よりひとつ手先一尾もみより。一ツ手先に一ツ。又身よりから打いたす。以上五ツなり。是を五方のむちといふ。またせこしのむちのあてやうの事。たゞ先よりあて□□そめて。又手元の尾にてあておさむる也。左右のちかひ計なり。あてやう前に同じ。小鷹も同前か爲なり。

一かりほこのゆひやうの事。人のちのとをりにゆふ物也。但犬ねこの用心なる間。人のかたのとをりにゆひたるかなをよき也。木の本の方を何時もつなきに寄人の左へなるやうにゆふへし。横のひろさ不定。座敷の方へよこ木のよこに成様にゆふへし。左手の木はよこ木のむかい木の方にあるへし。繩にて十文字に二ゑにまわしてむすひ。座敷の方にてきるへし。木の事ハくぬ木の本な

り。去なから左様に俄にはなき物なる間。槍の木又は杉にてもするなり。ほこたれの事。俄の時はむしろにてすへし。かりそめにもたぬきのかわなとにてはせぬもの也。

一鳥かくる事。是も右にしるすことく流々有。去なから諏訪流には。田のまへ山のうしろとかけへし。おん鳥はまむすひにして。みふせおきて。扱さるへし。めん鳥はめなこむかひにして。右の寸ほとにしてきるへし。結様の違計なり。節分より前は丸ふしにてかけ。節分過ればわりふしにて懸へし。是第一の秘事なり。

一田物の事。繩にてかけへし。寸法の事。先いづれもまむすひにして。鳥のはしにくらふるといふ法なり。去なからそれは鳥によりて餘りなかれる。見計ひて能程にすへし。一鷹つなきやうの事。大鷹は七くさりせては



五くさり本也。是を略して。常には大鷹を五くさり。せうは三くさりにもつなくなり。本しきには。前のことくなるへし。

一鶉を竹にはさむ事。七ツ。九ツ。五ツなどはさむへし。はさみ様の事。そきてその間へ入て。先を紙よりにて結ふへし。若又萩にはさむ事もあり。それもはさみやう。竹のときはおなし事成へし。たとへ萩にはさみたりとも。いくさはとはいふへき儀なり。

一かやうのものの披露の事。是も別條なし。はさみなから棹ともに持て出て披露すへし。座敷のたゝみに懸たるよりも。そはに立所さへあらは。立て置いて披露したるかよきなり。去なからたて所なくは。下に成とも置へし。いくさは有とも同し事たるへし。

一どりかひの事。是はいち竹の本にはさむへし。

一かりそめにも鷹を据ている人のうしろをとをらぬ物也。むかしは鷹匠。鶉つかひにあへは。何たる人も下馬してとをるなり。左様にあれば。必鷹匠もいかほど道遠くとも。人をやりて馬にめされよとの時宜なくて叶はぬものなり。必鷹師むちをぬきてかなはぬものなり。

一こしと馬との時宜の事。とかく是は人によるへし。こしからも馬にあひており。馬からもこしにあひておるへし。更にこしにたいしての時宜にあらず。乗てによるへし。去なから女房衆出家などは。一向各別の事なり。何篇こしにあひたらは。輿をよく道を通して。馬をはわろき方へ乗のけて通したらんに。少もほうへん不可有也。

一勸進能。くわん進舞しはいにて。さるかく。てんかく舞まいに。或は太刀或は長刀など

つかはす事有。それも前に注す如く渡し様。別の事なし。舞臺へ持て上るはわるし。人の中より左様の道具を持て行は。かならずさるかく出て請取也。ゆめく舞臺へは持てあかるへからす。或は花。又は出家のけさくわりの様成物を。いたきるゝとも。それも大畧おなし事たるへし。

一折。食籠の物に。かめあしの有物は。かならずはしにてはさみてはけさぬもの也。則そのきそくをくはて。又龜足にさしなからくひて。龜足計をぬきてもよし。龜足をそはに置いて。歸る時取て歸へし。年のよりたる人なとは。龜足などをふところへ入ても不苦。但若おさなき人は。そはに置いて能なり。加様の事。何も是に同し。

一當世人の前へ出て。盃をのむとき。先出てのまぬ先に。かならず禮をする人おほし。中に

しらぬ時宜也。只なにとなく吞へし。我かのみたる盃を。貴人聞召は。それはいかにもいんきんに禮をする事。勿論定たる時宜なり。一軍陣又は首途などの時。かわらけのひねりとめとて。たてにかならず筭ある物なり。其方を前へなしてのまぬ也。是は新敷かわらけのいまた人ののまぬ先の事也。人ののみて跡は。いつ方にてのみてもくるしからす。一袴をきたるに。當世必前こしをあてゝ。後に足を人ことに入る也。一段といむ事也。先左の足よりふみ入て。扱右を入。其後前こしをあつる物也。さうれいの時きるいろはかまのこしを。かやうにあつると云也。右より足を入る事も此時の事也。

一鞠を常にはさみて置を。人毎に鞠はさみと云也。飛鳥井との松の下なとも。こしをはさみと云たるかよきとなり。

座に立へし。一、双立るとも。かた／＼宛のちかひめなどの左まへにならぬ様に、右のさきへなるやうに。念を入れて立へし。

一、火はちに火を置事。むかしは書院おもてむきの座鋪には。たて炭とて。すみを立て置たり。惣別左様の炭を火はしにておかす。手にて置へし。去なからこしらへたる炭をは。手にて置へし。こしらへぬは火はしにておくといいり。こしらへたる炭といふは。よく／＼ぬくいて。手に炭のつかぬ様にしたるを。こしらへたる炭といふ也。是をは必手にて置也。然ども火鉢とたいとの間に。火はしはあるなり。

一、かゝりに立所の事。先軒を賞翫とするなり。軒はきの方しやうくわん也。六人の時は。軒に一人立間。なを／＼賞翫の事也。扱は貴人の間。又は貴人の御立候本こしとて。貴人の

木をへたて、立事も。賞翫の事也。一、或は馬に乗に行時か。又は馬を引て出時など。なかきはかまをきたらは。兩方の袴の前をよくおしかいておくへし。これをこもゝたちといふ也。

一、かゝりの中へ馬を引籠事。座敷のむかふよりひきこみたるもよし。但平地門などよこめにあれば。則そのよこの方より引こみたる不苦。軒とかゝりとの間をのけはくるしからず。別て歸る時も同じ事なり。

一、さかなの目録などに。鳥いくつかひ。魚なんこんなどゝかき。鯉。ふななどは。一折とも又は一ツ。二ツ。十。二十などゝ書へし。たい鮒などの類も。同事たるへし。

一、包丁かたななど。常にも又狀にも文にもなんまひと云。これも大平流にはたゞいくつといひたるかよきなり。

(を九)

一さけほのむすひやうの事。おとこむすひ色々の當世むすひ色々有。たゝ人のものをきたることく重て。一むすひ結たるかよき也。刀は上の方へむすひめの有様にむすひて。刀のさやにかゝりて。扱下へさかりたるかよきなり。これもちかへやう前のことし。

一色の事。定法なし。いか様成もくるしからす。年の寄たる人も。くれなるのさけほくるしからす。前々いかほとも。年よりたる人さけられたるを見およふ也。

一ひきめさけほの事。必ゑひさやまきにさけたるなり。去なからさやまきにあらねとも。うら打の時は。かならすひきめさけほにてありし也。これもゑほし。かみしもの時。ちさ刀にはさけられたり。是も如何ほとも見及たり。ゑほしかみしもの時も。刀のつかまかぬ物也。放目貫たるへし。

一主貴人の前にて。傍輩の盃をいたゝかぬ物也。去なからさかなをくるれは。それは必いたゝく物なり。同親兄弟などのさかつき。外人の前にていたゝへからす。

一主貴人の前にて。親の名を云たるよりは。たゝおや者ものといふかよき也。名を云は。親を賞翫の心なり。

一當世の人つよく名乗をほんにいふ事は。其身をさけていふときは。かならす云たるかよき也。御内書などにも申すか。又は御使の名字をあそはして。そんちやうそれ可申とあそはすは。さやうにひけもせず。名乗をいふ事有へからす。御内書とは。公方様の御書の事也。

一主貴人の道具。或は鞍鐙。或弓。うつほ。鍵。長刀加様の物を。主人の小者中間などに渡事。こなたの持て出やうは。前に注すことく

也。くら燈のやうなる物は。とをさふらひに  
置て渡すへし。手渡しを中にてする事大事  
也。道具といひ。又はかやうの物は。ちうに  
て渡されぬ物なり。下に置て渡すへし。鍵。  
長刀。うつほの類ひは。手渡しをもすへし。  
其時はとを待まで出て渡すへし。たとひゑ  
んの上。又とをさふらひの上より渡す共。お  
り候はんつれともと言葉をつかひて。上よ  
り渡すへし。其詞をつかはすして渡せば。人  
によりておりられよといふか。又は請まし  
きなといへは。渡す人の越度なるへし。能々  
心得へき事也。是も主人の中間小者たる故  
也。惣別に渡す時も。鞍などの紋所以下をも  
見せ。鍵長刀のなくなとおも念を入れて渡  
すへし。又うけ取ときも。よく／＼見てうけ  
取へし。

一きうしはい膳の時。かり染も物を云へから

す。つはき膳へ入るもの也。殊更主などの前  
を給仕せは。猶以。其おそれをおもふへし。  
一人の刀を見る事。むかしはかならず小刀か  
うかいをぬきて。扱刀をぬきたり。是はあひ  
てへの用のため也。覺をいたして置心也。  
さりながら當世は何とや覽。それもこここ  
と敷見へてわるし。去なからかはぬけは。  
かうかいなとに。つはのつかゆる事も有間。  
さやうの所によく／＼心をそへてぬくへき  
なり。刀を見せられたらは。先その儘ぬかす  
とも。つか。へり。さめつは。其外めぬき。か  
うかい小刀以下をも。こと／＼見て。扱刀  
をぬくへし。ぬきはなしやうに。すこしさや  
をきつさきの方へ。はやくぬきはなしたる  
かよし。但それも餘りあらくぬきはなした  
るも。目にたちて見くるし。是もよきほとら  
ひあるへし。扱刀をぬきはなして。先さしお



もてより見て。扱さしうら又はむねなどを。よく／＼見へし。もし刀にきすなとあらは。其所を餘り念を入れて見たるかわろし。其きすへはわざと目をやらぬやうにしたるかよきなり。扱しつかにさして返すへし。若前にしるすことく。かうかひ小刀なとつかへは。ぬきて置へし。ぬきて置たらは。刀をさして。扱かうかい小刀さすへし。又人の方よりぬきて出されたるを。さやにさしてかへすときは。刀のはの方を我前になし。むねの方を人の方へなして。兩の手にてよく／＼持て渡すへし。左の手をはつか／＼しらに添て出すへし。渡す時は。兩の手をつはのきはへよせて。つかかしらを。人の取やうにわたすへしといふさたあり。これはもし手なとすへりて。刀のかたへはしりてはどの用心也。去なから是は道理はさもあるへきにや。た

ゝ人なとへ渡すときは。つか／＼しらへ兩の手をつけて出したるか能也。異説とてかうの事はりをせめて。けに／＼敷いへとも、た／＼かやうの法のなき事は。しつべきたり。又は見てみよきやうなるかかんやうなり。あしくこれはとりおとすものなり。能心得へし。

一あふら火をかきたつる事。定法なし。何にてもかきたつる物あらは。それにてかきたへし。もしいつれかかきたてもものなき時は。小刀にて成共かきたてへし。惣別小かたなのはの方にてあしくかきたつれは。火のもゆるかたをきりて。下へ落すもの也。誠に右に注すことく。かきたてもものなきときは。小刀の先にてむねのかたにて。かきたてにくきものなり。はたて引よするやうに。かきたてたるか能也。其後。油をさしたるかゑんよ



きなり。かきたてす油をかはとさせは。其まゝ火きゆるものなり。

一たうたいを持て出る事。大略しよく臺に同し。右の手をは上のさらのきわへあけて。左の手にてはしらをもつへし。とうたいを持手をさけて持はうわかふきにて。あふらつきおつるものなり。是も能々かねて心をつかふへし。

一たんけい持て出る事。當世はやる物也。油火より上へ出たるはしらのさきを持也。それもとく上へ計わろくあくれば。あふらつき落るものなり。ちとあふらつきの方を。すくひあくるやうに。こゝろを付て持へし。左様にあれはとて。あまりあらけなくすくひあくれば。又あふらこほるゝ物なり。かやうのことは。法の外時のきてんかんやうなり。

一主貴人の御茶を給る事。當世のはやりもの

なり。數寄屋へはいりての作法は。定而いるゝ品々有へく候。去なからはやり物にたもあれ。もしおさなき人のあまりしる食なごを。あらいたる様に。きれいたてをして。皆くひたるもなとやらん(に脱カ)こひ過て。見にく

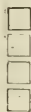
き様にもあるへきか。能ほとくもあるへし。扱茶をたて出されたらは。先のまぬさきにいたゝきてのむへし。茶の色なども。餘りつよくほめたるも。あまりこひ過たるやうにあるへし。そはにある人にむかひなとして。すこしはほむへし。のみはてゝは。いつれもそのたてたる人に。禮をはしたるかよきなり。

一あしなかに禮はなきものなり。いつかたもあしなかをぬく事はなき也。公方様なとへも。御ゑんのきはへはなくなり。去なから又ことによりて。はかぬ事もあるへし。わらん

しも禮はなきといえり。

一人の前にて。きんとんくふ事。れうしにくらへは。中成さとういてゝ。かほへかゝる物なり。其用心をしてくふへきなり。さを少しくひきりて。さとうをいたして。のちくうかふよきなり。

一ふるきの云置しは。しゆりしもれうしにくゑは。しるかほ又はゑりなとへかゝりて見くるしきものなり。これもすこしさきやくひて。先しるをよくすふやうにして。その後くひたるかよきといひならはせる



一□小袖の事。おり筋はかならず正月。あひ染は九月九日。紫の小袖は。大畧いのこに用たる也。但正月などに。あひそめの小袖をきる事も。いか程もありしなり。去なから大かたかくのことくなり。

一四月朔日よりあわせをきて。五月五日より帷子をきる也。又九月朔日よりあはせをきて。九月九日より小袖を着也。惣別わかきものなど。さむき時。うすきいしやうはくるしからず。又夏あつき時きるものなどさる事らうせきなる事なり。若八月すへなとに寒き時は。病者なる人は袷をきたりと。其上に帷子を重て可着。

一瓜をむきやうの事。昔より云傳へたるは。左の指三本にて持。六ツ半にむくといへり。去なから今は餘り左様なる事もいかゝ也。又ふりによりて。左様にむかれぬ事あるへし。扱上をうすく切て。一きれくふへし。今は一きれきつて。くひはせてすつる事也。一向いはれぬ事也。是はむかしよりくふか時宜なり。かりそめにも切りはなしたるを。小刀の先にさして出す事。努々あるべからず。惣

別瓜にかきらす。柿栗にても。小刀の先にさして出す事有へからず。殊更貴人主人に斟酌すべき事なり。

一水無月迄は。瓜をはたてにふたつにわりて。扱よこに切へし。みな月よりは丸く。そのまゝ輪切にすへし。

一人をどふらふ書狀の事。とめはに猶期後音之時。尙以面可中なとある文言をきらふ事也。扱上のふうしめに。墨を付ぬもの也。然間。常の狀のふうしめに。墨を付ぬ事を嫌也。もしわすれて墨を付ねは。こちにてすみをつけてひらくへし。

一れん書れん判といふ事。書狀にありといふは。大勢判をするをいふ。れん書といふは。大勢の宛所にして。名を書いてやるをいふなり。れんはんは。日の下かきたる物なり。おく次第に賞翫の人。判をすへし。去ながら時

の亭主か。又者事によりて。その時のとうりやうを取様なる事あれば。その人。日の下をする有。連書といふはかならずはし次第に。先賞くはんの人をかう也。

一樽代披露の事。二十疋は中に持ても。披露してもよし。百疋。貳百疋などは。下に置て披露すへし。但百疋は二ツ宛わけ。中にても苦しからず。か様の事は見にくからぬ様にすへし。法の外也。

一新き墨を摺はしむる程先の事。いろ／＼説有。乍去兎角字かしらを。上へなして摺たるかよきよしひ侍るなり。龍のかしらを海へ入たるかよきなとゝいへとも。たゝ右之分可然なり。

一辻堅之事。御通ある横小路の方をけいこする也。その方に幕をはりて居るもの也。そのときの幕のはりやうの事。御とをりある方

に。まくくしをたて。その御通ある方に。し

きかは敷。太刀を持居る也。太刀を左のひ

さの上におきて居る也。扱主人御通のとき。

まくもあけ。太刀をしきかはの上に置。敷皮

より下りて。かうへを地につけて通し中也。

御通あつて。頓て本のことくあるなり。御供

の衆のときは。しきかはの上に居へし。その

まくのはりやうは。そとをけいこの故也。

一座鋪にたゝみ敷へき様之事。本をは何てう

敷共まはり敷にしく物也。かならず床の前

を上をよこ疊にしく物なり。よこたゝみ四

帖ならへては。しかぬ物といへり。

一座敷へ持出す事。五献。七献。六献より見は

からひていたすへし。

一さるか。てんかく舞まひふせひに折紙つ

かふ事。亭主のやれは。名を云に不及可遣。

別の人遣時は。そんしやうそれと。なをいふ

てつかはしたるかよきなり。

一餘所より使兩人來らは。かならず兩人して

聞たるかよきなり。但それも事によりて。一

人して聞事もあれとも。同は兩人して聞へ

きなり。

一唐布のかたひら。平人いかなる人きてもく

るしからず。

一御こしの供するの時。しきしやうの時は。雨

のふる時。必ず御こしにゆたん掛る也。その

とき御供の衆も。それをあひすに傘をさへ

也。ゆたんかゝらぬ間は。何とふるとも。か

さはさゝぬなり。(脱アラン)時はさすましきなり。當世

笠を着るも同事也。

一常に人のよくいふ事也。名人と云。是はむさ

といふましき事也。萬達せぬものはいはぬ

事也。何にてにも。そのしる事によきをば。

上手と云へし。

一主人などに物を申時は。ろくにむかひては

いはぬものなり。是はいきを主人につきかけましきためなり。よふしやあるへき事也。

一たてすな二つの間をはむさをとをらぬもの也。兩方のわきより通るへし。

一まわり酌といふ事は。我のみて則わか酌するをいふなり。たゝかわりゝ酌するをはいふへからず。

一打刀計をも人に出すなり。太刀のそはてかなはぬ事にてはさらになし。太刀よりは結局賞翫すと云也。進物などにも是同じ。

一飯しるに。さいしん引事。しるをかけて後は。引事無用なり。去ながら所望有てならは各別也。

一山の物と田のものご一度に出す時は。先山の物より出すへし。但其中に鶴白鳥などあらは。まつそれより出すへし。是は一かと賞

翫の事なり。

一狩杖切様の事。せこのは我乳にくらへて切へし。主のはかたにくらへてきる也。木は榊本也。但梅栗の木をも用る也。諏訪流に如斯也。又むるなとをもするなり。

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢



# 魚板記 一名魚板持參之記

魚板持參之事。たとへは兄弟して持參候はは。首の方は兄。尾の方は弟と可心得。退出の時は。後しさにしさり候。御座敷末にて左の方へまわるへし。左とは首の事也。

一白鳥其外。臺に置候鳥。可懸御日事。兩人してかき可申。然者左の頭の方を兄。右を弟かき可申候。扱頭の方を可掛御日。鳥は必々左の羽裏へ頭引まわして如此也。魚板には替候也。

一鷹の鳥可掛御日事。鷹の鳥にかきりて。尾の方を御前へ成し申候也。然者かいくちは御前にて。右に成候也。尾の方を御前に向候事は。鷹の鳥にかきりたる事なり。

一鳥を臺に居候は。横目に居可申。板目に居中間敷候。春は女鳥をはしに居申へし。

御前男鳥女鳥御前より御覽して。右に女鳥可有之。

一臺に居る魚。可懸御日事。是も兩人してかき申候は。御前の左をかき申者。兄たるへし。則魚の頭の方なるへし。退出には左へ可罷立候。右へ立候へは。尾の方御前へ向候間。不可然候。

一同一人して持參候時は。我か右へ頭をなし。腹を御前へ向て持參候へは能候。此時も左へまわりて退出候へは。尾の方御前へ成らすして可然候。魚を臺に居候は。臺のふちの合目を。魚の脊の方へなして能候。

一御樽披露の事。目錄を以て披露申候間。懸御日事は。殿中にてはなき事也。私にては樽を懸御日事可有之。自然口の候樽を。口の方を我左へなして。可懸御日候と申儀候。ゆめ殿中にてはなき事なり。



一花を包候事は。定りたる法意は無之候歟。大形板の物なと包候折様のことく折て。末の方をせはく折て包候事可然候。草花は少し相替事も可有之。必々水引にて可被結候。

一花を懸御目事。右に持候て。左を添候て可懸御目候。草花は物によりて。花の方を下けて持參申。於御前立候て。懸御目申事も有之候。

一板之物なと又帶以下包候事難注。直傳とす。

一扇を包候事も。是も難注。直傳とす。扇を包候は。水引にて結候事有間敷にて候。

一せん香はしきんなとの様成丸き物を包候て。水引にて結候は。かたわなに結候由。専公家中にも被仰候。左様可有之事也。然者輪のかた。我左に有へし。口傳。

一硯箱並料紙持仕事。(參脱)文臺候は。文臺の上に硯を居。別々には有間敷候。前より座敷。又

は押板以下に被置候事も候。料紙も同前に候。文臺無時は。二色持候は。硯の上に料紙可有。筆架文鎮等候は。料紙の上に有へし。扱御前にては取分料紙は貴人の左。硯箱の蓋は右に可置候。蓋の紋の木末を見分候て。根の方を貴人の御前へ成可申様可致持參前に。硯のはこり又水入など。よく見候て持參可申候。又ふたをとり不申して。其儘置事も可有之候。

一主君なとへ物を召させ候事。無別儀候。刀をぬきて。御繪紋取に參る事も有之。又差なからも不苦候。右より召させ可申。御鏡の臺の紋。御腰物。御扇子。鼻紙。あせぬくひ以下可進候。御鏡の臺のはしに。帶を掛可申候。

一御とのひもの。御こおんそ。たゝみ様の事。こおんそは小袖のことし。宿直物の事は。子細候て仕立様も替り候間。たゝみ様も夫に

隨ひて可違候。御筵を敷。夜の物置申事は。三ツに折て。上かひを上へ成て。襟の方を枕の方へ成して可置候。又めされ候様にひろけて。筵半分にも可置歟。御腰物などは御枕元へ可置候。然者柄右へ成可置候。

一こしの下すたれの事。上すたれの内よりすたれの上を引通て。上かひを上へなし。こしむねのことく可立候而かけ可申。下簾の下高位の女房衆御かけ候。七所金物。九所金物にかけらるへし。取分九所金物は。一段の賞くわんの事にて候。五所金物は。誰々も乗用候間。下すたれの事は有ましく候。

一御輿にめされ候時。御こしをかせ申候は。別の綱をうしろはかりかけて。こしよせへ兩人してかき中。やかて妻戸を立よせ。庭上へおり申時に。御こしにめされ候て。御簾をおろされ候は。兩人して前のことくに御

縁にあかり。御かうをしさらかし申。綱をかけさせ可申候。

一御こし何時もひたりへまはし。路次にて御輿を昇替り申候は。添に參候人。手を掛替せ可申候。

一召されたる御こしを。御輿寄へよせ申候事。立砂の真中をかき可申。扱綱を取て。前のことく長柄を御座敷の内へ入申候。庭上へ罷成候に付。女房衆御出候は。御簾をあけられ候。御こしより御出候は。また御縁にあかり候て。前のことく御輿をまはし申へく候。召され候はぬこしを。明こしと申へく候。

一男衆。御輿に召され候時は。小太刀などを。輿の内へ被入候は。左の方へ入可申候。一御輿添之次第。

二御輿四三加様にも次第可有。

一御輿又御馬の先へ老衆參候次第。

人人人

四六二 御馬

三五一 人人人

一御こしの先。御車の先。御馬の先へ參候事。

何も如此左りの水つき上り候。右の水つき下り候。御車のときは。左の角先へ上ると申。御馬の先は左の水つきと申。御車の時は左の長柄先を一番と可心得也。

一女房衆の御輿の供に。太刀打刀も持事は有間敷。御輿添の衆又小者に。私の道具を被持事は不苦。その御ぬしの道具としては。中々有間敷候。

一女房衆へ相對し申拵之事。別に替事はなし。物などを申時。餘りに差寄て申事は。斟酌之儀なり。兩手をつきて可申。然共かた手つく程の人には。左つきて申事可然候。女房衆に不限貴人へも。餘り御身近く寄て。物を申間

敷也。

一御輿寄の左右の事は。たゞ御輿の寄方の御輿の左上り候。御鉋の役も左に畏候なり。又妻戸のうつ重のやうに可寄と申方も候歟。夫はいらさす事なり。たゞ御輿の左上り候。一御火鉢に指にてすみを可置候事。皆々の事は不存申。女中衆さへ御手にて被置候。火器にて被申事。努々有間敷也。

一御酌取可申事。扇を被。鉋をも納候て。御銚子を帶より少し高く持て。御座敷の中程へ罷出畏て有。扱可申時分を見合罷出。左の手をつき畏て。左候てさかつきを取。扱銚子の通に盃を持。貴人の右脇に置申時。何方にも御禮候は。其前へ致持參。右の脇へ可置なり。猶以。何方へも御禮候は。其方へ何ケ度も持參申。下に可置也。中にて御禮させ申事は有間敷也。御禮の事おわりてきこしめ

し候はぬ時は。左の手を御銚子を添て。左のひさをつきて。いかにもしつゝと可申。御酒請られ候は。右のひさをつきて少差寄て。御酒を可申貴人の御前へつかへ候て居候事。尾籠に候。きこしめし候度々。左をつきて可申。扱聞召たる盃をは。銚子の通に持候て可罷立候。左右の人に參ん事。左にては立さまに左に立へし。右にては右に可立。是に心得有之。此儀は上座へ後をむけ間敷ため也。

一二献日三献めとて。別に替事不可有之候。又罷立候事は。其座敷により左右不定候。

一二ツ中ては。必加へて三ツめを可申。御加中時罷立ては。貴人へ後を向間敷候。又たゝみに御銚子をつけ候は。中にて加可申。

一御酌仕候事。是も扇を抜て。鉏を納め。御銚子取人罷出候は。應て御ひさけの人も可

罷出候。御ひさけをも帶の通に持て。貴人へ加中候て。御ひさけの人。手を添て加可申候。常にはひさけのつかへ手をかけ可申也。

一三ツ盃の御酌は。加中間敷也。式三献の御酌も。加中間敷也。

一御銚子を人に渡候は。左へ長柄をまわし。左にて銚子の長柄を持。右にて御銚子の下を持候て是を可渡。貴人等輩に少替有之。

一御通の御酌の事。貴人聞召候御盃を。御内之人へ被下候は。臺共に持て被下候人罷出候を相待。御通へ參候時。臺より卸し。御盃にて候と申聞。頂戴させ可申候。其後つきて御通へ參候人には。其儘可被下候。上なとたてつきこほしなと仕候事。尾籠なるへし。

一御通の時。御銚子に酒なき時。何時も加可申加めとては申間敷なり。御前の通をあけ申て御覽候様。たへさせ可申候。主人に酌。後

を向けましき也。

一猿樂。田樂御酌仕事。彼か前へ盃を向け候事は有間敷候。御座敷の中へ召出候て。たへさせ可申候。是は三職の御前伊勢守所にての事也。所にもより。又御仁躰にもよるへき事なり。殿中にて御酒被下候時。同朋の役也。然時。御銚子の上に盃を置いて罷出候。如斯候時は。御銚子を被下候と申ならはし候也。

一陣中にて御酌の事。無別儀候。手をつきしさりなと仕候事を仕間敷候。少は心得共可有之。

一馬上の人に御酒申事。御銚子の上に盃を置いて。弓手廻り水つきを取て。銚子を差上候て。さかつきをとらせ可申候。

一主君。他家へ御出の時。亭主又たれ人も。御酌にて御申候は。きこしめし候後。彼御銚子を。御供の人又御同名衆など。其座に御座

候は。早々被出候而取可申。同御ひさけをも。御供之衆取可申。主君の子息又は同名衆御座候は。彼御役なるへし。

一同時客人。御前御座候は。又亭主方の人。如前に扱可有。あるひは同名も。又内之人な候は。他名たりと云共。其近付人罷立。御ひさけをも可仕候。其時くわへさまにおそれ入たると。そと禮を可申。又御ひさけめされたる人。時も御酌御座候事に候は。返禮として御座候。是定たる法儀也。

一御盃持參候事。左に持て右の手を添罷出。座敷のまん中に置候時は。左の手をつきて。畏て右の手を添て。下に置罷立へし。左右へ定の事は座敷によるへし。

一御膳すへ申事。必々鉢を納め。扇をぬくへし。但扇は所によりて。さす事も可有之歟。御膳をは口の通少上て持。いかにも身なり



様よきに罷出。居様に左のひさをつき。右を立て居へし。兩手を同心に引候。少差出て左の手をつき。右の手にて笠を取申事も有之。又兩手にて取る事も有へし。直さまにひさを立なをし。左へ可立。然共。座敷に可寄間不定也。何れも罷立と思ふ方のひさをつき候へは能候。たちさまに別の給仕杯に。刀のこしりなと當候半様に。心つかひ可有。貴人に少及かゝる様にして居可申候。

一御膳上申時は。同前たるへし。

一御吸物以下の御さかなも。居様心持何も同前たるへし。

一式三献居申事。

御前<sup>一三</sup>前<sup>二</sup>一是は御相伴衆へ居申様也。

一御膳居申事。

御前<sup>一三五</sup>  
<sup>二四</sup>如此居申へし。

御前<sup>一三五七</sup>  
<sup>二四六</sup>如此も居申也。上様同前也。

御前<sup>一三五七</sup>  
<sup>二四六</sup>如此も居申へし。

昔は八の膳迄參候得共。今は七の膳迄參候。御相伴衆へは。大略五ツ目迄參候也。

一折を持て出事。箸は臺に有へし。扱折の表裏を能々見分候て。又箸順逆をも見分候て。臺を持て可罷出也。又折に指を添ても不苦候。扱御前によきほと。の所に可置。持參候人は。御折の物挾候て。進上之事は有間敷候。但事にも可依。

一御折は。上座に二ツも三ツも可被罷出候。賞翫の御方へ御盃の參候時可罷出候。一座にいくつも罷出事は。如何にて候。貴人の御前へ盃參候度ことに。被出候事也。其亭主の聞召候時は。人によりて被出間敷候。

一折は献數も候時は。五六献より參る。但又献



數無時は。二三献より可參候

一御食籠の事 蓋を仕なからも持參可有然共蓋の上に箸を可置御前にて蓋を取箸をとり。物の上に置いて。ふたをは取て可罷立候又次の間より蓋を取て持參候事も猶可然候。箸は必々可有。殿中へ者御食籠を出事は無事也。

一土器の物。又押へ物以下持參之事同事也能々表裏を見分候て。箸杯の落候半様心得候て。持參可有。土器の物は臺にも居候。又公卿などへも被居候。殿中へも參候物なり。公卿の物も同前たるへし。

一三ツの御盃の事。一度にてそと三度ツ、以上三ツは九度參候。御ひさけは候へ共。加申さぬなり。惣して一ツ盃の時と初献には。如斯可有事也。

一御銚子物包候事は。殿中になき事なり。御祝

の時は。片口たるへし。内々の時は。包候事も有之。

一皆々御參會の時。大勢御人候時。兩方へ御銚子立候事。常に有之。殿中にて無御座事なり。

一貴人の御盃。末々に成候て。又自然上候は。其時居たる物に。御酌取衆上候而。貴人へ上可申。又夫を人に被下候は。銚子の上には被置間敷候。手に取て被下候人に可渡候也。

一居士器とて被置事。□□□罷出たへ候事に候。又其たへたる居士器は。其儘。本のこゝくに御前に可置候也。常々には有間敷事なから。自然居士器の時。此心得成へし。殿中にて必々御座候事なり。御供之故にてきこしめし候なり。

一諸人御參會の時。献まわり候は。一へんま

わり候而。其盃。末座の人一兩人末座聞召候半前に。別之御盃被出へく候。御盃添候て。御銚子取て御座敷を立候へ者、自然その御客人御定候事も可有之。然る間。いま一兩人聞召候程の時。次の献の御盃可被出なり。但時宜によるへし。

一御盃臺の事。初献などには出間敷事候。殿中にて七献はかりも參候てより。臺はまわり候。献數もかく候は、夫にしたかひて可被出候也。

一御前にて御盃を被下候事。扇をぬき劔を納可申。扨御前へ參候御盃たらは。いかにもく謹て頂戴申。口を添て御盃を差上候て。御酒を請候て。扨うつむきてたへ可申。又二献めよりは。盃をさけて酒を請可申候。前は御盃たるによりて持上候て請申なり。御前へ參り。次の間たとへ貴人御座候は、手を

つき御禮可申罷置候。

一御通之時。御盃の外は。傍輩中の盃は頂戴申間敷候。但貴人又主人の御同名御親類中。又外の人御出家などの盃をは。戴可申候。其外はいたゞき中間敷事也。又我吞たる下をと垂候間敷候。只其儘にて可置候。

一同時御肴を貴人被下候は、たとへ精進の日たりとも。受用可申。受用仕にくる物にて候は、。そと口を添懷中有へし。御座敷に置て立事。太尾籠の事也。又頂戴候事は。盃と同前なるへし。又少人などは。下にも可置也。

一三ツ星の臺の御盃たへ候は、御前の方よりもたへ可申候。一ツたへ候ては臺に置。次第にたへ可申候。

一公卿亦者小かくなごに居候盃をたへ候は。臺に置間敷候。たゞみに被置候を。御酌取人

取て臺に被置候。貴人は臺に可置候。

一臺の盃たへ候事。大事の物にて候。作物又はあやつり杯に。少も當り候はぬ様。しつゝと可置候。同時我より後にたへ候人無は。臺にすへすして。臺の下に盃を置。左にて盃をもち。右に臺を持て可退出候。

一臺の盃は參候ては。必々やりて被置候事にて候へとも。去ながら初て參候時は。うゐく敷様に。下に被置候はぬ心持候。其時。御酌取人上に被置候と。被仰候時取上候歟。當座の又よしにも成候と申ならはし候殿中にても此分なり。

一臺にさかつき二ツ三ツ居候を。貴人聞召て被下候は。御さかつきはかり取て。如常能々頂戴申てたへ。やかて臺に被置。又別のを頂戴候てたへらるへし。下に盃不被置候。御參會の時。御相伴衆。亂酒に成候て。御縁又

は別の御座敷に御入候共。御さかな等參候は。本の御座敷に居中候て。前の御さかなに取替可申也。殿中にても如此なり。

一亂酒の時。自然當方より御さかつきさゝれ候事に候は。たとひ後成共。貴人の御さかつきよりたへ可申候。

一大御酒の時。久敷持候事は尾籠の儀也。但座敷の舁にも可依。

一酒の下を捨事。我身の方の吞たる所を通して捨へきなり。是日のすひたる所を雪く故なり。然に下を魚道と云事は。前に通候跡に。又歸るもの也。此故に下を魚道と云なり。

一下入の事。大酒などの時。下入へ魚道を捨る事尾籠なり。但事にもよりて。さもあるへし。兩方には必々下入出る事有之。然時は脇へ取まわして。下入へ捨候ても不苦。

一むかしは酌取候人。兩方の膝を立て。つくはひ候て仕しと也。當代は左をつきて右を立て候也。

一取違の酌の事。貴人へ先小盃を中て。我大さかつきをたへ可申。貴人半分程聞召時分。我たへ候はて可然候。とくたへ候て。貴人の聞召候を相待躰は。尾籠の事也。

一貴人へ我吞たるさかつきをさし申候事は。日上とを可然候。いたゞき申共。可申候へとも。口上と申事。猶可然候。

一於人前。飯を受用可然事。めしは先二箸受用候て可然候。其後は三箸も可用候。汁を取上候て可被用候。汁を吸候事は。年の程にも可依。但吸候て不苦候。汁をかけ候て後は。吸候間敷候。

一菜は中より用候て可然候。焼物などは惡敷候間。いかゞにて候。但鮭などは賞翫の儀に

て候なり。何も不苦候。二ノ膳の菜を用候而。又本膳は惡敷由申候。順に用候事可然候。

一二三の膳などにのりかゝり候て。用事は不可然候。自然素襖の袖などにかゝり候事も。又賞翫候て用意候物を不被用候も如何よく相計候て可被用候。右の物を用候時。左より取候事。如何にて候。其時。箸を取直し。右にて取上候て。左へ渡て用事可然候。置さま同前たるへし。

一飯を分ヶ候事。膳の内へ分候儀。尾籠之事なり。但さひ皿の方へ分可申。然共生飯皿も候はゞ。膳の右の脇へ分可申敷。惣別再進を分候事は不可然候。能程請可申。又ふかくはしひ中間敷事也。

一飯のつに。二足又四足の汁かけ候事はいかに候。ひや汁をかけ候事。本儀に候。但又

事にも可依候也。

一貴人の御前へめしを持て罷出たへ候はし。  
笠を取て置可罷出候

一貴人の御前にてめしの御相伴候はし。少片  
ひさを立左の手をは。おしきとひさの間に  
候きて菜をも可用歟。片ひさをつきては。貴  
人の御方のひさをたて申事可然候。等輩に  
て候はし。左の手をひさに置候。驛能候。ケ様  
の事又時の儀によるへし。一へんに不可有。  
一貴人物など被仰候はし。箸を取直し御雑談  
をも可承候。との被仰候を不承して受用候  
事は。尾籠成へし。

一箸を膳の中へ置。又は汁土器なその上に置  
事。ゆめく不可有候。左様の事は土民のわ  
さ成へし。

一御さかなの吸物の事。箸を取て。又吸物を取  
上候て。吸候て不苦候。又若人などは。すひ

候はぬ事可然候。老者などは吸候て不苦候。  
一御肴のひとつ者などを。ことに寄て物によ  
り。折敷ともに上候て受用候事も有之。是も  
人によるへし。めしの引物などの時も同前。  
一まんちうなどの事。取て右を下に置。左を受  
用可申歟。箸を持候はし。汁をすひ可申也。  
加様の事は法意なき事にて。只ケ様に仕付  
たる躰まで也

一鷹の鳥。肴に出候はし。臺共に頂戴候て。つ  
まみてたへ可申候。被用候。是は貴人主人の  
鷹の取たる鳥なるへし。又貴人少人などは。  
左様に有間敷事なり。

一鷹の鳥。春夏は雲雀を賞翫可有。雲雀はかけ  
爪を賞翫候。

一秋は鳴。是ははしを賞翫也。

一冬は雉を賞翫有へし。

一湯漬の事。別に替事有間敷候。然共湯つけと

は。中に大あへませなど必々可有。然共夫よりたへ候可然候。何も干物を被用歟。汁の事吸間敷候。但物によりて吸可申なり。湯を受候時。器をとりなをし候て可被請候。黒いかなと何にても。湯又器などに移候物をは用間敷候。

一御菓子可用事。居候は、先やかて楊枝を取て疊に置。惣座へ參候以後。見合候て、さきを一束折て可仕。夫も手にてかくしつかうへし。貴人の御前にてつかふ事。尾籠千万也。また扇などひらき。口にあてゝつかふ事不可然候。菓子は何にても可被用候。

一御茶を可被用事。貴人御座候は、臺を下に置。天目はかり取て。些と下座に向て可被用候。同輩の座にては。右にて臺をもち。左にて天目をかゝへ候て。可用候。寺方にては。茶禮とて次の人に禮をなして用候事也。

一御茶の給仕の事。右に臺を持。左の手を天目の上なとへ。指の添事不可然候。貴人等輩に心得有へし。

右依懇望寫進之候。聊爾不可有沙汰候也。

因幡入道

天正十六年八月五日

如芸直判

彌九郎殿

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢



續群書類從卷第六百九十五

武家部四十一

人唐記

一人の唐名を呼候事。是或ハ殿文字をへて申候へは。おそれある座敷にてハ。大輔殿。少輔殿など、不申。唐名を中はきよく候。餘所へ使にまかりいて候ては。主の唐名を申事ハ。おかしき事也。いかにもわか主をハ卑下して。治部少輔申せと申様など、可申候。寄合のときハ。官途を自他可申候歟。左やうに候へハ。しかるへく候。又他所の御狀。中務のことをハ中書。如此被申候など、可申

なり。

(打カ)

一路次にて主人とくく折あひて。物かたり  
のときハ。兩方の内衆ハ。可下馬は尤に候。  
大かたの事候ハ。打のけてひかへ候事。常  
の事なり。大かた馬の禮の事。御一類と諸大  
名行合の時ハ。大名の殿原衆ハ。下馬可有之  
候。御一家の若黨ハ。不申候事。定法儀なり。御  
一族御參會の時ハ。兩方の殿原衆下馬すへ  
し。凡御一族と行合の時。兩方如此なり。  
一人の使節の事。直に可申候。大事の秘事にて  
候ハ。其殿の御使に某參候と。先人して可

申入候。無指義使節。又狀なと持て候ハ。人して可申。先書狀をも壹人にも遣て。御返事を可聞也。諸事無之に使にて候とて。對面を待つ事笑敷事也。又家主罷出對面之時ハ。戸口に畏て。それと申候時。頓而着入て。或さし薙。或板敷に畏て可申。使節としてのミしきたいせぬ事にて候也。

一女房馬に乗せ申事。無別子細。只御腰を廣様にかき懷て。打越様にし候へは。鞍を打越。女房の身にて。片足を越候時。押置てめさせ候。女人の股をかきなとして乗せ申事ハ。無古實也。沓なとはかせ申事。自然に候ハ。此役ハ殿原の役にて候。中間なとにハさせぬ事也。中間にいるはする事ハ。殿原の口惜事也。

一同程の人の式鉢の事。たゞみ一帖程さかりて初居候へは。二度も二度も被請て。こと座

に移り候こそ。式の禮にて候を。餘りに謹て居候へハ。式鉢の数も事多く。返々人をひうする様に見へ候ておかしく候也。

一女房同程の人にハ。三度出候盃をハ。二度客人に初させ可申候。座敷へ喚入可有對面。又上方親方にハ。庭にも縁にも様によりて出合可然候。

一人の祝を賀し候はん時に罷向時ハ。如何にもハ。花を折て可罷出候。物を相傳の時も同前。師に向時。如此人を敬ふにて候也。

一人の身を訪。又訪問に罷向候時ハ。打しほれたる鉢にて。忍やかに供もの(の脱)も少く。直垂衣裳なをハとしてまかるへし。昔物語にも申。或人和歌の道を尋候ける折ふし。深重病以外に候ける弟子の候けるか。當道の秘事を相傳の爲に車も牛も供の者も。行粧新調に花を打て出立まかりける。病者も心得て。

祝の酒など用意して。秘事を授けり。母家へ歸て翌日早天に又殊外なえ／＼と立出召具候者を。一兩輩にて罷向て。其身を訪て候ける事を。面白きために申傳候。毎事可使心にて候也。

一人の許にまかり又寄合の儀。我許にて早くしたため申候て。人の何としてもてなし候はんご走廻候物をも喰候はず。酒をも呑候ハぬ事。言語道斷比興の事に候。如何にも他所にて喰て候とも。又酔て候とも。人のもてなし候はんする時ハ。呑候よし。喰候よしをすへき事に候。結句早したゝめ仕候なとと申て。箸をもとらず。盃をも取候ハぬ事ハ。よのつねの禮をしらぬにて候へハ。さるへき人ハ。飯をも喰酒をも呑候。又余の座敷にてつまり候間敷程用候間。假一日二座三座積て。人にもてなされ候とも。同程物をも

喰。酒をも呑候事。第一の仕付と申なり。

一 貴人上方などの御前にて。瓜を喰候に不殘可喰。他人の事も同前。

一 上方の御前にて。御配膳仕候時。御前に貴人御箸にて挟み、被落候物をハ。御配膳の人取て喰事にて候。或御臺の上に置などする事。曲事に候。多分功者の役にて候。但座敷に可隨也。

一 貴人常に酒入魚道人候物をハ。酒あまる時ハ取上。一口呑候由をして。持て罷立捨る事に候。公方様魚道の御酒ハ。御供衆罷出吞可申也。

一 梨子を御前にて切候事。常の事に候。その段ハ折敷にあてゝ切候て。枝の付候方の一切をは。上様に進上する事也。又同程の貴人數多寄合の時ハ。梨子を切様候也。先丸なから皮をむきて。枝の方へよせて。横様に切て。

折敷に切目の方を押付て。枝をとらへて刀を添て。枝を少ツ、削なかつて。其刀のあまりにて。豎横に切候へは。皆々一切ツ、に枝の付て切候。残のきれを上にて置て進候へハ。皆々枝きれに成にて候。三人候ハ、三切。五人に候ハ、枝も五切に候へく候也。



一人の前にて物を給。酒をも給て後罷立候へき時ハ。そなへたる物を悉持て罷立候ハね共。肴などハ持れ候程にても。取重て罷立候也。

一酌の取様の事。田舎人は多分銚子のきはに手を添取られ候惡候。銚子の柄の二重に候所よりも。さけて取候事能候也。かつらに右の手に懸る様に取りる事也。目に立ぬ様に毎

篇可調事肝要也。

一女房の御酌ハ。銚子を持て立廻てハせぬ事也。只るさり寄りるさりのきて。片足を敷て仕候事能也。銚子をもたゝみに付て。持て廻へく候。酒をも參候時も。銚子をもたゝみに付なから入申候間。御盃をも女房の酌の時ハ。下けて召れ候也。何事も女房ハかひなくせられ候か能候。琵琶をもいその方を奥に付て。女房ハひかれ候。膝にのせてハひかれす候。凡さるへき所々の御前のやうハ。品々に候間。疊一帖の間にて。皆手なかにて取へきと申也。

一御障子の役人。同御蔭を上げ候時。御みすのもの。又ハはつれなとに。目をも見候事也。凡御前を通り候時も。其方を見ましく候。御みすの外などに。女房達に召れ候て參り。物を被仰候を承り候時も。我面をそはへ成様

にして。うつむき承り候か能候。女房連のミならず。上方様に御目とを見合申事ハ。恐ある事ニ候。田舎の人又ハ高も賤も。面をつけつけとまほる事口惜事也。或近習の人。又ハ御心しりなとの人ハ。惣なく常に上様の御顔をまほり上げ申候て。御目つかひに依て。ふるまふ事ハ別儀にて候。公家方に隨身と申ハ。かやうにふるまふなり。

一用意と申事肝要也。昔ハ烏帽子を風に吹取られて。俄に事かけるに。法師の道具の中に烏帽子を一頭取出してきせけると也。かやうの物をも。其主の用にたゝぬ人の持事。不思議なる事也。ゑほしかけ。たゝう紙。ひんくし。墨。筆。的矢。くすわ皮に鏡。笛。弓の絃。いたつき類。鞠の在所ハ。沓。引合。もとゆひ。歌の會所へハ。懷昏。短冊等を可用意事ともなり。

一主人の御前に祇候の心持の事。人多時。人の後のかけに祇候仕て。召に可隨。又傍輩の前に居ふさかり候て。宮仕事下品之仕付也。一貴人の前又ハ他所にても聲の口。又縁にても人の通所に居たるハ。心なき專一也。田舎人のする事也。他人の居たる前に。居ふさかりて。人を後になす事專一尾籠也。たぐうたの所行也。主人御覽して。以外御機嫌惡敷仕付也。

一しはらぬ鞍をは。みたれ鞍と可申候。しはりたれとも道具不付をは。はたか鞍と云也。一當時長き袴を。もゝたちを挾て。御前などを廻る事。何故候哉。長ハ見る所能也。いかにもさけて被召仕事共也。一主人又ハ貴人御前にて。指事なきに。面をくひにかミ目やうなとする事惡し。心をかれて人の寄にくき事共也。

一主人餘所へ御出候時。御供と有に遅參事曲事也。主人を待申様に。拵らへて可罷出候也。

一主人の御前に祇候の時は。御顔を下目に掛けて見申物也。打上て見申さぬ也。さのミ主人の御前の通にハしこうせず。

一主人の御前に參るにハ。構て／＼參次第座敷に居也。前に出仕したる人を越て居ハ不可然。上なる人も少禮をすへし。無是非□奉れも先に居たる人をは押上て。下に居るハ見能也。ケ様にする時に。若ハ其人を賞翫せんとおもふ事ハ。他事の用有様にて。座敷を立て。後に歸りて下などに居たるは。法の如く見よきしつけにて候也。

一餘に禮ふかくする事ハ。おこ付方に似たる也。

一御かよひハ仕付たる人に譲るか古實也。こ

ほれ物初献の御肴なとハ。さらぬ様にて。人にさすへき事共也。

一主人の御前には。無召てハ祇候せぬ事也。相かまへて可隨召也。

一侍の傍又は縁の際に。小便する事不可有之也。

一主人と碁双六などの相手の時。或食物茶なと給候時。座しなから給候事。以外見くるしき事に候。座をも立去り。膝をも立て可然候。殊更今の折節楊弓など葉縁候。ケ様の遊宴の座敷にてハ吞て參る者ハ。早く吞て參候事は能也。

一主人又は他人の見出よひ候通りにて。人に物を申こも。立なから申聞候事。以外惡敷事ニ而候。申者ハいかに賤く候とも可爲無禮也。

一猿樂田樂參候て。御庭に畏候時。申次の人。



立なから聞て又御返事なとする事。以外の田舎人にて候。主人の前にてハ。殊に毎年他人に向てふるまひならず。只主人に殊にする事也。

一袴カハハカマなどにて御供の時は。袴をハはくへからす也。

一我馬にて自然あたりなる仁牀などをあて落したらは。馬より下て禮をよくく可申。又人の馬など川渡する時ハ。水けかけぬ様にすへし也。

一一國の守護に合て。普通の侍ハ乗合すへからす。せは道などにてハ。片へ可下。廣所ならハ遠打よくへし。

一遊君に衣をひかん時ハ。きぬニツ有ハ。袖を兩方へ向て。手の上にかけさまにかけて可持也。

一主人又ハ去へき人の前にて茶を給候時。臺

にすへなから吞候ても。大方ハ不苦候へとも。是も取おろし吞候事能也。

一油の役事。二人してする也。一人ハ燈心と油と。一人は燈臺是ハ添て也。

一馬より可下在所ハ。狩場。的場。鷹狩。犬追物。笠懸。又ハやふさめの所也。

一筒の酒をつく事。口をぬかぬ前。帶をときて。口の上に手を覆て。さて口をぬくへし也。

一主君より御直垂かへなと、仰あらん時ハ。疊下りて可畏。扱敬人の御直垂を被下候時。いたゝきて御座敷を立て。かけにて我直垂の上にきかさねて可參也。

一我より上の貴人。盃を召上られ候時は。中座に出て。首を傾て參て聞召はて、後。本座になをるへし。依人御太刀進上有。

一引出物給らん時は。御盃をさし置て可給。但

懷に可人物は。扇。藥。香など成へし。其外の物にハ。御盃をさし置て。手をかくへし也。

一 貴人の御女房。御酌御加などにて。上様より御服など被下候時ハ。盃の二ツ盃めに被下候をいたゞき。三盃吞中て。まつ盃を次へ持て罷出。戸の際に置。扱參て兩の手にて。御服を抱持て罷出。扱前の盃を右の手にて取。御服をハ左のうてに掛けて持て可罷出。若廣ふたなから取て罷出たらハ。御服をハ殿原に持せ。廣ふた計を持て罷出。御女房達に渡し申て御禮可申也。

一出陣の時。敷皮くひかミを左へなして敷と云。人有て鞍に掛る時ハ。白毛左へ成へし。是ハ敷時の事なり。

一 腹巻を進時ハ。兩方の袖を取。わたかミに取添。むな板の方を人の方へしんする也。一 荒皮を引様。二ツに折て白毛を客人の方へ

向て引く也。

一出陣の時。敷皮しき様。白毛を前へなして敷也。

一 矢開の餅の事。黒餅ハ下。白ハ上。赤餅ハ中に置。三枚重たるを一度に打立て。先さきを可喰。その後押返て。白餅上に成様に置也。一 大口。御直垂袴被下時ハ。大口ハ下。直垂ハ上。袴ハ中成へし。是ハ猿樂に被下を重候事也。

一 傾城に馬を給事。御座敷の前に馬を引立れハ。傾城の女。おりあひて我仕たる帶をさきて。馬のとうに投掛けは。則馬を引て。傾城の宿へ遣す者也。又くつわのたちはなかねへ帶を引とをすも同前。

一人の方よりの使をハ。名字を可聞也。

一人の御前にて使などの時。庭より扇を扱事不在也。多分ハ縁にて拔。又は物を申時とし

て拔。立時ハ扇をさして立。座の間ハぬきて可然といへり。但當時ハ依人可依所なり。

一何にても餘所よりの肴の大成物ハ。兩人にて持事可然也。一人にて持事。惡敷きしつけたるへし。

一縛寄る時。上手と云ハ左也。女房の時。上手右成へし。

一笠懸の矢道ハ八杖なり。

一主人の御前にて仰書する時ハ。硯をハ主人へ向て書也。ふしんの時ハ御顔を少守る也。奉問事ハ無之物也。

一硯を自然折敷にすゆる事有之。切目を前にむくる也。食物ハすへて柳箱の時もすゆる時ハ。堅さまにすゆる也。

一硯の墨をする時は。堅様にする也。廻しすりハすらの事也。但當流にハの文字形にする也。

一瓦硯ハきらふ物也。除口等にハ無用也。石をぬりたる硯ハ。晴に不出。つゝら箱も塗たるハ不出。只其まゝハ晴にも出す也。

一熟柿ハすゝる物也。核なと出す事ハ有ましか也。

一鳥のへつ足を喰様ハ。骨をはり／＼とうとう喰切々々喰也。喰すこきなとハせぬ事也。但年寄衆なとハ。骨なとを高く喰候ハす候か能候。齒を可憚也。

一破籠の食を喰にハ。底をあらハす様にハ不喰物なり。

一箸本末を削事。すへたる左ハ末也。右ハ本也。末にて物をハ喰也。本を手にて取へきなり。

一何にても喰切たる菜をハ。上にハ不置。皿の脇に可置也。

一女房の食物大切に切也。喰切故に如斯。僧俗

のをハ。一口に喰候様に可切也。

一菓子の中に柑子をハ。最前に取て可喰。四に破て可喰。今川流如此。又柑子を三ツに破か能なり。菓手に龜足あらハ。召れより取喰へし。

一汁の實ハ。持上ては挟みちきり候ハぬ也。土筆其儘、ふたらん物也。

一肴にハ梅干必可有。是式の肴也。

一酒を請候時ハ。盃を高くハ上の事也。迷惑なれハ。服などへハ引下へさくる事本也。

一魚道と云事。凝濁と云。靈山凝濁と云。用玄法橋のミ下道と云。

右古本破様。仍更寫之畢

貞丈書

朱書

一用意と申事肝要也と云ヶ條の内。法師の道具の中に。烏帽子を一頭取出てきせけると

也云々。

貞丈按スルニ。源平盛衰記云。寛平法皇の御時。昌泰元年十月廿日。大井河の紅葉散覽の爲に御幸あり。和泉大納言定國卿供奉せられたり。嵐山の山おろし烈しかりけるに。定國ゑほしを河へ吹入られて。すへき様なかりけれハ。袖にて□をかへておはしける處に。如無僧都と申人。御幸に被召具たりけるか。香爐箱よりゑほしを取出し奉りたりけるにこそ。人々目をおごろかしたる高名にてハありけれ云々。

朱書

一人の身を訪。又法問に罷向候といふヶ條の内。或人和歌の道を尋候ける折節。深重病以外候ける云々。

貞丈按スルニ。四條大納言公任の病中に。大宰大貳高遠平禮に下のはかま花を折り

## 人賢記

出立。和歌の故實を問ひ。其後打しほれたる出立にて。病を問ひしとぞ。古今著聞集に見たり。また西行談抄にも見たり。

<sup>イ本</sup>依熟望令寫之。漫不可有他見者也。

天正十七年十月九日 <sup>朱伊勢</sup> 因幡入道如芸在判

<sup>朱</sup>伊勢彌九郎殿

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

夫人に賢愚あり。かしこきハまれに。おろか成ルハあまねし。ものに勝劣あり。すくれたるハすくなく。くたれるハつねなり。されはにや。代をかさねたるも。親の子といふはかりにて。雪をあつめ。螢をひるふ舊規をも思はされハは。つたへ置所いたつらに人のたからにおなし。又重代ならぬともからハ。さしてまもるハきふしもなき故に。執心をとめさるにより。人まねにのミして。或以今案意樂新作し。或當座の以才覺似て似さることをとりさたせしむる間。粗改らるへきあらましの折節。ハからさる應仁の大なる亂いてきたり。十餘ねんの間に。九重の内外。皆焼原となり。家々のしるし置たる物。こと／＼くうせはてぬ。然間。殿中の舊例ものこらて。不殘諸道もすたれも

きのまちかき事をひろひ。まさきのかつらな  
かき世の子孫のためにしるしおくところしか  
ならし。

ちゆき。家々もいよく絶はてぬれは。みゝに  
のこれる故實もなく。眼にあへる舊章もなし。  
只井蛙の滄海の浪をしらす。野鴟の虚雲の上  
をおもはさらんかことくにして。動ハ恥辱を  
うるよりほかまたくなし。あはれなるかな。  
いまよりすゑの世にいたりてハ。弁しるへき  
志のともからありとも。眞を出たるためしな  
けれハ。道にまとへるのミにて。あきらかなる  
人かたかるへき。惣して奉公のみち。さらにか  
きりなしといへとも。先御前へ祇候の時ハ。身  
をきよめ。繪紋たゝしくして出仕いたすへし。  
古語にも御身ちかくめしつかわれん輩ハ。口  
に雞舌の薰を含。手に蘭を握るといへり。物い  
ひ名目かりそめのごり扱までも。心にもるゝ  
事なく。平日のたしなみなければ。當座にはい  
まふに及<sup>ひ</sup>のあひたことこのつゐてをもつて。お  
ろかなるをかへりみす。後の嘲を忘て。あしか



## 人賢記

一御字申請事。兼日申上候時。下の御一字引合に被遊て被下候を。上に置。下の字の事ハ。吾家々々に定る字候得ハ。それをつき申候。人により上の御字被下事。勿論にて候。其時。下の字なにと申字と申上。二字共に被染御筆被出事も有之。只御字計御筆をそめられ候儀。通法にて候。公儀如斯候間。自餘も准之。

一主君より御字拜領の事。折紙に被遊て。御太刀又ハ御腰物にそへられ候て。御盃頂戴の時。直に拜領を一つにとりて。御いたゝき候て。御字をは左の手にて退出候。御腰物出候事ハ。まれの義に候。先御字御太刀計候。御腰物の時は。太刀にとりそへ候て御もち候。御もち候所ハ。帶とりのあひたなるへし。公

方様にても如此候。

一式の引出物の時。そうしやうに渡候。弓はつし候。はんするかよし。承り候。さやうにあるへきと存候。袋に入候事ハ。路次の程の故實たるへき□いそへあつかはるへき事勿論候。可被渡時は。にきりより一天はかり下を。右の手にてとり。左の手にては本はすをとりて。左のひさをつき。請取人の左の方へ出候。其時。請取人。左の手をいたし。出す人の左の手。本はすにあるへきを。猶其下へ右の手をやり候て請取候。請取人ハ右のひさをつき候。はつし弓。ハリ弓に替ましく候。もちて出候やうハ。にきりより四五寸上を。右の手にひつさけてもち。ゆみをたてゝ。つるを我か身のかたへ成て出候。

一御門役辻固の時。打刀もたせられ候事も不苦候へ共。小太刀を被持候事。本儀にて候。

小太刀もあまり金作ハあしく候。

一御走に被參候衆。はかせられ候太刀ハふくりもなく候。今はふくりんの事ハ不及申。大せつは 小せつはしは引迄も。金にもつくり候を被帶候。不可然候。ケ様の事ハ。人躰にもよる事候間。いかにもくすみたる躰可然由。申ならひ候よし。

一つハ切付之事。晴之時可被用候。繪をかき候はぬを回事ハ不及見候。家々の紋を黒くかきて可被用。大かたひらの時ハ必々可被用候。

一同ちから皮ハ。しろなめしたるへし。しほてかわハ。引目かわたるへし。くけめにふせくみをも仕候。とつゝけの緒むらさきハ斟酌あるへし。其外五分まどう。又ハ何色も不苦。長サ一尺二寸。

一唐筵の切付并沓の事。さして非賞翫候。然共

少は賞翫之事也。沓ハきつか本儀なり。

一赤かなしの鞍に紋を入たるを回事。晴の時ハゆめ／＼あるましき事なり。内々の義はくるしからず。

一茶染の事。入道仕候へハ。かならず／＼可用之。大法也。犬追物以下にも用之。淺黄同前。然者手繩も同前たるへし。鎧も内々墨きを用之。

一同時分 赤くら覆をかけて人も淺黄のもうせんたるへし。赤くら覆無用方ハ不及申。ぬりたる鞍覆。ふすへ皮などを可被用候。

一白き笠袋御免之衆。入道。そも白笠袋御用候得は。赤もうせんを無御用候。

一しろ笠袋に淺黄のもうせん。ふすへ皮。ぬりたるくら覆をも被懸之。但一段と晴の時ハ。赤を可被用候。

一俗躰の人。茶の鞆。ゆめ／＼御用あるましく

候。手綱同前。

一手繩の事。むかしハ白。青。黒三色三くりに仕候。近代考を用候。

一陣中にてハ白手繩を用候。是をかまさしなわご申候。布にて三くりに仕候也。大形三色かたわきはかりに仕候歟。

一しろき笠袋。赤きもうせんの鞍覆の事。依御覽各用之事勿論候。又くわんせんの鞍覆の事尋候へハ。只あかきもうせんの事見候。雲形の候ハ。殊更賞翫之事候。

一蚊張のおもしには。くろかねをほそく打ても被置候。是にて人を打擲する事の古事有之由。申ならひ候也。

一御簾の重にハ。銅銀などにて。生類を作て可置之候。たとへハ龜鶴の類也。當時石をつゝミテ置候事。略義也。

一御筵の縁之事。禁裏様にハ。しきを御用

候。うらハすゝしのうら。ひろさ不定。武家にハうき織物。御紋にハつふきりなり。惣前へりに織物用候事本儀候。

一御枕の繪之事。禁中にも御用候事也。かたかたハ模様なり。かた／＼は。菊又ハ鶴などの類をかき申候。公方様にも同前。

一主君社參の時。御幣の役者事。神主御幣をとりにて出てもちむかひ候時。役人立ながら請取。左の方をあけ。右をさけてもちて參。御前にて畏。御幣を取なをし。我か右をたかく持て。上の方を受取せ申候へハ。をのつから御幣のかミ。主君の左へなひぎ申候やうに。うけとらせ可申候。御拜ありて給時ハ。中にて又とりなをし。如元左をあけて持。神主へ可渡之。

一於庭上御對面の晴の時ハ。申次はかりなり可申候。のこり祇候の衆ハ。御縁に可有祇

候。殿中如此。於御前。月二日御盃頂戴の御練貫被下様躰の事。御盃頂戴仕。可被退時分。誰々も御前へ持參候。可被下時。御盃をハたゝミに置て。兩手にて請取。則頂戴候て。たゝミに置たる御盃をとりそへ退出候。御衣を右のかたに懸しと申人も候か。左様にはなき事候。只兩手に持て退出候。殿中如斯候間。於自餘も御衣御拜領同前たるへし。一於路次與に行合申候ハ、右へ折のき。左をとをし申へし。但道惡く候ハ、路次のよきかたをとをし申候。<sup>(可九)</sup>帷裳かゝり候ハ、うちかけて下馬あるへし。又様にもよるへし。一貴人へ互に馬上にて行合候ハ、是も右へ打のけ禮を申へし。早々下馬候へハ。貴人も下馬候間。行過され下馬にて。走衆なとへ禮あるへし。貴人とミかけ申候ハ、かくれ申儀可然候。但御人躰にもよりて不及下馬。以

使者<sup>(彼)</sup>波走衆へ一禮申事も可有之。

一鷹狩に行合候ハ、左へ打のけて下馬仕。右を可通。是ハ鷹のおもてになる故なり。

一鷹犬引たる者。又餌袋付たる人にも。下馬にて可然候はんか。但是ハ可依人躰候。いづれも少心得有へし。疊紙の事。はなかミとも。疊紙ともいふなり。昔ハ五はかり常に持しなり。其内。射手方のたゝうかミとて。必一杉原をたてさまに四におりて。又よこに二に折。四方にきれば大略はさミものゝ寸法になる。自然主君御弓あそはさるゝ時。たてさせらるゝ事有之。其時ハきりめを前の下へ成て立候。地より上くらのため六寸計也。此外我はなかミに用候。又人の所望候時の用候禮これ五はかりも用意候つる。折やう紙數も有之。公方様へも進上候。それハ引合

候は。寸法折様有之。

一公方様御者も、ひきは、き脚半の事。十月五日。北野へ御成より。三月三日まではき申候。雨ふり道も悪敷候へ。御走衆も御小者も。脚半をへとられ候。諸大名の内衆も同前儀候。

一敷革と申ハ。鹿の皮にてとしらへ様寸法等有之。又ひつしきと申ハ。常に付候を申候也。豹虎のかわをハ。平人は斟酌之事ニ候。三職ハ御用候。ひつしきハ寸法も候ましく候歟。紈の革たるへし。又熊の皮をは。むかしハ彈正官の人ならてハ御用無之候。

一ひつしき敷革の事ハ。付候ことくしき候。主人の供のとき。庭上に敷候ハ。われごもちて罷出しき候。さて足なかをハ。引敷の左のしたにて置(脱カ)。又はき候時は。引敷の上にて。足なかを左よりはきて可罷立候。引敷より

罷出候て。はき申事ハ如何にて候。

一あしなかにハ。禮なき事にて候。殿中庭上迄もをき申。但又ことにもよるへし。

一鹿の皮引敷に用候哉事。何共無覺悟候。不及見候間有間敷候。

一琴持參の事。左の手にてハ。腹の中ほどをかかハ。右ニ面ハわうかくをかへて。置さまにひかれ候勝手に可被參候。

一琵琶持參候事。人のひかれ候やうにいたき。左の手にてくひをにきり。右の手にて撥面上をこしてかへ。置さまにハたミにたて、抑まわして。琵琶をあをのけて彈候勝手に可被參候。

一笙を持參候事。せめの所をとり。ゆひを竹の間へ入。さを我かたへ成。つゝのかたを指出し申へし。

一硯箱の筆の數定たると申事有之。然共數ハ



いかほとも不苦候。公事を被取行時ハ笠撒(又)の和漢連歌當座小者硯(に)にハ笠なから置候也。如斯差別有之儀候。又檉文狀等認候時ハ。黒軸の筆一對撒笠置之。

一豹虎の皮進上事。臺にすへ候革。一段大に候得は二に折候て。かしらの方を懸御目候。別に替儀無之候。

一御具足懸御目候事。からひつのふたにすへ。はたかミかけをとりて。わたかみの上に。かふとを置へし。他流にはわたかミかけに。甲をからミ付候事も有之歟。當流にハ無之候。兩人してかき申候。たとへハ此役兄弟仕候ハ。兄ハ具足の左。弟ハ右をかき可申候。右をかきて出たる人ハ。やかて退出候。左をかきたる人。御具足に手をそへ引なをし候やうに仕。可掛御目。御鎧同前。

一甲ハかり懸御目事。しのひのをよくとり

て。下へまからさるやうにして。左の手にすへ可懸御目。流々によりて相替候事も候歟。當流にハ此分候。別に替儀無之候。

一鞆のつゝミやうとて。別にハあるましく候。引合にてつゝミ。水引にて可被結候。正月二日御馬始に進上も此分候。

一手綱腹帶つゝミ候事も。しりかい同前たるへし。何方へも被遣候ハ。臺にすへられ。十具廿具同前。

一杉原をこしらへ候事ハ。やかて杉原を八まひ程四におりて。紐を結候て。臺にすへ。其上に扇板物進候。すへ候十束廿束の時ハ相替候。又引合たんしなとハ。かミゑり二筋にて結候。いづれも臺にすわり候。別に様躰は無之候。

一眞羽又ハ鷹羽なとハ。引合につゝミ水引にて結候て。臺にすへ羽の本を御前へ成申候。



一羽をハしりと可申候。一鳥とハ中間敷候。

一盆香合進上の時ハ。香合をハ。袋より取出候て進上候。袋をハ同朋衆へ渡可申候。御前へ役の草木のもとするを見分候て。本の方を御前に成可申候。

一香爐進上候時ハ。盆にすわり候香爐にあし候ハ。あしのうちおもてを見分て。御前へ可有持參。

一金欄段子のなかき物。盆又臺にすわり候ハ。なかき方を御前へ成。上かい下かいを三分候て可有持參。

一扇一本の時ハ如常。又一つミとハ十本の事に候。それをハうつくしくたミたるうすやうのかさねたるにてつミ。金銀の水引にてからけて。引合たんしにもすへられ候。

一貴人ハ書狀參候ハ。左に字かしらを我か

前へ成て。右をつきまいらせ候。又陣中にてハ。立なから參候事故實にて候由申候。

一貴人の筆を參候ハ。右に毛の方のちくをもちてまいらせ候。軸の長さ眞艸行に寸法有之。

一鶯懸御日事ハ。籠桶のさまのかたを御前へ向て。ふたをあげ。こをけの上にあほのけて置。御前へ丸物をなして可置。扱卒度におういを可取也。きちはこはんの板目にさし候。又人に渡中如此。取出候てミせ可申。丸輪の方を奏者にミせ。こ桶に入。緒をむすひて可渡候。

一主君へ御手水可參事。先はんさうに水を入。みたらいの中に置。其上に御てのこひをたミて可置。其御手巾を取て。左のかたに打かけて。御手水をかけ可申候。御手水をのこはれ候時。かたをよせ申候得は。御てのこ

ひをとられて。御手のこはれ候。公方様にハ。女中の御後見候。御成之時ハ。御供衆の後見ヘ。又遠路ヘ御馬にて御成之時ハ。走衆の内壹人。陣ひしやくのことに新調仕。小者にさゝせられ候。御手水御用之時。水をくみて參候。又近邊に水なき時ハ。御かみ手水進上可申候と伺申。進上申事も有之候。殿中此分候 自餘も可准之歟。

一轡を渡事。常に人の免しとて。手綱とられ候やに渡候。惡敷候得者。さる轡に成ん。人のいむ事にて候。左に手綱のまかりをもち。右にて轡を取て可渡之。

一御太刀かたなに。御物と進物と相替候。惣別銘により。進物にも不成事候間。用捨可有之事に候。

一進上の御太刀に。無名ハ不成候。然共遣太刀の事不苦候。きつと仕たる時ハ不可然候。

一帯取候事。啄木ハ不可然候。但近年啄木も進上候歟。略義見候。かんたうの帯取本儀見候。

一主人の御重代などの御太刀。遠路ヘのとき。走衆のうち 可然人躰にはかせられ候事有之。其時ハ右にもはき申候。又わつそくにもかけ申候。

一御前又ハ晴の時。火打袋をさけ候事。若人ハ有間敷候。四十以後者不及御案内さけ可申候。但病者などハ薬を入候間。わかき人も御案内申上候てさけ候はんか。

一ゑほしかミ下の時。つかまきたる刀さし中間敷候。晴の時も常にもさし申さす候。自然事もかけ候時ハ。いとにて卷たるハ指可申候歟。それは略義にて候。

一はなち十徳と申事ハ。下にはかまを着用候て。上に十徳をはなちきにき候得ハ。はなち

十徳見<sup>ハ</sup>なく候。中帶<sup>ハ</sup>かりにて。十徳<sup>ヲ</sup>着用候を。ハなち十徳と申て。尾籠の事にて候。古よりもはかまのうへに。十徳を着用候事ハ有之事にて候。むかしハ葛をくろくも。いかやうにも染て用申候。又十徳の上に帶をも仕候し也。

一 参會の時。亂酒に成候てすわふひきの事。つねに有之儀見候。やかて當座にはかまをもひかれ候て。兩方共にめしかへられ候。但素袍はかりもひかれ候。袴共にひかれ候事勿論候。

一 足袋之事。殿中へハ御免候<sup>ハ</sup>てハはき不申。無役革黒革をハ不用候。まさふすへ小紋の黄革などハ用候。又はき候事ハ。右よりはき候。人にまいらせ候時も。右よりめさせ申へし。但左よりといふ説も有。猶可尋。みかうしの間出入之事。大法のやうに嫌申候。殿中

御主殿と申は。四方共にしとミ見候。此御殿にて御祝義共有之事候。然時ハ出入嫌事ハ無其儀哉。又自然死人をいたし候時。みかうしのうへをおろし。下より出し候間。かりそめにも。下ハかり取候事あるましく候。

一 妻戸の間出入事。御沙汰ハ不承候。但つねに出入ハ有間敷候。急度したる時ハ。妻戸の間より御出入候間。さやうの時。御立砂をと立候は。平人出入斟酌可然候。

一 貴人など御出候時。内へ請し人中候ハ。縁の猿繫によく戸をひらき御通候時。風など吹たてさるやうに可有氣遣。先にも不意出來のよし申ならわし給し。

一 諸人被召遣候時も。又常にも座敷にて靜にあるへき事。大足にあゆミし事。おとろきあしとて。いにしへよりわらひ候事見候。小足にあゆミ候へハ。身なりよきよし申候。

一物披露申候時。目錄なと下に置候時。風吹候ハ、扇をおもしに置ても不苦候。

一人を送り候事。賞翫の方をハ次の座敷にて一送り。縁にて一送り。庭上にて一送り。これ第一也。猶もうやまひ候へハ。門外迄も送り候。其次ハ座敷にて一送り。縁にて一送り。是第二也。又次の座敷までいて一送り。これ第三なり。同座敷にても。人によりて一送り候。又一送りも候はぬかたも可有之。如此心へて淺深の禮あるへし。

一主君御使にて候ハ、一重つゝふかく御送りあり。一送りの衆をハ二送り。二送りの衆をハ。三送りの心得たるへし。

一萬祝言に付而遣候物等用捨の事。元服祝言に弓征矢遣時。きりふの羽付たる矢用捨の事。よめ入に猿毛の馬に乗。うつほのほなとに不用。秋ふた毛のむかはき。うみなしの

鞍。移徙に火性の馬。火打袋ひわた色の衣裳。赤。さけを。もへき色なと可有捨。惣別祝言に禁句等可有心得。

一軍道具ハあらはぬ事也。殊に幕をハ不可洗新けれども。大將打死なとすん(有ク)はあらふなり。然間。堅洗事をいむなり。

一ときの聲ハ。左より右へあけ候ハ吉也。右より左にあけ候ハいむなり。

一具足着する時。吉方いろ／＼あり。俄之時ハいつれも打置。當方へ向なり。又三ツ日間神の方と云。此方へ可向。子ノ日ハ寅の方へ可向。其日の三ツ目の方なり。

一かちにて笠をさしかくる事。右よりさしかけ候事可然候。

一御酌をとる人。次の献の時ハ。前の酌盃を出事可爲本儀かのよし申。此沙汰不定之由。先々申候畢。提子の役人衆中にてあるへし。

又せはくハ別の間にもあるへし。不苦候。

一よめ人之時。衣裝之外に刀、同系はしの直やうとてハあるましく候。相計て可被置候。

一貴人主人のおんそ筵枕なと持參事。別儀あるへからす候。宿直ものハ様躰も可有之。こおんそハ如常小袖のこごくたるへし。

一於神前御酌不可有別儀候。後を神前に向ましく候。

一長持にはるひと申事ハ不存候。但くわんに付候かわ迄にてハ、<sup>(歎)</sup>よハく候間。布にもたすけ出仕候。是を中然<sup>(歎)</sup>打任てはるひと申事ハ不存候。

一金の扇。平民は斟酌あり。字を書たるも無用。内々ハ不苦。おもてむきハ不可然候。

一群參の時進上候。御太刀多候へハ。申次とりて。次の間に置て。いとまりとは不定。所つまりせはく候へは。見はからひて取申候。つ

かの方を前へ打當て取可申候。

一各初て御參會に。式三献の盃取ちかへてきこしめし候歟のよし。何共不存候。有ましく候。

一御能の時。猿樂に折紙被遣様之事。殿中には舞臺より庭上へおり申候てうたひ申。庭上におゐて。一人つゝめしいたされて被遣候。異事無之候。

一御能の時。つゝミ打腰をかけ申事。御座候哉之事。腰をかけ申事ハ。ひろき御庭の舞臺にて候へハ。不及沙汰かけ申候。又御縁ちかき御庭ニ而ハ腰かけ不申候。其時かけ申候得と被仰出候てかけ申候。御供衆の役にて候。伊勢守なども申きかせ候。

一猿樂に御酒被下事。菊の御酒とをりてすへに候。盃を座しきにおかれ。めし出し候て可被下候か。惣次猿樂の前へ盃を持向事ハ無



之候。當時以外緩懇に候て。御酌の仕合もむつかしく候。

一繪を進上の時。ななき繪をハ横に盆にすへ申へし。繪の面の方。御前へ向可申候。然ハ外題ハ御前の左たるへし。持參申者の右に。外題有へし。また繪をハ盆に豎にすへ申へし。然ハ外題の方。我かたへ成て有。持參候二幅三ふくの時同前。

一座敷に繪を掛候時ハ。卷緒を繪の左のかたへ成もてかけ可申候。二幅の時ハ左ハ左。右ハ右へ成やうにして可然候。又卷緒のゆるかぬやうなるも有之。

一廣蓋の事。其家々の紋を入候なり。然間。雖爲新調候。私の紋を入候而御服をハ。入不申候。諸家へ御成之時ハ。御紋の廣蓋用意有之。

一文箱に狀を入事。不依貴賤事也。私にてハ人

に渡候時。奏者に箱の緒をときてミせて渡事も有之。不及其儀渡候事も有之。年始に爲御使右京宅へ勢州被參候時ハ。馬の前へ右の方の中間持て。右京に縁へあかりて。御文箱をとらせ。おくの間へまいらせ。奏者秋庭。又ハ別人にも御使之山被申候時。御文箱を持參ながら被申也。御文箱を被渡候也。先々ハ右京□へ直ニ被渡候也。申候也。至近代奏者に被渡之候高國の御時まで。直に頂戴なり。其時ハ右京ニ對面の時。文箱の緒をとき。御内書をハ蓋を取て直に渡之申候。蓋を□□へてまいり候つるなり。扨御内書頂戴ありて致祇候。御禮可申上之由。御返事之時。太刀を給て卒度手をそへられ候なり。むかしハ御使の給候太刀をは。不頂戴之由申候得共。近代ハ卒度いたゞき候なり。扨退出候。太刀をハ秋庭もたせられ。中間に被渡



之事も有之。縁にての禮なり。秋庭は庭上へ  
おりす候。然に別の所より庭上へ下。就他事  
物申やうにして。門外迄貞宗を送り申候。近  
頃の仕合なりと申傳之候。常□不改御物語  
り也。

一對諸人禮節の事。上中下有之。蹲居。口禮。平  
伏の三品なり。又兩手をつき。片手をつく差  
引等有之。鐙をかくへ申とある本も有之。押  
てと有之もあり。かくへ申とある儀共故實  
と云々一段賞翫の詞也。他人不知之。小袖の  
下かい上かいとある本も有之。又上かへ下  
かへとも有之。所詮上かさね下かさね。上ま  
へ下まへの事なるへし。しからハ上かへ下  
かへと申て可然と云々。猶可相究か。

一日笠をさしかけ申事。左右ハ不定。日おもて  
よりも指可申歟。雨笠も風雨の時ハ雨かゝ  
り不申様に。風下より指可申候。

一金欄段子なと進上仕時ハ。記録に有之こと  
く相候共。かゝつゝミ可然候。あまりにそこ  
ね候ハ、上を引合にてつゝミ。水引にて可  
結候。五端十端とも進上候時ハ。一端ツ、せ  
んかうなとつゝむやうにして。それをもと  
ゆひのふときほとに。二すし紅にして。惣を  
結て盆にすへらるへし。むかしの段子ハ卷  
候ハ、たゝミたるにて候。いまは卷とんす  
にて候間。一端てつゝミて惣結をして可然  
候。惣結は兩わなたるへし。一端ツ、はかた  
わなるたるへし。

一からいと三斤。或ハ五斤なと進上候時ハ。ね  
ちたる方を下になし。堅に盆にもすへ候ハ  
ハ。ねちさるかたふつさりとて見たてよ  
候。一斤などにて候得ハ。如常横にもすへら  
れ候。

一三物の遊と申ハ。流鍋。(馬脱カ)小笠懸。犬追物なり。

しかるを近代はやふさめまれなる間。犬。笠懸。歩射を三物といふなり。又五物とハ。やふさめ。笠懸。小笠懸。犬追物。歩射これを五物と云なり。

一御主の御走に參勤申候時。遠路なとへハ刀の下緒をとめ申へし。とめやうハまるへ引まわして。腰のま中にて留へし。自然太刀なと帶候時も同前。又さけ太刀の時ハさけおく其まゝも置へし。後腰にかい候人も候か。それは見苦候。

一人數をかきたるをよむ時。ひとりふたりとよむへし。一ツ二ツとハよます。又首の注文をよむ時は。一ツ二ツとよむ間。つねにはひとりふたりとよむなり。

右條々任懸望浮重令相傳之者也。

慶長三年六月廿三日

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

續群書類從卷第六百九十六

武家部四十二

諸大名出仕記

大名出仕の時。其供の足半の事。御門の内までもはかれ候。主人御縁へ御あかり候時は。おの／＼はかしこまれ候。さやうの時も。皆々はかれ候。足半をぬかれ候事ハ。可依時宜候也。又足半三緒二緒之事。高下於都ハ。其沙汰なく候。貴人等も大畧二緒にて候。

一足半木履ハ。殿中の御門の内へもはき申候。御縁のきわまでもはかれ候。常の木履ハ。人中へは緩急にて候。いやしく見へ申候。足半

木履は。公界にも能候。公方奉公人ハ殿中にもはかれ候。大名の御内にハはかれす候。

一御拜賀の時。布衣之事。御笠并御沓の役人にて候。兩人參勤候。次にわらはと申事。是も役人の名にて候。公家かたに被仕候人にて候也。於公方ハ。きんやくの方共申候也。

一主人。貴人より御太刀切にても。被相添候て被下時ハ。御太刀はかり戴申候。太刀を戴候てハ相添候物を戴候に不及候。又目錄などは。太刀に被添て戴き候也。

一勸進能の時。花太刀などつかはし候事勿論

なり。太刀にて如常右に持之。舞臺持向候時。座の者一人。舞臺よりおり候て請取候。又花は。右の手に持候。いづれも舞臺の上にて渡し候事ハなく候。太刀花其外。何を遣候とも。忤者にて可遣候也。

一 白小袖ハ花族にて候。自然にハかに人中へ着候時は。あお花にても。又は墨にても。ちいさく紋を付候て着候。是故實にて候。但貴人御前へかやうにして着し候事ハなく候。白小袖を着候時。俄に人前へ罷出候時の事也。

一 髪立の事。公家ハ二才。武家は三才にて仕候。此様躰は先髪をたれ。米の粉をつふかにぬり。さてわたほうしを長くさせて。其綿帽子に。山たち花同熨斗匏を加へて結そへ中程を入。もとゆひにてむすひ候也。同眉を作り中候。男女ともに此分にて候。山橘熨斗匏

の數口傳に有。又支度之事。男子は長緋を着させ候。平人のは布の素襖袴にて候。長緒めはつなひもくみにて候。又きくとちは。すゝしの糸をふしかねに染て用候。又素襖の有革にて仕候也。

一 帶直の事。九才にて仕候也。帶をは主人の御上などに申候もよく候。吉方へ被向候て被仕候。次に帶の事。龜の甲織付たるを仕候也。

一 齒くろみの事。年は不定候。先十二三計の比にて候。此時も主人の女中なとへ筆を申。色々の様躰有之也。祝は帶直しと同前也。

一 女房ひんをそかれ候事。十六才の六月十六日の午の時。かほそかれ候。十六日壬午にて候へは。猶以吉事にて候。惣別ひんのさきをつめられ候も。壬午にて候。色々口傳あり。しるし候分にてハ。心得も行候はぬ間。詞に

て可申候。是又殊外の祝にて候。

一 裕着時分之事。九月朔日に着して。九日に小袖を上に着し。明るとしの卯月朔日迄。わたを着し。扱端午五月中を被召候。詞にも四月一日より裕を着し候と申ハ。不覺のまゝ事にて候。只わたを其儘着してこそ居候へ。能可有之分別也。

一 杉原のひもの事。十帖の時の事にて候。二束の時は如何。紐こしらへ様の事。杉原九枚計つき候て。兩方のはしを中に折入。四ツにたゝみ。下より上へ巻。兩わなに結也。折かく請取人の方へなるやうに結へく候。又紐のすその方。うけ取人の方へなるへく候。

一 馬にたてかけと言事有。同かけたてと云事。これまた可心得事也。

一 馬をはしらかすとは。惡敷候。一あしと申也。

一 馬の立とは惡候。あかると申候。又ほこをつく共申候。

一 馬をせむるに。小路にて乗候へて。小路乗りと可申なり。

一 笠ふくろにあをりかけて。馬の跡にもたせ候様躰。口傳。

一 せこの酌の事。客人亭主方歴々着座の時。上性計に盃めぐり候て。中座以下に盃をそくだり候へは。何とやらん相見之候時の時宜にて候。客人あまた候得は。亭主より御せこと申候時により候。可爲分別候也。

一 主人貴人女中方の御盃を被下候時。御同前にきこしめし候て。被下候へと貴人に申すまで申たるか能候。扱被下候へと承候時ハ。くきやうともによく戴き。盃を取御下を給り候て。御酒を請候。女中衆のさかつきの下をは。給候ハぬかよく候。用捨の所却而緩怠

に罷成候處にて候。但時宜によるへく候。

一茶の宮仕の事。廣坐の時には。茶をまいらせ候て。少退候て罷居候。小坐の時ハ縁に下り候て。扱めしはてられ候時。參候而請取候。左の手にて上中下を分別すへし。

一猿樂等に青襖ぬき。又肩衣ぬき候は。遣し候時其儘青袍又肩衣不着か能候。

一猿樂に小袖をぬき候て遣し候時も。わたのまゝ罷居候。又小袖を着候へは。ぬき候ハぬ様に相見申候間。不着か能候也。

一兩人酒を給候時。肴を人のはさまれ候は。見合候て罷立請取申へし。猶口傳にあり。

一織筋三端折に入候時ハ。十二たんハ双候て。一端と二端の上に置候也。

一依時節衣裝を着仕事。先九月九日より。明年の三月中は小袖を着候。又四月朔日より五月四日までハ。給を着候。また五月五日より

八月中ハ帷子を着候。又九月朔日より同八日迄ハ給を着申候。毎年此分にて候。但男女のかはり候也。

(子脱カ)

一帷の事。何も苦候。唐布なり。御禁制の御沙汰はなく候。又北絹などを平人着候事は。努々有間敷候。少人などは内々にては不苦候敷。又紋紗等も同前なり。

一年寄には白き帷先可然候。羽は正直布なども不苦候。又若人等紺地白の帷子よく候。紺地白とハ皆人の申候地白の帷子の事にて候か。次梅崩黄を加へそめたる帷子も。若人には可然候。殊に上かはをは。赤くそめて。下かは計を梅もえきにて染たるは。若衆などには猶似合候て能候。女房衆も若き間は。加様に染たるを用ひられ候。

一生緋の帷子の事。是は依人可被著候。平人なと著申候事は。努々不可有之候。但十四五迄



は。依人著候。子細有之儀候。

一丸生絹の事。是も同前に候。丸すゝしとは。すゝしの袷の事也。一重すゝしとは。生絹の帷の事なり。紋を付てもおり申候。又一方をは赤。又下かいをは白も仕候歟。是をは白紅と申候。又何も赤も仕候。色々におらせ申候間。一向に候ハす候。

一小袖の事。依高下不着衣裝多候。先おり物の事は。平人等は可有斟酌候。旁御禁制にて候。公方々御免候へは被着候。理運にハ不被用候。但又平人の子十四五迄は。内々にてハかんたうのおりものならは。着候ても不苦候。夫も外人參會には着問敷候。

一白き小袖の事。只の人ハ着不仕候。但平人にもおほかたひら着候時ハ。白小袖を用候ても不苦候歟。又出家等はくるしからす候。一縞子同段子の小袖。是も御禁制にて候間。人

中へ着候事不可有之候。但少人などは又不苦候か。

一織筋の小袖の事。老若ともに不苦候。是も昔ハ不斷は斟酌候而。晴の參會の時は着候やうに承候。當時ハ何も被用候間。此拵にも不及候。

一藍の染小袖の事可然候。依老若それ〴〵に相應候様にて用候。年寄にハ紋をちいさく付たるか能候。又若人にハ紋を少おほきに付へし。又いさうに染候て。目に立候へは不可然候也。

一茶染の小袖の事。不苦候。うらうちの時も着候。但若人には不相應に候か。又染様にもよるへし。

一紫の小袖の事。御禁制のさはなく候。但下之人など着候て。然も其人の御前に參候事ハ。可有如何哉。又紫もねりをこしをあけて

染たるはよく候。こしのあかぬはいやしく見へ申候。紫に不限。何もそめ小袖ハ。こしをあげ申候。

一梅染の小袖の事。是も不苦候。人中へも着候。但若方には不相應候。とし寄は着候。うら打の時も着申候。

一かけあさき。同かけもえきの小袖の事。不苦候。昔は遂申候。當時ハすたり候。うら打の時ほとも可有如何候哉。小巡方の時ハ着用候也。

一茜の小袖の事。是はきつと參會の時は。可有如何候哉。心やすき方は常に着仕候。是も無紋の類にて候間。依所着候ましき事にて候。一無紋之小袖の事。不着仕候。内々にてハ左も有へし。無紋の類にて候へとも。茜の小袖ハてうほどの參會には。被着候方も候也。

一紅梅の袷の事。男は十四五迄ハ着申候。其比

過候へは無着用に候。紅梅とハ紅の袷の事にて候。

一赤き袷の事。是は廿計迄も依仁躰着候。赤き袷とハ。糸を蘇木にて染おりたる事にて候。又紅梅は糸を紅にて染申候。大略人日は同前之やうに見え候得とも。殊の外相替候也。一袷の事。年寄にハ先あさき。ちや。こん。もえき。くろ梅。此類相應にて能候。又若き人には朽葉。ひわ。柳色など可然候。又ひわた色。玉虫いろ。かや色。空色。とかけ色。紫ハ三十計の人着候也。

一紅梅のねりぬき白などは。幼義の人被着候。又紅梅の袷のうらは薄紅梅にて有へし。又ぬき白のうらも赤候。又ぬりのうらは白く。袖はわきあけたるへし。えほしを着候ハぬ前は。わきあけにて候。但烏帽子を着候とも。依年わきをあげ申候也。

一白き袴の事。不苦候。うらたち又はおほかた  
ひらの時も可着候。白袴と申へ。きぬの袴の

事也。ねりなとを仕候事ハ。なき事に候。越  
前絹なとをねり候て。うら面に仕候て用ひ  
候。是は袴の事にて候。小袖に仕候て着候事  
はなき儀に候。御禁制にて候なり。

一小袖を三えりに着候事。自然の義に候。外人  
の前へ着候事。努々不可有之候。只二ツゑり  
無難候て能候。二ツゑりとは。小袖の襟と袴  
のえりとまでにて候。又現喝食若衆などは。

三えり能候。

一小袖を大ゑりに着候事。緩怠なる儀候。殊以  
年寄ハ二ゑり可然候。又うしろへのけて着  
中候も。緩怠なる儀に候。よき比に可着候。

一巡方時肩衣にひたを取候はぬハ。自由なる  
儀に候。先如常ひたを取候事可然候。

一肩衣の色と。同袴の色の替りたるを着候事

略義に候。少人には不苦候か。但是も心安時  
の事也。

一半袴の事。是も自由の義に候。着候事努々有  
間敷候。又よの袴ハ依不着候。わさと四ツの  
袴を着する事も候。

一打かけ肩衣ハ。一段緩怠の心安方へも。うち  
かけて見參する事有ましく候。

一袴のすそのぬひめをは。三針さしにて能候。  
あひもなく然とはりのをこまかに縫候事  
は。おもハしからず候。いやしき物にて候。  
地下人など常に用候。

一小袖と同肩衣袴の色。同やうなるを着候も  
あしく候。不苦とは申なから少めにたち候。  
一帯の事。若人ハ色の赤を仕たるか能候。又年  
寄ハへに不入のよし物かうしなと能候。

一帯の事。つけ帶用事能候。くみ帶用候事。人  
中へハ不可用候。いやしき物にて候也。

一 大身かはりのあはせ。少人など不苦。上かいは赤。下かいは白。又はうす紅などの事にて候。女中衆へ不苦候。

一 男の小袖のうらを赤くする事。如何にて候。少人のは不苦候。但それも面の色にもよるへし。表赤く候へは。裏も赤くする事。又少人のも茜の染小袖。又は織筋などのうらを赤くする事は無儀候。紫の小袖またはちや染。茜などの裏を仕。赤くする也。色々是は少人の小袖の裏の事にて候。

一 小袖うらをも白くして。紋計を藍染などに仕たるは。自然少人などとは不苦候。年闌たる人には不似合候間。無益にて候。是は小袖の地をは。ねりにて仕可然候。其儘白にて。紋はかり紺にてつけたる事にて候。少又異相にも見へ候か。

一 地をは黄茶にして。紋を紫。又は崩黄。又候。

蘇芳などにて染たるは。中程の參會には可着候。貴人の御前へハ。斟酌しても可然候。うつくしき小袖にて候得と。地下人など專着候間。左様の儀に如何にて候。

一 小袖袷などの色のかわりたるを着候か能候。赤袷に同茜の小袖などは。又惡候。又朽葉の袷に同朽葉のおり筋などは。又惡候。また黒茶の小袖など着候時。又紺の袷。是も如何にて候。此等を以て自餘之儀分別有へし。

一 男の着候小袖には。いづれも綿をは入れ候。又女房の小袖の上着にハ。綿を入ぬものにて候。上着とは。いち上にきられ候小袖の事にて候。

一 膚に袷を不着候。略義候。人中へ出候時ハ。必可着候。又袷の代に白絹をはたに着候事。是も畧義に候。但三月など小袖袷は。あつく候間。小袖の下に。かたひらを着候事も候。

是は不苦候。寒時分には。かたひらを着候は  
ゝあしく候。

一小袖の時分に袷を着候て罷出候は不苦候。

また帷子の時分。袷なと着候惡候。亦袷なと  
の時分に。帷子を着候は不苦候。但是も可然  
時宜候。三月廿五六日の頃。袷なと着候か能  
候。又四月廿八九日より五月二日三日なと  
に。帷子着候。是も不苦候。また四月の初な  
とに。帷子なと着申候事。ちと異相に見へ申  
候。又三月の初に袷。是も同前にて候。猶以  
是は其時節世上あつく候へは。自然ハ此方  
にて候。心安方へは加様にも仕候。貴人の前  
へは。相定候時節の衣装可然候なり。

一小袖のえりの後を巻候て着候をは。そう  
かうえりと申か。近頃自由なる儀に候間。人  
中へ如此着候事は。努々有ましく候。年寄な  
と他人行の時。ほのくほへ風あたり候へハ。

巻たる襟をひろけて。風のあたらぬ様に仕  
候。若人なとはすましき事にて候也。

一ひとへ袖はそは不苦候。是は巡方の袖のみ  
しかきにて候間。依時宜人中にも着候事も  
候。又裏の付たるは着ましく候。緩怠なる儀  
に候。

一村搔染たる上下。同かた衣。袴の事。依人着  
候。不苦とは申なから。本々の參會の時は。  
如何有へきや。先は如常縫め付可然候。地紋  
にして。それを紫にしたるの事にて候。

一帷の事。先五月五日に厚絹のかたひらを可  
着候。六月より越後布なと可然候。又七夕の  
帷子は。必越後布たるへし。

一帷の袖の上に。縫上を仕候事。常の義にて  
候。袖の内に仕たるか能候。又女房の帷の縫  
上をは。袖の外に仕候。又小袖の袖の上に  
縫上をする事。有間敷事也。同小袖のこしの



當に。縫上する事も無之。但又喝食の小袖にハ。こしの下に縫上を必仕候。

一帷子の時分。世間も寒く候へは。帷子の下に裕を重ねても着候。寒として帷子の上に重ね着候ハ惡敷候。又裕の時も。寒候へは。下に小袖などを重ね着申候ハ不苦候。

一社參の時の十徳には。常の巡方のことく紋を付申候。又地紋にも付る人候。次袴も後こしと。又兩のもゝたちとに付候。是も地紋にも仕候。但地紋ハ略義に候。遠所の社參の時は。十徳を着て。其上にふと帶して。腰當を仕。太刀をはきて鞆付。同弓を持候。ふと帶ハ白き布をほそくおりて。それをくけて用候也。

## 諸家參會記

諸家參會之時。可覺悟條々。

一諸家參會の時。太刀以下にて。御酒の時御禮の事ハ主客前後の事時儀によるへし。客貴人にて候ハ、亭主より可被進候。又亭主貴人にて候ハ、客人よりも可被進候。不定の由申也。

一他家へ主人の爲使者罷出時。主人より太刀を被進候ハ、其趣を申て。太刀を渡て後。自分に御禮申候ハ、縁にても又御座敷にても。愚身も序なから一腰にて。御禮申度由申て可渡之也。奏者彼太刀を一具に披露の様は。彼申たることくに披露中へし。さて御酒半なとにても。時儀見合。太刀にても御禮可申なり。

一同時御酒半に。盆香合等の唐物の類にて御



禮申候事ハ不及見候。但かねて一段と罷出候時。から物以下可被遣候。然者對面以前にみやけとして可被進候。亭主よりは。俄の參會にも。から物以下被進候事數度有之。

一同時乗たる馬を進候事候ハ、鞍をおろしあらひ。轡にても又乗くつわにても引て可被進候。鞍を置なからも被進候し。かみをまきたらは。すきたてゝ可被進也。

一同時馬太刀などにてても。御禮可申候に。可然馬にも乗候ハすは。太刀を進候時。馬をもと詞にて約束申事。常にある事なり。やかてひかせ可被進也。

一御酒の時。御酌にて太刀を被進候ハ、被進候人の同名。又ハ内の人持候而可罷出。主君の右へ持參申候ハ、つかの方を主人方へなしてまいらせへし。又座敷によりて。左より進候ハ、しはひきのかたをさし出し申

へし。是則被進候勝手たるへし。如此の事も。兼てかくこなき人は。俄はいまうある事<sub>ナシ</sub>在之也。

一同給候人は。盃を下に置。謹而頂戴可有。但ちやうたいの事ハ。互の位によるへき間不定。さて右の脇へ取まはして被置候を。誰人も罷出取可罷立なり。

一同參會の時。猿樂・田樂以下に折紙遣事候ハ、其時の申次の人。又は知音の人に談合候て。某殿より被遣候と申聞可遣之候。自身ハ遣候ましく候。自然太刀などは。自身も可遣候か。是も以餘人遣事。猶可然候。又時儀にもよるへし。

一同時。主人又は客人共に。一番に打刀を被進候事ハ。略儀にて候。先太刀を被進之候て。後ニハ打刀をも可被進候。打刀ハ一かとのやうに候間。何もそひ候ましく候。たゝ打

刀はかりたるへし。

一同參會の時。惣領たる人。其客人を賞翫にて候ハ、其庶子も太刀などにて。御禮勿論候。客人より太刀などを給候ハ、其返禮の事ハ不及申可被進候。

一同參會の時。惣領の盃を其庶子たへ候ハ、さかつきハ頂戴候ましく候。然共同名中。其外心やすき間にて參會の時は。尤いたゞき申へし。貴人主人の御前にてハ。ゆめ／＼ちやうたい有ましく候。

一貴人主人の御前にて。今日は精進にてなとと申事あるましく候。御尋の時ハ。一往はいやと申て。猶御尋の時ハ。すぐに申たるか可然候。殿中にても此分たるへく候。

一主人又は貴人。わたくしへ御出の時ハ。門外まで罷出事も可有之。又庭上にて出合申事も有之。在所の事ハ。其家作又は時儀による

へし。又諸家へ御成の時ハ。其亭主大門の柱のきはまで罷出。かしこまり候。門の左右の事は。御成の路次によるへし。御成も如此候間。それにしたかひ。主人御出の心得も同前たるへきか。

一貴人などの御前にて。はれの役仕候時は。かならずゑはしかけをすへし。大法にて候。犬追物以下の時も同前。殿中におゐて披露なと申時も。烏帽子かけを可仕のよし申也。

一女中にてめしつかはれ候時。刀を置候てまゐり候なと、申人も候しほとに。尋申候へは。刀をぬく事は。ゆめ／＼有ましく候。自然佛法の師などの前へ。心やすき間にて罷出候ハ、さも可有か。いヶ様の貴人の御前へ罷出候共。刀をさし可申候。御湯殿風呂。又は御くしなとに參候ハ、刀をぬくへし。其外。刀をぬき申事は。曾以有間敷申候な

り。

一 貴人の御前へ罷出候時ハ。扇をぬきて紐皮を。すあふと小袖の間へ入候て可罷出。召仕候時も又同前。

一式の引出物と申事ハ。五種にかきりたる儀ニて候。此請取渡しやうの事は。渡ての次第のことく受取へし。流々によりて次第かはり候。先一番に太刀。二番に弓征矢。三番に鎧たるへし。また又馬渡して後にも渡候人も候へし。然共本儀はまへの次第可然候御目にかけて候も同前。御成の時は前より御さしきにをかれ候間。別に仕合はなく候。如此時はかいそへ兩人もめしつれられ候。又請取人も同前。

一 奏者仕候時。折又ハ板物など請取候て披露候ハ。其まゝ御前に可置候か。又とるへきか。美物などハやかて取候て可然候。普通ハ

此分候。殿中にてハ何も相替義共候。

一 御能の時。舞臺へ燭臺持參の事。燭臺持參の時も。又しんを取候時も。まつ御前の方より取可申。又しん取候事。臺ながら取候事可然候。蠟燭を取おろして取事ハ不可然候。但さやうにも成候ハて。かなはさるやうにも候ハ。力およはす候。惣別大事の物にて候。火なごちり候はぬやうに可取候。はさみにて取候事可然候。箸にて取候事も。能々心をへ候はねは。仕合あしく候。又篝の事ハ。二方に可焼候庭もせはき所にてハ。蠟燭も御前の方二方にはかりも候し事も在之。かやうの役ハ。さかりたる役にてハなく候。殿中にてハ御供衆の役にて候。次の間などは。同朋衆の役にて候。

一 御座敷へ燭臺持參の時ハ。右に可持之。有明などの大なるは。兩方にも可持之。御座敷に

は臺の足を貴人の方へ向候事可然候。ころひなと仕候時の用心にて候。

一たとへせはき所にも。二所にたてられ候事可然候。風なと吹消候用心なり。又一所にも可有之。

一御能の時。女中より猿樂に小袖被遣事。別にかはる事ハ有ましく候。廣蓋に入候を。誰人も可被遣候。女中よりとして。女房衆ハ遣され候ましく候。男衆取次申へし。

一同時折紙なと被遣候事可有。御能過候てうたひ申。又ハ舞なとまひ申候とき。被遣候て可然候。其時被遣候人の御名を申聞候て可然候。太刀刀小袖なとも可遣候殿中にて御能半に被遣候得者。大夫面をはつして御禮申上間。仕合あしく候間。御能過候て。何をも被遣候。是は殿中にての事。自餘にては能半にも可被遣歟。如何候。

一御簾をかけ。又あけ申事。御簾ハ御座敷の内にかゝり候。あけ様の事ハ。うちへ巻候て。ふさかけにかけ。鈎さき外へなり候。神前の御簾ハ。是もまき様はうちへ巻候。かきハ外に候て。うちへかけ候。兩人して巻へし。

一御簾の御前をとほり申時は。兩手をつき可申候。御みす共可申候へとも。きよれんと申候て可然候。所により御みすとも可申也。若片手つき候は。御簾のかたをつくへし。

一妻戸の間。又しとみの間をとほるへからず。さりなから通候て。不叶事候ハ。不及是非候。殿中にてはみかうしと申候。是を出人心得有よし。中ならはし候なり。

一四本かゝりの満中理運に通事有へからず。但是もとほり候はてかなひ候はすは。御通にて手をつき御禮可申候。

一座頭そうしやの事。主人見參候ハ。手を引

て可參候。但座頭なからも。たしかにて候ハハ。後見にをよはす候。さて座敷にてハ。よきほとに所を相計。是にあれと可申聞候。平家をもかたり申候ハ、座頭申旨にまかせ。琵琶を可持參。座頭の引候勝手に可渡候。又折紙御小袖なと被遣候ハ、於御座敷手にて可遣。退出の時も同前たるへし。殿中にて惣檢校出仕の時。申次覺悟此分餘も准之一主人の御前にて。あつきとて扇をつかふへからす。あせをのこひ申へからす。殿中にても此分也。

一人に相對して物を申時。あをのきて申事ひろうなり。又うつふきても用心彼是あしき間。向の人の刀のつかを見合候て申事可然候よし申候。但又人躰にもよるへし。

一うら打の時。黒太刀を可持也。刀もさや巻をさし候事本儀なり。

一うら打小袖なと。人に遣候ハ、廣蓋に入候へし。其次第ハ裕小袖うら打と次第可有。小袖のことくにうら打をもかさねて。しりのかたをつねの如く可渡なり。

一新小袖をとち候事。袖の下をごち申候也。殿中八朔なとに。進上の小袖もとち申候なり。よめ入なとの時ハ。とちやうもかわり候なと、申人も候。加様の躰に故實あるよし申候なり。

一三ゑりに小袖を着用候事。略儀にて候。兒若衆なとハ。色繪にさもあるへし。又老者は物を多く着用候間不苦候歟。

一馬上の人に物申事。左右不定。乍去馬手より申て可然よしに候也。

一馬上の人に鞭を可進事。馬の前をとほるへからす。後へまはりて馬手より馬にたちそひ。とつつかのかたを卒度可進。あらけなく



指出候事不可然候。馬驚事も候まゝ。しつかに可進事也。

一鷹の鞭をはたゝきたるかたを可進。さし候かたハ進すましく候。

一同餌袋を人に可渡事。ねをうけをかけをもうちへ入候事も在之。又其儘置候事も有之。さて渡し候時は。ひるは鳥くひ。夜はうさきかしらを可渡也。是ハ夜晝の心得有之事也。一鷹の鳥と申事は。雉にかきりたる詞なり。其外ハたかの鷹。たかのうつらなと可申候。何鳥をもたかの鳥とは申ましく候。

一狩と申は。鹿かきの事なり。其外ハ鷹かり。うつらかり。もみちかり。さくらかり。茸かりなどゝ申へき也。たゝかりとは。鹿かきの事たるへし。惣別狩こと葉のならひなくしてハ。人のまへにて申間敷候。

一鷹の鳥御目にかけて候事。尾のかたを。御目に

懸へし。かひくちを御覽し候様可有。尾のかた御目にかけて候事。鷹の鳥にかきりたる事成へし。

一白鳥。其外臺にすはり候鳥を。兩人してかきて御目にかけて候ハ。左のかしらのかた兄。右を弟かき可申候。さてかしらの方を可懸御目。左の羽うらへ。かしらを引まはして可置之。

一鳥を臺にすへ候はゝ。横目にすへ申へし。板目にはすへましく候。春ハ女鳥を端にすへ。其外の季にハ。男鳥をはしにすへ可申候。たとへは

御前

男鳥

女鳥

御前より御覽し候て  
女鳥右に有へし。



一御火鉢又はいろりなどに。さし炭置申事。男衆の事は申に不及。女房衆も御手にておかれ候。火箸にて置事。ゆめく有間敷候。

一鐙おさへ申事。貴人めされ候ハ、左にてかこをひかへ。右にて舌さきを押候て。めさせ申へし。等輩へは左にてちから革。右にてかこをひかへて乗へし。若又下輩には。兩手にちから革をひかへ乗すへし。此三の品。分別あるへきよし申習候。

一鞍に付て。い木ゆ木と申事有之。いつれもくるしからす。居木柚木此の二の字是也。

一鞍に直弟と云事。則此字也。大坪事也。目録等にも直弟とも書。又大坪共可書之也。

一ゆかけをさして。貴人の御前へ參る事不可有。自然犬追物などの時。俄に御酒など被下事有之。右ゆかけ計とるへし。但取ほとのみきなくは。手覆をむくるへし。ゆかけさす

時ハ。右よりさして。左よりとるへし。

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫以宮内省圖書寮本校合畢

續群書類從卷第六百九十七

武家部四十三

風呂記

目錄

貴人。風呂にて茶水など參事。

貴人の前にて。物をはやく可食事。

宿願有て。腰刀を神へ奉る事。

願有て。神に我持弓を奉る事。

神馬にしてを付る事。

馬屋の腹かけ持木の事。

馬屋の鞭の事。

髪まく足駄の事。

竹はたけを竹刀と云事。

馬をはたくる物の事。

鞭の名所の事。

銚子の事。

鷹の鳥を。鷹柴に付る事。

鱸の五色鮠の事。

鮎の筏なますの事。

鶴の事。

八月一日。尾花粥と云事。

人の所にて禮の事。

酌を取候事。

小袖を檀紙に敷て參する事。

毛皮を參する事。

鞍覆をする事。

御轡よする事。

御年男を勤する事。

鷹を居て酒を吞事。

烏屋とあかけを懸御目事。

主人の鷹と。私の鷹を繫様の事。

小袖と扇と太刀とを添て。人に參する事。

鞠をかゝりにほす事。

女房に馬を見せ申様の事。

旅宿にて宿主人馬被下事。

御洒の下を給る事。

鷹居たる人に逢て禮の事。

輿の禮の事。

貴人に物を申様の事。

貴人の位を承る様の事。

座敷にて。主人の義なくして仕事有事。

座敷へ燭臺持て參る事。

鼻紙を參する事。

尺八參する事。

笛を參する事。

小鞍を參する事。

筵を敷事。

筵のたゝみやうの事。

主人より刀を見よと被仰し時分事。

主人が腰刀を被下候時の事。

風呂へ御供の事。

茶を吞事。

座頭に平家を語する事。

主人の代として。焼香致す事。

女房の座敷にて。召出を吞事。

香爐に火を取事。

座敷の敷居を越候事。

長刀を渡事。

四物奏者の事。

三物奏者の事。

同渡事。

太刀持て御供の事。

愁傷の時。太刀持様の事。

送足の事。

中半太刀。御中間ニ渡様の事。

弓うつほ渡事。

小者のつかひやうの事。

廣蓋の事。

扇の直様の事。

枕の方を定事。

風呂へ御使など仕候事。

爐の炭の上に火を置事。

繪見の物を渡事。

雙六の石。將某の馬を持て參事。

刀をさゝぬ所の事。

花の時。花筵の事。

花瓶と花を持て出事。

白花と色花の事。

雉をさくと云事。

物によりて焼串の事。

鶺鴒の鮎の事。

輿の内へ物申事。

神前下馬の事。

路次はた門の前を通事。

橋をかけ。道を作所の下馬の事。

川狩する所の下馬の事。

騎馬の時。鞭を抜て禮の事。

鞭をは。公方様へも被爲持候事。

鶺鴒に行合て禮の事。

鶺鴒もつかひ候時の禮の事。

貴人の御供の時。太刀を持て祇候する事。

御犬など見る事。

湯と水と持様の事。

貴人に昆布を参する事。

貴人へ肴居様の事。

同輩の人に肴居様の事。

我よりも下たる人に膳をすゆる事。

折の物を持て参る事。

瓶子に肴添て持て参る事。

よめ取。掣取祝言之事。

七献の引出物次第の事。

兒若衆女房へ銚子渡事。

御酌に参事。

酒の間に。烏にても魚にても板物出す事。

折の物を引事。

下緒詰る事。

元服の時の魚の事。

大名所見事。

寺を見る事。

折の物被下事。

御通の盃の事。

御酌を取人の事。

貴人の御酌にて被下事。

御神盃を吞事。

客人持参の酒の事。

夏縁なとにて酒参事。

湯漬食事。

茶碗染付土器などの盃の事。

傾城白拍子ニ銚子を渡事。

鷹の烏を食事。

餅を食事。

饅頭の事。

茶禮の事。

冷麵の事。

點心の食様の事。

飯の時の事。

御引出物遣候次第の事。

毛皮の事。

三献御酌の事。

自京都奉行人の方へ書札の事。

女房を迎る時の事。

## 風 呂 記

一 貴人の風呂にて。茶又水被聞召時ハ。刀を不指して持て可被參也。

一 貴人の前にてハ。物をはやく可食之。主人と同様に不食物也。

一 宿願有て。腰刀を神へ奉ハ。下緒を解て置。參らすへきなり。下緒は子細ある物にて。神へ穢れ也。

一 願ありて。神へ我持弓を奉にハ。拳を新卷直して。弦を新敷かけて可被參也。

一 神馬にしてを付る事。おゝいかみ又しみのかみ。又尾のあまおゝい。以上三所也。可引次第。先神前へむけて。人の見參に入様に。馬を立て。さてとへはつきまはして。順に三度留おちを可引。さて以前のことく又神前へむかはせて可渡也。



一馬屋の腹かけ持の木に。鞆形の様に二ツ、あり。此木ハ腹懸を押へさせんと見へたれとも。名有へし。八木といふ也。知人稀なり。又某貫とも云也。

一馬屋の鞭の事。ふとき竹の根を三尺六寸可切。節は半なるへし。緒をはふすへ皮にて入て鞭むすひをして。さんほうにはかへさずして。一寸計に切へし。鞭にとんほうを是不入。鞭のかけ所ハ。あいの板のむかふの柱にかけへき也。鞭をみて自馬のしつまるなり。

一髪まく足駄の羽の長一尺貳寸。

一竹はたけ竹刀と云事ハ。あやまりなり。刀にて馬をはたくことは。如何にあるへき事に哉。

一馬をはたくるものを。はれんと云物あり。田舎にハなし。山にらんと云草の葉にて作物也。刷牙刷足を馬はたけとよむ。

一鞍の名所。前後の山形。左右の手形。前後のすあま形。後のきしも。四の爪さき。居木。前後海。居木崎七也。

一銚子をは。一ゑたと可申なり。柄の入て有ゆへなり。

一鷹の鳥を鳥柴に付て。外人の方へ參せへき付やうならは。木の柴に可付。山緒をかけたる其緒にて。上の枝に可付。さて是をそろへて。藤をさきて柴に結付る也。鳥柴の長さハ。三尺計なり。女鳥ならは。枝二に可付。男鳥ならは。むかはせて可付。年の内ハ先男鳥を請とらせ。さて女鳥を可渡。春ならは先女鳥を可渡なり。鳥の頭を人の方へむけて可渡。左へ渡せは請取て。右へ可被直。貴人の御前にてハ。物に立添て可置。男鳥の山緒と女鳥の山緒と相違と云へり。

一鱸の五色なますとは。榎の木の葉をかい敷

にして可認 此なますハ。定て二献に參なり。酢鹽はうすぬた成へし。栗ぬたなり。川鱸にて可在之。

一 鮎の筏なますは。料理の第一の秘事なり。知たる人稀なり。是も酢鹽うすぬたなり。大豆をぬたにすへき也。かい敷ハ柳の葉なるへし。折敷は筏を二きやうにならふるなり。筏秘事なり。料理方にも知人稀なり。京都におゐても稀なり。こと物をくみませぬ習なり。一段賞翫の繪なり。鮎のよひぬ時計なり。

一 鶯の初音繪と云ハ。節分の夜の物なり。鮎にて認る也。かいしきは芹の葉なり。是は本草の家の秘事なり。此繪は五献目に參なり。世に有事をしらねは。物とにつまる物なり。

一 鶴ハおのかやきくしと。みそやきより外は。御座敷へは出ぬ物なり。

一 八月一日。尾花粥と云事は。らいれき有て。

七月廿七日の諏訪のみさ山の神事の時。尾花を取て置て。其を黒やきにして認るなり。就其。色々の謂ありといへとも不及注。世上に是を用て。粥をにて尾花粥といへり。

一人の所へ來て。我は座敷に居て。縁に居たる人に不可禮。又盃の禮もなく。縁は座敷の外なり。縁へ出て禮する事は。尤吉。主人座敷に有て内へとあらは。先縁に畏て。さて座敷へ入は。兩方の手を。さいを越て座敷へ可入なり。手を不越して入たらんは尾籠なり。

一 酌を取候にも。座敷つまりたらは。さいこしにも可加。其時は左の手を。さいを越て加へたらんは不苦。ひさけも其心得なり。時の様に可依。惣別さいこし。上々ニハ無之といへり。

一 小袖を檀紙に敷て參する事。檀紙一束の上に。小袖を四に折とは。上二に折て。中より

折て四なり。袖を中へ折こめて。扇などの上に。小袖を置も。此儀なり。

一毛皮を參する事。毛を上になして。兩方の端を中へ折。さて三に折。鹿の皮をば白毛を上になす。熊の皮をば。つらを上になす。皮の上にしりかいを置。眞羽を置いて引事もあり。白骨の鞍などに。眞羽を添て置時は。くきをきやくの方へ向て。羽をば横様にすへ。客人の前へむけて。左へ可置也。扇などの上に置時は。かなめの方を客人のかたに置。式舩ハ同前なり。

一鞍覆をする事。夏とても秋も冬も。或は豹虎の皮にて有へし。熊の皮。霜臺の官の人ならてはすへからす。春ならは何も白毛をみするなり。逆革に結付て。むなかいを引廻へし。

一御輿よする事。常には妻戸の左の方を賞翫。

よめ取の時は。乗人の右の方を賞翫すへし。一御年男を勤する事。早天に出仕して。先御楊枝を二削て。兩方へ奉る。男の楊枝は六寸折敷に置いて參するなり。御女房衆へはくきやうにすへて參するなり。其後。可置所に炭を置いて。御手水に可參椀の中に。少ゆつり葉を可敷。青目なる石を。三ツ椀の底にかなわに置へし。是は<sup>チヨウ</sup>□の不動儀なり。十五日迄は。何事も祝の事は年男の役なり。節分の夜の鬼の目も同前。式の者の事すへ様。初献引渡二献打ミ。三献わたいり三所に陶るを。其を一献つゝ。主人の左に押上候。三献並て置なり。

一鷹を居て酒を吞事。盃を片手に持戴き。下に置也。其時。酌盃に左の手をそへて。酒を入れて。銚子を地に置いて。兩の手にて盃を取て。鷹居に渡す也。

一鳥屋ごあかけを御目にかくる事在之ハ。先あかけを見せる。さて鳥屋鷹を見せ申へし。

大鷹と小鷹は。先大鷹なり。

一主人の鷹と私の鷹を繋へき様。我ハ手鷹をは。主人の鷹の左の方に。大緒さきをとむへし。主人の鷹をは。右の方に大緒さきをとむへし。

一小袖と扇と太刀とを添て。人に參する事あり。先小袖と扇を可出なり。そのうち太刀を出す也。

一鞠をかゝりに干事。當季の枝にかけへし。其日蹴ましきには。結を一結てかけへし。四季ともに同前なり。

一女房に馬を見せ申やう。向をは見せ不申。少すちかへて見せ申也。

一旅宿にて宿主人馬被下候は。繋なから輿輿カをはめすして被下候也。

一御酒の下を給る事あらは。參左の手をつき。右の手に土器を取上。こほさすしてのみて。さて片手をはなし。片手にて持て左へ歸し。若それにて吞申せとあらは。そのまゝ可吞なり。

一鷹居たる人に逢ての禮の事。弓手に馬を打のけておりて。沓をぬくへし。人によりて片沓を拔事も有へし。又鷹ハ見すとも。大鈴をさして餌袋付たらはおるへし。

一輿の禮の事。弓手へ打のけて禮すへし。又この方より馬も少かけ出して送り。式躰有へし。其時。弓のうらはすにて式躰すへし。又下すたれみせきぬおしたるこしには。おるへきなり。此式躰。當流には不用之。

一こしを立られ候時は。騎馬爪下て沓をぬくへし。

一貴人に物を申様。其人の左の耳に入様に可

中但又所によるへき事。

一貴人の位を聞時ハ。我は左の耳に聞へし。

一座敷にて主人の儀なくして仕事四有。一にはかけ繪唱たるを直す事。二にハ葎のかけ金を直こと。三にはらうそくの眞を取事。四には萬あふなきものを直事。是四なり。

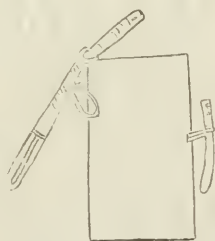
一座敷へ燭臺持て参事。賞翫の方をかけになさぬやうに置へし。飯樣逆にも飯へし。但座敷の樣によるへし。

一鼻紙を参する事。左の手に持て。主人の右の袖の内へ押入樣に可参也。切目我方へなし参する也。

一尺八参する事。哥口の方を我方へ成て。小刀の心得にて可参なり。右の方へ渡心持なり。一笛を参する事。笛筒に入たらは。筒共に持て。御前にて取出。我召笛の心に参するなり。

一小鞆は。そのまゝ御取候やうに参らすへきなり。

一薙を敷事。太刀の置樣在之。口傳ニ云。上の方を一折て敷也。御枕そはにも。又は夜物の上にも置也。太刀の置樣。



一薙のたゝみ樣。十二。十三。九。八とたゝむなり。口傳。十二にたゝむハ。十二因縁を表。十三。閏ノ月にたゝむへし。軍陣にては。九にたゝむなり。九曜を表。八にたゝむは。出家の人のをたゝむなり。

一主人より刀を見よと被仰候時は。左の手を



さきになして請取可申候なり。上を能々見申さて。はいき本を。そと抜見へし。皆抜て見申せとあらは。主人を脇へなし申様にて見申て。物を努々不可云。口傳。

一主人より腰刀を被下候時は。押戴て右の手にて。鞘を持て。左の手にて我刀を抜。うしろへ置て。御腰物を指。下緒を脇へやり。腰の通りを。主人の御目にかくるやうにして。我刀を右にて持て。御前を可立也。

一風呂へ御供の時は。湯具を扱申様。我刀を抜て。則召使候ものにもたせ。御腰物。扇。鼻紙を持てしこうする也。猶々持に。口傳。

一茶を吞事。天目を臺に居て出す時は。其まゝ吞也。又小茶碗にて候ハ、臺をはつして吞へし。其後。臺に居して並て置なり。通ひ人居て取也。

一座頭に平家を語する事。其所に奉祝云一句

と伺。主人先斟酌す。座頭定語るへし。二句目を主人所望。三句目を。又此方より斟酌する也。座頭頻に語る是通なり。

一主人の代として焼香なといたし候は。左の手にて焼也。刀を抜て置へし。香を焼て小脇へよりて可拜。向よりは拜まぬ事也。

一女房の座敷にて召出しを吞事。女房衆の酌取の顔を努々見へからす。我五尺計の前を見へし。但座敷によるへし。酒こはさぬ事也。立時。少にしり下飯へし。

一香爐に火を取事。春はひかき。夏は扇かた。秋はひしに押なり。冬は押すして。そのまゝ銀を敷なり。先合香何をも焼なり。其後沉香を焼なり。沉を焼て後は。餘の物を不可焼。一座敷の敷合を越候事。主従賞翫ならは。左の足よりこゆるなり。客位賞翫ならは。右を先ふみ入るなり。



一長刀を渡事。提て出て刃の方を我方へ成て。其まゝさし置に。請取人。下手を取。さて後へこし。順に直す。一禮して長刀を取て出へき也。又提て出て、立なから一禮して左に直し。そのまゝ渡すなり。請取人。右の手にて其後取。一禮して立事。常のことくなり。刃をのけて持て出るなり。請取人長刀の柄を。我かたのかうへの上越後に置。一禮するなり。口傳。

一四物の奏者と云は。弓。太刀。折紙。狀箱事。口傳。弓太刀右。折紙狀箱左。一に弓。二に太刀。折紙を添る。三に子細を申。狀箱を渡なり。當流同前。

一三物奏者と云ハ。弓。太刀。折紙の事也。但狀箱折紙太刀。是を三物と云なり。

一刀渡事。眞草行三在之。次第に鞘の方さかりなり。

一太刀を持て御供する事。一の足の下ハ。家の子持なり。二の足の上と。帶取の結所との間は。其家の長さ共持なり。與力は帶取を取添。手の内に持へし。新座の者は。二の足の下を持なり。

一愁傷の時の太刀の持様は。二の足を指にてわりて持なり。わるとは。大指。人指ゆひ。高々指ハ。足の間の内へなす。藥師指と小指とは。足あひの外へなり。當流同前。

一送り足の事。貴人の方の足を。先座敷の内へふミ入へからす。當流同前。

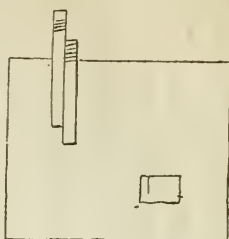
一中半太刀御中間に渡様。中間の右に持様にしてよこに渡へし。

一弓うつほ渡事。先うつほを渡なり。さて弓を渡也。うつほをは。つくはひて付なり。かけにて付ならは。何と成共すへし。當流同前。

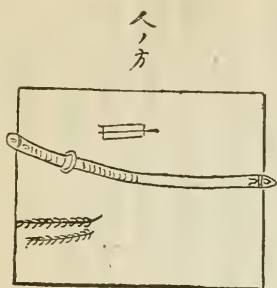
一小者のつかひ様。鞭弓懸かけたる小者右。敷

皮持たる小者。左二行に番へし。其次に打刀  
中に兩方に手明の小者可番。當流不用之。

一ひろふたは。まちやうめんを取なり。

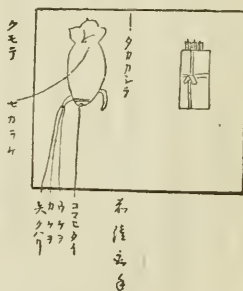


一ひろふたに結折紙。如此すゆるなり。



一ひろふた  
度二つ

太刀鳥目をすへて請取渡如此。



クモテ  
セカラヤ

コモタイ  
カクヤ  
矢クヤ

右は白

「はも

羽ヲハ蓋ノ右に置ク。ゑひらをハ左に置  
渡也。タカノ羽ノ時。如此するて被下事も  
これあり。手にすへて渡也。扇をハヌキて  
下におきて渡也。請取人同先に扇。其後  
簾。是は國を納たる時之進上之祝言。

一扇の置様。出家には右の方に置。女房には金  
目の方を右へ成て置なり。手をはやく引な  
り。等輩には右の手計にて出。左をつくな  
り。

一枕を惣別束枕をは着なり。但可依時儀。

一風呂、御使など仕候は、我刀をは小者に

持せて。すはうの紐解て。雨の後腰に挿し。

雨の膝を立て。兩手をつきて申事を申なり。

右へ飯へし。刀をは外にて指かへるなり。當

流同紐を前に挿むす。うの上をぬきて。

袖をまへに挟む也。

一爐の炭の上に火を置事。春夏ハ上。秋冬は炭

の下に置なり。

一繪さん物をは。盆に置て渡也。手にて渡時

は。左の手に渡なり。

一雙六の石。將棊の馬持て參事依より取出て。

盤を紙にて押拭。上に置て飯なり。

一刀をさゝぬ所は。鞠の風呂。貴人の御しん所

也。

一花瓶と花と持て出時は。花瓶は右に持。花は

左なり。

一白花はあかり。色花はさかり也。白花は左に持。色花は右に持といへり。

一雉をは切とはいはず。さくと云也。同焼鳥を

はひくと云なり。其外の鳥をは。切といふへ

きなり。當流同前。

一物によりて焼串の先出る事もあり。又不出

事もあり。雉兎鹿以下の物をは。先を出す

也。此外の物をは出すへからず。ちかひ候時

ハ人には參せぬ。

一鵜の鮎。其外川狩の魚などを。人に進上申に

は。はけこなから參候事。一段の賞翫なり。

一輿の内へ物を申事あらは。左の方のなかへ

の外より可申なり。なかえの二ツの間より

參らぬ事なり。男輿ならは。右の方のなかえ

のきはへ參る也。女輿ならは。左のなかえの

きはへ參るなり。我に口傳。

一神前の下馬の事。必可下馬。但若是御主の御

供若は馬なと狂ひ候て。下馬叶はすは。右の脊をぬき。同左の鎧をはつし。前輪にかゝりうつむき。手綱をかみ中に納て可取。常の時も此心得なり。鞭をぬくへし。當流同前。

一踏次(路)のはたに。人の在所有之。門の前を通る時。近ハ可下馬。是も家迎馬などの心のまゝならずは。むちを抜。神前の下馬のことくして通るへし。當流同前。

一橋をかけ道を作所の下馬の事。必可下馬。是も鞭を抜同前。

一河狩する所の下馬の事。たとへ百性以下のものと見へたる共河狩の禮儀。天下に其法定間。下馬をする鞭抜て可通。同前。

一騎馬の時は。鞭を抜て禮をする也。是本也。但只の供にも。御供ならは鞭をさすへし。貴人などは禮儀なし。其時は内衆は禮をして可然。同前。

一鞭をは。公方様も被指候也。近代には法住院殿様。高雄へ御成。又鞍馬の御成の時。御肩衣御袴にて被指候也。又惠林院殿様。紫野へ雪の朝の御成にも被指候也。當流同前。

一鶇に行合たらは。後へのき候て。はきたる物をぬきて可透。

一鶇を使候時。人馬より下り候は。川より鶇をみな／＼すへ上候て。たか／＼と鶇をすへ。上羽ふかせ候へは。人を使によりまさるなり。

一貴人の御供の時。太刀を持てしこうする事。貴人の右の方によこ。たゝみ一てう計へて。祇候する事也。御供の時。太刀を持ては油斷すましき也。置申時は。押板又上座に被立事もあり。是は家風に限事也。我そはに置事尤なり。又次の間に立をく事在之。同前。一御犬など見て。一畜みたるなどは云へか

らす。一廻二廻と可云也。一廻とは百匹の事。同。

一湯をは右に持へし。水をは左に持て。一方の手を添て可參也。當流。

一貴人に昆布を參候ハ、折目賞翫なり。口傳同前。

一貴人に肴の居やう。持て參。貴人の右の方に置いて。さて前の膳を取て。さてすゆる。其後。前の膳を取て飯也。同前。

一同輩の人に肴居る時は。下に置すして。左の手に持。右の手にて前の膳を取。さて肴をすゆる也。すゆる時は。兩方の手なるへし。同前。

一我よりもさかりたる人に膳をすゆる事。前の膳を片手にて取て。肴をも片手にてすゆるなり。歸時。是も左右習有へし。

一折の物を持て參事。切目の物ハ折の足あひ

より下へ手を入れて。左の手のひらに置いて。右の手を添て持て參也。

一瓶子に肴をへて持て參事。瓶子をは右に抱て持ち。肴をは左に持なり。是は瓶子一の時の事なり。一双の時は。先肴を持て參。酒をは縁にて。肴を座敷の内へ持て參可置。右の方へ飯るまで。縁の瓶子を取て參也。又肴をは御前へ持て參。瓶子をは下座に置事もあり。飯事右へなり。

一よめ取。髻取祝言などに。置鳥。置鯉を御坐敷に立る事。外に瓶子一具。蝶形をつゝませ。其前に二種二合置へし。扱鳥をは左。魚をは右にむかひ合置へし。當流同前。

一七献の引物次第。初献に馬。二に太刀。三に鎧。又は腹巻にても。甲小具足添へし。四に弓征矢。五に沓行騰。六に刀。七に小袖なり。さて馬は二人して引へし。しつなはい役



也。扱太刀は。一人して勤へきなり。常のこ  
とく參也。扱具足二人して可勤なり。さき持  
人は少さかりなり。あとはあかり也。是から  
ひつを可舁次第也。扱弓征矢は一人役也。弓  
をは右のかたに持。箠をは左に持也。矢をは  
肩にそえて持也。弓をも矢をも。貴人の時も  
奏者の時も。其人の左の方に。物に立そへて  
置へし。扱沓と行騰は。二人の役也。行騰の  
こしの方を。我左へ成て。兩手にて抱て。沓  
をははき見せへし。すその方を下に取そへ  
し。

一兒若衆女房へ銚子を渡事。柄の方を取よき  
やうに可參。少も後へまかるへからず。何も  
はやく手を可引なり。

一御酌に參事。晴なる御座敷にて候はし。斟酌  
可申人數多あらは。たれにても御參候へと  
可申。乍去。只御參候へと被中候はし。銚子

を取。酒をつかせ申。冬ならは銚子のうらへ  
手をあてし。かんをよくくおさへて見て。  
其後。御座敷を見て。廣き御座敷にて候は  
し。中程より少さかりて。先左のひさをつ  
き。右のひさを立て。其間待申へし。扱て鬼  
舂を申事候はし。左の手の平に一てき請て。  
銚子を上に置。右の手を下。左の手を上にし  
て吸なり。其後。手を袴にてそと拭なり。盃  
さす人と盃のむ人との姿の見ゆる習なり。  
一酒の間に。鳥にても魚にても。板物出候は  
し。御酌の人。上座へあかりて。板の方を見  
くたしいるなり。おもひさしのときは。向合  
の時。酌をむすはぬ事ともなり。  
一折の物を引事。箸にて引なり。貴人へ參らせ  
る時ハ。折の上を少取のけて。さて挿て身を  
つゝめ。兩の手添て參る物なり。公卿の物も  
同前なり。右の手を上。



一刀の下緒なきとて結事。忌事なり。穢たる時如此云々。當流同前。

一元服の時。何魚にても頭をは不可切。一献酒過て以後。頭をも切也。

一大名所見事。先馬屋を見るなり。同前。

一寺をは先庫裡より見て。後に方丈。次に僧堂を見るなり。

一折の物被下候ハ、。たとへ御酒をひかへ候共。酒を下に置。右の手を上にして。兩の手をそへ可請取。同前。

一御通の盃は。平馬なり一人に一ツ出者也。御なかれと云也。同前。

一御酌を取人ハ。盃を銚子の口の少内の方に置て。一人ツ、召出なり。公卿の上に有。一

ツ、取て銚子に如此取て同前。

一貴人の御酌にて被下ハ。兩の臂を付て吞へし。にしりよりて可給候。貴人へ盃を持參れ

と。惣より申候はハ持て參。盃をふかく露をおとし戴き候はん。置て可罷歸なり。

一芝居などにて。御太刀持ながら召出を吞申ハ。太刀を持たるまゝにて參て。右のひさの上ののせて置。盃を取て可吞。のみて右へ可飯。努々太刀を人に預くる事不有之。當流同前。

一御神盃を吞事。<sup>(上カ)</sup>公器を取て下に置て。さて取て戴吞なり。但御神盃を銚子取人。銚子にすへてのまするなり。

一客人の持參の酒をは。先初献に酌に立て。客人に可吞。客人持參してとて。努々亭主盃をはしむへからす。可分別。但客人はやく酌に立ての時ハ。無力可吞。

一夏は涼からんか爲に。縁へ出て酒など吞事有し。縁にては御坐敷の上下なし。其故ハ座敷の外にて候之間。不可成禮。但口傳。當流

同前。

一茶碗。染付け土器などを盃にして。御酒給候は。左の人さし指を。盃の端にあて。酒をつかせへし。其故は盃の縁を銚子にあてしか爲なり。

一傾城白拍子に銚子を渡事。左の手をつき。右の手にて及ひかゝり可渡なり。

一湯漬ハ。三箸食て湯を請るなり。追膳などあらは。飯にかはりて可食。上二ハ不食。下一を食なり。

一鷹の鳥を食事。焼鳥は不申及。手にて食候。汁ならは箸にて。一切は插み上て。扱頂き食へし。又左の手にて取て食て。其後。箸にて食たり共不苦。兎も同前なり。中頃までは頂き食たり。又今も頂き可食。只食たり共不苦候なり。當流同前。

一餅を食事。手にて二にわり。右をは置て。左

の手の餅を可食。又箸にし可食餅ならは。くひきりて。二口ツ、可食。其子細は。齒跡をみせしかためなり。

一まんちう二口ツ、可食。口傳同。

一茶禮の事。狭き坐敷なれハ。人もすくなかるへし。其時は向の座へ禮を可申。又座敷廣く。人數多候ハは。向座遠かるへし。其時は我より下一人に禮をなして吞へし。喉乾共そご吞へし。

一冷麵をは。上から不可食。下より可食。當流同前。

一點心の食様。先湯か參。さてかんか一二三在之。扱一番の美の生飯を取なり。一番のかんの上なるを取申。さはなり。後にハ不可取なり。

一飯の時は。ひさを不可立。肴の時はひさを可立。

一御引出物進候次第。一番御劔。自身持て參。不然は子とも舍弟可進。二に弓征矢。是は末の子又は親類。三に御鎧。是は役人親類の中に。器用の仁を可用。次に御沓行騰。此役人家子若ハ家人の中に。宗との仁可勤。次に馬。常には沓行騰を不進之也。

一毛皮の事。毛を上にて。兩方の端を折て。三に折なり。鹿皮の時は。白毛を上になす。熊の皮の時は。面の皮を上になす哉。扇などをも添て進もの也。羽をも添て進るものなり。

一御酌の事。三献の時ハ一番三郎。二に次郎。三に太郎。若は自身可參。當流同前。

一京都より奉行人の方へ田舎の遣書札事ハ。只可爲同輩禮。

一女房を迎る時の事。殿方より御迎に遣候殿原宗どの人名をも人に被知。又は仕付よく

候仁を選て。二騎計遣候か能候。其時。女房の親の方よりの引出物可任之。多分ハ腹卷一領。太刀一。馬一疋にて候。是はよのつねの事也。此外。多も少も人によるか。女房の方よりの供。しうとの方の引出物同事に候。御こしよせ。殿の方より可勤候。是も引出物は同前。又女房達美女の引出物ハ。或うすきぬ。或小袖にて候。たゝ人によるへし。美女の引出物は。上童の引出物と同事にて候。かいしやくめのとの引出物ハ。女房達よりは一倍たるへし。又下女は美女の三分一の引出物たるへし。さて又女房の御方よりは。殿の御かたへ大口ひたゝれ小袖にて候。數は不定。三日の色なをしの時。つかはすなり。

續群書類從卷第六百九十八

武家部四十四

酌并記

酌并立ふるまい雜々一

一主貴人之有所へ。盃ひつへきふせいにイを持て可出様之事。角の

折敷入るイのへきにすはりたりとも持て出。先座

敷へはいりさいきわにてつくはいて。亭主ひイ

の氣色を見つくろい。扱持て可出。客人と亭

主同位ならは。兩方の間に可置。又所時但イによ

りては。座之床のたゝみに置事も可有。時に

より見はからいておくへし。

一盃持様之事。餘あまりほイり高く持たるも。又ひきく持

ろしイもひろふなりイ。能程に持て出て。扱下に置

先へ少し出して置へし。はしめより可置と

おもふ所に。其儘置たるはわろし。少にちり

出して可置。扱歸る時ハ。左右かまいなく。

いつれにても。近き方へまわりて退へし。

一酌すへき様之事。若るほし上下の時イは。すは

うのひほを。能ふところへ入テ。扇ハぬくへ

し。但さしても不苦。是は肴奉時。こほれた

らは。するゑて可取爲也。はいせんの時は。心

指たるか吉し。扱てうしを持て可出。銚子の

持様之事。もろ手にちと先あかりに持て出

へし。片手に持事あるへからず。是を先末座もイのさいのきわにてかしこまるへし。畏様の事。右のひさを立。左のひさをつきて。左のきひすを敷て畏へし。久敷畏れは。ひさをかへても諸ひさをつきても不苦。扱なかゑの取様之事。餘みちかく取たるも。また長きもわろし。なかゑの中ほとを持て。かつらの上に。右之手之大指を懸。右之手を折めに懸て持たるか見よし。ほしに手を懸たるは。祝言の時ハ。能なと云人あり。乍去。手を懸けぬもくるしからず。ケ様の事は。見て能様にすへし。是も亭主の方を見て。扱盃之きわへ寄て。盃を取て跡へ少しさりて。又亭主の方を見て。客人の方へ盃を持出行へし。一番にハ盃を取上る事。三方にすはりてあるを。てうし持なから。はしめより片手にて取る時。惡敷取れハ。盃すへりありきて。はやくとられ

ぬ事あり。夫を無理にとらんとする事わろし。其時ハ取て見て。とられすは。やかててうしを下に置て。兩の手にて盃を取て。扱てうしを持てしさるへし。扱客人と亭主とのしき次第定りたる時。酒をいるへし。

一盃に酒を入事。盃持たる人に。あまりきをかゝりたるも。又およひこし成もわろし。能程に寄へし。見はからい肝要なり。又盃の上をあまりおもく入事。第一之をこつ不故實也。殊に酒なといたむ人にふかくおもく入事あるへからず。又かわらけの盃數のしにくめくりたるは。必われ候はて不叶者也。酌ものむ人も。其心得あるへし。無案内成酌の無理におしつけ入る酌と見て。たとひ下戸成とも。盃をあげぬる能也。酒のまですつるとも。あけてかわらけをわらぬやうにすへし。貴人主人の御前にて。捨られすは。たと



ひめいわくに及とも。力に不及吞へし。か様の事は。能々かねて分別すへし。惣別。亭主有りて。酒をしいる物成間に。酌の無理にしている事は尾籠也。右に記ことく。上戸などハ盃にひとつ入て。扱少しさりてのまるゝ間をまつへし。さほひてあれハ惡敷なり。

一酌に別人替る事。別條なし。貴人之前にて替事あらは。てうし渡すへし。渡し様之事ハ。等輩に渡ス時は。なかへを横に人の方へなして。とりなをさて可渡。主貴人へ渡時は。てうしの方を我前へなし取直して。なかるの方を主人の方へ成様に出へし。惣別。内之者にはてうしにかきらす。何道具にても。いかやうに遣うとも不苦。又内者も主人のいたさるゝ所を。いつかたなりとも。先取たるか能也。物しりかほに左様之時は。時宜にはつるゝともなく。ひやうしにあわぬやうに

するは。物しらすの第一也。いか様になり共。しほぬけせぬ様にすへし。

一かやうに酌に替る事。若御通などの時ならば。さいのきはまて歸りて。今替りたる酌の能ク居直りたるを見て吞へし。さなければ行つといてわろし。御なかれなどの時も。今替りたる酌。御盃を取て。てうしの上に置。又は手に持たるを見て出て吞へし。

一さいこしの酌きらふ事也。酒を吞に行人ハせんなくさいこしに吞へからず。若くわへなとせはくてはいられすは。片手をさいの内へこしてくはへへし。しやくする人も。さいこしハかつてなき事也。乍去。貴人有か何とそさいの内へはいられさる時ハ。片手を内へつきて酌あるへし。是は何ともすへきやうなき時の事也。

一ひさけ替へき様之事。是も替人。くはへのそ



はへ來る時。ひさけを取直し。つるを横にして。片手をつきて。片手にて渡へし。是を貴人へ渡す時は。ひさけの口を我方へなして。兩の手にて渡すへし。一段といんきんに渡すへし。

ひさけなるへし 持なるへし

一 てうしをくわへすへきやうの事。右之手にてつるを持。左の手にてはたを持。又左之手にて。つるのきわを持ても不苦。扱左之ひさをつき。右之ひさを立たるか能也。久敷程かあれは。つる持て。ひさけをは疊に付て置ても不苦。扱くわゆる時。等輩ならは兩人同程に出てくわゆへし。酌する人貴人なれば。くわへの方よりふかく行へし。てうしに酒なくは。酒おほく入たるかよし。てうしに酒有とも。時宜はかりの時ハ。酒をそと入へし。又そと入そめても不苦。入時は右の手にてひさけのつるを持。左の手にてハ。ひさけ

のはたをおさへ酒を入る也。扱歸りさまにハ。酌の人立て歸るを見て。くわへの人も歸るへし。一度に歸るを。人によりむすふと云人有。いつかふいわれなき事也。むすふと云事は。かく別の事也。

一 主貴人へ酌する様の事。仕様ハ前に記すことく別條なし。いかにも人躰をいんきんにうやまうてすへし。又等輩への事。是も別に替る事なし。唯常のことくすへし。若さるかてんかくまい舞。又は内の者に酌をして呑する事有。左の手をつきて。右の手はかりにて。銚子を持て酒をのますへし。替事なし。

一 盃の臺之有所にて酌する事。是も替事なし。さりなから大きな盃の臺は。持てありきかぬるものなり。其そはへよりて。御通などのことく呑物也。其時の酌に替る事なし。盃

の臺によりて。つくりもの杯有間。心安く持てありかれぬ物也。自然主人貴人などの前へ持て。ゆかて不叶事あらは。先てうしを下に置て。扱臺を持て行。其後。てうしを持て行へし。惣別。臺以下は前かとより主貴人の前に置物也。さりなからは若<sup>モシ</sup>かの事也。

一三盃之酌之事。一ツ盃にて三度つゝ。三にて三々九度入る也。惣別。盃一ツ之時も祝言かましき時は。盃へ入る時。そと一度入て。三度めに酒を入。亦二度めにも。そと二度入て。三度めに酒を入。扱三ツめに又そと二度入て。三度目に酒を入。以上三々九度の數を如此あわするなり。三ツ盃はさかつき一ツにて。三度ツ、入ると覺へし。くわへ出候て。はしめよりかまいなき所に。酌のすむ迄居て。酌の跡を歸る也。

一同三ツ盃吞へき様之事。前にしるすことく

吞へし。吞たる盃の置所。年寄たる人は吞たる盃を。三ツなから吞はてゝ。本のことく重て置たるもよし。乍去。若おさなき人は重ねすとも。そのまゝ三ツなからならへ置てもよし。何も置物といふ法はなき間。みよきやうにすへし。

一御通召出し吞様之事。先扇をぬくへし。一番に出る人は。御盃にて可有間。一段いんきんに戴て。口をそゑて吞へし。扱次々へとをす時は。すきとのみ。下をは捨す。御座敷に其儘置てのくへし。其次之ハいたゝかすのみ。下もすてすもとのことく置て歸るへし。

一數の御盃のみに出る事。貴人の方へむかひて戴。扱酌の方へ向て酒を受。又貴人の方へむかひて。少も残さず吞て歸時。主貴人御肴を給時。くいて今一度。そとまた吞歸るへし。當世肴をくいて。今一度のますして歸る

なり。わろし。貴人今一度のませんために。肴にて有間。肴はかりくいて。酒のミもせて歸るはひろうなり。扱肴はてゝかたてに盃を持て。左へまわりてかへらは。右に盃持て左の手をつきてかへるへし。右へまわりかへらす。是又同事。左に盃を持へし。いつれも扇をぬくへし。數の御盃にてなくとも。主貴人の御盃の事也。

一肴の事。本式ハ主の前にて皆くいてよし。乍去。かたき物か。又は大口に喰さられぬ物をは。喰躰にして。ふところへ入てのくへし。さりなからおさなき人。若人は。そはに置て。酒を吞はてゝ立時。其肴をも持て立へし。しやうとくは皆くいたるか能也。

一主貴人之肴をは。給たる所にて戴き。則くふか本なり。扱歸てさけを吞へし。

一鞠のかゝりにて酌の事。のきとかゝりの間

を通るへからず。又四本の木の間を通らぬ物也。まわりて通るへし。酌くはへの次第は。常のことし。別條なし。

一自然舞臺にて酌する事。別之事有へからず。御前のうしろにならて不叶時ハ。くるしかるましき也。

一貴人の御酌にて給時呑様。いかにも忝躰をして早く吞て歸るへし。酒ハあふのきて吞か能也。うつむきて吞事わろし。但所によりてうつむきて吞事も有へし。

一主より少下の人盃ならは。一たんしんに戴きて。口をもそへす吞へし。戴様能程に戴へし。其盃を貴人めしあけられハ。其時能したみて戴て出したるか能也。いたゝかても不苦。くきやうか。かくの折敷にても盃すわりたる臺に。我か吞たる盃をこなたよりすへても出。又すへすして其儘酌の人にも出

す也。何れも不苦。

一上らふ。中らふ。又は女中かたの御盃の事。是は口を添ましきと沙汰あれとも。かやうのうやまふ人の盃ハ。戴て口そへたるか能也。若衆成ども。同ことくたるへし。

一太刀折紙。自分又は披露之事。自分にても又は人の奏者にても。折紙の字かしらを我か前へなして。左の大指小指を折紙の上へなし。残る指三ツは下へなして持。太刀はあとのあしを。右の手のたけ高指と薬指との間へ成る様にして。ひつさけて持也。折紙持たる手より太刀持たる手は。ちとさかるへし。太刀もちたる手のあまりさしあかりたるハ。何とやらんいかはりて見にくし。いかにも人の目にたゝぬやうに持へし。扱主人の御前へ出る次の間のさいのきわにて。太刀の小尻を疊につけ。そとつくはふやうにし

て。御前をうかゝいて。扱持て出へし。うかかふ時。つくはいて程のあるはわろし。つくはふ心にして。頓て出へし。扱御前へ持て行て。折紙を下に置。太刀の柄頭に左の手をそゑて。兩の手にて折紙の上に。太刀のつはの少かゝる様に置たるか能なり。扱立のきて。我かためならは。禮をいかにもいんきんにしてのくへし。さうしやならは。客人を呼へし。そうしやをしたらは。客人出て禮を云たらは。頓て本の奏者。太刀折紙取てのくへし。いまた座敷の禮しやうたいなかはに出て。太刀を取るはわろし。客人をもよひこみ。座敷の様躰かたつきて。太刀を取たるか能也。惣別ハ太刀の足あひを持たるかよけれども。夫は小尻さかりて見にくし。又太刀折紙。昔は折紙は太刀の足二ツの間に有様に置たれ共。それは風の吹時わろし。

一太刀折紙可取様之事。さし寄兩のひさをつきて。つくはいて先左の手にて折紙を下より手を入れて。はたらかぬやうにとらへ。扨太刀を取上て歸るへし。かへる時も。太刀をつゑにつくやうに。小尻を疊につくへし。歸時ハ前にある様にちかき方へまわるへし。折紙の持様。太刀のさけ様前同。

一奏者杯に行。又は等輩猿樂田樂杯に遣時ハ。太刀折紙之持様。前に同し。折紙を下に置。太刀を上置き也。左之手をつき。右之手計にて如前可置。貴人へも等輩へも出時。小尻の方少し人の方へ寄程なるか能し。小尻之となたへ寄たるは見にくし。直成にこしたる事はなし。

一奏者に行たる時。道もしるくて下にもおかれず。中にてわたさてかなはぬ事も有へし。其時ハ折紙を前の如く持て。其上に太刀を

疊の上に置やうにして。太刀を折紙に持そゑ。兩の手にて渡すへし。此時は。兩の手をあをのけて可出。又折紙を常のことく左に持。太刀を右に持。常に渡すことく。折紙の上に太刀のつはをかけて。中にも渡すなり。いづれも不苦。地さへしるくなくは。たとひ土の上成共。下に置いて渡たるかよし。

一右のことく一度に渡すを請取様之事。むかいより兩手にて一度に持て出す時は。こなたも兩手にて請取て。其後こなたにて取直したるかよし。又折紙を左の手にて持。太刀を右に持て。折紙の上に太刀を置渡す時は。こなたも先折紙に左の手をかけ。太刀をはあし二ツ之下成とも。いつ方成とも取能所を取候て。扨亭主に云聞すへきならは。申きかすへきよし云て歸るへし。若留守と云へきとおもは。太刀折紙を一ツに右へ取直



して下に置。罷出たるよし。懇に言へし。扱太刀折紙を下に置いて門送に出て名字をとふへし。

一主人より太刀折紙拜領の事あらは。請取て。いかにもいんきんにいたゝき。折紙をは左に持。太刀をは前にしるすことく右の手にひつさけて罷立へし。禁裏様々自然拜領之時は。太刀にて御禮申事別條なし。其時。奏者迄參て御禮を申へし。

一繪などに太刀そふへきかのよし。御成の時は。添ても進上する物なり。左様の時は繪をは。申次披露有て。太刀ハ自分なるへし。或は鞍。鐙。具足などの進上之時も。太刀ハ必亭主自分たるへし。

一太刀と刀一度に組て出す事。太刀を下に刀を上になして出すへし。刀下に有と云説もあれとも。それはわるし。太刀下なるへし。

刀の柄太刀のむねの方へなるはの方へ成と云兩説有り。それも太刀のはの方へ。刀の柄成たるか能也。

一太刀の帶取の結様の事。たくほくの時は。房先上へ通してむすひたるか能也。太刀の帶取ぬのにてしたるをは。引通さすして。結のけてわなに成やうにすへし。たくほくをわなにすれば。心ほとけしてとくる故也。

一膳をすゆる様の事。先はいせんをする人ハ。扇をさすへし。是も右にしるすことく。あまり高きもひきゝもわるし。能程に持て。人の前へ持て行て。あまり間近くすゆるもいきつまりてあしゝ。少のけて先おき。扱先へちと兩の手にて出すへし。あまりあい遠なるは。およひこしにてわるし。亦足付けくきやうの様成物を。あい遠にすへて。おし出す事。疊のよこめなとなれば。時によりきしみ



によらぬ事もあり。さやうの時は。其まゝ置きてのくへし。それを無理に先へやらんとすれハ。さひしるこほるゝ物也。能々氣をつかふへし。扱膳をすへて食之ふた取へし。當世其儘置事ハ。自然茶湯なとのとき。食をさまさしと其儘置也。本式ハふたをとるなり。扱其ふたを主人の左之方に置也。右之ひさを立てますゆれとも。兩のひさをつきたる能なり。二の膳ハ。主人の右。三之膳ハ左。四ハ右。五ハ左。六は右。七は左。加様にすへし。但兩之はしつまれハ。二之膳。三之膳の通りの先にもすゆる。又真中の先にすへても能なり。

酌并座中立ふるまい雜々二。

一 あくる時の事。本膳よりあくる流も有。又後にすゑたるせんより上る流も有。さりながら公方様御成なとの時は。御本膳を残して。

大名衆其外。各御膳をいたゝかるゝなり。然る間。後にすゑたるから。あけたるか能也。

一 すい物或は何にても。膳を引かゆる事。持て出たる膳を下に置。前の膳を左へ成とも。右へなりとも。ひろき方の物にさゝわらぬ方へのけて。扱今の膳をすゑて。前の膳を取てのくへし。若今すゑたる膳にはしなくハ。前の膳のはしを。今すゑたるせんにすゑて。前の膳を取て歸るへし。但すゑる人の心得て。箸を取て置れは。はいせん人。すゑかゆるに不及。

一 折持て出る事。必精進を一合。うを一合とある物なり。客人と亭主同位なれば。兩方の真中に二合なから置へし。其中にても。しやうしんを上座におくへし。下の臺にはかならず箸あるへし。持て出る事。下のたいを持折

に大指をかけて。しかと持へし。能下に置いて見はからひ。さきへ少おし出すへし。但折なとは高く持物成間。能きをつかいてしるへきなり。りやうしに有可らず。

一しよくたい持て出る事。足一ツ上座へ成様に置へし。舞臺などに置時も。舞臺先へ足一ツ成様に置いて。ゆるかぬ様にしてのくへし。のく時。必手をつきてのくへし。是も近き方へ歸るへし。

一しん取へき事。しやうとく本式ハろうそくを。下へおろして取事略義なり。其儘上にて取か能なり。乍去。上にてとれハ。自然らうそくのしんちりて。あたまなとにかゝりてわるき間。故實としつに下へおろして取てよし。扱しんを取て。右の手にらうそくを持。左の手にてしよくたいをとらゑて。らうそくを立へし。

一らうそくとほしかゆる事。こなたより能とほして。右の手に持いて。燭たいのきわへよりて。右の手に持たるらうそくを。左へわたし。右にて古きらうそくをぬきて。下に置。左に持たるらうそくを右へ取渡して立かる。亦ふるきらうそくを。右の手に持て歸るへし。

一おし板に香爐可置様の事。是も足を一ツ前へなして置へし。或ハ丸盆。四方盆にすゐるとも同前成へし。

一はいおし様の事。花かたに成とも。又ハうろこかたに成ともおすへし。四季にかゝるといふとも。別條なし。

一きやしこしの立様。たゞ直に可立。別條なし。

一繪のかけ様の事。別に法なし。卷たる所を能持て。折釘にかけて。靜に繪をほとくへし。

かはとあらけなくさわれは。古きかけ物なとハ。きるゝ物なり。いかにも靜にすへし。上の長き緒をは。折釘のきわへ能寄てかけ。扱少立のき。ゆかみを直してのくへし。一かしらを出事。法度なき間。能き様にすへし。

一鍵長刀人に出事。せはき座敷ハつかゑてあしく候。人大勢ある座敷も。あなたこなたにつかゑて。たちさわきてあしき間。まいらすへき山座敷にて云。扱客たゝれ候時。外にて渡すへし。長刀ははの方を上へなして。右の手にてひつさけて出て。横に取なほして。むねの方を人の方へなして。之を我左のかたへなして。兩の手をのけて出すへし。亦鍵出す事。長刀に同前也。乍去。むねはなき間。たゝひつさけて出て。長刀のこたく可渡。取まわし氣遣有へし。

一請取様の事。人の渡すこたく。兩の手にて請取。扱右の手にて取渡す。もとのこたくひつさけ持てのくへし。長刀ははの方を上へなすへし。亦當世の人の鍵長刀を。石つきの方より出さる。有聞しき事なり。只先より常の道具のこたく出すへし。何とやらん用心に能爲の様なれとも。石突より出す事。一向にわけなき事也。

一茶の宮仕の事。臺にてんもくすはりたらは。右の手に臺を持。左の手にて。天目の下をそとかゝゑて持へし。主人の前近き遠き。能程に畏て。さし出すへし。若てんもくはかり御取あらは。臺をは主人のそはに置て。少しさりて居へし。扱御茶まいりて後。臺の上に御置あらは。其儘取て歸るへし。若疊に御置あらは。取て臺にのせてんもくにハ手をかけす。臺はかり持てかゑると云説あれども。茶

有時のことく持て歸るへし。

一大酒にてかわらけに。酒しみて取かゆる事あらは。貴人かましき人の取かへし。平人の前にてはわろし。取かへ様ハ。くきやうか。かくの折敷か。いつれに成とも。すゑてのきて。又もとのことくするて出すへし。

一花送事。本を紙に包。其上を水引にてゆいて出すへし。持て出る時。草花は花の方下になして。さけて出すへし。梅櫻木の花ハ。花の方を上へなしてもつへし。

一硯料紙の事。料紙を下に。硯を上安置持て出すへし。料紙上に置事。いむ事有といへり。扱主人の前持て行て。主人の右に。料紙はおりめを主人の右の方へなして。左に置へし。扱硯箱のふたを明て。水などなくは入へし。亦すみハ主人のすれとあらはするへし。さなくはするへからず。人により手跡の能人ハ。

すりたるすみにてハ。かきにくかる人有間。すれどなくはするへからず。

一かはらけに何にてももる時ハ。花を下敷にしへきかの事。かいしきに花はわろし。はを敷て。花をはかさりにするか能なり。尤事によりていかといふなり。或ハ吉野大原花見などに。櫻をかさにしたり。又菊見の時。きくをかさる事。いかにもしんしやくたるか能なり。めいゝかかすとも。かやうの物は萬同前也。

一鳥を板にすゆる事。惣別庖丁の事は。進士大草兩流有。鳥のくひを左の方へ折て。板にすゑへし。若鴈鳥鶴などの類を。一ツ臺にすゑて出すとも。同事成へし。亦雉子鴨などの類を。あまた臺にすゆる事あらは。いくつものならへてすへし。同事なり。鷹の鳥。亦はてつほうなとにて射たる鳥は。田の物山の物

何れもかけて出る。其時前に有ことく。かひ口をも。矢めをも人の方へなして出すへし。一笛を人に出すへき事。笛はふるき物にて。一段おれ安き間。いかにも取扱靜にすへし。家に入たらは。家ともに出すへし。若ぬきて見る時。主貴人これを見んとあらは。かしらる家の方へなして出スへし。

一小鞆出す事。むさとしらへなとを持てありく事。嫌ふ事なり。しらへちとも違へはならぬ物なり。持所を上へなして。うつかたを主人の方へ成様に。うたぬ方の鞆の輪を持て。そと御前に置也。かりそめにもしらへはいろふへからす。

一太鞆の事。是も小鞆同前。乍去。是はしらへ持てもしめて置物成間不苦。しかれともたゝ小鞆のことく持たるか。なんなき也。とう繩をかけて持へし。

一太鞆の事。太鞆を右の手にひつさけ。はちを二ツなから左に持て出すへし。扱人の前にはちをハ右に。太こは左に置へし。亦我か太鞆を持て出る時は。右の手の太こにはちを持そゑても出る也。但猿樂舞臺へ出る時は。左の手に前のことく。太こにはちを持そゑてもち。右の手をは橋かゝりにてつきて通るなり。

一ひわを人に出事。人のひく時の様にいたきて。くひを左の手にて。たてににきりて。右の手をはちめんの上へこして。いその方をかゝゑて。たいの方を疊に立ておしまはして。ひわをあふのけ。海老の方を右になす様に渡すへし。

一まんちうくひ様の事。まつそ<sup>惣</sup>うな<sup>並</sup>みにしるを請て持へし。そうへしる請渡したる時。右の手には箸を二ツなから持て。まんちう



一ツ取あけて。兩の手にてわりて。左に持たるを下に置。右に持たるを左へ取渡して。右にてはしを持なから。左に持たるまんちうをくふへし。いまたくはんとおもは。前に置たるを亦取あけてくふへし。はれなる時は。餘左様にくひたるもわろし。扱銚子の出たるを見て。そうの者も下に置て。かしこまるひさを直して。酒のしきたいあるへし。年寄たる人はしるにからとうをも入。又ハ事により。しるもすふ事もあれとも。若きおさなき人は。しるをすふもからとういれたるも見にくし。まんちうにかきらす。うんとん。さうめん。やうかんも同事なるへし。

一さうめんくひ様の事。但さいのけ様に。むつかしき事有。先に三ツさい有。其中のさいを左のさいの前へやり。右のさいの中のさいの所へやりて。右のさいを明たる所へ。さう

めんのあきおしきをやる也。あき折しきは。次第に上に重て置へし。是も前に記することく庖丁有。からとうをは。わかき人はしるへいるへからす。其儘くふへし。まんちうのこくとく先しるをうけ。惣へ請わたすまでは。下に置て待へし。扱請渡して後。箸を取へし。若おさなき人は。餘なかきを。そのまゝくへは。はてしもなく見て苦間。しるの内にて。みしかく切て。くひたるか能なり。さいしんの折毀を引時も。をさなき人は。餘おひたゝ敷しんしやくせぬかよき也。たとひくわすとも。人のさいしん引は。其儘置へし。くはぬハ少も不苦。かやうの事は。さうめんにかきらす萬に渡る事也。

一雜煮の喰様の事。上置をくふへし。もちはわろく喰へは。かたくてくはれぬ物也。又いかゝりてくはぬも見くるしきなり。とかく



いづれも能見て。くいにくき物ハ。箸にて  
むしりにくそふなるものは。いろはぬか能  
也

一小袖を人に出す事。貳ツ折にすへし。上かえ  
を上へなすと云きたもあれとも。それはわ  
ろし。下かえを上へなして二ツに折。ゑりを  
人の方へなし。二ツおりめを我か右へなし  
てつむへし。あわせあらは。重ねたるか能  
也。小袖はかりハ。いくつ有とも。かさねす  
して。同じやうにたゝむへし。又臺に積事あ  
りとも。此心にゑりの方へよせて。おめらか  
して重てつむへし。又ひろふた。もしは。か  
らひつのふたなどに入て。出て渡事も有。其  
時は。先ひろふたからひつのふたをは下に  
置て。小袖計取あけて出すへし。右の手にて  
は。小袖の折めを持。左の手にてはゑりの方  
の下をかゝゑて出すへし。猿樂。川樂舞まひ

なとに遣時も。同事成へし。亦かたひらなと  
かはる事なし。同前なり。又はかまかたきぬ  
の事。袴を下に前こしを上になし。二ツに折  
て横に置。其上にかた衣を小袖のことくに。  
ゑりの方を我か左の方へなし。はかまの上  
に置て出すへし。是も物のふたにすゑたら  
ハ。ふたをは下に置て。上はかり取て渡すへ  
し。かた衣はかり出時も。はかま計出時も同  
事なり。又野山なとにて。何もすゆる物なき  
時は。扇子にすへたらは。扇子は下に置。上  
成かたきぬはかま。或はかたひら。胴服。小  
袖以下の物計を取て渡すへし。

一肴樽披露の事。先精進物よりかみに。次に鳥  
を置。扱魚を置。次に樽置へし。かやうにな  
らへてをきて。使をもよひ。又は其主人をも  
よひ見参あるへし。たどひ狀文にて送ると  
も。披露の仕様同事也。

一湯漬の喰様の事。先湯を請。下ニ置。惣を見合。座敷の衆。湯を請わたして。扱箸を取て喰へし。食をくいて。扱左の手先に。かうの物ある物なり。先それを食の口にくい。それより後ハ。いつれのさいを喰ても不苦。しるをくふ事。老たる人ハ不苦。若き人おさなき人は。しるをすふ事わろし。汁のミをくふ事ハ不苦。扱さいしんをは。いかほとも心のまゝに請へし。しやうとく湯漬にかきりて。くいはて候時ハ。のこさす皆くふ事本也。乍去それハ年寄たる人の事也。若き人ハ残しても。くるしかるましきなり。

一飯喰様の事。さい數いかほと有共。一番に眞中成物をくいて後ハ。いつれをくはんともまゝなり。是も前に記すことく。くひにくき物はくはぬか能也。二三のしる有とも。餘に手とを成るをは。およひこしにくふはわろ

し。さやうの事。しるすに不及。嗜有事也。

一鷹の鳥喰様の事。初を一きれ。手にてくふへし。其後ははしにてくふへし。それも鷹の鳥と言葉をつかはねハ知りかたし。埋り有時之事なり。忝と云禮も少年寄たる人などはよし。かたわかき人の餘禮を云たるも。こひ過てかへつて見くるしき事有なり。

一すい物くい様の事。てうしの出たるを見て。持あけてみをそと喰て後に。しるをすふへし。くわぬ先に。しるすふ事わろし。若き人の皆くふもわろし。見はからひて能程にくふへし。

一刀を人に出す事。昔ハ下緒を折かねくりかたの間にまきて出したり。今それハわろし。其まゝ長なから刀に持そゑて出すへし。置様は太刀のことくむねの方を。人の方へなし。横に置へし。又主人の人につかはさんと

てこはれハ。むかふより出さは。右のことく  
又主人の左の方より出さは。むねのかたを  
主人の方へ成様に出すへし。亦右の方より  
出す事あらは。はの方を主人の方へ成やう  
に出すへし。すくに人にやらるゝ様に出す  
心也。太刀も同じ事たるへし。惣別何を出す  
とも。中にて人に物を出す時は。左の手を先  
に成やうに出すへし。但前にしるすことく  
右の方より太刀刀出す時は。右の手先へな  
らねは。勝手わるし。左の方より出す時は。  
必左の手先成へし。

一 わきさし出す事。是も昔はちいさ刀たる間。  
わきさしと云事なし。乍去。當世わきさしあ  
る間。刀と同事なり。又刀脇さしを太刀のこ  
とくにくみて出る事。是亦むかしなき事也。  
乍去。當世わきさし一度に出さは。太刀のこ  
とく組て出すへし。わきさし上に有へし。是

は定る法なき間。いかやうにしても不苦な  
り。

一 みすかくる事。神前のみすは。かきこまるそ  
とにあり。人間のかくるみすは。かきこまる  
内に物也。然間。まゝくも内へ巻て。うち  
のかきにふくるものなり。若かきなき時は。  
杉原にて。何かみにても。たゝみてみすの  
間へ入て。是も内へまきて。そとの紙にてゆ  
いて置也。ゑんへ出て。そとより内へまゝくへ  
し。つくは。いも巻こむへし。

一人の前へ出て禮をする事。先扇ぬきて出へ  
し。座敷をありくに餘ねりたるも。又足はや  
なるも見くるし。能ほとにあゆみ。扨主人を  
見付。やかてつくはい。主人との間近くは。  
さいよりこなたにて禮をすへし。主人との  
間に座敷もへたゝり程遠ハ。さいよりはい  
りて禮をすへし。年寄たる人などは。兩の手

を合ておかむやうにして。指先を組て禮をしたるもよし。乍去わかき人の左様にしたるは。餘こひ過てわろし。兩の手のひらを疊に付て。禮を仕さまに兩の手を少引て。扱禮をすへし。疊にあたまのつくほとに。いかにもいんきんに禮をすへし。餘り久敷もわろし。亦餘しやつきやくにあたまの高きもひろふなり。能々心を付ていんきんにすへし。かへる時ハ。いつかたゑ成とも。近き方へまわるへし。左へまはれは右。右へまわれは左の手をつくへし。立様肝要也。かきのせかたし。

一また板かきて出る事。賞翫の人魚頭の方をかくへし。板紙を先折紙のこどく横に折て。其折め前へなし。それを又二ツにたてに折て。其折めはきりての右へなるへし。切ての左の方にはしを手かたを上へなして。二ツ

ならへ置。かたなのうらを上へなして。はしの右の方へならへて置なり。亦流によりて板かみのたての折めの内へ。はしを入れて。其上にかたなのおもてを上へなして。置流もあれとも。大草流にかきりて其儀なし。扱兩人して板をかきて出て。きよとうのか方。先へす出へし。跡かきたる人ハ。頓てのく也。魚頭の方かきたる人。板のゆかみを直しかたひきならは。はなかみ成ともかひろくにして。近き方へまはりのくへし。手のつき様。右に記す同前。何時もちかふへからざるなり。

一板紙の事。大略杉原成へし。若引合なとする事もあるやらん。見およはさる也。或は鶴白鳥の時も別の事なし。此時も先かきたる人賞翫たるへし。

一庖丁はてゝ後。もとのこどく兩人して板をかきて歸る時。魚頭の方。かく人。まなはし

を取りりたる魚。亦鳥成とも能々くつしてかきてのくへし。是は板くはりを人に見せしかためなり。それも餘り事こまかに念を入過るもわろし。大方能程にすへし。

一御とをりに出。又は折臺の物などを持て出たる時も。歸りさまにハ貴人などの通りにては、必手をつきて通るへし。何も役に随ふ時、行さまには手をつかぬなり。歸りさまの事也。

一こしそゑの事。左の方賞翫なり。右の内にてもつのもとらて。興のきわ猶賞翫なり。

酌并座中立ふるまい雜々三。

一くわんしゆ戴せ申事。御主にさきのあたらぬ様に戴せ申て。扱やかて先を折て歸るへし。くわんしゆの先を。惣別人にあてぬもの也。氣をつかふへし。

一すゝにて酌する事。右の手にてすゝの細き

所を持。左にては下のふくれたる所を持て酌すへし。是も先は右のひさを立へし。但又時に依也。當世すゝのふくれたる所を。兩手にてとらへるもあり。

一碁盤。將碁盤持て出る事。何時もあかりをよこに請て。ゆるまぬ様に立に置なり。碁盤の上に。こけ置なから。わろく持ハ。自然すへりて落るもの也。持にくきとおもは。先碁盤を出。後にこけを持て出。盤の上にたてに置へし。北東に白を置様にすると云説有。それハ餘り物しりかほにてわろし。何となくなき方に。たてにこけ二ツならへて置へし。將碁の盤も同じ。駒箱別の事なし。上に置なり。駒たてよとあらは。たてゝのくへし。

一巻物臺にすゆる事。とんす。きんらん。しゆすなどの類をすゑて出すには。たてに如常



すゑて出し。丸はん杯にすゑても出す事あらは。其時よこにすわらてかなわぬなり。

一 杉原の上に。扇なとすゑて出る事。常の儀なり。すきはらにハひほ有へし。杉原を三ツに折て。なかくつきて。上にて常にをひをすることく。兩方にわなの有様にむすふへし。其上に扇をつゝみてすゑへし。何時も杉原のをりめ。人の右の方にあるやうにかさねたるかよし。必定法にハ有らねども。如此したるか能なり。

一 御手水かくる事。先はんそうに湯を入て。つのたらいの中へ置く。其上に御手ぬぐいたゝみて置へし。其手ぬくひを取て。かたにかけ。御手水をかけ申へし。かけはてゝかたを寄すれば。其手拭を取て。御手をぬくはるゝ也。公方様御手水は。女房衆御上るうの御役なり。御成などの所にてハ。御供衆の役な

り。其内にても。御一門などの御さたある人の役なり。

一 太刀折紙を披露の事。人により相違する也。客人を賞翫の時は。先客人を呼入て後に。亭主出る也。其時。太刀折紙を持て披露すへし。常にハ亭主出て居て。太刀折紙を前に置て。扱客人出て禮を云なり。太刀折紙に限らず。惣別常にしやうたいの時も。此心得あるへし。貴人をハ呼入て後に。亭主出るか能也。

一 具足鞍鐙なと人の給候時の事。よの物の様に。心やすくいたゝかれぬ物なり。然間。等輩の時ハ。祇忝との禮はかりを云て。禮をすへし。主人貴人の給りたる時は。それに手をかけて。手のきわに禮をすれハ。則いたゝきたるに成なり。其もやう肝要なり。

一刀わきさし。貴人給時ハ。戴取てのき。我か



さしたるをぬきて。そはに置。則拜領のをさして。又忝由申上て。禮をいふなり。

一小袖。帷。はかま。かたきぬなとも。主の給たる時は。戴て取て立かけにて。是も着して頓て出て忝由を。申上るなり。

一軟皮を敷事。すそを我左へなして。毛の方を上へなして。よこさまに敷てかしこまるへし。

一ひつしきの事。是は緒のつきたる方を。後へなして。毛の方を下になし。うらの方を敷へし。緒のつきたる方を。少内へ折返して敷へし。的の時の敷ハ亦格別なり。

一湯漬の時は。必先盃出る。食の時はめしはてて盃出るなり。扱酒ハてゝ。銚子取湯出る也。

一湯漬の時も。必後に湯出へし。當世出ぬといふ沙汰あれとも。必出し候はて叶ぬ事也。

一鷹の請取渡しの事。流々あまたあれとも。先諏訪流ハ鷹をすゑて居所へ。請取人來る時。先ゑふくろをときて。緒を右の手にましひ。扱鷹渡すへし。そのうちむちを渡すなり。鷹の渡し様の事。大緒の房の有方より。右の手の内ににきりふさの見へぬ様に持て。右のひさのねに。右の手をうつむけて置なり。請取に來る時。渡しはせて。人の請取まで待て居時。<sup>候イ</sup>其儘渡す也。其後。鞭をゑこみのかたより渡すなり。請取人。平人なれば。鞭をあてぬなり。但右に記すことく。或は政頼流以下ハ。又もやうかわるへし。

一同請取様の事。ゑふくろを出すを先請取て。こしにつけ。扱渡す人のそはへ寄て。右の手に大緒を持たるを。右の手にて取て。扱鷹を請取也。次にむちを取て。先脇へのきて。大緒さはきをするなり。其後。むちをあて。則

腰にさしてのくなり。

一鞭のあて様の事。大鷹は身より一ツたゝさき一ツ。尾も身より一ツ。たゝさき一ツ。又身よりから打出す。以上五ツなり。是を五方の鞭と云。又せうのむちあて様の事。たゝさきよりあてそめて。又たゝさきの尾にてあて納る也。左右の違計なり。あて様。前に同し。小鷹も同前たるへし。

一かりはこのゆい様の事。人のちの通にゆふへし。但犬猫の用心成間。人のかたの通にゆいたるか猶能也。木の本の方をは。何時もつなきによる人の左へ成様にゆふへし。横のひろさは不定。座敷の方へよと木のよこ見ゆる様にゆふへし。たての木は。横木のむかいの方にあるへし。縄にて十文字に二重にまはして。座敷の方にむすひて切へし。ほこ木ハくぬきか本なり。乍去無き時ハ。檜の木

又ハ杉にてもする也。ほこたれの事。俄の時は庭にてもすへし。かりそめにも。たぬきのかわなとはせぬ也。

一鳥かくる事。流々有。乍去諏訪流にハ。田の前。山のうしろとかけへし。男鳥ハまむすひにして。又手一束置て。男むすひにして。又三ツふせ置て切へし。女鳥ハ女なこむすひにして。右の寸程まして切へし。むすひ様の違計也。節分より前は。ふふしにてかけ。節分過れば。わり藤にてかけへし。是第一の秘事なり。

一田の物の事。なわにてかけへし。寸法の事。何もまむすひにして。鳥のはしにくらへ候と云法也。乍去。それハ鳥により。餘なかけ間。見て能程にすへし。

一鷹のつなき様の事。大鷹ハ七くさり。せうは五くさり本なり。是を畧して。常にハ大鷹を

五くさり。せうを三くさりにてもつなくなり。本式ハ前のことく成へし。

一鶉を竹にはさむ事。七ツ。五ツ。九ツはさむへし。はさみやうはそきて。其間へ入て。さきをかみよりにてゆふへし。若又萩にはさむ事。それも竹にはさむと同事成へし。たとへ萩にはさみたりとも。幾竿とはいふへき儀也。

一加様の物披露の事。はさみなから。さほともに持て出て。座敷の疊に置たるよりは。そはにたてゝ置所さへあらは。立て置て披露したるか能也。乍去。立所なくは。下になりとも置へし。いくさは有共。同事たるへし。

一取かいの鳥ハ。竹の本一番にはさむへし。一かりそめにも。鷹のうしろ鶉の前を通らぬ物なり。むかしは鷹師。鶉つかいにあへハ。下馬をしたる也。左様あれば。鷹師も道いか

程遠くとも。人をやりて馬に召れよとの時宜なくて叶ぬ物也。鷹はかならず鞭をぬき候はて。かなわぬものなり。

一くわんしん能。くわんしん舞。芝居にて猿樂。田樂舞まいに。太刀長刀遣事。左様の物持て行ハ。必さるかく出て請取問。努々舞臺へ上るまじき也。或ハ花。亦ハ出家の袈裟。袈。羅の様成物を出さる共。それも大略同事たるへし。

一折食籠の物きそくの有物は。必箸にてハ遣ハさぬものなり。則其きそくを持て可遣。取人もきそくともに請取て。ぬきても喰。又きそくに差なからくいて。きそく計をぬきてもよし。扱きそくをそはに置て歸る時。取て歸るへし。年寄たる人は。きそくをふところへ人ともくるしからず。若人は。そはに置て能なり。加様の事ハ。いづれも是に同し。

一當世人の前へ出て盃をのむ時。出てのまぬ先に。禮をする人有。中々しらぬ時宜なり。なき事也。祇禮なく吞へし。我か吞たる盃を。貴人きこしめされは。それはいかにもいんさんに禮をする事勿論なり。定て時宜なり。一軍陣亦ハ門出などの時。かわらけのひねりとめとて。たてに必筋ある物也。其方を前へなしてのまぬもの也。是は新敷かわらけの末人の吞ぬ先の事也。人の吞て跡はいつかたにて吞てもくるしからず。

一はかまを着するときは。先左足をふみ入。扱右を入れて後に。前こしをあてたるか能也。

一鞠を常にはさみて置を。人毎に鞠はさみと云也。飛鳥井殿。松の下なとも。こしはさみといひたるか能となり。

一鞠をは二ツ三ツといふへし。ける數を一足二足と云也。

一鞠の數をあくる事。十。廿。卅。四十迄ハ心の内に數をよみ。五十の時。五十といわすして。おかすと長く高いふへし。又六十。七十。八十。九十と心の内によみて。百の時。百と高いふへし。それよりは百十。廿。卅杯といふへし。貴人主人などのけらるゝ時數をよみこむなり。殊更勝負の時などは。猶以少しつゝ誦こむへし。ハの餘なれば百と云也。一鞠の木にとまりたるを落事。左の手を先へなし。右の手を跡になし。鞠のもたるゝ木の枝を下へおさへて。鞠を落すへし。竿にてつき落事。努々あるへからず。

一鞠を人に持て出て見するか。又出す事。取かわを持て。さけて出て。こしかわの疊につくやうに置へし。かりそめにも。まりのこひたいの方を。疊につくへからず。

一太刀折紙の調様。上中下の事。昔は必はしの

なん枚といふ。是も大草流にハ。いくつといひたるか能也。

一下緒むすふ事。人のきる物を著ることく。重て一むすひむすふ。刀は上の方へむすひめのあるか様に結。刀のさやにかゝりて。したへさかりたるか能也。脇指はむすひめの下へさかりたるかよし。ちかへ様は刀と同前也。下緒の色は定る法なし。

一ひきめ下緒の事。是は必ゑひさや巻にさけたる也。乍去。ゑひさやまきにあらねとも。こゝはの時は。必ひきめ下緒にて有し也。是もゑほしかみしもの時。ちいさ刀にはさけられたり。ゑほし上下の時。つかまかぬ事也。はなし目貫たるへし。

一主貴人の前にて。傍輩の盃をはいたゝかぬものなり。乍去。肴をくるれは。貴人の方へ向て。必戴へし。親兄弟などの盃。外人の前

にてハいたゝかぬ物也。

一主貴人の前にて。親の名をいひたるより親しや者と云か能。親の名をいふは賞衡也。

一當世人の名乗を本に云事也。努々云間敷事也。名乗を云事は。其身をさけて云時は。必云たるか能なり。御用書などにも。申次か又御使の名乗をあそはして。そんちやふそれ可申とあそはすなり。名乗を云事有へからす。御内書とハ。公方様の御書の事也。

一主人の道具或ハ鞍鎧。或は弓。うつほ。鍵。長刀。加様の物。主人の小者中間に渡す事。持て出様ハ。前に記すことくなり。鞍鎧の様成物は。中にて渡さぬ物なり。遠侍に置いて渡すへし。鍵。長刀。弓。うつほの類は。手渡しをもすへし。其時ハ遠侍よりおりて渡すへし。たとひゑんの上又ハ遠侍の上より渡とも。おり候はんすれともと言葉をつかひて渡す



へし。さなく候へは。人によりておりられ  
よといふか。又ハ請取ましきといへは。渡す  
人の越度也。能々心得て可渡也。是も主の中  
間小者たる故なり。惣別渡す時も。鞍の紋以  
下をも見せ。鍵長刀の金具をも。念を入渡す  
へし。亦請取時も。能々見て請取へきなり。

一宮仕配膳の時。かりそめにも物を云へから  
す。つはき膳へ入物なり。殊更主などの前を  
きうしせは。猶以。おそれをおもふへし。

一人の刀を見る事。昔ハ小刀かうかいをぬき  
て。扱刀をぬきたり。是は相手への用心の爲  
に。是を出して置心なり。それは餘ことく  
敷みゑてわろし。乍去。かはとぬけは。かう  
かいの鏢につかゆる事も有間。能心を付て  
ぬくへき也。刀を見せられたらは。其まゝぬ  
かすとも。つかさめ其外こしらへを悉く見  
て扱刀をぬくへし。ぬきはなしさまに。さや

を少きつさきの方へはやくぬきはなしたる  
かよし。餘あらけなきも見にくし。扱ぬきは  
なして。先さし表より見て。扱さし裏むねな  
と。能々見へし。若きす有共。見ぬ躰をして。  
扱静に差。かうかい小刀つかゑて。前かたとに  
ぬき候て置たらは。それもさして返すへし。  
亦人の方よりぬきて出されは。さやにさゝ  
すとも。むねの方を人の方へなして能持。左  
の手をつかかしらにそゑて渡すへし。主貴  
人へは。つかかしらの方を。雨の手にて持  
て。上を御取候様に出すへし。加様の法のな  
き事は。見て能様にすへし。

一あしなかに禮なき間。いつ方にてもぬく事  
はなき事也。公方様杯へ御縁の際迄はくへ  
し。亦事によりてはかぬ事もあるへし。わら  
んつも。禮はなきといへり。

一四月朔日よりあわせをきて。五月五日より



帷子を着る也。又九月朔日よりあわせを着て。九月九日より。小袖をきるなり。八月の末の少さむきとき。又病者成人は。あわせをきるとも。其上にかたひらにて着すへし。

一瓜をむく様の事。昔より六ツ半にむくといへとも。當世あまり左様なるも如何なり。亦瓜によりて。六ツ半にむかれぬもあるへし。扱上をうすく切て。一切喰へし。今は喰はせてすつる。一向いわれぬ事なり。昔よりくふ時宜なり。切はなして。小刀にさして出事。努々有へからず。瓜にかきらす。柿栗にて。も。小刀にさすましきなり。

一水無月迄ハ。瓜をたてに二ツにわりて。扱よこに切へし。水無月よりは丸輪に切。

一人をとふらひ狀書様の事。留はに猶期後音。以面可申杯と有文言を嫌ふなり。扱上のふうしめにすみを付ぬものなり。

一連署連判と云事。連署とハ大勢の宛所にし。て。名を書たるを云也。連判とは。大勢判をするを云。連判は目下さかり也。少く次第に賞翫たるへし。乍去。其時の亭主か。亦ハ事により其時のとうりやうを取人。目下に判するも有。連署ハ必はし次第賞翫たるへし。一樽錢披露の事。廿疋。三十疋ハちうに持て披露してもよし。百疋。二百疋ハ下に置て披露すへし。但百疋ハ二ツに分。中にてもくるしからず。か様の事は。見能様にすへし。法の外也。

一新敷すみは。字頭を上へなしてするか能由云傳る。龍の頭を海へ入たるか能なと。いへとも。右の分可然なり。

一辻かための事。御通有横小路の方をけいこするなり。其方にまくをはりてゐる物なり。其時の幕のはり様。御通有方に。幕串を立。

同方に敷かわを敷。太刀を左のひさの上に置いて居る也。扱主人御通の時。幕をもあげ。太刀を敷皮の上に置。敷皮をおりて。かうへを地に付て通し。御通有て。頓て本のことく御供の衆の時ハ。敷革の上に居へし。此まくのほり様ハ。そこをけいこの故也。

一座敷の疊敷へき事。本式ハ。何疊敷共まはり敷に敷もの也。床の前は必横疊に敷もの也。横疊に四疊ならへて。しかぬ物といへり。

一座敷へ折出す事。五献。七献。六献より見はからいて出すへし。

一猿樂田樂舞まい風情に。折紙を遣時ハ。亭主のやられハ。名を云に不及。別の人遣時ハ。そんてうそれと名を云て。遣たるか能也。

一餘所より使者兩人來らは。必兩人して聞へし。但それも事によりて。一人して聞事もあれば共。同じくは兩人して聞たるか能也。

一御こしの供する時。式しやうの時ハ。雨のふる時。必御こしにゆたんかゝる也。其時。供の衆も笠をさすへし。かゝらぬ間は。何とふるとも。笠はさゝぬなり。當世のきかきも同じ。一名人と云事ハ。むさと云間敷なり。萬に達せぬ物は云ぬ物也。何にてもする事の能をは。其上手と云へし。

一主貴人惣別人に物申時。ろくにむかいてはいわぬ物也。是はいきをつきかけましき爲也。

一刀。人に出す時。太刀をわて叶ぬ事にてハなし。結句賞翫也と云。進物に是多し。

一飯しるにさいしん引事。しるをかけて後は。引事無用なり。乍去。所望有てハ各別なり。

一山の物と田の物と一度に出す時。先山の物より出すへし。但其中に鶴白鳥杯あらは。先それより出すへし。

一狩杖の切様。せこハ我か乳にくらハ。鷹匠ハ肩にくらへて切る也。木は柳榊本也。但梅栗（肥アラン）の木をも諏訪流に如此。又むろなとするなり。

一鞍置馬。御目にかくる事。牽て出様ハ。前に記すことくむかふはかりを見せ申なり。然共御覽せられんとあらは。はたか馬のことく御目にかけへし。

一馬よりおりてハ。手綱をむかいへ越す人多し。是わろし。たとい主貴人の御馬成とも。亦御前成ともおりて。其儘置てのくへし。口取必手綱を前へ越して牽ものなり。但口取なく。我ど引て歸らん時は。手綱を前へこし引て歸るへし。

一つハ切付たうむしろの事。いづれも不苦。殊にひいたれの時ハ。必つハ切付たるへし。つハ切付の時も。たう薙の時も。力草

は白かるへし。乍去。さらに白きハわろし。くちなしをうすく出して引たるか能也。

一馬を餘所より牽て來るを請取に。當世は色色説有。前にしるすことく請取て。先手綱を前のことく取定て。扱しさらかして。主人其場に居られたらハ。其方へむかふを引向て。右の脇を少よりて居て。主人の方を見て。つきまはして歸るへし。若主人。其場に居られねハ。前のことくしさらかして右の脇へよるに及す。頓てつきまわして歸るへし。手綱の取様以下。前に記すことく也。

一青きしりかひ。からちや。もゑきなどの色を。當世皆人のする事也。入道法師ならてハ。せぬもの也。はれの時。努々不可用。殊更むらさきのいろなどは。猶以すましき也。

一鐙の内を黒くする事。是も尻かい同前也。但俗躰にては判官亦驪正少弼忠大弼など名を

付ものはする也。彈正左衛門ハせぬ也。乍去。是もむらさきのしりかいハ。かけましき事なり。あさき。もえき。茶色などはかけへし。

右酌并記者。伊勢六郎左衛門尉貞順之記也。

貞順者。天文年中。永祿年中之比之人也。光源院義輝公之御代中次之致近勤たり。

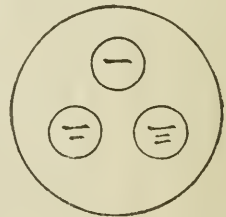
一本に有之數ヶ條。左の如し。

自然舞臺にて酌する事ト云ヶ條の後。  
貴人の御酌にて給る時ト云ヶ條の前。  
一三ほしの御盃のみ様の事。此繪圖のことく  
のむへし。五ツほし同し。

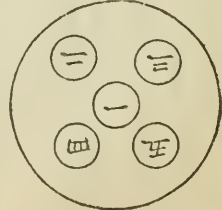
こしそへの事ト云ヶ條の後。  
卷敷いたゝかせ申ト云ヶ條の前。

一神前にて御へい請取。主人にいたゝかせ申様の事。神主の方より立なからうけ取。左の

前



同



かたをあけ。右のかたをさけてもちて。御前にてかしこまり。御へいを取直し。我右を高く持て。上の方をとらせ申へし。主の御左の方へ。へいかみみのなひくやうに請取らせ申へき也。御拜過て給る時は。ちうにて又取なをし。本のことく左をあけて持へき也。

鷹受取様の事ト云ヶ條の後。  
むちのあて様ト云ヶ條の前。

一主人貴人なとへ渡す時ハ。是も大緒。右之手にてもちて。左の手のきはへ。右の手をちかくよせて。鷹と大緒を一度に進上する様に渡す也。いかにもしんたいいうやまふへし。

かりそめにも鷹のうしろと云ヶ條の後  
くわん進能くわん進舞ト云ヶ條の前に

一 一こしと馬との時宜の事。とかく是は人によ  
るへし。こしからも 馬にあひており。馬か  
らも こしにあひておるへし。更にこしに對  
しての時宜にあらず。乗手によるへし。去な  
から。女房衆出家などは。一向各別の事也。  
何篇こしにあひたらは。こしをよき道を通  
して。馬をはわろき方へ乗のけて 通した  
らんに。すこしもほうへんあるへからず。

人の刀を見る事云ヶ條ノ後  
あしなかに禮なき云ヶ條ノ前ニ。

一 あふら火をかきたつる事。さたまる法なし。  
何にてもかきたつる物あらは。それにてか  
きたてへし。もしいつれもかきたて物なき  
時は。小刀にて成さも。かきたてへし。惣別。  
こかたなのはの方にて。あしくかきたつれ  
は。火のもゆる方を切て。下へ落す物なり。  
誠に右にしるすことく。かきたてものなき

時。小刀の先にてむねの方にて。かきたてに  
くき物也。はにて引よするやうにかきたて  
たるかよき也。惣別。油をさす時も先かき立  
たるかよきなり。其後。あふらをさしたるか  
よし。かきたてすあふらを。かはとさせは。  
其まゝ火消るもの也。

右の次に

一 とうたいを持て出る事。大畧しよく臺に同  
し。右の手をは。上のさらのきはへあけて。  
左の手にてはしらを持へし。とうたいを持  
時。手をさけて持ハ。うはかふきにて。あふ  
らつきおつる物也。是も能々かねて心をつ  
かふへし。あふらつきとは。  
右の次に 油さらの事也。

一 たんけい 持て出る事。當世はやる物也。あ  
ふらひより上へ出たるはしらのさきを持な  
り。それはたゝ上へ計わろくあくれば。あふ  
らつき落る物也。ちとあふらつきのかたを  
すくひあくるやうに。心を付て持へし。左様



にあれハとて。あまりあらけなく。すくひあくれハまたあふらこほるゝ物也。かやうの事ハ。法の外時の氣點肝要なり。

右之次に。

一主人貴人。御茶を給る事。當世のはやり物なり。數寄屋へはいりてのさ法ハ。定法いろいろあるへく候。さりなからはやり物にてもある。わかくおさなき人のあまりしかめしなどをあらひたるやうに。きれいたてをして。みなくひたるも何とやらん。こひ過て見にくきやうにもあるへきか。能ほとらひも有へし。扱茶をたていたされたらは。先のまぬ先にいたゝきてのむへし。茶の色などを。あまりつよくほめたるも。あまりこひ過たるやうに有へし。そはにある人にむかひなとして。すこしハほむへし。のみはてゝは。いづれもそのたてたる人に。禮をはしたるかよきなり。

あしなかに禮なきと云ケ條ノ後。四月よりあはせと云ケ條の前に。

一人の前にて。きんとんくふ事。れうしくへは。中なるさとう出てかほへかゝる物也。其用心をしてくふへき也。さきとすこしくひきりて。さとうを出してのち。くふかよきなり。

右の次に。

一ふるき人のいひ置しハ。しゆくしもれうしにくへは。しる。かほ又ゑりなとへかゝりて。見くるしき物也。これも先をすこしくひて先しるをよくとふやうにして。其後。くひたるかよきといひならはせり。

右の次に。

一小袖の事。おりすしはかならず正月。ある染は九月九日。紫の小袖ハ。大略亥のこに用さるなり。但正月などに。ある染の小袖を着る事も。いかほとも有しなり。さりなから大かた。かくのことくなり。



餘所より使者兩人と云ケ條の後。  
御ししの供するト云ケ條の前ニ。

一唐布のかたひら。平人いかなる人きてもく  
るしからず。

主貴人惣別人に物申ト云ケ條の後。  
刀人に出す時太刀そはてト云ケ條ノ前ニ。

一たてすな二つの間をは。むさをとをらぬも  
の也。兩方のわきよりごをるへし。  
右の次に。

一まはり酌といふ事は。我のみて則我酌をす  
るをいふなり。たゝかはりくするをはい  
ふへからず。

右十四ケ條。一本に有之。依て卷末に寫  
之置也。

一鞍置馬懸御日事。

一馬よりおりて。手綱をむかひへこす事。

一つゝら切付たうむしろの事。

一馬を餘所より引て來を受取事。

一青きしりかひ等の事。

一鐙のうちを黒くする事。

右六ケ條。一本に無之也。

右ニ。一本ニ云と記したるは。細川家に所  
持の本也。

明和元年申年十一月廿一日校合畢。

貞丈記。

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

續群書類從卷第六百九十九

武家部四十五

酌之次第

一盃を出し候事ハ。人ときやく人と同はいならハ。客人の方へよせておくへし。

一客人しやうくわんならハ。きやく人の方へよせてをくなり。

一主人しやうくわんならハ。もとより主人の方へよせておくへし。歸りやうも。大かたその心得たるへし。よく／＼心得へし。

一よるの盃の事。しやうくわんのかたと。そくたいのあひたにをくへし。

一しやくとりやう。あふきをおきて。てうしの折めの所へつめてとるへし。但大きなるてうしならハ。折め上七ツめのきハへよせてとるへし。いづれもてうしの大小によるへし。心得へし。

一同てうしをもち出候て。貴人へむかひ參やうにして。中座につくはふる也。さて主人めつかひ候ハ。そのときたちて。盃をとり候とき。左のひさをつき。てうしを下にをき。兩手にて盃をとり候て。さててうしをもとり。うしろさまに三あしほとしさり。その、

下さまへ下され候時ハ。御盃をとりて。こかくはかりにすへて下され候也。同又一段と下はいなは。こかくをもをき候て。御盃計手にもちて行也。

一下さまの盃をめしあけられ候ときハ。先御前へもちて參。盃計をとりてくきやうのうへにをきて參る也。いくたひもかくのこくなるへし。惣別くきやうハ御前計の事也。御前よりとをくさかる事あるへからすなり。但又。しきにもよるへし。いづれも先大かたかくのことくなり。

一てうしのわたりの上に。盃ををき候てくたされ候を。御なかれと云也。此のみやう。御前に向て。いたゝきのみとて。盃をもちてたつ也。これはいかにも上たる御前にての儀也。何も御前にて。此をもむきたるへし。よく心得へし。

一御酌にて下され候を。御とをりと云也。此こきハ。いたゝかすしてのみ候て。そのまゝ御てうしの下におくへき也。てうしよりとをくをく事。りよくわいの儀也。かやうのときハ。すへりよく兩ひちを付て請。ちとしさるやうにして。ひちをあけて給候てまかりたつ也。かやうのときハ。したをもすてぬ物也。のみこほしたるへし。

一御酌にて下され候事。正月なと又ハしせん  
の儀なり。よく心得へし。

一同めし出しの事。たとへは。めし出され候てまかりいつるとき。それかしもちて參とて。主。わか盃をは。いたゝき候てのむへし。おもひさしにてなくハ。いたゝかすしてのみこほしにしてたつへし。したをふる事有へからす候也。

一同又その盃を。貴人御こひ候て。めしあけら

れ候ハ、下を少のこし。口のつきたる所をすゝき。さてとりなをし。いたゝき候て。酌へわたすへし。又しせん人により候て。わか持参する事もあるへし。しきによるへし。大かたしやくへわたし候てよく候也。さて貴人めしあけられ候とき。中座いたし。いかにも謹て。かうへをちにつけ。さて御酒を御うけ候てのちかうへをあげ。本座へ歸へし。何もこれはいかにも上たる御方へのしき也。一めし出しのとき。主わか盃なりとも。御前にてハ。いかにもさらにいたゝくよしにてのむへし。われよりうへの人。おもひさし候共。貴人の御まへにてハ。その心得分別すへし。めし出しにかきらす。つねにも心得有へし。惣別めし出しなとのとき。わき／＼へ禮儀なと有ましき事也。上ををもんするゆへ也。よく／＼心得へし。

一盃を人の方へさし候とき。同はいより以上へハ。下をふりいたゝき候てさすへし。同又。同はいより以下へハ。下をふりいたゝかすして。そのまゝさすなり。心得へし。

一同人の方へさし候とき。わか口のあたらぬ所をとりまハして。いたゝき候てをくへし一同又のみ候人ハ。盃をとりなをし。あなたの口のあたりたる方を。いたゝき候てのむへし。これたかひに禮儀なり。何もとうはいより以上の儀たるへし。

一同のむ人も。上の盃ならハ。中座していかにも。つゝしんていたゝき。さて下をのミ候て。さてさけをうけへし。同又等はいならハ。中座するにをよハす。いたゝきてのむへし。すこししやうくわんならハ。そと出座して。いたゝき下をのみてうけへし。但大かたのときハ。下をのむ事ハ。これあるへからさ

との事也。心得へし。

一たいの盃をはのみ候て。そのまゝやかて下をふり。たいの上をき候てよき也。たいをはつしてをく事ハいかゝにて候。つねにハあひかはる也。下手なりとも。盃のたいともに。わか前へきたり候ハ、右のことくのみにて。たいにをき候てよく候なり。さしやう。のみやうハつねのことく。よく／＼心得あるへし。

一ゑほしきの酌の事。三あし半のき候て加へし。又くハハ七足半行て加る也。同くハへも二度ハ心得をして。三度めをつくへし。しうけんにハ何も同前也。

一よめどりのしやくの事。やあしあゆみてくはへへし。又くハハ六あし行也。此ときハくハハ右たるへし。てうしの口とひさけの口のあふやうに心得へし。いづれもむす

ひ候也。口傳有之。

一むこ入のときのしやくの事。一あしあゆミて加へへし。又くハハ七足半行て。右のひさをたて候て加へへし。

一よめどりのしやくの事。くきやうにのし。こふ。くりをきて。盃三ツかさねて出すへし。式三こんをりやくしたるていなり。よめとりのときハ。此のみやうを用へし。三ツの盃共に。たかひにのけてのむへし。中の盃をおとこはしむるなり。さてはしめハ女はうのみはしめ。おとこのみおさむる也。女はうの方にハ。かひしやくの女はうたちありて。盃のとりわたしをする也。よく／＼心得へし。何もてう／＼口傳有之。

一同酌之事。盃一ツにて三度參らせへし。たとへは一度參らせて。二度くハふる也。あはせて三度の心得也。扱のみはてゝ。此盃をかい

しやくの人とりて。もとのことく上にかさ

ねてをく也。さて酌。くきやうをもちあげ。

座へ向て立へし。おとこ此盃をのみて。いち

下にかさねてをき。二ツめの盃にて。はしめ

候て。女はうの方へさすへし。くハハハ兩方

ともに同前也。さて酌。此ときハ下座へ向立

て行へし。女はうまへのことくのみ候て。お

とこの方へ行ときハ。又上座へ向立候て行

へし。いづれもかやうにとり候へハむすひ

候也。つねにハ惣別にむすひ候事を。ことの

ほかいむなり。よめとりのときハ。ほん酌

も。次酌もむすふ事を。ほんと心得へし。ひ

さけの歸りやうも。本酌右へかへらは。ひさ

けも右へ歸るへし。同左へ歸らハ。ひさけも

左へ歸るへし。かくのことくかへるを。おも

ひがへりと云也。かやうにすれハ。むすひ候

也。よく／＼心得へし。ひさけハいづれも三

々九度の心得なり。

一同酌とるものハ。兩人なから二をやもちた

るこしやうのやく也。但又しきにもよるへ

き也。

一さる引に sake をのまするときハ。えんより

かた手にて酌をすへし。盃ハそのまゝのみ

てもちてたつなり。こかくにすへすして。か

はらけ計もちて出へし。

一てうしうけとりわたしの事。たとへハ向に

ある人にわたすにハ。右の手をわたりのさ

きへとして。左にて柄をかゝへわたすへき

なり。同ならひたる人にハ。左右共によこた

へて渡すへし。同又貴人へ渡し申ときハ。な

かえをささへなして。てうしのかたをすこ

したかくさしあげ。ひちをつけて參らする

ものなり。よく／＼心得へし。

一いかにも貴人主人などの御うけとり候はん



ときも。大かた同前也。さりなからてうしのきハを右にてもち。たゝみすりを左にてもち。てうしのかたを。少あくる心得にして。うやまひて參へし。同ひさけも同前なり。

一ひさけをつねにわたすへき事。大かたてうしの心得たるへし。ならひたる人にハ。左右ともにそのまゝ渡すへし。又むかふへ渡候とき。これも右にてつるをとり候て。ひたりにてひさけのはたごそこをもちてわたすへし。何も口傳これあるへし。

一貴人の御盃頂戴申ときハ。さのみわきへ禮あるへからすもの也。いそぎ中座いたし。盃をうけとり。こかくにすはりたらは。小かくをはちにおきて。御盃をいかにもふか／＼といたゝき候てのむへし。貴人御くらゐにより中座するとも。下をのますして。御盃はかりいたゝきてのみ候事もちろん

也。貴人の中にても。下をのみ候事ハ一段ごしやうくわんの儀也。大かたならハ。ふかふかといたゝき。口をつけす其のむへし。さりなからしきにもよるへし。同中座候ともてう／＼しんさうの心得分別有へし。

一主人貴人の御盃を下さるゝときハ。貴人へさしむかひまいらせ候ていたゝき。さてさけをうけ。又のみ候時も。貴人にむかひまいらせて給へき也。

一御前にてさけのみやうの事。さけをうくるときハひちを付てうけ。さてのみ候とき。ちとかうへをあけ。こしをすへてのむ也。うやまふごて。あまりうつむきてのみ候へハ。しせんむする事あり。かやうの儀は。御まへのみやうかくのことく也。よく／＼心得へし。惣別。主人又父の盃をは。いかにもうやまひて可給もの也。さりなからちゝの盃な

りとも。貴人の御まへならハ。いたゞくにお  
よはすしてのむへし。あひ心得へし。

一惣別上中下共に。酌盃もとをゐへたて候ハ  
ぬやうに。心得候て酌をすへし。同のみ候も  
のも。その心得をなすへし。座敷によりてな  
らす候とも。へたて候ハぬきつかいをして  
とるへし。何もよく／＼きつかひ可有之事  
專一也。

一せこのてうしの事。盃をハこかくにすへす  
して。御なかれのこたく。てうしのわたりの  
上にきて出すものなり。同すゝの酌のと  
きハ。すゝの口のうへにかハつけをゝきて  
いたすもの也。さて一人のみ候てよりハ。盃  
を手にもつ也。わたりにハをかぬもの也。よ  
く／＼心得へし。

一せこをいるゝといふ事。たとへはらんしゆ  
になり候ての上にて。御酒久しくありて。末

座にて客人のともしゆへ。こなたの人たれ  
にても。さけをすゝむるを。せこといふ也。  
何もこん／＼のさけのときハ。さい／＼せ  
こをいるゝ也。さりなからこん／＼たひ  
／＼入る事ハ無之候なり。よく／＼心得へ  
し。又しきにより候て。多人數などのときハ。  
せこのてうしいくたりも出へし。五三人ま  
ても有之事も候。かやうの事ハ。ことにより  
又ハしはゐなごにてハ。かくのこたくもあ  
るへく。何もことによりての事也。よく／＼  
分別すへし。

一同せこを入る事。末座はかりにもかきるへ  
からす候なり。らんしゆなどのときハ。せこ  
のてうし。御座敷へもことによりて參候事  
可有之。一へんにハさたまるへからす候也。  
心得へし。座中へ參候ときも。たいにすゆる  
事ハあるましく候也。手にもちて行へし。

一 せこの時ハ。次第むつかしければ。わかきものなどに酌をとらせて。せこやくとて。先酌にはしめさせ候て。さてたれ人なりとも。はからひてのませ候事。故實つねの備也。

一 せこのさかなとて。別て出る事ハあるましく候なり。御座敷に五しゆも三種もさかなあらハ。今出たるさかなをはきて。まへに出たるさかなをとりおろして。せこのさかなとなすへし。

一 御座敷ひろく候へは。さかな七ツも八つもあるへし。又座敷せはきときハ。二つ三つをき。大まへに出たるを。次第々々にとりて歸るへし。これハさかなもちて出たる人。やかてとりてかへるもの也。心得へし。折とりすへ公卿の物しきろう。何もその心得たるへし。よく／＼心得へし。

一 よすへなとのとき。酌とるへき事。貴人とた

かをうしろにせぬやうに心得てとる也。たかのうしろをとるへからす候也。同たかせうにさけをもるときハ。たかせうの右のかたへ。そとさしより候てもるへし。むかふへよるましく候。よく／＼心得へし。

一 盃のたいにすハリたる盃の事。たいちいさく候て。かた手にてもたれ候をは。てうしと一度に。つねのことくとるへし。もし又。しせんことによりたい大きならハ。たいのある所に少さけて。てうしををき。さてたいを人の前へもちて行候て。さててうしをとりて行へし。たかいに禮のあひたもかくのこくとく也。何かともかやうにあるへく候。惣別。たいへてうしと一度にもつやうに心得へし。さりなからはな見など。又ハらんしゆなとのとき。しきにより大きなるたいの出る事も有之へし。

一つねに盃をのみはてゝをくときハ。たれにても。のみおさめたるものもちてたつ也。同酌にわたす事も有へし。ときによるへし。酌ハ貴人のかたへ向なをり。うかゝひたるていをして。さておさめよとあるときたつ也。盃をおさむる人。先今一こんとうかゝひ候てよく候也。心得へし。

一同かくのこくときハ。こかくきハにあるときハ。盃を右に。こかくを左にもちてたつ也。又とをくあらハ。盃はかりもちてたつなり。さてこかくをはたれにても取也。同かやうのとき。こかくをとりて歸とも。さかつきのこく雨の手にて。たかくもちてたつへし。そさうにする事。惣別あしき事也。よくく心得へし。

一酌をするに向座へ御禮あるときハ。ひらき候て御禮ある所を。あふさかさるやうに心

得へし。右にもしるし候こく。かくのこく的心得かんよう也。

一さかなをひき候とき。酌と次酌の間をとをるましく候也。ひさけのうしろをとをりてよく候也。さりなから。しせん又ひさけのあるところによりて。うしろへまはり候事。ならさる儀もあるへく。さやうのときハ。めをつかひ候よしをしてとをるへし。かくのこくきつかひ候へハ。くるしからさる也。惣別はんしにわたりて。いさゝかもゆたんなくきつかふへし。ことにさけなとにえひ候へハ。心かけてさへおつとある物にて候。いはんやきつかひなく候ハ。物ことにふしつけのみたるへく候。つねに内々にてのきつかひ心かけ。かんようなるへし。

一くハへをする事。何と、きもしきゐをこして。うちにてくハへへし。さりなから。又座敷に

よりて。いかにもつまりたらハ。しきゐをへたて候てなりともくるしからず候也。かやうのときハひさけを内へこしてくハへし。一へんにさたまるましく候。よく／＼心得へきものなり。

一同正月など。又ハしうけんなどのときハ。いかやうにつまりたりども。うちへいりてくハへし。しきゐをへたて候て。くはふる事ハあるましく候。つねにハかゝるへし。何もよく／＼心得へし。

一主人きやく人たかひに自身酌をせらるゝときハ。父子あらハ。ひさけハ子のやく也。又おやこなきときハ。同名家子のやく也。心得へし。

一さかなを引ときハ。酌左右へ座敷によりてひらくなり。何も貴人のかたをうしろにせぬもの也。かやうの儀ハ。くわしくハしるし

かたし。仕合しなへてう／＼口傳有之へし。一盃を出し候て。くきやうにても。折にても出し候ときハ。きやく人しやうくわんならハ。客人の方に盃ををくなり。又客人下はいならハ。客人の方にさかなををくへし。同はいならハ。こん／＼問を主人と客人と。たかひにしやうくハんの心得にをくへし。五度ならハ三度ハ。しやうくハんの心得なるへし。我所にてはあひたかひに。かくのこたく客人をすこしハ。しやうくわんの心得かのようになり。されハとうはいのしきなり。何もよく／＼分別すへし。

一盃を出し候てハ。さかなを出し。さてうし出る也。こんこんあるときハ。すひ物など出候て。さしてうし出るとき見合。すい物をとりあけて。くひて下にをくとき。ひさをたてはしををく也。さて折にても。またくきや

うにても。やかててうしと打つゝき候て出へし。よくゝ心得へし。

一つねにすい物などにて。こんゝ次第にハかまひ候て。さかなを出候ときハ。まつすい物出で。さて一人参候とき。くハへの所へさかなをもちて出へし。

一同かやうのときハ。一こんの中にも、久しきときハ。二種も三しゆも出すへし。同はいならハ。これもたかひの前へ出す心得に。これあるへし。よくゝ心得へし。何もてうゝ口傳あり。

一同ほん式になくとも。正月などハ五こん七こん。又は三こんまで有之共。大かたほん式のていを心得て有へし。くきやうの物ハ。一こんゝに出へし。つねにハこんゝ間久しきときハ。くきやうの物二つも三つも出へし。

一同ほん式のときハ。折とりすへ。しきろう以下二しゆも三種も出へし。何もこんゝ遅速にもよるへし。又しきにもよるへし。かくのこくと二こんめなども。一度つゝ。いせんのかかなをとるへし。

一こんゝあるとき。盃を出し候ときハ。相伴の人一兩人ほと。いまたのまさるうちにかけて。出し候やうに心得あるへし。をのゝのみはて候て。出るやうに候へは。のみ候てわろし。よくゝ心得有へし。又ハしきによるへし。

一つねにとりさかなにて御酒有とき。座敷により久しきとき。くきやうの物。いかほと。座のけうによりて出へし。かやうの義ハ。さたまれるほう有へからず。主人の御きしよくによりて。御酒久しきときハ。しいつれも同前也。



一同とりさかなと云事。何なりとも。いくいろももりて出すをいふ也。二いろ三いろももる也。あしうちなにも。杉原をしき。そのうへに。なんてんのは。あるひはしやうかなとをしき候て。さてそのうへにもる也。正月などハ。うらしろ。ゆつりはなとしきてよき也。

一 ukiやうに松など。又むめのえたなとを立候て。さて右のことくもりて出すも同前也。一 かくのことくえたなとを立るに。上座のかたのすみをかたとりて。たてたるかよき也。中なとに立候へハあしく候也。よく心得へし。

一 同草のはなとをしき候ときハ。これももとを上座へなして。はさきをすゑ座へなるやうにしくへし。はさきの上座へなるハわろし。よく心得へし。

一 折なと出し候ときハ。あしを二ツ。貴人の御方へ向てをくへし。つねにハ上座へ二つなすへし。はしをハたいにをくへし。

一 さかなくみの事。しうけんハ三つくみ也。うちあはひ。かちくり。ふなり。くみやうハてうく口傳有之。同さかなのとりやう。先手よりとるへし。何も口傳有之也。

一 しきろう出すやうの事。たとへハしきろうのふたの上に。こかくにはしをさして可參。さて下におき。まつこかくをとり。はしをぬきて右にもち。ふたをあけて。はしをき。こかくをはふたの中へ入て。とりてかへるへし。かやうのときハ。ふたをあふのけてをくへし。心得へし。

一 同又ふたをそのまゝをくときハ。こかくはかりとり候て歸るへし。ふたをハ下はいの方にをくへし。等はいならハ。主人の方にを

く也。此ときハ。ふたの上にはしをいきてよし。□のことくしきろうにより。ふたをきやうあり。地きんなどのふたをハ。うつむけ候てをくへし。同又たゝ。くろぬりなどのふたをは。あふのけ候てをく也。此ときハはしをふたのはたへもたせ候てをくへし。

一同しきろうを出し候に。ふたをする事ハ。しせん儀なり。わか所などにてハ。ふたをハとりて出してよき也。此ときハやかて。はしをかなかけにすへてもちて出。さてはしををき候て。かなかけをハとりて歸る也。右にするすことくかやうのときも。兩手にて出すときの心得に歸るへし。よく／＼心得へし。一同きやく人などのもたせならは。ふたともに出してしかるへき也。いへに入たらハ。いへ共に出し。する座にていへをとり。しきろうはかりを上座へ出すへし。はしをそへ候

ハ。せひに及ハす。さやうになくハ。いせんのことく。はしを内よりやかてもちて出へし。はしをそへ候事ハ。しきによるへし。見物などの所へハ。かならずはしをへ候てよく候也。

一すきしきろうなとを。しはるなとへ出し候ときは。花などにて。ふたの上よりかさり出し候てもよきなり。なてしこ又ハ石竹のたくひなとをさして出し候也。座中などへはいかゝにて候。いづれもよく／＼心得へし。

一しきろうのかさりなとも。ふたをしてをくり。又ハ唯へ出し候ときハ。ふたのたかさにしたかひてもるへし。かさりなとも。その心得なるへし。又ふたをおき候ときハ。かさりも大きに。もり物なとも。それにしたかひて。たかくもりたるかよき也。心得へし。

一しんのしきろうハ。五色を五やうにもるへし。同さうのしきろうハ。三つも二つももる也。五つのときハ。何もたかさ同やうにもるへし。

一中のみと云事。かすを參候とき。たれにても間をすけ參らせ候を。中のみと云也。たとへは三つ參候とき。三ツめをくつろけり候こと也。同又御つまり候ハ。はしめ一ツきこしめし候て。二つめをすけ參らせ候也。しきにより。はしめを御うけにても。中を御たのみの事もこれあるへし。いづれも事によるへし。大かた先初め一ツをは。とかくに參り候て。二ツめか又ハ三ツめをすけ參らせてよき也。心得へし。

一同中のみの事。二はいつゝけてのみて。さて盃本へ返し候也。當代三盃つゝけてのみ候事も有之。上古にハ二盃也。大りやく又たう

たいは。人によりて三盃のみ候ことももちろんなり。

一同又大中と云事。たとへハ三ツのみ候とき。中をのみ候人。二盃のみて。三ツ目を又たれなりとも。間をたのみてすけられ候を。大中と云也。かくのことくの時ハ。いくたりへもたのみ候也。いせんのさかつき本あまりに御つまり候へハ。かやうに間ををき候て。ほとをへて。くつろけ申へきため也。又てにより下はいの盃を。貴人。中のみをさせられ候事も有之。それも參やうハ何も同前也。よく／＼心得へし。

一惣別中のみハしたをふらす。いたゝかすして。盃。本へ返しり也。但人によるへし。貴人の御中ならハ。いたたき候て。返し申候ときも。したをふりいたゝき候て。返し參らせてしかるへき也。中のみとて。さうにある

事あしき事也。よく／＼あひ心得へし。平人のときハ。いたゝかすしたをもふらす。その

まゝ露なしにのみて。さし候てもよく候。但それもしきによるへし。よくよく心得へし。

一中のみハ少もひかへす。つゝけてのむもの也。同大中のときハ。いくたりもあれ。一盃

のみて二ツめを。人のかたへたのみのますへし。のみおさめ盃もとへ返し候なり。同盃

もとへかへり候て。一盃つゝのむへし。そのとき又二盃なとしる候事あるましき事也。

能々分別あるへし。大中もしきにより。三盃つゝのみ候ときハいせんのことく二盃のみ

候て。三ツめを又わきへたのみ候也。いづれも同前なり。

一同大中のときのていにより。その盃を次第に返し候て。いせんのことくへすくに返し中事も有へし。何もしきにより。又ハ座の

ていによりて。かやうにもあるへし。よくよく心得へし。

一中のみにさかなを出す事。たれにても盃本より出し候也。中のみをせぬ人。わきより

さかなを出し候へハ。とりおとしとて。一盃のませられ候也。よく／＼心得へし。さかな

のとかハ。惣別一盃にて候。さりなから。しきによりさしきによりて。かすをのませら

れ候事も有之へし。まつ／＼大かたハとかハ一盃と心得へし。一へんにハさたまるへ

からす候。何もよく／＼相心得へし。一本式のときハ。何こんもあれ。折とりすへい

かほとも出へし。しきろうも參るへし。さりなから。しきろうハ折かハらけの物とあひ

かハるへし。御座敷中ころの時分出てよき也。但又それもしきによるへし。

一折ハ。しやうしんの折と。きよるひの折とあ

るへし。たとへハかまほこの折。又ハまんなうの折。かやうに有へし。心得へし。

一折又はとりすへなとも。きそくある物をハ。はしにてハはさますして。きそくをとり候て。まいらせてよく候也。但きそくにより。いかにも貴人なとへハ。きそくある物なりとも。はしにてはさみやすき物ならハ。はしにて參らせてよく候也。つねにハあひかゝるへし。

一折かハらけの物。くきやうの物。をさへの物。そのほかしきろうひやし物以下。貴人の御前へもちて出るときハ。上座の方ちかくをきて歸るへし。同貴人兩人御座あらハ。上座の中にをくへし。

一御酒久しきとき。こん／＼あるときハ。しきろうも二ツも三ツも出へし。但一度に出るにハあるへからす候。よくよく心得へし。

一とりすへ出し候やう。たとへハ五ツとりすへまであるときハ。先はしめに一つとりすへを出し候て。さて次第に二ツすへ。三ツすへ。五ツとりすへ。かくのこくく出し候てよく候也。但又はしめに一ツとりすへ。次に五ツすへ。又二ツすへ。そのうち三ツすへなと。かやうにやうたいをかへて。出してもくゝるしからす候也。先大かた右のをもむきに出し候てもよく候也。心得へし。

一折にハ何にてもあれ。一いろよりほかもるましく候也。十合あらハ十やうの物をもる也。心得へし。同折にハかうたてある也。折の大小ハ何寸の折と云也。たとへハ七寸。五寸。三寸。此心得にあるへし。折のたいにあしをつくるもの也。あしハ三ツ付へし。口傳。

一はしハ。折のたいにすゐるなり。

一 おりとすへなとハ。よそへをくり候ときハ。かうよりにてしはり候てよき也。十もんしにかうよりをかけへし。同又そのまゝていにより。御座敷へ出る事も有之へし。何もしきによるへし。よく／＼心得へし。

一 しきろうなどにこくしの物あるときハ。はしにてはさみ候て出事ハわろし。くしをとりにてまいらすへし。

一 どりすへハ。くきやうにとひをして。さてそのうへにかわらけををくへし。五ツすへまでもかくのごとく也。どゐにゐのめをすかすへし。くきやうのれんし。何もくきやうにすきはらをしきて。さてをく也。こゝろ得へし。

一 くきやうに盃をすへて出すときハ。すきはらをしかぬ物也。さかな等のときハしくへし。よく／＼あひ心得へし。

一 ひやし物の事。なつハうりなと。又ハ何にてもすゝのはち。あるひハちやわんの物などに。水を入れて。ひやし候て出すをいふ也。

一 大しゆになりて。貴人御つまりありて。御さかなをといふとき。ひやし物などを出すときハ。やかてもちて参りたる人。はさみ候てまいらせ候てもよき也。同又座中の人。たれにてもまいらせられ候事もちろん也。よく／＼心得へし。

一 折なとのかまほこをハ。やうたいによりすきたる所を。一つとり候て。はしにて参らせてよし。きそくともに参らせてハ。やうたいにより候て。むつかしき事有之。さやうのときハ。はさみて参らせ候てよき也。但又しきによるへし。いかにもこかまほこなとをハ。人によりきそくをとりて出してもよく候也。何もやうたいによるへし。



一をさへの物といふ事。いろ／＼のさかな出つくしてのち。まへのさかなともををさへて。今一こん中たきといふ心なり。同又しきによりにはかなどのとき。さかな調法なきのとき。をさへの物を出して参る事もあるへし。一通にハあるましく候。何もしきによるへし。大かた先はしめに出事ハ。まれなる事にて。しせんの儀なり。よく／＼あひ心得へし。

一をさへの物と云事。すわまかたなど。又ハちかミなどにして。いはくみなとのていをして。さてしゆ／＼のさかなをもるを云也。らつちや。とうちんかうなどをもるへし。盃のていの心得に。大にしてさてさかなをもち。はしををき候て出すを。をさへの物と云也。大小ハ又座敷によるへし。何も盃のたいよりハ大さ成へし。

一さかなをひきやうの事。手のこうを下へなし。左右のひちを付て参らするハ。事のほかしやうくわんなり。同又左のひちはかり付て参らするも同前なり。同又ひちを付すして。うやまふ心えにして参らする。これハかるし。何もしやうくわんの中にも。しんさうハてう／＼有之へし。同はいのすこしの高下のとき。ハいせんのことくたな心を上へなして。左の手をやかてそへて出し候也。同又等はいならハ。かるきハ左の手をうてにそへて出し候也。左の手をはしのかたよりとをくそへ候か。下はいへのをもむきなり。

一同下はいへのときハ。たとへは左の手をそへ候とも。たな心を下へなして。手のこうを上へして出し候へハ。さけたる心得にて候。なを又下手へハかた手にて出し候也。か

た手にて出し候うちにも。左の手をつき候へは。少しやうくわんなり。よく／＼あひ心得へし。

一同さかなうくるやうの事。左右のひちを付候てうくるハ。いかにもしやうくわんなり。又左のひち計付てうくるもしやうくわん也。但右よりハ少ハかろし。ひちをハつけすして。さていかにもうやまふ心得にしてうけへし。何もしんさうハてう／＼有之へきなり。

一とうはいのときも。たかひに中座してうけてよし。此ときハ中にてうけへし。とうはいの中にも、しんさうハもちろん也。何もてうてう口傳有之へし。

一同さかなをうくるに。左の手へ右の手をかされてうけ候て。大ゆひにてさかなをおさへ候ていたゞき候なり。しんさうの儀ハ。右

にしるす心得なり。よく／＼分別すへきなり。

一同どうはいか。すこしかろきときハ。此ときも左の手をうてにそへ候也。はしのかたへ左の手とをくそへ候へハ。かるきやうたい也。同なを下はいならば。かた手にてうけへし。下はいのうちにも。左の手を付候へハ。すこししやうくわんの心得にて候。よく、よくあひ心得へし。

右條々應相記者也。

天正廿年 右近太夫入道

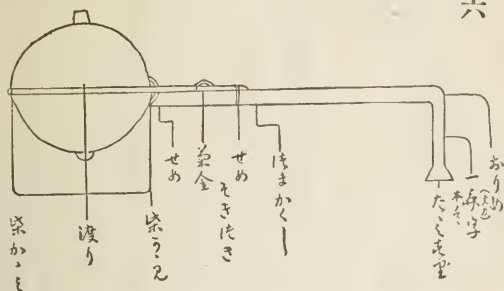
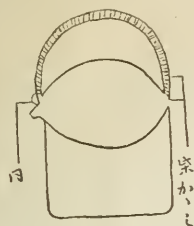
八月吉日 沙彌宗得在判

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

續群書類從卷第七百

嫁取故實

武家部四十六



一銚子包様之事。一のせめに。ゆつり葉一枝  
松の葉少かさねて。はさきを渡りの方へ出  
し候て。其上を紙にて。順に糸をまくへし。  
松の葉の上に。しやうそくかみ有。  
一卷目の數。廿七も又廿八もまくなり。菊金の  
上に。卷目一ツあるへし。  
一渡りのむすひめの事。手前より男むすひ。次  
を女むすひにする也。十三月の時に十二。十  
二月の時は拾三むすふ也。ゆいめのはし。五  
分宛置て切へし。ふくさもとゆひ也。但長柄  
のこうよりは。水こきをするなり。

一とひの尾付候口の卷目の事。數三卷なり。あ  
まるよりをより合。渡りにむすひ付る也。こ  
うよりハ何も二筋也。

一提包様之事。ゆつり葉。松の葉右同前。卷目  
七ツ。又ハ九ツも有之。松の上に。しやうそ  
く紙あり。

一銚子のとひの尾七寸。たゝみすりのとひの  
尾五寸。同提のとひの尾九寸也。

嫁取座鋪之次第。

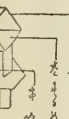
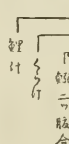
(原本圖有此間  
今隨便宜移置)

一二重のまけ様。下の臺の足二寸。同ふちの高  
サ一寸五分。折鋪一尺一寸。上の臺のこしの  
高サとう返しふちの高サ二寸。折敷一尺五  
分。三方にさま有。同もりやう餅數三枚。あ  
つさ二寸宛。下の餅は折敷のなりに切合。ふ  
ちの高サニ貳枚之餅四方一寸宛。引こませ重  
ぬる也。三枚目のもち。是も四方一寸宛引こ  
ませかさぬる也。上のひらにハ。枝持三重の

二重左



いわし紙二包。中にひたを取。水  
引にてゆひ。頭きやうのせん  
方へなり。



手掛右

松を。中に立。其まわりに。かうし三ツ。生粟三ツ。柿三ツ。いわし二ツ腹合紙に包。中にひたを取。水引にてゆひ。頭の方をきうせんの方へ置也。同昆布二枚見合置也。折敷四ツの角に。こうたてを立て。かうたての手先。何も行合候様に。同ゑひ頭を上へ。串に立。こうたてに添。折敷四ツの角にたつる。上のひけをいにてからみふたゑまわす也。但右の松に。金銀の露を置也。餅の切口には。何もくもやりをゑとり書也。下の餅のまわりにハ。ひめくるみをのりにて。ひらさまをおもてゑつくる也。二枚目の餅のまわりに。かやのミを。ほそき方を上にして。そくいて立る。上の餅のまわりにハ。青大豆を二方に。白大豆を二方にむかわせてつくる。下の臺には、せを敷也。昔は白木。當代は祝言のゑをかき候てもくるしからす也。

一置鳥の臺の事。臺の高サ四寸。長さ壹尺二寸。廣サ六寸。鳥なりに心持をまくる也。同切目に。足を高サ三寸に付。鳥の置やう。臺の内に置。あけをして鳥を高く。いけ鳥のなりに置。口より串を指へし。

一きやうせんの臺ハ。くきやうなり。かわらけに食を盛て。箸の方にかうたてをするなり。食の上にほうしゆのなりに。食をにきり置也。汁は鯉。手先に梅干三ツ。中にくらけ。手無と小鰯二ツ。三方にさま有。右の盛物。何もかわらけ也。

一三ツ盃。是も臺ハくきやう。盃はかわらけ也。但小角にすへ。くきやうに置也。

一手掛まけやうの事。下の臺の足の高サ二寸五分。ふちの高サ一寸五分。折敷の廣さ一尺五分。上の臺のとし六寸五分。同返しふちの高サ壹寸五分。上の折敷一尺。何もふたへか

わなり。同盛物。一小鳥。一卷するめ。一かまほこ。一くしこ。一串蛇。一むすひのし角一ツ。一色の肴にて盛上る也。なりハ杉なり。高さ八寸ほとに。右の六色を六角に盛也。ひはの葉をさし。金銀の露を置也。下の臺にハはせを敷也。

一置鯉の臺之事。魚のなりにして高さ四寸。長さ一尺二寸。廣さ五寸。切目に三寸の足を二所に付る也。何も口傳有也。

### 女中もしつけの事。

一みやつかひあるへき事。何もこしまきをあらてよく候。御酌をとり候事。てうしのゑをかみにてくるみ。右のかた手にて。横にてうしを持つき候也。

一ひさけは。なんしやくに打つゝきてよく御入候。くわへする人。ほんしやくよりとをくあるも。あしく候也。

一くわへ中とき。なん時も左の方へてうしをさしいたしくわへ申候。右へさし出し。くわへ候事あるましく候。よくく心得へし。一御盃ハ。何もかわらけほんにて候。惣別。御女はう衆にかきり申さす。ぬり盃はりやく儀也。

一盃すへ申臺は。くきやうにすへ申候てよく候也。ともに小角にすへて。くきやうおく事もあり。

一上るくの御盃のみ中ときは。左の手をつき。右のかた手にて盃を取。上の御まへるむきいたゝき。御しやくにむかひ。さけをけのみ候て。もちてたつへし。其御盃上へあけよと御申候ハ。よくくしたをふり。そといたゝき。御しやくに渡し申へし。御上るあかり候ときは。兩手をつき。御前へ目を立へし。



一手のつきやう。ゆひさきを我か前へなるやうにつくへし。おとこはゆひさきを向へつくへし。女はわかまへるなり。

ひさのたてやう。一はうのひさをつき候ハハ。一はうをはすへらかし候へは女ハいすまいよく御座候て。常に其心得肝要たるべく也。

一女はう衆は。さかつきいたゝかぬといふせつあれとも。そといたゝき中かよく御入候也。

一いたゝきやう。右の手にて取。いたゝくとき。盃のむかふさかり候やういたゝくへし。一みやつかひ中人。こしまきに手をつき。ひきあけ候心をいたし候か能也。心得へし。

一御しやくもる人。かた手にてうしをもち。ひたりにてハ。くきやうのさまる。手をかけて持候なり。せんする申時も。右の手にてふ

ちをもち。左にて公卿のさまへ。手を入もちて參り。すこしまへかたとに置候て。むかふへおしよする心もちあるべく候。

一くこまいる候事。御かいしやくの人有物也。左の手を御つき候て。そとくこを臺に置ながら。まいり候てよく候。扱御しるをまいり候時ハ。はしを御おき被成。右にてそと取あけて。御すい候て。扱下に御をき。はしを御取候て。しるのみをまいり候てよく候也。

一おかすの事。いつれなりとも。むつかしくなきはしをつけ候てよく候。大かた中のおまはりより。まいりはしめてよく御入候。まるきりなどのたくいをくい候へは。そのあと。はん月なりになり候て。あしき物也。

一二三のしるをまいり候も。以前のこたくも。能々心得へし。

一くこを御つけ候てまいり候事。いくたひも

かさへ御つけ候てよく候。かいしやくの人御いり候時は。かさへわけてまいらせ。又ま  
いりあけ候へは。かさへわけられ。つけ候て  
まいらせ候也。

一御酒すきて。ゆまいり候ときは。はしをとら  
すして。ゆはかり御うけ候て。まいりて能  
候。何も口傳有。

一御しやうはんの事。つかさねにさまをあ  
け申事。四はうは一たんとくらいある御こ  
とにて候。扱三はうもしやうくわんにて候。  
又大かたの人は。二はうも又人より申候て。  
一はうはかりもあけ申。又はいかに御しや  
うはん申内にも。さまあかさるたいにても  
まいり候。同又臺なき御かたも御入候。いつ  
れもまつく此ふんしるしまいらせ候なり  
右之一冊。當家より新田之御臺所に御  
所望ニ付而。被遊遣候寫是也。

小笠原大膳大夫長時

同 右近大夫貞慶

右之冊。當家雖爲御秘事。任御執心應記  
進上候。努々疎早不可有他見者也。

小池甚丞貞成

小口 權介

以東京帝國大學史料編纂部本謄寫以宮内省圖書寮本校  
合畢

# 女房故實一名御産所記

御所さまより御所々々への御うはかき  
の事。

一そのとゞくの御所さまの御心はうたいに。あそはし候と見えし。御おやかたなとへは。誰にても申給へと御入候とみえり。御てうよりも御おやかたにて御入候へとも。上らふりる申給へと御入あそはし候とみえり。この御所へ誰にても申給へと御入候へは。この御所よりは。上らふ申給へと御入候つる。この御所のも御こなにて御入候へは。りるともりるへしとも。あそはしたるとみえり。又よの御所御所よりは。御所さまへは。上らふ御ひろうとあそはし候。御かたゝも御入候ときり。さためてさやうに御ひろうと御入

て。御てうの御名をあそはして。申給へと御いり候はんすると思り。まへゝの御やうたい。さやうに見えり。そうしてハ。御所さまよりは。御おやかたにて御入候はぬにハ。御どうはひにりるへしと御入候はんすることはとおもひり。さたまりたるほかにハ。さきの人。つよくほんそうし候へは。こなたよりも。又ちとおなしことなから心し候やうにかき候。人もしあひてゝにちごはよりり。物にて候。又御所さまの上らふよりは。御所々々の上らふ中らううわかきの事。御所さまのこ上らふより御所々々のこ上らふへは。御なをあそはしてりるへし。御とうはひの事にて候。御なかたち人はり。御入候し。こなたよりもこの心にて候。

一御所々々の上らふより。御ともしうへは

りへしと。とうはいに御入申と。中らう  
よりは申給へ。御所々々の上らふよりほう  
てうしうへは。りと候。ふきやうしゆへ  
は。り。とうほうしゆへは。り。  
御なかよりはほうこうしうへは。とうはい  
りへし。ふきやうしゆへは。おなし心なか  
ら。うわかきのな所か。ちとさかりなとし  
り。上さまの上らふ御なかつち。御所さ  
まのおなし御てうにて候。うわかきもさ  
きを御しつかほとな所あり候。さけてあ  
そはし候は。な所さかり候。そうしては御所  
さまの御おやこしう。御こ御所々々になら  
せられ候ほとに。御所さま御いとうしかり  
の御所の御成し御てうは。みなくしつし  
まいらせられ候御ほんそう御入候。

御こわくこまいりやうの事。

はかまにむねのまほり御かけ候。おり物し

いつゝきぬめし候て。御まへに被參候御は  
んせん御さた候。御所さまなりて御むかひ  
候。御かたくち御ゆの御ひさけをは。こ上ら  
ふたち。大上らふの御そはへまいらせられ  
をかれ候事にて候。又上さまも。御からおり  
物めし候て。御はかまに。むねのまほりを御  
かけ候て。御いりおはしまし候。御まへに上  
さまの上らふこそてに。あこめのきぬめし  
候て。はかまにむねの御まほり御かけ候て。  
おなしやうに。御はんせん御さた候。御所さ  
ま。御上さまも御立候て。のちにあけまいら  
せられし御こわくこのときは。御そはつき  
にても。御なをしにても。御まへはりなんと  
めしくあかり候時の御てなりは。御かくこ  
ともしまいらせ候。御しやうそく御ぬき候  
てのちに。御いわみ七こんまいり候時へ。う  
へのきぬなとみな御ぬき候。

御さんしよの事ども。

一上さまの大上らふをはしめ。御女はうしゆ。御みやつかい候御おひの御いわるには。つねの御所にて。三の御さか月（う）て。御所さま御おひをそとちきに（い）入候ハせのひやうこちきに御たちたひ候。

御はかための事

一御ひとりほうたいにて候ほとに。日はさたまり中さす候。ふきやうハ時々により候。いせのひつちう。大くちひたゝれにて。御はうのよき御かたにならへをき（い）られてよく御入候と申され候へは。成りて御むかひ候。大上らふはゑぬい物めして。むねのまほり御かけ候て。御はかまめして。御かたくちにてくこん被參候へは。つほきりのにて（い）。三の御さか月もまいり候。そきハ御てうしにて候。こ上らふハことにかみを

めし候て。ゑぬい物めし候。御かたくちと御てうしとを。大上らふへまいらせられ候御所さまの御たち候へは。御なりかしらの御人ゑぬい物にはかまめし候てまいり。御かけ候て。下にしかれ候きぬにつゝみて。ひやくさんのはこのふたにすへて御すへ候。御いたし候は。わたへまいり候上さまのハ。そのせきの御うふすなへ（い）ても。御まへにていせう三の御さかつきたひ候て。御ふくたひ候。御すへ候て。御いわるふきやう。三の御さかつきいたゝき。御ふくたひ候いせにハこ上らふ御しやく。ふきやうにハ。御なりかしらたひ候。

一五月五日の御くすこまハ。御所さま上さまへは十二すちつゝのり（い）。上らふたちより御下までハ。九すちにて候。御ひてうハ六すちつゝにて候。

一御所々々なて時ハ。御こし一のたいへより候。御こしよせの中へ御所々々のり入候。かミ／＼のはせて。その御あとやかきへより候のミ／＼くろきかた／＼のこしは。大上らふの上らふ御よせ候。そのしさいは。すいふんの御かた／＼上らふに。被參候によりみな／＼のを御よせ候事にて候。御はんたちのは。そはくちへより候。たゝのねうはうよせ候。つほね／＼へのまれ人は。それ／＼の者もくちへより候。御所の御女はうしゆハ。ことにより候て。御つまなんとへよりしことも／＼。

一ほうたんは。廿のどしまてめし候。  
一こうはいのたくひは。廿八の御としの五月五日までめし候。そうしてしも月の一日より。五月五日のあしたとくまでめし心ほんにて候。おなしくは夏はめし候ましく候。り

やうはう一ませは。こうはいのたくひにて候。

一上らふたちは。かうしまるすゝし一系めし候。御なかたちは。かうしは御めん候へは。すゝしなとは御めん候事もまれに候。

一あやをしろきをめし候人ハ。とき／＼の本のもんをめし候。うすこうはいしろく／＼れなひなんとにそめられ候へは。もんはなにてもくるしからす候。

一廿八よりのちハ。あやもこうはいのたぐいには。そめてハめし候ましく候。むらさきのちになしては成候ましく候。

一かた／＼ぬい物。かた／＼はゝもいつものにて候はねは。とき／＼の木の物を。りやうはうおなしやうに。もんにつけられ候へ。さりなからかた／＼は。ときはのゑやうにて。かた／＼ときの木の物にてもくるしからす



候。

一 正月のきりには。二こそてに一ゑりにめし候。こうはいのたくいめし候人ははたにこうはいのたくいめし候。ねかしもめし候。きりにはひとつくのゑりをそろへて。めし候ましく候。

一 廿まではほうたんめし候ほとは。むねのまほりこんち。

一 廿八まではこうはいのたくいめし候ほとは。

あをち

一 こうはいめしとまりてよりあかち。

正月よりめし物の事。

一 一日あさ。こそてそめ物。ひるの御いわるおり物。

一 二日あさ。こそてなににても。ひるはおり物。

一 三日あさ。こそてなににても。ひるははく

ゑ。

一 七日あさ。こそてなににても。ひるはぬい物。

一 十五日あさ。こそてなににても。ひるはおり物。

一 二月一日。御こそて何ににても。

一 三月一日。御こそて。御もんはもゝつきし二ゑりにめし候。

一 三月三日。御こそてなににてもめし申候。こそて一ゑりにめし候。

一 四月一日。御こそてりうもんのおり物。ほうたんめし候人は。ほうたんのたくひなにしても。

一 五月一日。あさこそて。なににても。こうはいめし候人は。こうはい。ひるはゑぬい物のすゝしこう。

一 五月五日。あしたのこそてなににても。ひる

はすゝしのおり物。すゝしのうらのねりぬきめし候。五月うちはかたひらはめし候はす。御たいさまめし候へは。わたくしにもめし候。

六月一日。あしたはいつれもあかきにても。くろきにても御かたひら。なにゝても御すゝしうらの御こしまき。

一七月一日。いつれもあかきにても。こんち。しろにても御かたひら。

一七月七日。御すゝしうらはなにゝても。

一八月一日。御ねりぬきのすゝしうらにそめつけ。御たいさまハ。ませにすゝきはかり。御もんにつき候。御わたくしには。秋のゝを心々に御つけ候。

一九月一日。ねりうらの御ねもしに。御こそてめし候。なにゝてもめし候。

一九月九日。御そめ物。季のもんをおなしく御

つけり。

一十月一日。あさこそて。なにゝても。ひろおり物。この月はむらさきをほんにめし候。

一十一月一日。なにゝてもめし。こうはいのたぐりめし候人は。こうはいのたぐひほんにめし候。

一十二月一日。なにゝても御心々にめし候。廿六日には。御所々々御さいまつの御れいに成候ときは。ゑぬい物めし候。

つねの御所御かうしの事。

一こ上らふたち。みすをあけ御おろし候。かたまのあした夕さり。御やりとはかりたて。御あけ候みすはまかれしまゝにてをかれ候。御かうしのかきかねは。あしたとく御はし候て。よる御かうしへは。御かけ候御かうしまいり候へは。ほうこうしゆ。その比はきやうこくのいわ山とうみんふちやう

なにて候。

一つねの御所のはきことは。御所さま上さまのこ上らふたち御れんたい。そのほか御くわんすのま。くきやうのま。御ゆとののうへまては。御なかたちはきまいらせ候。

一くわんまいの御うへは。御はゝなりをくはうよりさせまいらせられ候へは。御はくごおほせられ候。かやうの御かたはかくおり物めし候。いつにても。うへさまより御めん候へは。御まくらおしたてゝめし候はぬ身には。御めんと申事は候はす候つる。

一くわんれいの御うへにて。御所へ御まいり候へは。御なかかしらしを御よせ候。

一御なかたちは。すゑの人よせ候。

一御なかたちは。御まいりしたいにて候。

一こ上らふたちにおなし心にて候。

一大夫殿の中のないとう。御しもにて候つる御なかたちにかはる事もなく。みやつかわれ候。く御の御てなかせられ候はぬはかりかちかひ候。御ちやのゆ御あしすましなとせられ候かほんにて候。御しも候はねは。御なかたちもさせられ候へ共。きりはこのふんにて候。ほそ川衆ゑくわんれいの中のおとなしゆは。御しもにて候。

一御ねうはうしゆのなとも。めうせん院殿の御とき御代までふんにて御入候つる。

又はふしん なをさりくはれ候ほごにあせ

なる されに御入申候。しせんなに事

事。 も御きゝありたれと。うつる

そこく まゝ申入候。かやうの御事。

うけ給候ハ、 おほせられ候御たしなみ候

申入候かしく。 事ときごくに思ひ。

一あんやう院殿の御むかひには。せんほう寺

のをきんせんし申さたにて。もとも大上ら

ふになしまいらせられ候れいか候とて。大上らふにて御入候つる。それは御むかひに御入り。御よめいりきしき御ふた候はぬのちにて候つるほどに。御たうくとも御めうせんゐん殿御ふたおやれきくしく御こしらへツ、をかれ候つれとも。よろつの御とゝのへなりかね候て。御所の御もんよりうちから。御たいのしきにて候つる。人のわろくきゝて。御たいに御なり候はぬ身にて。上さまになりまいらせられ候と申候へとも。ほとにかやうにかきて入り。とも。しらぬ物のきゝ候は。ゑ心へ候はぬと申候はんとおかしく候。

一上らふたちは。いつもし人のもしたるうすやうも。御くし御ゆひ候。

くはうへ御入り。御ねうはうしゆの

事。

一ひのとのへハふちむき。三てうとのへはにしむき。からす丸殿ハひかしむき。さんしうのはあふくのこうちせん御はしたう御はくるの身は。たきにて候とも。せん御はくうつに御入候。これは大夫とのへ御うつにて候。くはうより御はくなりとさせまいらせられ候より。御はくご申候。御はくなり候はぬハ。御はくごは申候はす候。

一かみくのこしのよせ人。上さまの御おやこしゆにて候上らふたちは。おそれたと御ぬしくおほせ事候て。大上らふの上らふに。御見せ候へとおほせ事候て。いまにそのふんにて候を。御なかたちかみくはさかりて候ほとに。ゑ御よせ候はぬと御心へ候。御よせ候事か。御なかたちの身には。ほんそうにて候事にて候。

これわかきときかきてをさ候はんをと  
て。よろつほれ候程に。御すもしあらせお  
はしましりりり。かしく。

御所さまの御やうたい。

一御わたましには。三日しろくめしてもをめ  
し候。十五の御としまては。あかきをもめし  
候ほとに。三日御まいり候はす候。御つほね  
にて候。あかくめし候。ほひはあかきを御さ  
た候

御さん所の事。

一上さまの大上らふはしめ。御女はうしゆ。御  
ミやつかひ候。御おひの御いわひには。つね  
の御所にて候。三の御さかつきりりり。御お  
ひとは。御所さまちきにりりられ候へは。御  
さた候。いせのひやうこにちきに御たちた  
ひ候。又ちきにしん上申され候。二おやもち  
ほんに御やくさせまいらせられ候。御あと

つきにハ。御さん所へなり候て。御所さま御  
系なを御つき候。御さん所へはあかくめし  
候。御たんしやう候て。三日はしろくめし候。  
御てかけのたゝもなきは。御所さまの大上  
らふ御おひりりられ候。

御こわく御のまいりやう。

一五日りりりるゝあしたとくは。三の御さか  
つきりりり。しき三こん御てうつの御こわ  
りりりときは。みなあさこそてめし候。はか  
まめし候人は。はかまめし候て。むねのまほ  
り御かけ候。もをめし候御人は。みなをめし  
候。やくしやはかりはかまめし候ほとに。大  
上らふ御なかかしらほんにめし候つる。ひ  
るほとに。ときのくわんれい御りりり。御所  
さま御たいめん候まに。御こわく御はこは  
れ候。御てなかいせ。そのほかとうミやう  
たちにて候。御なかたちやくしやおり物也。

こそて。はかま。むねのまほり御かけ候て。  
きぬをめし候。おり物はねりぬきに。うらは  
あをく候。おもてにハ。くもをちらして。ろ  
くしやうゑをかき候て。ゑやう御心々にて  
候。かみをみたして。御はこひ候て。つねの  
御所の中にはこひをかれ候。大上らふ二こ  
そてにおり物めして。はかまむねのまほり  
御かけ候。おり物のいつゝきぬめして。御ま  
へに御入候て。御はんせん御さた候。御所さ  
まなり候て。御むかひ候。御かたくち御ゆの  
御ひさけをは。こ上らふたち。大上らふの御  
そはへまいらせられ候てをかれ候。又うへ  
さまも御うらおり物めし候て。御はかまに  
むねの御まほり御かけ候て。いらせおはし  
まし候。御まへに上さまの大上らふ。二こそ  
てにあこめのきぬめし候て。はかまにむね  
の御まほり御かけ候て。おなしやうに御は

んせん候。御所さまうへさま御たち候ての  
ちに。あけまいらせられ候。御こわく御の  
ときは。御そはつゝきにても。御なをしにて  
候。御まへはりふんとめし候。あかり候とき  
の御てなか御かくこともし。御しや  
うそく御ぬき候てのちに。御いわる七こん  
まいり候ときは。うへのきぬなとみな御ぬ  
き候。

御はかためのやうたい。

ひやうこにちきに御たちたひ候へは。又ち  
きにしん上候。ふたおやもちほんに御やく  
をさせまいらせられ候。御あつきには。御  
さん所へなり候て。くはうさま御ゑなを御  
つき候。御さん所へは。あかくめし候。御た  
んしやう候て。三日はしろくめし候て。三  
日すき候へは。又あかくめし候。わか君さま  
にて御入候へは。どきのくわんれいより。御



くそく。御ゆみしこうしん上候。ひめ君さま御入候へは。御ねりぬき十かさね。上さまは十かさねうらはしたて物のきぬにて候とさうに候。御こしいたきまいらせられ候人に五かさね。

御はかためのやうたい。

一御ひとりほうたいにて候ほごに。日はさたまり候はす候。ふきやうは時々にかはり候。いせのひつちう。大くちひたゝれにて。御はうのよき御かたにならへをきまいられ候て。よく御入候と申され候得は。なり候て。御むかひ候。大上らふはゑぬい物めし候て。御はかまに御まほり御かけ候て。御かたくちにてくこんをまいらせられ候へは。つほき物にてゐる。三の御さかつきもゐる。それは御てうしにてまいらるゝ。こ上らふはもにかみをめし候て。ゑぬい物をめし候。

御かたくちと御てうしとを。大上らふへゐられ候。御所さま御たち候へは。御なかゝしちの御人。ゑぬい物にはかまめし候て。まほり御かけ候て。したにしかれ候御きぬにつゝみて。ひやくさんのはこのふたに御すゑ候て。御すへへ御いたし候。八わたへゐるとて。御まへにて。いせに三の御さかつきたひ候て。御ふくたひ候。御すへにて御いらいふきやう。三の御さかつきいたゝかれ候て。御ふくたひ候。いせにはこ上らふ御しやく。ふきやうには御なかしらたひ候。

御なりの事。

一正月二日は。ときのくわんれいへなり候。御所さま御しやうそくめし候て。くるまにめし候。上さまは。御むねたてにめし候。御りきしやのきり。御ちきやうなともたれ候て。くわんれいにて御いわるゐる。御女は

うしゆくるま二りやうにて御まいり候。みなく御はかまめし候て。むねのまほり御かけ候。御所さま。上さま。御女はうちちも。やくしやはかり御ともに御まいり候。みなきぬとも御もたせと。五日には御所さまはかり。はたけ山殿へなり候。十日には御ふたねは。御所さまの御女はうしゆも。御まいり候。はす候。

十一日には。御所さまはかり。三ほうゐん殿へなり候。

十一日には。くろき御所々々御れいになり候。ひるハ大りの御しゆ御まいり。上らふすけ殿なかはしくちの人御まいり。御所々々のなり候ときハ。ゑぬい物をめし候。大りの御かたくの御まいり候ときは。おり物をめし候て。しろきはかまにて。七こん御さか

なり。つねの御所に。大りの上らふすけ殿は御入候。なかハしは御ゆとのうへに御入候。くきやうともにてまいり。御なかたちハ。御こしとも御ませ候。御はんせんも御さた候。

十二日には。御所さまはかり。ふゑいへなり候。

十六日には。みなみの御所へ。御ふた御所なり候。上さまへの御ひきいて物。御からおり物三かさねまいり。

廿二日には。御所さまはかり。山な殿へなり候。

廿三日には。御所さまはかり。ほそ川殿へなり候。

廿六日には。しやうれん院殿へなり候。

廿九日には。御ふた御所。ひの殿へなり候。

二月十日にハ。せんほうし殿より。つうけん

しを御かり候て。御ふた御所なしりられ候。

正月十一日には。りはぬ御かたくハ。十六日の御ちやに御り。ミヤくへは上らふたち御はんせん候。とうたうたちハ。御はんたちへは。御なかたち御はんせんを御さた候。いりゑ殿より御ちやのこり。まいりさまには。一色つゝかちて御り。御あけ候ときには。御ちやのこ御けんさんひとつに御あけ候。おり物めし候。したにはゑぬい物みなもをめし候。大上らふハ御いて候て。御みやつかひは候はす候。御さかなはりはて。のちにそご御たいめん候て。かへしり。

御なりのときの御ともの御やうたい。

一大上らふ御ふたりはかり御まいり候。こ上らふは御ひとり。御なりハ三人はかり御ま

いり候。ゑぬい物をめして。おり物御かいとりに御さた候。御かいとりのうへに。むねのまほり御かけ候度はうすちのあふき御もち候。

一はふたんは。廿までめし候ほとは。あふきみなくれない御もち候。

一こうはい。廿までめし候程は。あふきつまつまくれない。

一こうはいをめしとまりては。つまむらさきを御もち候。

御かけまほりの事。

一ほうたんめし候ほとは。こんちあをちのきんらん。いづれもおはたしほう。

一五月五日。御くすたま。御所さま。上さまへは十二すちつゝのかまいり候。上らふたちより御しもまては。九すちにて候。すゑの御ひてうは。六すちつゝにて候。大り。ふしみとの

五りやう殿より大なる御くすたまふ。

わきあけの上らふたちへられ候て。そ  
と御かけ候て。わきあけのほと御かけ候。

一御所々々のなり候ときは。御こしいちのた  
いへより候。こ上らふたち御よせ候。くろき  
かみくもとのやかさへより候。御はん  
たちの。とはくちへより候。つほねくの  
まれ人は。それくの下くちへより候。御所  
の御ねうはうしゆは。ことにより候て。御つ  
まなとへよる計も。

くはうより御ふちの事。大上らふへ  
るふん。

一夏千百疋。あき六百疋。ふゆ廿一くわん。御  
かつかい。月ことに三百疋つゝ。上らふ御つ  
かい被遊人にて候。

こ上らふたちへるふん。

一夏千疋。秋五百疋。冬二千疋。

御かつかい。月ことに十五ツ。

御なかたちへるふん。

一夏九百疋。秋四百疋。ふゆ十九くわん。

御ほつかい月ことに百疋つゝ。御しもへ  
おなしやうに御ごり候つる。

一こうはい廿八までめし候。五月五日のまん  
時までめし候。十一月の一日より五月五日  
までめし候かほんにて候。夏はめし候まし  
く候。くもはくも。こうはいのたくいにもち  
いられ候。りやうはうひとつませも。こうは  
いのたくいにもちいられ候。ひとつませり  
やうはうこうはいそめ。すゝしうらには。も  
ちいられ候はす候。

一正月にはきりには。二こそて一ゑりにめし  
候。こうはいのたくいめし候人は。はたにこ  
うはいのたくいめし候。ねもしもめし候。き  
りにはひとつのゑりをそへてはめし

候ましく候。

大上らふの御つほねすまいの事。

一 うへくちには。たいのまを御つくり候て。す  
すり。ふんたい。みつしのたなを御をき候。

をき物は。をかれほうたいにて候。なかの  
まにハ。ひやうふにちとこかけをして。御な  
かもち。御こそてのたいをかれ候。そはくち  
に。ちやのゆのたな。ふろ。くわんす。色々を  
かれ候。ときのくわんれいの御は。くはう  
へ御まいり候ごきは。一のたいへ御としよ  
り候へは。ともの人のこしは。三のまのすゑ  
つかたのそはくちへより。おりさせ給ひ候  
ても。そはくちにのみいらせ給ひ候。

一 こ上らふたちへは。御身とおなしくあつか  
いられ候。御なかたちへは。大もととはく  
きやうにて候つるか。ちかきほとは。たゝの  
くきやうをも。いられ候へとも。御なかた

ち御心をして御むかい候。御しもへは。あし  
つけにて候。御ひてうには。御けさん候て。  
くわんはたひ候。御むかいにて物なとたひ  
候事は。候はぬ事に候。

一つねの御所のはき事ハ。御所さまのこ上ら  
ふたち御れんたい。そのほか御くわんすの  
ま。御ことのま。くきやうのま。御ゆとのの  
うへまては。御なかたちはきりられ候。

一 御みま御いつま。御むまはきり事。上  
さまの御かたのこ上らふたち御れんたい。  
上さまの御かたの御なかたち。は。こ  
の分にて候。この御むねのうちは。とうほう  
しうは。なににもみやつかハ。いふはす  
候。御ゑんそうは。とうほうしうはきり。  
一 御つへと申事ハ。十五日のあしたとく。さき  
つちやうおもてにて。御らんし候てのち。い  
つもの御所にて。上さまハしめりて。御

ねうはうしうのみきの御かたのうへを。三ツ、そと御うち候。その御つへに御あたり候か。御めんほくにて候。ちとはくをかれ候て。春のゝにいぬなとろくしやうゑにかゝれ候して候。

一みや／＼御所々々おなしく御るいさつになり候へは。みや／＼へ御たいめん／＼られ候てのちに。御所々々へは御けんさん御入候。

一上さま御ともしうには。山とひこ□□□はか。せんしうみかみ。いなはのもり。たちいひんこ。みよし。にしのこほり。みかわのちうてう。さゝきのゑんや。いまた御ともしう候つる。これはしかとおほえたるしうまで候。

御よめいりのとき的事。

一御所さまは。なににてもうへめし候つゝ。上さまかたの御ねうはうしう御まいり候はんする。うい／＼しく候とて。その夜は御みや

つかひ候はす候。そうして上さまの御女はうしうは。うちまかせては。御所さまへは御みやつかひ候はぬ御事。かけ候はゝ御みやつかひ／＼。そのほかはちかひ候事。さのみ候はす候。

一御はんにて御かはらけにて。くこは／＼つる。これかほんにて候。三ねんすきては御こきにて／＼。

一御いはる六ほんたて。しき三こん／＼。かんにやくせられ候へは。三ほうにて候。

一めうせん院殿の御ときは。三てう殿のこ御れう人。しせう院殿上らふにて御入候つか。御むかひも御／＼つるとて候。大上らふの御はんせんにて候はね。御こくにここしらへて／＼。二まではまいり候て。三か／＼はす候。

一御こしははりこしにて／＼。



一ほうけうゐん殿は。八まんへ御ゑんに御なりありたきにて。せんほうちのを。上さまに御もち候。あるましき事にて候とて。めんほくとて。見事のしたてにて候つると存候。

女はういしやうの事。

一おり物のかさねには。ぬい物こうはいなとにて御入候。そめこそてはかさねられ候はす候。おり色はなにゝても御かさねり。こうはいぬきしろ。りやうひとつませは。廿八までめし候。

一くもはくは。十五までめし候。

一はくは。こうはいおりすちのしたにもめし候。

一ぬい物は。おり物のしたならては。へちの物のしたにはめし候はす候。

一いるいすはしゝらうはのへになり候。

一はくぬい物のかいきりとは。かたすそのこ

とにて候。しまにて候はて。をしとをしたる事にて候。これはうへへにめし候。たゝの人はき候はぬ物にて候。

一どをしはくぬい物。これもうへへはかりめし候。ゑさしきしたくの人き候。

一四月にははたと申物めし候。ねもしにはくゑぬい物などにして。うらあかくしてめし候。

一すほたと申は。ねもしにあかうらつきり。そうへつほたんは。十五までめし候へとも。いまちとめし候はんも。御まゝにて候。

一四月一日より二ツゑりにて候。さむく候へは。つゝみてあひにめし候。

一五月五日よりすゝしうらにて候。ねもしにこしまきにて候。ぬい物にても。はくにても。おりすちにとも。御さたり。いつれ

もすゝしうら。こうはいのたくひは。し候はぬものにて候。うらそまり候まゝなり候はす候。かたゝぞめこそて。かたゝはくなとにては。こしまきに御さた候。

一まるすゝしは。うらおもておなしことくにて候へは。こしまきにもしゝう。めしよく候物にて候。

一六月一日より。ゑちこのあかきかたひら。又つしかはなすゝしもめし候。

一八月一日より。ねもしにこしまきにて候。

一九月九日より。ねもしのうへに。そめこそてめし候。あいにはなにゝても。三ゑりにて候。はるごふゆハ。おなしく三ゑりにて候。うへゝは御ゑりいくつ御めし候はんとも。御まゝにて候。

おとこしうのいしやうの事。

一四月一日よりあわせにて候。五月五日より

かたひら九月九日よりあはせ。うへにこそて二ゑりにめし候。ふゆはるこのふんにて候。

一大りの女中しゆは。なつもすゝしうらのねもし。うへの御前へはめし候。又ほそ川とのねうはうしうは。五月五日よりかたひらに。こしまきとみえりう。

一正月二月うちこうはいのたくひは。二ゑりにて候。三月三日よりこうはいのたくい。二ゑりにて候。四月一日よりこうはいのたくい。二ゑりにて候。五月五日までにて候。おなしき日の夕かたの御さかつきより。すゝしうらのねもし。又はまるすゝしにてもめし候。六月。七月。八月。九月八日までは。このふんにて候。

一九月九日の夕かたの御さかつきよりは。すすしうらのねもしにて候。丸すゝしにても。

二ゑりにて候。又十月一日より更衣と申て。  
はりうらのねもし三ゑりにて候。上薦典侍  
殿たちは。あやもめされ候。内々御しもなと  
ハ。あやをはめし候はす候。

一十一月の二はんのうらより。こうはいのた  
くひにて候。三ゑりにて候。又右のまろすゝ  
しも。おり色はなり候はす候。をきもんのた  
くひはくるしからす候。御所の御いしやう。  
大かたこのふんにて候。もしちかひたる事  
も御入候は。かさねてうけ給り候へく候。

右一冊。光照院殿御本申請。令書寫訖。

于時文祿貳年五月十四日 友枕齋

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫以宮内省圖書寮本校  
合畢

續群書類從卷第七百一

武家部四十七

女房進退

女房衆のしつけの事。

物のまいりやう。はしのとりやうの事。まつ  
せんにさしむかひて。はしを右ノ手につま  
みて。せノふちへ引上ケ。下から手を入れてす  
くひ取也。はしのたいごて。ちいさきみゝか  
わらけまへに有。そのたいにすわりたるさ  
きにハ。そのまゝ下から手を入れてすくひ取  
に取也。もとすへあり。右の方ハ。はしのも  
と。左りの方の箸のさきは。すへと心へい

し。ふりかへしなとして。物をくふ事。ゆめ  
ゆめなき事に候。其しさいは。はしのもとす  
へ知らぬといへり。思<sup>ア</sup>ハつまみとり。その取  
やう口傳有。女房衆などもおさあい方へは。  
そのこうけんの人とりていたすなり。また  
そのせんすへた給へ。箸を膳のふちへ引上  
て。さて罷たつ也。さてめしを二くちに二は  
し。三はしくふて。汁を一はし二はしほどく  
ふて。下にはしを置て。右之手に大汁を取上  
てすふて。下におきて。はしをまへノやうに  
すくひ取にとりて。さて手よりよき方を取

てくふ也。ひたりの方之さいなど。やかてはしめなどに取てくふ事。さいこしせんこしとて。なき事ニ候。中もちなりと。手よりよき方を取て。くふ物に候。そうへつ物をくふ時には。くちおとひたひたと高き事いやしき事也。汁なとすふにも。口をと高き事いやしき事に候。汁の中のほねなど取いたし。せんなどにおき候事。いやしき事ニ候。そのまゝ汁の中に置候也。鳥の汁なと有ときにも。ほねなとはりくくとう事なき事に候。おとこなどは。はをとたかく。鳥の汁なとをはくひ候といへり。女房衆なとは。目にたち。みゝにあまり候事。ふしつけ也。そうして女房も男も。人中にてあまりしつけふりして。物しりたても。おかしき事ニ候。物をも人のくうほとくうかよく候。あまりにことうしく。すきたるもおかしき事に候。ふ

しつけなり。さいなごあまたにむさと手をかけ候事。なき事に候。まいりやうはくてんあり。

一二ノ膳をは。その人の右之方にすへ候。それをもみを一はし二はしほとくうて。箸を下に置て。右ノ手に取上。汁をすう物ニ候。これまたひくく汁をすふ事。わかき人なとはなき事ニ候。としよりたる衆はくるしからす候。二膳のさいなとも。手よりよきかたを取て。くう物に候。まいりやうなを口傳あり。一三ノ膳など。つねのやうに。その人のひたりの方にすへ候事も有。されとも本しきには。二膳のむかひニすへ候。是は左り方は膳こし也。膳こしをは取也。御まいりなき事ニ候。そのしさい右ノ方に一さうにすへ候。また事によりて。ひたりの方には御手かけなとまいる。又汁つけなをとりかへて。本膳の

めしを。御くきやうなとにすへておき候。さて汁かけのめしなど。ほんせんにすべ候。これはときのやうたい也。よめ取。又ハ祝儀なとにすへめしとて。左りの方に。へちにめしまいるなり。又候汁かけめしなとも有也。そのときには。ほんせんノめしを。御まいりなき物に候。まいりやう色々口傳あり。

一やき物などのまいりやうの事。はれかましき處にては。我とむしりなとして。くう事なき事に候。こうけんの人。むしりて參らせ候ときに。さて取てくう物に候。そうへつはれかましき所にては。くう事なき事に候。わかき人などは。猶以の事に候。ほんしきにハ。きりやき物ほん也。それをうちやき物といへり。一ひきとあるやき物をハ。しきしやうにはなき事ニ候。一ひきもあるやき物をは。せんのまる物といへり。參りやう口傳あ

り。

一かまほこなとの參りやうの事。そうして手に取上なとして。とりてくう事なき事に候。こうけんの人。箸にとりはなして。やかてそのいたの上におきて參らせ候。さてはしにはさみとりて御まいり候。かまほこも上下にあるとき。そのこうけんの人しようあり。女房衆ハ。おいたといへり。おとこはかまほこといへり。まいらせやうに口傳あり。

一さしみなど。むさとやかて取てくう事。なきことに候。こうけんの人。手もとへ取ておき候時には。くう物に候。參りやうに口傳あり。一さいしんの汁なと參るときにも。大汁。小汁。又は三ノ汁なとも。我と取ていたす事なき事に候。かよひノ人とする物に候。おきし時にも其分也。我と取て出す事なき事に候。一女はう衆に看取て參らせやうの事。ひたり



の手を下につきて。右之手にはしにはさみて。さていたす物に候。右之手に御取候やうにまいらせ候なり。

一女房衆。さかな取やうの事。右之手にとる物に候。大ゆひと人さしゆひと。二ツにつまみて御とり候かよく候。ひとりの手に取事なき事に候。然共。右之手にさかつきもつときには。ひとりの手にも取物にて候。取やうに口傳あり。

一女房衆盃參らせ様の事。御前に御膳御肴有時に。御前の右之方ニ置候。さかな御せんとなき時には。御まへノまん中におき候也。そうへつ。男衆も女ほう衆も。御まへの右之方へまいらせて候。然共。其座敷の所によりて。ひとりの方へも參らせ候。

一女はう衆。さかつき取様の事。右之手に取物に候。ひとりなとに取事あやまりなり。

一女はう衆しやくの取やうの事。右之手にてうしのほしと。せめとの間を。右之手の大ゆひの上にあるやうに。銚子のさきの右之かたへなるやうに。なかへのおりめたゝみすりのひとりのかたへなるやうに持て。ひとりの手を。下につきて。さて取物に候。さかつきとらせ申ときには。おさあい御方には。御くきやうをはら上てとらせ申候。いつかうおさあいかたには。さかつきに酒をうけて參らせ候。くわへさけをいたし候時には。右之方へなりとも。ひとりのかたへ成共。すこしそはむきてくわへ候ときには。さてうしを下におきて。ひとりの手を。下につきてくわへ候。そうへつ。祝儀之ときには。ひとりの方ニくわへある物に候。たちさりなとしてくわへ候事。ゆめくゝなき事ニ候。そのくわへてうしする人。たちくわへ

候。さりなから。なによりさしきなどの躰により。そのしやくたちて。くわへ候事ほんしきには。なき事に候。そのしやくの取やうにくてんあり。

一くわへさけ取やうの事。ほんしきには。そのしやくのひたりの方にあるかよく候。くわへ候ときに。ひたりの手を下につきて。つるかけのきわを取。さけてくわへ候。くわへはたちてくわへ候かよく候。そうへつ。三ツさかつきにハ。くわへハなき物に候。さりなから。くわへ酒をはいたす物に候。そへかわらけとて。かわらけ參候。とふらひの□時にも。くわへはなき物に候。さりなから。くわへをは出物に。とふらひなどには。しうきなどのやうに。三こんハなき事に候。とうせいハ。とふらいにも。三こんくわへいつかうなき事に候。祝儀どうれいとハちかひ候

也。

一よめ取むこ取なとにハ。しやくなどたちさりて。くわへ酒いたし候事なき事に候。そのしやくのひたりの方へ。くわへ酒する人たちよりてくわへ候。そうへつ。よめとりむことりにハ。しやくにもくわへもむすひ候。しやくはかりむすひ候事ハ。かたむすひ也。くわへする人。ふたりむすひ候かよく候。それをハ。もろむすひといへり。そのむすひやうニ。くてんあり。つねのときにハ。むすひ候事なき事に候。然共。くるしからす候。あひへつりくのときには。わかれしやくとて。取やうあり。

一女はう衆などしやくのときに。おごと衆酒を請候とき。さかつきをいかにもひきくさけて請候かよく候。たかく上て請候事ハ。なき事に候。その男ふしつけ也。男のしやくに

ハ。上へあけ候事なき事に候。又ハラうせき也。そのうけやう。くわへやうにくてんあり。

一 おとこ衆しやくにも。女はう衆のしやくにも。さかつきへ酒をいるゝほとらいの事。ひるは酒を九ふんニ入候。よるは八分にいる也。あまりにうへゝたり候事。ぶしつけなり。酒の請やう。しやくの取やう猶口傳有。

一 よるのさかつき酒の請やうの事。酒をうけて。我かけをうつしてのむどいへり。女房衆も男も。同じ事に候。これにはしさいあり。

一女はう衆ノしやくの請取渡しやうの事。渡すときには。てうしを下ニ置てわたし候。ちきに手に渡し候方なき事に候。わたしやうに上中下有。猶口傳あり。

一 てうしの請取やうの事。そのまゝたちより

て請取候也。

一 ひさけ渡しやうの事。是も下におきてわたし候なり。又はしきに手に渡し候事有。その渡しやうにくてんあり。

一 酒の請取やうの事。是もそのまゝ請取也。請取渡しに口傳有。

一 公家武家のたいの次第の事。公家方にハ四方れいし。武家方には三方れいし也。さる間。おし出し御くきやうなと。前三方といへり。その御くらいにもなき衆ハ。一方れいし也。臺には上中下有。

一 公家武家共に。膳のあけやうの事。本膳。二ノ膳ノときには。本膳をあけて。扱二ノ膳をあけ候。くけふけともに。そのふん也。又ハ三ノ膳のときには。ふけかたには本膳あけて。扱二ノ膳あけて。三ノ膳あけ候。一二三とあけ候。くけかたにハ。三二一とあけ候。

今ハ公家方よきとて。三ノ膳より五ノせん。  
七ノせんときにも。そのふんに候。女はう衆  
おとこ衆も。其分に候。七ノ膳すへ候とき  
も。女はう膳をは。たいのさきへひたりの手  
を人。右の手に臺のふちをもつなり。すへや  
うくてんあり。

一くけかたには。あさ御たい。ゆふ御たいとい  
へり。これハおとこ衆の事也。女はう衆ハ。  
あさく五。夕く五と仰候。武家方にハ。あさ  
めし。ゆふめしと。おとこ衆はいふ。くてん  
あり。

一さいをは。女はう衆ハおかすといへり。男衆  
ハ御くそくといへり。

一くけふけともに。くらゐある御かたへまい  
るをは。めしをも。さいをも。汁をも。酒を  
も。御ちやをもまいるほと物の物を。めしとい  
へり。是か□うめしなり。くらゐなき人はい

ふへからす。

一女はう衆もおとこ衆も。もちなどまいりや  
うの事。一くちくふて下におき候事。なき事  
也。そのしさいハ。一口くへは三ヶ月なり  
に。はのあとかありて。さたのかきりいやし  
き事に候。二くちなとは。くうておき候。ら  
うにやくなん女ともに。其御心得へく候。そ  
うへつ人は物のくいやうをもつて。人のし  
つけか見へ候物に候。

一女はう衆もおとこ衆も。うりのはうちやく  
の事。ほ。そのかたより。ひたりのかたへ。し  
ゆんに六ツはん。七ツにかわをむき候。六月  
みな月より七月のたなはた迄ハ。わきりに  
するなり。そのうちハ。二ツにわりてきる  
也。又今川殿の家のりうには。はつ瓜のとき  
には。はなのちくのかたよりむき候。すへノ  
ふりのときには。ほ。そのかたよりむくとい

へり。これもおもしろく候。今は皆。ほその  
かたよりむき候事は。しさひあり。六かく殿  
ノ家ノりうにハ。八かくにむくといへり。は  
つふりなとのときには。其さしきの人かす  
ほとにきり候物なり。

一柿のかわのむきやうの事。こねりのかきを  
は。へたかたまるむきにして。こしに刀めを  
付て。さて參らせ候。つねの柿をは。二つわ  
りて。かうノかたよりかわをむきて。こしに  
刀めを付て參らせ候。しゆつちんのかとい  
てのときにハ。こしにかたなめを。よこ刀と  
ていむ也。つわりたるしゆくしなとをは。へ  
たノかたをぬきて。へたの方よりすうとい  
へり。

一女はう衆などは。くらゐなく其。其男のくら  
ゐほとに。しやうくはんする物に候。さかつ  
きなとも。其たいやうほとのかかつきをは。

いたゝき候はす候。そのしうほとのからゐ  
有ほとのかかつきをいたゝき候。

一四きのいしやうの事。大かたぬきのきにし  
て參らせん。三月三日のせくにハ。らうにや  
くなん女共に。こそてをめし候。小袖のもん  
に。花もゝを繪にかきたるそめこそてなり。  
昔は女はう衆は。綾の小袖うすかうはいに。  
桃の花色に染てめす也。その綾文には。はな  
もゝをおり付たるあやなり。せつくはいつ  
れもそめこそてなり。三月の晦日迄。らうに  
やくなんによ。ともに。綿入の小袖着るなり。  
一四月朔日よりらうにやくなん女共に。あわ  
せをのし候。綿ぬきとて裕をめす。男ハ櫛裕  
をめす也。やなきハ夏の初めなり。五月四日  
迄。おとこおんなあわせをめす也。五月のせ  
つくよりらうにやく男女共に。しやうふか  
たひらとて。そめかたひらをめす也。かたひ

らのもんには。ゑもきしやうふつけたる帷子也。あかき帷子などは。五月五日にはめさす候。

一 九月朔日より八日まで。老若男女共ニ。あわせをめす也。おとこはくちはの 衿を本にめすなり。そのしさいは。くちはへこうやうをへうし。秋のころなり。

一 物九日のせつくからは。老若男女ともに。そめこそめし候。本にて候。其染小袖の文には。菊紅葉菊かさねを繪にかきたるそめこそて也。御祝儀などもさま／＼可有。

一 十月御いのこには。らうにやくなん女ともに。紫の染小袖本にて候。十二月四季のやうたい。又はいしやうのやうたい様々有。大方ぬき事にて候。

一 女房衆のめすうわきのやうたいの事。おり物。おり筋。ぬいはく。くもはくなどをめし

候。其上きの時には。綿を入すあわせにしてめし候。わたの入たのはめし候はす候。衿にて候。

### 一行欠

いかにけつかう成共。小袖へうわきにはきぬ物にて候。かたおりなども。しうき。よめいりなどにはめさす候。綾の小袖などは。うすかうはいにそめたるは。うわきにもめし候。またへにのかうはいなどもめし候。おりすしなども。しゝらは。たゝのおり筋よりはさかり候。いためを本にしやうくはんにめすなり。なつのかたひらのこしまきにも。おりすし。おり物。はくゑ。くもはく。ぬい物。おりかうはい。ぬき白。うすたて。しろくれなひ。又はねりなども。こしまきにする物に候。そのこし巻のときにもあわせ也。そめこそてなど。こしまきにする事なき事に候。か



へきのねりなどは。からをねらす。すゝしにして付る。ねりたるは付候はす候。

一夏のかたひらなとも。すゝしのかたひらを。六月朔日よりまへにはめさす候。男もさいみせすりこわりちゝみなとのかたひら。又はくりむめなとも。六月一日よりまへにはめし候はす候。らうにやくなん女共ニ。かたひらも身のまきたるうすきかたひらめす事らうせき也。身か見えすきて。さたのかきり見苦しき物に候。女はう衆なとは。色くろくなる物に候。

一かたひら上ノ帶の事。すゝしのおひをするか本にて候。ねりの帶など。かたひらの上にする事なき事に候。又小袖ノ上に。すゝしのおひなとする事なき事に候。小袖の上には。練之帶本にて候。

一緋の白きあわせなとも。くらなるなき衆は。な

ん女共に。しんしやくあり。ねりもきぬも。うらをあかくそめたるあわせをは。ほたんの裕といへり。又ハうすわたなど入たるは。ほたんこそてといふ。女はう衆にかきらす。わか衆おちこなともめす物に候。又はきぬのしほりのあわせとて。女はう衆もあり。きぬのあわせとて。袖口をしほりたるをいへり。是はしさいあり。今ときの人。おさあひ人などに。くちはなどのいろなきあわせなとめし候事。ためしにもなき事に候。おさあいかたなどには。あわせのはきには。うすかうはい。ぬきしろ。うすたて。しろくれな。きねりなとかよく候。もごよりねりなとめすなり。そうへつ。ねりをは十五のけんふくまでめし候かほん也。十六からめさすおとこかつしき。女はうかつしきなとこそは。あかき物をそうしてめさする。是はくち

は。柳色。ひわ。もへきめし候。いまときは。かつしきにあかき物きせ申事。一かうなき事に候。おとも女はう衆も。そのとし比めす色あり。あまりにことおゝき間。しるしかたし。大かたかくのふんなり。

一ひくに。またおとこかつしき。女はうかつしきなども。こしの通りに。すこししもをつまみて。ぬい上をしてめす也。これかしやうくわんの心なり。又はしつけなり。そうへつ。もんかたなども。その時分にあいたるかよく候。おとこかつしきなどは。夏のかたひらの上に。こしにくんといふ物をまき候。くれないの糸をさけ候。これははかまをめす心なり。

一女はう衆男衆も。小袖。袴。帷子などのたゝみやうの事。袖を我ひたりの手にもちて。たたみるなり。うわかいになるやうにあり。右

手にもちて。たゝみ候ときは。下かいか上になるやうに候。うれへのときには。右ノ手に袖口を持てたゝみ候。下かいか上へ成不苦也。かたきぬすわふなと其分也。人に出す時も。其分也。たゝみやう口傳有。

一物のめじやうの事。女はうもおとこも三ツゑりにも物をめす事あり。男などハ三ツゑりなとにめす事なきことに候。おちこ若衆などは。三ツゑりにめし候やう有。口傳あり。

一よるの物。綿をつまつして。ひきのはして入候上へ。下につみたる綿をひき入候也。そうして綿をつみて入候はす候。五十はも百はも引のはして入候。こしらへやうにくてん有。これは大よるの物のこと也。こよる物たたみやう。つねのこそてにはかわり候也。あまりにことおゝき間。ぬきのきなり。猶く

てん有。

一きぬなと人に渡すときには。一ひきなとを  
は。よこ口物にすへていたし候。二疋。三疋  
までも其分也。五疋。十疋。二十疋は。たてき  
ぬに緋のまきくちを。人のまへにわたし候。  
一いたの物をは。杉原につゝみて。水引にてゆ  
いて。板物の臺とて。ひの木のたいにあしを  
つけて。扱それにすへて渡し候。そのとき  
は。よこいたにおき候なり。

一布なとも一端二端なとは。よこさまにもお  
きて。十二十の時にも。まき目を見せて。物  
にすへて渡すなり。是も上かたには。ひの木  
のたいにすへいたすなり。

一人の御そんしありたる事なれ共。もしあや  
まりも有物也。伊勢殿の書物にもあり。緋を  
ハ一疋二疋といへり。又は女はうなどは。一  
卷。二まき。十まき。二十卷といへり。

一いたの物をは。一たん二たんといへり。女は  
う衆は。一ツ二ツといへり。

一布をは。これも一たん二たんといへり。女は  
う衆は。一ツ。二ツといへり。

一綿なと人に渡すにハ。十把二把なといたす  
には。ひろふたなとにすへて出るときには。  
はさきの方を。人ノかたへいたし候也。

一すきはらなとを人にいたすに。杉原を一帖  
ツ、右ひたりから引合て。さて十帖かさね  
て。杉原八枚。又は六枚たけにても。よこつ  
きて。扱四ツにおりて。おひにして。杉はら  
のたいとて。こしらへて。人に出すときに  
は。帯のむすひたるわなの方へわたす也。文  
などに書候時にハ。拾帖貳拾てうとかき候。  
おとこなとも其分也。さかりたる所へハ。壹  
束二そくとかくへき也。かきやう又ハこし  
らへやうくてんあり。

一中おりなとも。二束三そく迄ハ。貳拾てう三拾帖なとゝいへり。そのほかは。四束。五そく。拾束。二十そくといへり。壹さをといふ事。あき人のいふことはなり。

一とりの子などは一てう二てう。又ハ壹束なとゝいふ事なき事に候。一枚。貳拾枚。百枚なとゝいへり。

一たんし。みきやうしよなとも。拾てう。貳拾帖といへり。引合なとは。五拾枚。百枚なとゝいへり。

一おひを人にいたすときには。一たけとは。八筋をいふ。一えたとは。拾すしをいふ。一すちなと人に出すにハ。つゝみ候とき。ひたを一ツとり候なり。二すち。三すちその以後は。ひたを二ツ取也。いまの帶のむすひやう。帶のきりめを見せぬやうにむすひ候也。口傳あり。

一たいめいなと。くけふけともに。其くらゐある人のめし候物をは。小袖も。袴も。かたひらも。かたきぬも。すわふも。はかまもめす程のを。御ふくといへり。是かそうめう也。下々をさやうニはいふへからす。

一御てうすのときの御手ぬくひのなかさの事。三しやく二寸ニするといへり。しさいあり。人のかたちは三十二さう有。それをかた取て。三尺二寸にする也。御手ぬくひにかけて。御まへの右之方ニ置候。御手ぬくひかけなき時には。其御てうす參らせ候ひたりの方のかたに。二重にかけて。布のきりめのかたを。我まへの方にして參らせ候ときには。ひたりのかたをさし出しとらせ巾。てうすかけやうの事。かけきゝすゆたんなくかけ候也。其かけやう有。

一おとこのあせぬくひなども。しゆんしやく

の事。四はんなり。其たゝみやうの事。四方のはしを。内へおりこみてたゝみ候。布のきり目の人に見せぬ事也。あふきなどにすへて出し候。又ハはこのふたなごにもすへて出し候。あふきにすへていたし候ときも。あふきのおりて口すへて參らせ候。あふきのさを。人のかたへむかへゝからす。いむしさひ有。ちこそはめて出す也。

一てうすをは。おしくかけへし。あしのゆをすこし取といへり。

一女はう衆も男衆も。あまり取つくろいたるもらうせき也。人かすならぬ身にてなき事に候。又はむさゝとあるもらうせき也。其ちふんほとゝいにあひたるかよき也。

一女房衆。手はこのふたをは。うつふけておき候かほんにて。女はう衆の手箱のふたの上にはかさり有。其しさひニうつむけて置候。

一人のまへへ硯れうし參らせやうの事。ひつたいの下に。れうしを置いて持て出る也。れうしのきり目の方のむかいのひたりの方へ咸やうに。おきて出す也。さて下におき候とき。れうしをむかひのひたりの方へ。引出して置いて。さてたちのき。ふたを取て。其人の右の方へ。あをのけて置候。ふたを取て見るに。さかさま成事あらは。もとのやうに。ふたをしたまひて。置なをして參らせ候。もし墨なとすり候へと仰候ときにハ。硯を其ま置て。さかさまに墨をするかよく候。取なをしてすり候事らうせき也。され共。取なをしてすり候へとあるときにハ。なをしてする也。すりやうにくてんあり。れうしを硯箱の上に置いて出す事不吉也。そのしさいには。男などは。くひのちうもんを書時。又はきしやうもんなど書候時には。ひつたいの上

れうし置候。女はうはとふらひ文などかき候とき。ひつたいの上に。れうしおきて參らせ候。置やうに口傳有。

一女はうのふみのかきやう。すみのすりやう。筆のそめやう之事。まつすみのりやうのかしらよりするといへり。りやうのかしらより。水をうつすといふ心なり。しうき。きたうのときには。れうのをのかたよりするといへり。そのすりやうは。硯のうみの中より。水をすみをもつ也。すり上て。三度すり上て。ひたりの方へ。しゆんにのもし成に。手をうけて。いかにも靜にする也。物のたとへは。すみはかきにすらせよといへり。墨すりくち。ひつまさるやうにするなり。

一筆のそめやうの事。筆を硯のうみの中に。よくとはりしてつかう物也。口などにかむ事。ゆめ／＼なき事に候。

一筆にも祝儀などにハ。しろちく筆かほんにて候。しろちくはひるかほんなり。くろちくはよるの筆也。そめやうニ口傳有。

一物のかきやうの事。まへのやうにすみをすり。筆をそめて。さて物をかき候。れうしひたりのかたのひさを。上に置てかき候。不吉なる事。又ハとふらひ文のときは。右のひさの上置てかき候。

一女はう衆のふみの書やうの事。うやまふかたへハ。、、申させたまへとかき候か。うやまふやうなり。一たんどやまうかたへハ。ひろうかきとて。其御ちの人。御女はう衆。宮つかひ中にもはしりまい候。女はう衆の御名を書て。、人々御中なともかき候。またおなし事なから。御返事とかきたるは。さけたる心にて候。まいらせ候と計かきて。其なをかゝす候。我より下なるへし。こ



なたの名前。いつくよりとかくは。うやまわぬ人のもとへの文なり。又ふみのうわまきの事。かみ二枚をふたへにとりてつゝむは。しやうくわんなり。一枚はさけたる事也。ひねりめにすみを付て。なか／＼と一すち引事あり。とをき處への文には。上かきに月口をかくへし。たてかみの上下をなしほとにするなり。うやまふかたへは。めしつかいは御女はう衆。なをたれ殿と書へし。文のとめはも。御心へ候て。申させたまへと書候也。又は御心返候て。可被申入候とかき候也。あなかし／＼書文にて。そうへつ。女はう衆へは。しやうくわんかき候。かへり事。又おとこ衆の方へは。女はう衆のかたへのもんこんにハ。いかにもすく／＼とおとこのと葉を書候。□□候。又けしやうふみなとは。たゞつねのことはかよく候。人により

て。ふるうたなとのことはぬすみ取。はし／＼をはこど／＼しからす書付候へし。うたなとちらしかきなとかき候。うたことはにつ／＼けて。いつくうたやらんと見えぬやうにもかき候。そうへつ。女はう衆。男衆もれうし四きにより候。春は梅かさね。夏はあやめとりのうすやう。秋はもみちかさね。冬は松かさね。大引合にふか／＼と帶をしてもち給へし。又は伊勢物語のことはをかき候也。れうしなとわるきには。うやまふかたへかき候事らうせき也。又我くらゐをも。さけたる心也。いやしき方へやる共。我くらゐはとのれうしに書候也。そうへつ。上書上中下有。あかりたる方へは。上ケて書候。中はそのかたへは。少さけて書候。さかりたるかたへは。いかにもさけて書候。しやうくわんのかたへは。すみうすくかき候か

しやうくわん也。さかりたるかたへは。すみこくそのなにく書候なり。我なをもしやうくわんのかたへかき候ニハ。ふどくこくろく書候。あなたさかりたるかたへふ。我なをすみうすく書候也。又女はう衆より。おとこ衆へふみを御やり候にも。いかにもいかにもすすくとしたるふんしやうなとは。書候は。なまけたるふんしやうなとは。書事人のふしん有かきよ文なとは。申におよはす候。おとこ衆より女房衆へは。おとこのふんしやうを。かなに書候へく。又字をましてもかき候へく。男衆の文ニかなをまてかき候事らうせき也。文の上つゝみ。ふうしやう。女はう衆は色水引也。おちこ若衆なとおなし事に候。おとこはしるきふうしをもつてゆい候。又ふみなどのはしをせはきもいやしき物也。あまりひろきもらうせき

也。およそ二寸八分。又ハ三寸計よく候。又文のおくをおる事。三きやうほうらへおる也。三きやうハ三くたり也。一きやうおりて。一おりまき候。こしふみなとふうしとも。しやうくわんのかたへは。さし上てふうし候。さかりたる方へは。さけてふうし候。すみひくも二すち引は。しやうくわんの方へ□□□。さかりたる方へ二すち引也。女はう衆おとこ衆も。ごふらひ文なとは。かへり事なき事に候。ふうしめにすみを引事。ゆめ／＼なき事に候。はしかきもなき事に候。それハ事によりてかき候事も有候。よめ入。むこ取なとの所へ書候も。かきやうあり。かへり事やかて／＼又候なかく書候事ハ。なき事に候。かきやうにならひあり。おとこ衆。女房衆も。ふみの字かしら上にかき候事らうせき也。あまり上りたるも見くるしく

候。其れうしのほとらいよく候。とりのし引合などは。しやうくわんなり。是は大かたぬきかき候。惣別。かやうの御事ハ。そうてんなくてハ。御心へゆきかたし。さりながら。御こころへ候やうにかき候。

一女はう衆。男衆。つめのきりやうの事。つめは取どいふ也。女はうは右之手のくすりゆひより取。さて後。こゆひ取候也。ひたりもおなし事に候。おとこはひたりのくすりゆひより取て。おさめに小ゆひとり巾也。右之かたもおなし事に候。女はうもおとこも。右ひたりのあしの爪のきりやう。おなし事ニ候。惣別。正月六日の日きり候へは。十二ヶ月なから。何ときもきる也。手足の爪ハ。一度ニきる事なき事に候。是は公家武家のさた也。猶口傳あり。

一ちんへたつおとこのくそくなと。こしらへ

候とき。我物さしにあてかいて。かいたつ事不吉なり。しさい有。其人の物さしをかりてする也。口傳有。

みつしたなのかさり物之事。

一上の重に手箱。二番に火取ちんはこ。きやうしとし香はし。はいおしそへてあるへし。

一たき物のつほ。盆にすわるへし。何のほんにてもくるしからす。

一わきにたんさく箱。同しく文箱。

一下の重に。硯箱。引合。うすやう。硯箱の上にああるましく候。杉原。うすやう。ふうしあるへし。水引つゝみハ。雨にならへてわきにあるへし。

くろたなのかさり物之事。

一上の重に。はらひ箱。二重ニ墨。あかもとゆひ。はこわきの重に。おはくるはこ。わたし。くれないうすやうにつゝみて。

一下ノ重に。やわ／＼のかみ。ふうしあるへし。つねに御つかひ候硯もあるへし。

一とこにりやうし箱。はらいはと。とこのたなのわきに。小袖の臺二ツ。一ツハどのい物。壹ツは小袖。そのそは。かいおけ。はんさう。たらいあるへし。

以東京帝國大學史料編纂部本謄寫校合畢

## 女房筆法

女房文かきやう。

一 おとこのかたより女房衆へまゐらせ候文。いつれの御方へも。まゐる申給へとかく事。うやまふ事なり。もんこんは。あひはからい。こは／＼しからぬやうにしたゝめへく候。女房ことはをかくへからす。ものをしらぬ人は。女房衆へまゐらせ候とて。女房ことはをかき候。おかしき事ニ而候。入候上かきには。上中下あるへし。たとへは。

一 まゐる 人々申給へ。

二 人々申給へ。

三 まゐる申給へ。

四 まゐる 〆 給へし。

五 まゐるへし。

六  
まある。

七  
まゐらせ候。

ほうちやうさまより二いろはいりやう  
いたし候。まことに御ねんころのいた  
り。かしこまりそんし候。ことにとう  
とうおほしめしより候て。下され候事。  
一たんしうちやくのいたりにまゐらせ  
候。いかにもく御ことはをそへられ  
候て。御申にあつかるへく候よし申給  
へ。

いせのかみ

さた陸

むかしよりかくのことくもんこん御文  
候うへは。これにて御こゝろへあるへ  
く候。

一わかなをは。上のしをかな。下をまなにかく  
へし。みやうしくわんをも。かなをませて。

これをかくへし。なをこゝろへとも。御入こ  
とまゐらせ候。

一わきつけなくのとめやうは。御女房衆より  
おとこのかたへつかはされ候文にも。又御  
女房衆と。たかひに御とりかはし候文にも。  
おなし事たるへく候。たかひのくる<sup>ら</sup>した  
ひに。御はからる候てあそはし候へく候。  
一ふみの上まきの事。二枚を用へし。一枚をた  
りてもちゆる事はりやくきなり。ひねりめ  
に。すみをなかくこ二すちひくへし。又ゑ  
んしよへの文には。上まきのうらに。月日を  
ちいさくかくへし。たてかみの上下を。おな  
しほどにするなり。まき文のおく三行折て。  
おるにつきに一行をおもてへおるへきな  
り。ことなるれいきあるへからず。なのりの  
上のしかなに。下のしはまなにかくへし。み  
やうしも。かなにまなをませてかくなり。ま

た女房のかたへも。うやまひ候にハ。めしつかはれ候御女房のなを。たれとのへとかきて。申給へとかくへし。とめところは御ころえ候て。申給へとも。又御ころへ候て。申入られ候へくとも候て。あなかしこともとめ侍へし。そうして。女房衆へは。しやうくわん候て。もんこんいかにも。すく／＼

とおとこのことはをかくへし。またちこわかしゆなとへのけしやうふみにハ。たゝよのつねのことは能候。又人によりて。古歌のことはをぬすみ。こはくしからぬやうにも。かきつゝけるへし。あるひはうたなとも。ちらしかきにかき。又うたをことはにつけて。いつく歌やらん見えぬやうにもかくへし。れうしは。しきによりて。はるはむめかさね。なつあやめみとりのうすやう。あきはもみちかさね。ふゆはまつかさね。また

ひきあハセなとは。ふか／＼にほひをし候てもちゆへし。けんしものかたりに。みちのくのえならぬなと侍は。當時のひきあわせの事といへり。またふみのふうしやうのかやうに。ふうしめにすみをつくへし。文のやうにふうすへし。文のうはかきの方に。すみをつくへし。

一大上らう小上らうへのふみ。いつれも御女房衆へのあてところたるへし。色々まゐる申給へ。かやうにもあるへし。又中らう衆へは。春日殿へまゐる申給へ。春日御局へまゐる申給へ。かくのこくあるへし。春日殿へは中らうかしらにて御さ候間。此ふんにて候。そのほかの中らふへは。中しやうの御局へ申給へとあるへし。

一ちらしかきは。ちらしやうむつかしく御入候まゝ。かやうなるかき物にては。しるしわ



けかたく候。

一かしらにおかざる文字の事は。そ。に。り。  
かたくさへしも。又おにすへさるしの事。  
ほ。と。こ。わ。か。糸。たつな。ら。そさしこれ  
なり。かならずすへさるにはあらされとも。  
あしくかきぬれは。みにくきあひた。これを  
きらふへし。あなかちにかたくしもならん  
しきにはす。うたの五もしには。かならずか  
くましきにや。七もしのかしらなとには。き  
らふへからさるなり。

もくろくとゝのへやうの事。

しん上。

かん 二。

たい 一おり。

にし 一おり。

御たる 十か。

以上

たい。ふな。こいなさは。  
かすもおほく候て。見だ  
てもよく候て。かすをか  
くへし。たいふなは。十  
より上は。十まいご。ま  
いの字をかきて。まよし。

いせう京すけ

さた遠

一かなもくろくかくのことし。御たいさまな  
とへは。かやうにあるへし。

しん上。

御折 十かう。

御たる 十か。

以上。

一女中かたよりさるかくなとへつかはさるゝ  
おりかみは。千ひき万ひきとかみの中にあ  
るへし。

千ひき

万ひき

しん上。

からいと 五十きん。くれなる。

おり色 十たん。

杉はら 三十てう。

以上。

いせのう京のすけ

さた遠

いしやうかはりの事。

いしやうのかはり候しせつの事。三月中ハあわせにうすこそて。四月ついたちよりあわせをき候なり。いろのあわせならは。ゑりそてをしほるへし。いろはなにいろもくるしからす。これはてん中への事なり。わたくしにては。ゑりそてをしほらぬもくるしからす。たゝしそれもきとしたる時は。いかゝとさな候し。またしろきぬのあわせほんなり。たゝし。くはうさまにめされ候あひた。しんしやくあるへしとも申候もみくは。

をりいろはなく候つる。きぬをいろくにそめてき候つる。それはゑりそてしほらす候。五月四日まではあわせ。五日よりおとこ衆ハかたひら。女中衆は。てん中にはすゝしうらのねりぬをめし。御こしまきもすゝしうら。六月一日より七月中。かたひらをめし候。八月一日。又ねりぬきをめし候。御こしまきそめつけのこそてを。おのく御もちひ候。おとこ衆も。いにしへハ八月朔日よりあわせをちやくしたるとて候。今は九月朔日よりあわせ。九日より小袖をき候。又十月の子にハ。なんによともに。むらさきいろのこそてをもちひ候。これはてん中にての事なり。たゝし京中大りやく此ふんに候。またぬめのこうはいをは。たいり御しよに御しこうの女中は。御年廿一の五月五日のむまのときまでめされ候御はうに候へく。お

とこは十五までゑりをしほりてき候。

一ほつけんつむきのことそて。もんのつきたるはくるしからず。もんのつき候はぬは。てん中又きとしたる時は。そく人はしかるへからず。出家入たう。どうほうはくるしからず。またなにしても。から物同せん。又いにしへハ。とうはうしゆは。こそてのりんに。

なにてもから物をさしたるよし申候。近年はさも候はす候。そうして。そく人はゑほしなどの時。ことにむもんのこそてきへからず。たしさるかくは。なにをきてもくろしからず。武家のしんも。大かたひらの時は。しろきこそてをきへし。きぬなるへし。又しろきあやにも。人にこふくをまいらせられ候にも。一たんの御かたならては。まいらせられ候はす候。またむらさきの袷は。御きんせいにてハなく候へとも。ほうこう人

は。しんしやくのやうにも。むらさきからのこそて同せん。くほうさま御ふくは。いつれもむらさきの御うらつき候あひた。そのははかりに候へく候。

一くはうさま御ふくと中は。おりものいろ御も  
んハ不定候。

しろきあや。又はあやつむきを。ちをいろいろにそめ。御もんむらさきなどにつけ候。そのほかのかゝむめ。またしいなつむき。遠江あかねなとにても。御うらはまへに申ことくに候。おりすちなど申候物は。しせうるん殿御時までは。めされ候はぬよし候。又かくおり物は。一たん御しうくわんのきに候。くはうさまの外。みたいさま。日野殿。三てう殿。女中くわんれいの御は。御ゆるしにてめし候。また三しよくハ。はいりやうにてめし候。

一たゝのおり物も。はいりやう候はては。てん中へは誰もきらはす候。また女中衆も。中らうはかうしのおり物。うちまかせてハ。えめし候はす候。すちみすなとをめし候。きほに候へく。くはうさま御ふくたまはり候を。ひさしくき候を。きほと申。わたくしにて。主へたまわり候こそておなし。

一しまおり物の事。地下人のきる物に候へく候。きとしたる人は。下にももちひす候。

一かけもよきのこそて。いにしへははやり候つる。今はすたりて候。むめそめのこそては。今もおの／＼もちひられ候。ことにうつくしくそめたるは。わか衆にもよくにあひ。女房にもよろしく候。

一丸すゝしの事。御ふくは中におよはす。大上らうめし候。中らふはめし候はす候。たれもめし候事はしかるへからす。またひとへす

すし。一たんの事に候へく。大かたの人はめし候まし候。

一くはうさま大上らうの御も。ひとへに候へく候。小上らうより下はうら付候。

一すゝしの事。まるすゝしと申ハ。うらおもてともにすゝしに候へく。ひとへすゝしと申ハ。ひとへにて候。そうしてすゝしは。しやうらうまでめし候。中らうはめし候はす候。その下の事は申におよはす候。ひとへすゝしは。一たんの事に候へく。

一いにしへは。おひ六わりにて候。しやうゐん殿御たいより。八わりになされ候。人によるへからす候。

一三ゑりにものをき候事。ちこわかしゆなど。ゑりをいろえてうつくしく見せ候はんために候へく。またとしよりは。ものをおほくき候はんためなり。たゝつねのことくきたる

かよく候。又そうかう。くひにものをき候事。とうはう入たうなど。としよりはくるしからず候。わかき人はひろう也。又大忍りにき候事同前。

一こそてを人にまいらせ候事。あわせをかさぬる事。御またこそてはかりをもいたし候。かすはさたまらず候。十。二十。又五。三。一なともつかはされ候。二ツはほん／＼には。いかゝ御入候はんや。あわせのかさなりたるは。二ツにてはあるましく候。こそてはかりの事に候へく。

一御かちやう二はりあるへし。ミついろ。すゝし。め。しゆす。かきしやくさう。かきめつつき。くりむ

一いつれまこは。わか子の子なれとも。むすめの子をは。しやうくわんすへし。むす子の子は。やいくわいたるへし。ある人。はなみのさしきへわうかへの二人あそひ候を。いつ

れもまこなれとも。藤若殿こなたへよひまいらせよ。つるわか丸こなたへよへと。人してをほせけるを。人めまたきゝたまひて。これこそおとこのかくれなきものしるによつてとほめたまへ。女人のたしなみにより。おとこのなをあげ候なと。藤若丸はむすめの子なり。つるわか丸はむすこの子なり。これおとこおんなのしやへつあるへし。

一はなみのさかつき事。そのはなを一ふさ。さかつきに入て。人にさし申候。又さゝれたる人は。それを取りいたゝきて。あふきなどのうへにおきて。さてさかつきをとりて。つねのことくさけをのむなり。それを又。人にさし申候は。もとのことく。そのはなをさかつきに入てさすなり。いかにも／＼そのはなをしやうくわんあるへし。

一神せんのはなみの事。しんせんをも。はなのもとをも。うしろになさぬやうに。さをさせらるへし。そのほかはおなし事に候へく。

一女中こと御ひき候時は。いそのかたをたゝみにつけて。御ひき候。ひさにのせては御ひきなき事候。

一御すたれのかげやう。かきもこまるもうてにあるへし。まく時ハうちへまくなり。かきにかくるへし。又ひき合にても。すきはらにても。三たけにも四たけにもつきて。四にもおりて。みすのうへもつからきぬの下より。兩方へおなし程にひきいたして。兩方おなしことくにして。みすまきあけてゆひ申候。ゆひやう。一むすひして。ねちかふなり。兩方のねちかふところ。むかひあふやうに。見あわせてするなり。その時は。かきもこまるも。まきこむるなり。しせんみすたかくあけ

らるゝ時の事に候へく。神前などは。かきもこまるもほかにあるへし。

一御しつまりところに。いろ／＼おかれし事候。まつとの物二。御こそ二。御枕二。御むしろ。へりあかきとんす。御むしろのうらすゝしたるへく候。

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢



續群書類從卷第七百二

武家部四十八

今川了俊書札禮

目錄

書札之事。  
文箱之事。  
諸家之事。  
和歌之事。  
屏風障子之事。  
けさう文之事。  
女房文云之事。  
男匂之事。

歌道流事。

そらたき之事。

硯紙の事。

女房胸の守之事。

管弦具足之事。

連歌執筆事。

## 今川了俊書札禮

書札禮之事。此事。當世ハ以之外亂候て。只人の心に候て。式躰ふかく慇懃に候人ハ。ハいくらも被致禮けに候。をのつから尾籠にふるまい。又物しり候へて。振舞人候へは。ごかむへきにあらす候か。兎も角も人のするにまかせて。われも人も只無禮にのみ振舞□候間。何と可申とも不存候。但自然物を知候へて。無禮に振舞候事ハ。恥辱と存候ハんにハ。尤かやうの禮ハ可定候歟。たとへハ將軍家の御一流のかたハしにて候はんする輩の方へ。諸大名より可被遣候書札禮ハ。さたまりて候。先代の時ハ。相摸守ハ號一族とて。諸大名共禮も定候けると申候。御一族の無官無位に候といふとも。四位の殿上人の位に准て可被用由。公家より被定て候ける

と申候。然間。諸大名連の官位ハ。多分一きうと申て。從下の五位より從上の上位に舉候。諸大名より一族方へつかハし候狀も。同五位より四位の人に遣候書札ハ。同皆々。當處恐惶謹言にて候。あて處ハ其人の居所者。小路の名。又者内の管領ハし〳〵の名字にあて候。書候けると申定候。大名連の中におゐても。諸大夫或ハ官加階かたく候人の方より。一族のきれはしの者に被遣候時者。書札にかた敬ハ有にて候歟。さ候へてハ。本は一方のとう人。まして兩管領以下に成候ハんにハ。諸大夫職の人にも。皆々恐惶書にて可被遣候。只平侍順の大名の抑て思ふまゝに書れ出候て。一族共に申候ハす。まして諸大夫共申候はて。なか〴〵と書事口惜事にて候。何とかいにまかせふるまい候といふとも。殿上人ハ〴〵〴〵。諸大夫ハ〴〵〴〵。侍

はゝにて御座候。おのれをのれか家に生付て候程に。過分の振舞ハ。かへつて物も知候ハぬのみならず。其まゝにふるまひて。通事あるへからす候間。つゐにハ云甲斐なしに成候ぬと存候。縦ハわれも人も。其身之果報又思之外出身し人なと候て。父祖身にも越候て。官位たかく成候也。公方の御沙汰としても。或ハ隨官位。或ハ年老次第なと候て被定候時ハ。無是非候。さ候ハて如何に上臈仕候共。殿上人の上に諸大夫職の人々振舞。諸大夫の上に諸將連のこころハあるへからす候也。先代の代に城の入道之事を賞翫候て哉之間。諸事亂に成行候。結句一族一々我かやうの者に會候ても。官位次第と申居候。沙汰の外の事に候。事新敷御當家又長井の方々の事ハ。諸侍の角不可申。書札の禮も。いにしへハ慥候けるけに候へ共。亂世の

時分に候間。何共かとも同物に成行候歟。侍職に取ても。其家立所。昔より定候へ共。只多勢有力の人々ハ。懸而上臈に成哉之間。不及申候。此間われゝに向て。書札の禮に。進上恐惶とあそはし候。無勿躰候。昔ハむかし。今ハいまだても哉之間。堅辭退申度候へ共。但我等か事ハ。既九州の官領時分に候。則將軍家の身を被分位に被告哉之間。式躰ハ大方に向申候ての御札かと心得申候間。辭退所なく候。今も我々當職上表申哉ニ候。自他同輩之儀たるへく候間。相互に恐々謹言たるへく候にも。京都にても。大方之一方の引付の頭人に成ぬれば。それかゝりの上衆連。まして評定衆奉行人に。皆々恐惶可書にて候間。六波羅の頭人。九州探題にハ。恐惶の御札不可有子細候。老公方を恐と申あるへく候間。更ニ私之御禮ニ預申哉者思申

ましく候。故實冬資大内入道。同大夫等。只恐々謹言と云。當所にハやかて今川殿と書て。廻てか共。とかめ候におよはす候き。人の物を知候はねはとて。つれて物しらすに不可成候間。公方をかろくせられ候するを。身としてとかむへきにあらす。當少貳殿ハ恐惶謹言になされへく候。是又神妙までにて候。大内なとハ今も我々にハ恐々謹言と書候て。詞も以之外無禮に書候へ共。是又沙汰之外ニ候。侍職に取ても。此人之事ハ。諸人被存候へ候。なれ共。とかむるに不及候。仲秋か方への狀にハ恐惶と被書候て候。縁者心地候て敬候哉。然者仲秋御親方にて候ヲ者被敬ても不覺あるましく候へ共。父道階之時。無禮にしをき。人も家人も請次候て振舞に候。うたてしく存計候。如此事能々御心得候までたるへく候。委可申承哉之間。是

まで申にて候。尾籠に候て先代者師泰上杉の人々等輩にて候へく候。先代宮將軍唯にて候。當將軍ハ御座候之間。我等か□の者事までも。先代一族よりハ。少人にも所をかれ可中に候。存候へ共押付て振舞かへは。さてのミ罷過候き。如此事。公方より始めて被定さらんほとハ。我等か當職辭退の後ハ。只恐々謹言とあそはされへく候。是のミならす一國をも給て候する人ハ。其國中の地頭御家人等の書札も。恐惶と書候て。難あるましく候。公方を敬申にて候哉之間。家の疵ニ成ましく候。書札の禮ハ。惣而如何にも。禮ふかく哉之間能々に候。物知て候人ハ申候也。片敬の書札之事。前々あらハ申て候。書おとして候程に。又書加へ候。同ほとの人の方の狀にハ。謹上某殿とかきて。國守にて候ハハ。たとへハ近江守何かしと可書。さならぬ

官途の事も。當官のほとハ官をかき候。前の官に成て候へ者。皆々前の位某と書候。常の事にて候。又われより敬人の許への狀にハ。進上と書候。藤原の何かしなと、書候て。其人の許に官領し候人の名字。又ハ宗との人の名字を當所書也。或ハ人々御中共書。又

官領の名字をも。其人の名字にあて候て書。我官途名字をも書事あるへく候。無官の身にて候へハ。源平藤原共。我性と名乗をかく事ハ。常の子細にて候。又少可敬人の方にハ。進上とかきて。應而其人の名字を書。姓名乗をかきて。謹上人々御中とかきて。恐々謹言とも可書候。進上の時ハ。恐惶謹言と書候。謹上の時ハ。恐々謹言たるへく候。少敬殿にハ。進上恐々とも書候。片敬の書札と申候なり。進上たとひ同ほとの人々。聲に成。外戚に成。ゑほしおやにて候にハ。此方より

ハ片敬の書札可然候。外戚の方より同輩の返事たるへく候。庶子一族より惣領の方へ被遣候狀も。如此進上恐惶謹言にて。當所ハ人々御中。又其人の居候所の名など可書にて候。恩敵の人一族にても。かく恐惶進上と可書候也。

一あまりに。上臈□に遣狀にハ。中々進上恐惶書事もいかゝにて候。御内祇候の人々或ハ政所に向て。謹上某殿へ。何かしと書候か能候也。文章ハ殿中以便宜可有御披露候。可得其意候なと、可書候也。我等。二條關白殿なとに遣之狀ハ。謹上恐々謹言と書て。或ハ月輪中將殿。法性寺少將殿なと、書にて候。惣而。書札の禮を知て候人々なく候。以外に尾籠のみ書候。おかしき事に候。狀の牀にて人の家定ところあるへからず。趣之間如何にも禮をふかくし候か。堅事と申候に候。人



の名乗をあまりに見分候ハぬやうに書候ハ。尾籠の事にて候。内者所へハ子細なく候き書札の禮之事。殿上人の方より公卿に被遣候文ハ。恐惶謹言と書候。殿上人の方より諸大名に被遣候ハ。恐々謹言と書候。殿上人と申候ハ。四位上位ほとにて候。四位ハ上四位下。從四位上。從四位下如此次第に候。五位ハ。正五位下。從五位上。從五位下にて候。官途ハ。中將。少將。左馬助。兵衛佐など。大膳大夫。右馬頭。左馬頭。此等ハ化所の大夫の位にて候也。中務大輔。同少輔公内大輔。同少輔。式部大輔。同少輔。是ハ殿上人も成官にて候。又三位よりして二位一位ハ公卿にて候。正四位。從二位。正三位。從三位にて候。かやうの次第に候て。書札の禮可有心得候。

一三位以上の人の許への書札ハ。進上と可書。

又の様にハ。内封と申て。腰文にしたて。立文にして。謹上共。進上共かき候へて。或ハ進之候。又小路の名など。當所に書候て。我名をたへ名乗はかりを書事。常の事に候。又同輩の書札にて候へ共。少敬度候へハ。其狀など書事も候也。立文に仕候時ハ。禮紙候へく候。内封ハ公家にハ。禮紙を遣られ候て。夫を腰文にせられ候て。墨をひかれ候事。常事にて候者ハ四紙の禮。五紙の禮ハ異説也。三紙。四紙の禮と申候て。立文の上卷を仕候事も候けると申候。是ハ人の方より返事せられ。或は此紙にて書給候へと云心様の式牒にて候。公家の物知て候人にも。尋中候しか。そハ四紙五紙の禮と申候事。慥知人なく候と被仰候也。あまねくハ立文の禮紙一紙にて候。

一文箱の事。公家にハ皆文箱とて。蒔繪に金物



なと仕候て。組をにして中に被入候て遣も候へ共。箱に被入候程に封なく候。武家も同前に候カ略儀に候。私に箱なとはりて。尻頭を封を書付て。宛所名字かく事候。是ハひらきて候時ハ。文字の左の方の蓋をきりあけ候之間。異儀なく候。

一 諸家の書役ハ。將軍家御一族又ハ殿上人の流。又ハ諸大夫の人々。若ハ侍家人々如斯所其家に定て候。諸大夫の家と申ハ。公家にハ日野。勸修寺。四條など申人にて候。又久我など申て。宮方にハ兵衛佐か家なども可申。武家にハ御家攝津の人々。長井の人々一流にて候。是ハ諸大夫として。諸侍達同位たるへく候へ共。官位など諸侍よりハ少被遣出しほとに候。評定の座席又役など被勤候する時ハ。小山。宇都宮。千葉。武田。小笠原以下の侍達よりハ。上役を遣られ候へく

候。

一 和歌懷紙書やう。公方様又晴の時。或社頭にての時ハ。讃岐檀紙を上下切調て。たかさ一尺計仕候なり。上様の御懷紙よりハ。高さハ恐候て候間。少ひきく切候也。横ハ懷紙のあり次第也。但袖口ハ手打置候程候也。其此方にハ詠の字を書候へく候。

春之會にハ。

春日同詠三首和歌官のある人ハ。官と姓と名乗書なり。其無官の人ハ姓と名乗計也。

梅花

難波津にさくやこの花

冬こもりいまをはるへと

さくやこのはな

春月

てりもせずくもりもはてぬ

春の夜のおほろ月よに

しくものそなき

### 暮春

おしやけにさくらやまふき

ちりしほれ春なりぬへき

けふのけしきを

たどへは。三首の時ハ如此。二行七字つゝに書也。又端作に廳而初の題を書つゝけてもかく也。たとへハ。

### 春日同詠梅花和歌

前のごとくに歌をかく也。其次の歌ハ題を書也。端作の高をは同通に書也。三首かきの歌の末をはひろくハのこさぬ事と云也。いか程も末をつめて書事にて候也。是ハ男の懷紙をかく様也。或は法師。或ハ兒なとの懷紙ハ。詠三首和歌と計り書て。題と端作との合に名をかく也。兒ハ何かし丸と書。法師ハ官の有法師ハ。法印某とも。法橋何かし。僧

正某共かく也。入道ハ沙彌何かしと書也。遁世人時衆なとハ。たゝ何阿と書也。又男も官位の有人ハ官位を書て。藤原共平共源共加て名乗を書つゝくるなり。無官の人は。姓と名乗計書なり。女房の懷紙ハ。重たる薄様又ハ薄檀紙などに。一重にかくなり。面計にかきて。ほとけぬ様に押まきて。上一寸四五分を横様に押折也。内々の會にハ。引合などをも用也。又男も前の官に成ぬれハ。散位とできて。姓と名乗とも書也。當官のほとハ。官を書なり。國司も別官に成てハ。前の何守とも。又何の前司なとゝも書也。公家内裏仙洞いししいしの御會ハ。武家の人存知無益哉之間。不及注之。

一短冊之事。是ハ本式無物也。當座之歌讀時ハ。號探題となり。障て手にまかせて取て讀時之事也。ひろさ一寸八分に切て。三に折候

也。題のはつれと名乗かく處を折て。其中を又一折てするなり。たゝ又上と下計も折也。詠終て後。題の上を紙ひねりにてとち合て。引結まで也。終の短冊の裏に。年號月日當座と書なり。書やうはたゝ二行にて引合打疊薄檀紙時によるへく候。うち疊の短冊は。春夏ハ青き方を上に書也。秋冬ハ紫なる方を上に書也といへり。たゝ又亂ても書の事也。一散しかきの事。女房の文ノ外ハあるへからす候。公家様の上らうの家より下紙もとへ内し等にかゝれ候事も候也。夫は以外無禮にて候。散し書ハけさやう文より事おこり候と云々。其三二一、ゝゝと文字をくはりてかき候なり。尋常の女房の文を散してかくにハ。三二一とまでハ不書候。たとへは。

まいりとふらひて

御いふせ

そのゝちに事か

さも

おハしまし

申うけわたらせ

さふらふ

ゆかしく

こそおほえ

たまはりさせおハして候へ

さふらふ

へく候

あなかしこゝ

如此面はかりに書常の事也。又おほく書ちらす時ハ。うらへ返ても書也。それハ。只ひた散しに書候て行也。

一女房のくわいし書やう。はしつくりを書へからす。題をもかゝぬなり。其題したいに書也。かきやうハ。たとへハ。

春たつさいふはかりにやミよし野の山もかすみて今朝ハみゆらん

殘をも。題の次第に、如亂句と文字をくはりて書なり。上ハ二寸あまり置て可書。下をハ一二寸も置へし。たんしやくの歌を書も。散して書なり。たとへは文字同前くはりあはせて書なり。

一只一首の題の歌をくわひしに書様。たとへハ。

### 春日同詠一首和歌。

#### 山霞

春たつといふはかりにや

御よしのゝやまも

かすみてけさハ見

ゆらん

これハおどこの懷紙に書やう也。端作に其題を書付ても書也。たとへハ。

#### 春日同詠山霞和歌

如此書也。三行三字に書也。是も法し兒なと

ハ。同詠也。兒ハ名計某丸と書也。或人の子息の童にて。歌を奉けるに。藤原の某丸とはや書たりけるに承及候。昔貞和の頃ハ。兒歌よミ達の會を見しかは。たゝ某丸とはかりかゝれ候よし候。姓と云事。いかさまにも常の儀にハなき事なり。

一和歌の讀師仕候時のやう。會之懷紙皆々調たるを取て。無官の人の末座之人の歌を下に重て。其次第に或ハ官位。或ハ老者。又上臈次第に重上也。又女の歌ハ男の懷紙にハ。別にかさぬる也。内々の會にハ。女房のくわいしをは上に重ぬる事もある也。法しの歌ハ入道法師を一ニかさぬる也。二十八品の歌。いしゝ其本を詠和歌と書也。

一内々懷紙なとハ。男も兒も法しも。只何其和歌共書常事也。さ様之時者。名乗はかりを自他書也。次第に重終て。立さまの中を一折を

し折て。文臺の下に置いて。後に講師召出て。文臺の前に圓座を一置たる上に居たる時。講師。懷紙を取上て。一の下なる下らうの歌より。文臺の上に引延て。文字の頭の方を。講師の方に成てよまするなり。講師努々懷紙に不可手懸。さてよミあくる也。

一春の日一同一山の露たかくいふ事を一たかくよめる一やまご歌一句つゝ讀切りくゝよみ上也。さて作者を後に。題をよミてのち。歌をよみ上。歌をも一句つゝ讀切々々よミあくる也。たとへハ春たつと。一いふはかりにや三吉ひきくたかく野の山もかすミて。一今朝ハ見ゆらん。如此讀切々々よむへし。次の題をは。題□歌計をよミ上也。其後。此人の懷紙をは。只官姓名乗と歌とはかりよミ上也。一人つゝの歌を講師終て。又次々の懷紙を講師取上て。開てよまする也。よミ上をハかうしと云也。懷紙

重て詠し切人も候講師と云也。講師ハ官位のまさりたる人の仕候事也。如此次第によミ上れハ。終にハ又如元官位に次第ニ懷紙を上に成候也。歌皆詠し終時者。講師ハよミ上るまてにて。急に座を退て本座に居る也。講師と詠吟の人数計殘留て詠終也。詠吟者初ハミな一返つゝ也。上臈ハ又上の人の歌をは。二返なとも三重に高く吟也。さて其懷紙末の手を。一處紙を細くたゝミて結合て引結て。懷紙の面に結とゝむる也。一の懷紙の下に裏に。年號月日を可書。

一當座の歌とまり題を取て詠事。いかなる達者上手も。時により受風情のうたかいかたき時も哉之間。歌數をも不可作也。五十點ならハ二首三首に過へからす候。但其時の人衆によるへく候。惣に題をあまた取て。よミをくれて披講之時。いらて□□□ハ見くる



しき事也。將又連歌なとも。句數をしたるを  
高名と存知て。下品のなま句おほく仕候ハ  
中々恥也。一句にても心有よろしき句たし  
なミ度候。和歌をも今時の人ハ。おほく讀む  
を上手と人や思ふらんとて。あさましきた  
わ事讀ハ。終にハ上手にならざる也。

一屏風障子などの色紙の事。色紙形を書事。い  
かなる能筆も。家の口傳を不心得してハか  
かぬ事也。但歌計ハ手よき人ハ。色紙にハ書  
とも不苦と申なり。色紙様重角半と押也。た  
とへハ。

□如此ならへ □如此甲角合 □如此片さかり  
□て押ハ重也 □て押角也 □に押ハ半也  
數ハ三十六枚也。好ニ隨而多も少も可押也。一番之左  
のはうにハ。

□其次にハ □其次には □如此ならへて  
□半ミ押也 □角押也 □押ハ重也

此三種の外にハ。とかく亂て押事ハすまし

きことに候。口傳也。

一けさう文を書様。此事都而安く大事也。た々  
流々色々又さるへき人に好色たる人達の古  
文など見申候へは。あなから一やうならす  
候。乍去。た々ふつ々かなるさまも無。又た  
みたるやうもなき也。其折によりあはぬ戀  
逢戀。忍戀。後朝。絶中。恨中。いしいし。さし  
當て。まめやかなる心底を云あらハしたる  
其中に。詞のそ々ろかひあまり。又まめや  
かならすつくろいかける也。一句に歌計に  
あらハしたるハ。中々よき也。詞はかりのふ  
ミハ如斯大事なるへく候。源氏にもあなか  
ち戀しゆかしとハなし。おりハたえねと云  
也。如何様にも詞少にて。思すちを言あらハ  
して。まめやかにあハれと見らんやうに可  
書。あふ戀ならハ。上へのみつからいひかハ  
しつることはの殘兼言のはし／＼とも。ま



とハリかゝりて。夫を便に書も一ふし也。又詞に歌を書そへたるもあり。夫ハわさかましく歌に詞とを引はなちてなとハかゝぬ事也。詞につゝけて一言なかしたるうちに。歌と詞とのすちめのさすかに見ゆるか能也。散して書ハ。文字くはりをは三三二二一と書と申也。夫にてはなく共。心得て能可書也。又むすふもやうあり。うへハやかてかみと見ゆるやうに。うハかい下かいの直に見ゆる様に結也。草木の枝にも付也。料紙ハ皆々色のうすやうなり。時に隨面用也。又中々に引合なとみちのくのかミもえならぬと源氏にかけるも。引合の事也。文字くはりのやう。面をは何ものちらし書のことくに書て。うらにもなり。又袖にもなる時。三三二一とハ書なるへく候。夫もあまりにまくるやうにハ書ましく候。

なに事の御

とにま  
いりて

ほとにてかと

よろつ  
申うけ

ゆかしくこそさ

たまハリ  
候へく候

ふらへこのほ

たとへハ。此様文字をくはるへく候と申。四三三二一と所々にちらし書も。見能そ侍ぬへき。猶こまかにしるし侍へき也。又ふみのにほひハ。態かましくこと／＼敷かうはしきハわろし。をのつからしみふるきやうにかほるへき也。惣而わさとかましきハ。中々かたはらいたき事也。二條殿あそはしたる物に。思鶴とて候。けさうふみの詞くたりあまりたをやか過たりしことのつまに。古歌の詞をとりて。書なそらへたるか能也。すへてたゝかやうの事はけらハしからす。そゝろかす。さるからふつゝかならぬやうに書て。心のそこをあらハすとせちに侍也。返々申

候。七夕の懷紙。又五首十首も。懷紙に書時  
ハ。紙をつきて歌をそみな〜書へし。

一人の許へ歌はかりをよみて遣にハ。歌をち  
らし書のやうに書て。歌の下に名乗を書な  
り。

一花もみちのえたに歌を讀て付にハ。たんさ  
くを書て。名乗をもかくへし。

一女房のふミをしたゝめ候事。公家さまにハ。  
多分立文にして候にハ。引合二枚を引重て。  
ひねりめにすみ長く二はかり引て。上らう  
の本につかハし候ふミには。女房達のおと  
なしき人々。又細々御前にめしつかハれ候  
女房達などの名を書て。其後申させ給へと  
書て。其下に名乗を書へく候。名乗の下の文  
字はかりを。まなにかき候上をは。かなに書  
候事と申候。是ハ上らうの方へまゐらせ候  
文の禮にて候。文章にも其上らうに召仕候

女房達に向て。物を申候言つかいに可書候。  
結めの墨の事。りの字と申候。何と候へハ如  
此引候哉。書とゝめ候所にハ。此よし御心得  
候て御申候へ。あなかしくなとゝ書事。常事  
にて候。又同程の人にて候へハ。女房の許へ  
男のつかハし候ふミ敬て書候。能々散し書  
候事に候。又たゝ引そろへて書候事も候。  
何もくるしからす候。尤父か申散し書候ハ。  
けさう文に候てわろく候よし申候へ共。公  
家のやうを見候へハ。多分散し書にて候。詞  
けさうふミにて書事悪く候へハ。文字ハ散  
し書も無子細候。詞をは男のふミに直々と  
男の詞にて可書候。又主人の方へ細々内々  
まいらせ候ふミなとハ。女房たちの名をか  
き候て。申させ給へなとゝつねに書候て。男  
の名乗を書候。常事ハ某殿御つほね申させ  
給へと書候か能也。

一けさう文書事。是ハすへて大事の事にて。なへてハ。けさうふミと申候へは。古き歌の内の心詞片はしを集取候て。其心を書事のみ候。又なまくれたる詞のやハらきて候を取集て書事も候。定片はらいたき事にて候。白拍子のかたへのけさうふミハ。よのつねの詞にて云通候。片腹いたくも候ハて。能人のむすめの宮仕の人なとかたへつかハし候けさう文ハ。ちとやハらき候て書か能候。或ハ見ぬ戀。或ハ聞戀。又者後の朝の戀など牀ハ。其所のやうによりて。恨事をも書候。又契事をも書やうに。むつ言の殘などに付て。かくし題の事などを。後朝のふみに書事も能候。所詮實に心さしふかき事を書候て。片腹いたくも。又こハくしく候ハぬやうに書候へく候。かやうの事。大事に存候也。歌におもふ事をよみあらハして。一首散し書

□し候て。いつも無子細候。歌を書つゝけていつれか歌やらん。詞やらんとも見へ候ハぬやうに書候か能也。人の本より其月と云字を書候て遣へく候けるに。女房の返事に。其月とハ暮を侍と云名にて候けるを。女心えて。お文字を書て候。男ハ人によはれ候へハ。よといらへ女ハおと申候程に。よはれ候てまいるへきとこたへにて候。おといらへ候事無子細候。又人のけさう文をつかハして候へは。返事にハ文字を書て候ける。是は憎と云心にて候。かやうの事ハ。いくらも候へ共。中々片腹いたき事にて候。一文の料紙ハ。かさなるやうハ。四季ニ隨而色ふし候へく候。春ハ梅さくらをかさね。夏ハよもぎ重。みとりのうすやう。藤歎冬かさねなど。春の末夏の初まで可用候。秋の紅葉かさね。女郎花。冬ハ松かさねなとにても能

候。草木の枝などにむすひ付候事も候。又結ても候へく候。うすやうなとも匂ひふかく候ハ能也。源氏にも書て候。道のくかミのえならぬなど、申へく候ハ。當時の引合事にて候。又けさうふミにハ。男のこと葉にて候とも。書へき詞にハさふらうを書事あり。口すへてゑんしよハさふらう。又云ことハなきか能也。むすひて候。うハかひ下かひ六借敷物にて候。墨付候事。上かいの方より墨を引まハし候也。の、文字やうにふうし候也。かやうにふしめに付へく候。

一男の匂ひに薰麝香なとわろく候。香たかく薰をも麝香をも御用候。其もうはたきにな。ちんをたかせ給ひ候事と承候。

一歌の事。是ハ或ハ爲定。或ハ爲秀。又者飛鳥井方なと、一道を立られ候間。其門弟に成候て。一姿習事候間一すぢならず候。我々ハ

爲秀の門弟。又爲兼のなかれも伺候之間。此分を可申候。短冊ハ廣さ一寸八分に切候。上下にけをかうかいのさきなとにてかけ候也。題書候紙の寸をは。二寸はかりなかくけをかけ候。下方をは一寸はかりにけをかけ候也。題書て後けかけて候分を。上下折て又中を折籠て。さくり題申候て。面々に手さくりに取て書也。人の上手により候て。おほくも少も可取候。又懷紙ハ或ハ一首。或ハ二首の時ハ。端作に詠。何首和歌と書也。是又二首三首の時者。其數詠字の下に書て。詠字より文字一はかりさけ候て。題を書候て端作と題とのあハひにさし上て。官位氏名乗を書へく候。一首の時。三行三字。二首の時二行七字。七八首の時者。二行に可書候。男ハ同詠と書候か能候。上らうなどハ詠と書事。常の事に候へく候。たとへハ春にて候者。春

日同詠三首和歌と可書候。法牀の人ハ皆詠何首和歌とはかり書候て。名を書へく候。當座にて候ハ、硯を面々に被置候。披講の事。又かさね候事なとハ別而可申候。作法あまた候。前々あらく申て候。御稽古候者。御存知候へく候。

一そらたきするやう。けふりなどのあらハに見ゆる様にことくしく候ハわろく候。いつくやらんとおほえて。ほのかなるやさしく候也。源氏にも見えて候色好人ハ。心をはちて振舞なり。まして人のためは不及申候。たゞいくらもやさしくゆうけんなるへき事也。

一紙硯人にまいらせ候事。是ハさしたる事候ハす候。おんなもおなしかるへく候。硯をは蓋を取て持て可參候。墨をは御前にてすり候て。まいらせ候事ハ常事にて候。但上臈な

と事ハさも候て候。夫なくてハたゞまいらせ候かめやすく候なり。墨をなましいにすりまいらせ候ハ。物書候はぬ人のすりてハ。いかにもあつかハしくへたけに候程に。申中たゞまいらせ候か能也。水入をはかならす見候て。水を入て可持參候。紙の事ハ硯の下に取副候ても能候。別に進之候も能候。

一年男を承てきんする事。早朝に致出仕ハ。先ハやうし二削て。殿に一上臈にまいらせ候也。柳枝也。長ハとのハ六寸。上ろうハ五寸。是を一ツ、折敷に置てまいらせ候なり。其後、御かうしをことくくあけて。座敷をきよめ。すみをき候へき所にハ可置候。御手水も年男の役たり。若水を通のてうつのとくかんしてまいらせ候やう。はんさうたらるの中に。下にゆつりはをしくへし。もろむきハ下に弓。弦をハ上に可敷。さて青めな



る右のちいさきをみゝなりに御手洗の底の下のゆつりはをはたらかさぬやうに置へし。十五日までハ御悦候。酌御はいせん。悉年男の役たるへく候。鬼の目。まめは以三度つゝ打つへし。

武田一阿彌陀佛傳也。梅花春の物。

一ちんハ二兩二分。一ちやうし二兩二分。

一ひやくたん二しゆ。一かんさう一分。

一しやかう三分。一くんろく二しゆ。

侍從夏の物。

一ちん二兩。一ちやうし一兩。一かいかう二分。

分。

一ひやくたん二朱。一かんさう一分。

一しやかう三分。一くんろく二しゆ。

黒方四季にたく。

一ちん四兩。一ちやうし二兩。一白檀 一兩。

一かいかう二しゆ。一くんろく一しゆ。

一しやかう一しゆ。

三種いつもたく。

一ちん一兩。一ひやくたん三種。

一ひんらうし二種。一しやかう二種。

一松やねすこし。

一只こしらゆるやう。能酒に三日ひたして。其後取上て。能々そゝきて。うらをつよくこそきて。うすやうに成たる時。あまつらに付て。あふりて粉にしてあはするなり。

一松やねこしらゆる事。あふひのかいにて能能とらかして。とろく成たる時。ほそき布にて二三度能々こして。水に入て後。かたまりたるを取上て。そゝきて入るなり。

一そうしてかうやくこしらゆる事。臼にて能能粉にしてふるうへし。何もへろくにとしらへ候へく候。匂ひもなくさらへて。よの物をハとしらへ候へく候。いづれも粉にし



て後、取合てあまつらにてあはせ候へく候。  
錢五まい一兩にて候。一朱とハ一錢の事也。  
能々可秘々々。あはせて後、やり水有所に  
て。穴をほりて入て。七日をく事もあり。

一つけおしあはする事。ちんを一焼わりて。麝  
香をあまつらにて。能々すりくたきて。取合  
て。其後、二三日置て。取上て。岩火の置て。其  
上にて炙。かわらけ又もとのしるに。取入候  
て焼也。たき物あはするとハ。梅のすり木。  
柳のはしを用也。あまつらにてあはせて後。  
梅のすり木にて。五百きねつき候へく候。千  
きね付て焼申候。

一あはする時。重々に置候様。一番にちん。二  
番にちやうし。三番にひやくたん。四番にか  
いかう。五番にくんろく。如此能々むらませ  
なきやうとのへてあわするへし。

於小榮肥勸喜寺。以無二之御芳端。如此今  
寫書了。極々秘曲言語不及候。努々不可他  
見及候。可秘々々。

染殿御所手箱抄

了俊御在判

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

曾我兵庫頭八十五箇條品々不好事

制札之端制札事。

高札之端高札事。

目錄之端目錄事。

但進上無之者。自然可有之歟。

註文之端註文事。

制札事之上之ノ字事。

制札高札其外一色一書事。

制札高札其外實名判形事。

同ヶ條一色之時也。兩之外之事。

公武兩家之外受領ノ守之事。

判形無之檢文實名之事。

判形有之檢文實名無之事。

貴人高人江御札無冥加事。

御慇懃迷惑ト云事。

御狀過分ト書事。

男書狀裏に之字事。

平人江渡御入御御ノ字下ニ書事。

恐々申上候。又恐々申候。恐惶申上候。又恐惶申候。判形之事。

自之書狀之文言ニ御字事。

御無音。御尤。御如在。御事。御報。御無沙汰。御尋。御斷。御吳服。

貴報。可申上ナト。

自分申様ニ如此等ノ御字。

此外數多有之。

書狀之端書ニ以上事。

主人貴人江奉狀端書事。

同書狀ニ御禮申通シ之事。

同書狀ニ珍敷文言同珍文字事。

目安奥ニ名字官實名迄書事。

三色ゆかけ眞名に書事。

鷹。弓。馬。

ふちの事。

うつほの事。

あをり。此三色も眞字事。

ふち。うつほ。あをり。

堅紙付年號事。

折紙書下年號事。

貴人高人江切紙に而申上事。

仰之觸狀點事。刺點ノ頭。下如此ノ事。

主人之御名。奥ノ日付より下ニ書事。

主人ニ奉書狀ニ薄墨事。

書中眞字ニ捨假名事。

壹ツ 貳ツ。此等之事也。

等輩ニ奉ノ字事。

狀ニ。一人果テ相ノ字事。

狀ニ。一人死テ今度事。

狀之端ニ置字事。

到來物數脇ニ付ル事。

并此一字脇ニ付ル事。

當時略ノ封書狀表ニ實名之事。

被爲成如此爲ハ□□之外書事。

女中江之書狀判形事。

但證文ハ各別也。

同書狀奥月日付事。

書狀到來ノ此方便ニ遣返事之脇付ニ。御返事

之事。

一人之儀ニ相ノ字事。

器入物或是ヲ背或橫板書事。

且ノ字。式ノ字一定書事。

一ツ書ヲ萬事重ニ書事。

書狀并目錄等一枚ト書。亦數付ル事。

魚之數唯之字事。

庖丁ト計書事。私刀ヲ加。

熨斗ト計書事。私匏ヲ加。

鶺鴒之外鳥數羽字事。

鳥數一番ト書事。

味方甲一列ト書事。一面。

罷ノ字。日本雖爲風俗。必用捨事。

將軍家御書之名有品々御請其書狀之名不書事。

俗家中ニ拜上拜進卜書事。

主人仰狀宛所敬書事。

宛狀宛所書敬書事。

目錄品々註文堅紙事。

五節供等返事不依上下除其季事。

兵衛名衛字へ書事。

書狀并目錄注文木色々物次第奥ニ書事。

右弘安禮節如此趣不可勝數。然ニ延元之

比。北島親房卿略其蕪詞。被選出三百六十

ヶ條畢。彼一卷當家雖令相傳。復去天正之

比亡父兵庫頭謁三光院令論談糺明之古例

之内。摘英拔莖者八十五ヶ條被記之者也。

其後近衛殿信輔公。菊亭右府遂一覽被點

頭之者乎。誠家傳之秘書。聊不可有他見者

也。

慶長十五九月日 曾我又左衛門尉尙祐。

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

# 續群書類從卷第七百三

## 武家部四十九

### 書簡故實

書札ハ古今其法有之。上下の品を定といへとも。建武年中。等持院贈左大臣公。一天草創之比より。武家權威たくましくたのしひをきはめ。おこりを思ふ族。不論嫡庶混亂しかとも。世上未落居なかりし故。其法をたゝし給ハす。寶篋院殿早世おハしまし。鹿苑院殿いとけなくて。征夷將軍に備り給ふ。此時。細川前武藏守賴之朝臣被奉後見。其後。勘解由小路義重。畠山左右衛門佐基國三管領に補任して。天下

の三職とあふかれ給ふ頃。上古風猶殘て。家々雖有故實。其品煩しく。其詞ふりて異成逸也。依之。今川氏賴。小笠原長秀。伊勢平氏滿忠に仰て。禮樂射御之規式もたゝし。以舊本再三令明。非を削。是を取て公卿大夫之書禮の定りハあれども。代々に替り。年々に變して。則當世古法不足用。天正年中。小笠原大膳大夫長明。切瑳琢磨して書札法を改。我家に秘といへとも。そも當時にくらへんとすれは。十にして其半も用かたし。故いかなとなれハ。三管領。四職。番頭御供衆家々滅て。今殘名家其數おほ

からす。殿様脇付之文字等錯亂して。一事不叶古。故此書札上下之文章ハ。故長時貞慶家之秘本をかたとり。近く菊亭右府公草案をかんかへて。爲後士録之竊藏。知音懷予以短才愚意偏招世間之嘲。後生有明服被改予非者尤所希也。穴賢莫及外見。

書札目錄

公方様へ言上之事付請文。

大中納言宰相へ之事。付四品諸大夫

僧家へ之事。

制札之事。付壁書。

感狀之事。

所領折紙之事。

與奪狀之事。付一家口券賣  
代管被官狀

女中方狀之事。

惣別書札法之事。

目安之事。



月 日

名字官

名乘判

南禪寺

參侍者御中

南禪寺ハ五山之上たる間、公永共に一たん御賞翫なり。其外、五山へも大概同事たるへし。少ハ眞草行等覺可有歟。敬白を謹言と可有。五山ハ、天龍寺。相國寺。建仁寺。東福寺。万壽寺。鎌倉五山ハ、建長寺。圓覺寺。壽福寺。淨土寺。淨妙寺也。

昨日者以參上甲冑御影令拜見候。大慶不可過之候。重而詣床下可申入候。恐惶謹言。

名字官

名乘判

月 日

等持院

進覽之候。西堂へ凡此趣也。

恐惶をも少草に。又侍者御中共可書也。蔭涼等などハ、餘之西堂よりハ賞翫之山。

久不能拜顔候。御寺役已下可爲御取紛之

由存無言所存之外候。猶期而上令省略候。恐々謹言。

名字官

名乘判

月 日

玉公首座禪師

侍用下

凡此趣也。道號之なきハ、後堂首座とて。法之事也。道號を申者。前堂首座とて賞翫也。首號を言ハ。座元禪師とも可書。一寺之住持ならハ。其寺號又ハ軒號など可有也。恐々敬白ともかくへき也。

内々令申東堂之鉢詩御談義之事。近日可有始行之由承及候條。聽聞之望候。宜預御意得候。恐々謹言。

名字官

名乘判

月 日

喜公藏主

玉床下

是此分たるへし。是も寺號院號などあらは。それを書て可然也。道號も可然也。出家に至りてハ。俗姓

は不入段。不珍事ながら。又其御身一段之承候事との事ハ。縱侍者之位に候へく候とも。長老西堂のこ  
とく賞翫申て。書狀所認事。古今の勢也。ことに公  
方様御連枝なさ。其心得有へし。□輝万松軒なと  
へハ。直札にてハ無之。

夏中御法談尤可然存候。以參可聽聞申候。  
恐惶謹言。

名字官

名乗判

月 日

三福寺

進覽之候 御内宿中とも可有。

淨土宗へ凡此趣也。禪家長老と。淨土長老ハ。公儀  
御用之佛鉢御賞翫也。年始にと五山ノ長老參賀時。  
御縁近御送有て御禮有。其外無之。

芳茗贈給候。誠祝着之至候。以參賀可申述  
候。恐々敬白。

名字官

名乗判

月 日

金光院

御同宿中 進覽之候共可書也。

凡此趣なるへし。金光院と申。七條道場の寺號也。  
かやうに寺ノ號を可書也。大概淨土長老同前之心  
得なるへし。下々への事ハ。何阿彌陀佛進之候なと  
も可有之。又床下ともしかるへし。

尊書謹以拜見仕候。抑就在洛之儀 御使僧  
殊香合一。剔紅 盆一枚法鐘 令拜領候 御懇  
情之至恐悅無極候。必態可令啓上之由 可  
令披露給候。恐惶謹言。

左京大夫

三月四日 義興判

進上一寮

上書同事禮紙有。遊行上人繪旨御中  
明大内殿方之返禮也。

一制札之事。

下知如件とハ。理運之文言也。其國の守護代奉行迄  
ハ可有之歟。其外ハ依狀如件。執達如件なと、書  
也。但私領にて他人のははかりをおもハぬ所なら  
ハ。何さ認ても不苦候也。先軍陣なとにて。必制札

も所望する也。然者體在所之様鉢も尋極て、制札之文言に心得へし。貴人なこの御領中ならは、文章に用心も可有之也。

禁制

一 盜賊狼藉之事。

一 放火人之事。

一 博奕之事。

右條々堅令停止者也。仍如件。

年號月日

名乗判

右ハ守護制札也。

禁制

安國寺

一 甲乙人等亂人之事。

一 諸人押而居住之事。

一 伐採竹木之事。

右條々若任違犯族者、可被處

嚴科之由候也。仍下知如件。

年號月日

山城守平朝臣判

右かやうの制所に名乗ハかゝす。官受領に判形可

有。無官之人ハ。氏に名乗可有之。禁制ニ年號用通也。

禁制。

一 軍勢甲乙人濫妨狼藉之事。

一 陣取付放火等之事。

一 和懸兵糧已下之事。

右條々堅令停止訖。若有違犯之

輩者、可被處嚴科也。仍下知如件。

年號月日

官途判

右大將數多之時、自分之制札ならハ當手軍勢ニ可書也。其時ハ直判なるへし。

きんせゐ

たういち場

一 をしかひの事。

一 ようきやくせいせんの事。

一 こうろんの事。

一 かたきうちの事。

一 たうそくをかくしをく事。

右てう／＼一事たりといふ共。いはひのと

もからあらは。かたくせいくわせらるへき者也。仍下知如件。

天正八年五月日

左衛門大夫藤原在判  
攝津守源朝臣在判

凡此趣也。朝臣書も奥にて也。貴人なハ官受領はかりにて可有判形。但氏ハ。相調たるかよき也。何も右のことし。日の下をハ。大方年元之役と可心得。何も條々口傳有之。惣別かやうの制札にハ。名乗をハ不書して。官より氏を書て可有判形。所によりてかやうにかなに書事も。一つの故事也。

定。

一盜賊人之事。

一放火人之事。

一喧嘩口論之事。

右彼條々於有注進者。別而

可令加恩賞者也。仍下知如件。

年號月日

三郎

二郎

一郎

右ハ横板也。條々多可書ため也。常の於首也候者字不書也。

一壁書可書次第。大方如此。

壁書

山中民部丞勝光  
大江掃部助勝元

河内國

中村兵部少輔信勝

澁川郡荒馬庄之事。當知行之地也。掠申輩有之者。尋承可申明者也。仍壁書如件。

天正八年五月日

凡此趣也。日付之下に。名乗判形有ましく候也。條口傳有之。心得へし。

壁書

一博奕一切令停止事。

一於家中野心之輩。不見隱可申聞事。

一有思違子細之時不作仁。不背申存分者。可爲忠節之事。仍壁書如件。

天正元年正月日

御判形

一過書可調次第。

賀州下向人六拾人。荷物有之。輿式挺。馬拾疋。諸關渡無其煩可有勘過之由。所被仰下也。

天正八年五月日 沙彌 在判

前丹後守源朝臣在判

江州

越州

右京兆被官。八幡宮へ社參人百人。荷物有之。輿拾挺。馬拾疋。關所上下無其煩可有勘過之由。被仰出候也。仍下知如件。

永正元

三月二日 大和守在判

丹後守在判

薩州

役所中

かやうにも相調候也。又人により候て。諸役御中と書者も有之。其時ハ名乗ノかたに。官又受領を調候事も有之。常之折紙などの心得也。但時宜によりて

一感狀之事。

の事也。何も折紙の時ハ。付年號たるへし。

今度於相州鎌倉合戰之時。首數輩被討捕勝利之段。感悅之至。併忠節無比類候。至子孫可申傳候。恐々謹言。

永正

九月 日 貞勝在判

奈良孫九郎殿

今度於下總八幡郷合戰之時。首壹被討捕手柄之段。感悅之至候。仍刀一國光。遣。彌可爲戰功狀如件。

永正

八月 日 貞勝在判

岡崎備前守殿

凡此趣也。此認やうハ。我與力被官人なま人の様跡也。與力分なさハ。少賞既有へき段勿論也。忠節ト云字に。御字も書くはへ。御忠節と書にて可然也。又與力或旗下之仁ならハ。追而上意に有御感と書

加へ可然也。及其時文言之義者。一篇に定へからず。執折紙に候へく候。鳥子又ハ杉原なま。折紙にして相認候也。

又云。粉骨無比類之段。誠神妙令感悦之。彌可勤忠節事肝要也。猶又一段子細有之者。太刀打鏝下高名面疵なま。文言に其働種種可書也。

### 一所領折紙之事。

此間欠

分國頸城郡之内。壹万石宛行之畢。全令領知。可抽奉公之忠勤者也。仍如件。

天正八年三月日

長時在判

誰かし殿

分國新川郡之内。中村郷千石之事。令扶助之訖。可令全知行狀如件。

天正元年八月日

成政在判

某かしとのへ

領知之内。吉田村千石之事。令扶助畢。全可被知行之狀如件。

天正八年八月日

長時在判

何かし殿

凡此趣也。折紙に認るさまハ。如常付年是也。知行所方々にても出し候て。目錄別紙に可有之。又一紙に書加へ候事も有之。一篇に定へからず候。加増出し候時ハ。本知行千石之上。尙加増千石乞扶持候。如此可有之。

### 一與奪狀。

就當家與奪在國之上者。文書幡重代分國進之置候。如先例之可被申付候。彌當家繁榮日出珍重可爲肝要也。仍執達如件。

天正八年

信濃守

五月吉日

長勝

松尾新十郎殿

進之候

大方此分也。かやうの時ハ。子ながらも賞翫有へき段勿論也。

一字之儀豪仰候。種々雖斟酌中。無餘義御斷之上者。任御意代々用來候長字令進覽候。恐惶謹言。



天正八年

上村信濃守

五月吉日

長勝在判

奈良孫四郎殿

人々御中

一字之儀被仰候。雖斟酌候條々御斷之上者。任其意。長之字進入候。恐々謹言。

名字官

年號

五月吉日

長勝判

井上孫四郎殿

御宿所

一字之儀承候。乍斟酌代々用來候長之字進之候。別而御信用專一候。恐々謹言。

信濃守

年號

五月吉日

長勝判

凡此趣也。杉原を折紙にして可相調。紙一枚たるへし。上包有之也。何も條々口傳有。上中下之心得大方如斯。同下手被官人いかにも。さかりたる方へハ。文言不可有之候。折紙之中程に。一字計書付て。

年號月日名乗計有之。

御字拜領。殊被成下。御内書。尤以頂戴奉

存知候。仍爲御禮。御太刀一腰。黄金百兩。

段子拾端致進上之候。宜預御披露候。恐惶

謹言。

名字官

十月 日

名乗判

進上中村主計頭殿

御宿所

一賣買之證文。

賣渡田島之事。

山城國宇治郡

柳澤村

右爲永領。代々知行無相違者也。然者依有

要用。限永代賣渡かいての名官の中段實正明白也。

無他妨可有候知行。爲其相添數通證文渡

進之候上者。於子孫聊不可有違亂之儀者

也。仍うりけん狀如件。

名字官

年號月日

名乗判

某殿

參

大方此分也。我より下手への儀ならハ。取沙汰と有  
な。執沙汰と書候て能候。御請文と書を。請文と認  
へし。下手へこ申も。被官ならハ。もこより其外に  
ても。一段下手への儀なるへし。何れも一篇に不可  
了之。口傳。

預り申御知行分山城國都築郡吉岡村御代  
官職事。御年貢諸公事物等。嚴密ニ可致執  
御沙汰。若聊も無沙汰之儀有之者。雖爲何  
時可有御改易。其時不可及一言之子細者  
也。仍請文如件。

年號月日

名字官

名乗判

某殿

參

一女中方へ狀之事。

一筆申り。若きみさま御くハししん上  
申たく候。しかるへきやうに。御ひろうた  
のミ入り。し。

まつもと

さこん大夫

三月二日

しけ長判

御つほねにてあこゝ

申給へ

是又凡此分也。年期をさす事。或ハ三ヶ年又五ヶ年  
な。其時之申合による也。又年期不及申合事も候  
様。殊により勿論也。又補任請文も壹ツかきにて。  
條々を書立候ハ。申合も時宜により有之也。先通  
法之趣如此。宛所も前のこさく也。

三月五日

貞時

齋藤孫四郎殿

凡此趣。女中方之事。第一賞翫にハ。ささの名をかくを上さす。又ハひろう狀勿論也。いんきんなるかたハ。判形可有之候。名乗事上字をかなに。下字を真名にかくへし。法跡ハうへを眞字に。下をかなにかくへし。又二字なからかなにもかくへし。

一女中方へ目錄次第。

しん上

かん

一

たい

一おり

はまくり

一折

御たる

三か

以上

はうさこん大夫

さた次

一書札之法様之事。

第一賞翫之書やうハ。此旨可有御披露共。可預御披露共有て。恐惶謹言共書て。其内の被官人にて。家子にて。宛所を書事。子の

方より父の方も如此なるへし。但恐惶を。恐恐謹言ト可有。其故ハ恐惶と相調候へハ。直ニ献する心得也。何も宛所肝要也。

一某殿人々御中と云事第二也。又進覽進献なと、書事。第三にて候。御宿と書事第四也。御宿所と書事ハ。このましからぬ義也。然者。近代如此のみ有之間。不及是非候。進之候第五。むかしハ等輩へ之書様進之候ニ候へハ。近代に至てハ。下手へのミ用來候。打付書第六。最下也。うち付書とハ。名字官迄書て。御宿所とも。進之候にと共。何共不書を申ならハし候。此儀ハ被官人など。又ハ下下へ之儀なるへし。

一謹上書之事。肝要之様にむかしより其沙汰有。眞草行上中下にわたりて。何も用來候也。縦ハ謹上墨黒く書て上輩へ。滲上ハ等輩へ。伏上下輩へ。此分成認し謹上書之時ハ。上

書之名乗の上に。官を書へし。無官ならハ名乗の上に。氏を書也。奥の日の下にも。名乗上に官を書なり。受領ならハ受領を書へし。官と申候へハ。受領の外のみ申様に心得候人も有之。必しも非其儀。受領をも官と申段勿論候。内官外官と申。禁中に百敷と申候を。内官と申。諸國受領を外官と申成へし。將亦無官の人より一段と慇懃の方同氏ならハ可有斟酌。和歌の懷紙などには。公方様にての御會に。源氏ハ上之御氏に恐奉りて不書加も此心候也。謹上書之時ハ。禮紙とて有之。如常不封して。白紙一枚にて上を卷て。其上を立文にする也。

一折紙一重にかきて。表にて書留にハ。日付之奥に。つかハす所の名を可書。又裏にて書留にハ。奥に名を書に不及候也。但是ハ。腰文の時之事也。立文の時ハ。裏にて書留と云と

も。日付之奥に名をかくへし。

一僧家へ之書札之事。長老へハ恐惶謹言共書て。寺の名を書。侍者御中。或ハ侍者禪師など。いかにも敬て書へし。西堂分大概同前。但長老などハ不可有。眞に可書を草に書。侍者御中と有へきを。尊床下などハ可有。時宜による事によるへし。縦平僧たりと云共。一寺之住持とならハ。其かと有て賞翫も勿論也。

一公家方之事。攝家清花などへハ。其所之殿上人にても。諸大夫にても。又ハ侍にても。伺公之人に宛ニて可書。直札にてハ不可有之也。縦淺官たりとも。高家を賞翫之故實也。其外之旁は。或ハ人々御中。或ハ進覽などハ可有。但例式の公家衆たり共。大人にならせ給ひ候ハ。直札は斟酌あるへし。次に常々公家中にても。末五位六位の身などへハ。人

人御中なとなく共。進覽なとなくも可然候はん哉云々。時宜によるへし。

一門跡方之事。青蓮院殿。聖護院殿。梶井殿なと、申類之事。攝家同前之心得也。其外脇々下々の義。大概公家方と同じ。但法中之事ハ。さのみ官位を不□□故に聊用捨可有之云々。

一女中方へ美物なと參らせ候に。女房詞とて鯛をおひら。鮭をありまなをと云事有ましく候。鯛をハ鯛。鮭を鮭と認たるかよく候也。

一武家方諸侍書札事。武家方にても。四品仕候方へ。五位六位の諸侍より。恐々謹言と書事。無謂と申事ニ候。恐惶謹言と可有事也。然と加様ニのみ相調候慮外之儀候哉。地下之五位より四位雲客へ之儀。弘安禮節此趣勿論也。

一返事認様之事。賞翫の方へハ尊報尊答。又貴報御報なと共書て。同輩又下手へは。御返報と書て。猶下輩へハ御返事共可書也。此趣。何も何も以前事なから有つけたる様躰也。此段も上中下眞草行によるへし。

一觸日記書様次第事。杉原なと折紙にして。其子細を可書に。縱令主人よりいつ何日に可泰由仰に付。可書様躰。たとへハ如此。

來月十五日庭上之花可被爲御覽候。各可被○以下一行闕文。

名字官

三月十日

名乗判

松田丹後守殿

上村左兵衛殿

館野又右衛門殿

かやうに奥さかる也。又先各之名を端にかきたて。奥に其子細をも書也。其時ハ

奥上也。又次第むつかしきも有にハ。人々の名を可書已前に。次第不同と書て。扱名を書立る也。故實常之儀也。

一同輩へ之書狀可書様之事。

其後者。久不能拜顔候。背本意存候。何等之事共ニ哉。御隙之時分參可申入候。此邊御次候ハ、光臨所仰候。諸事期面上之時候。恐惶謹言。

月 日

某殿

御宿所

乍同輩少上下此分なるへし。又御宿所之上に。まいる云字をも書也。同人返事書様之事。

御狀之旨令拜見候。喜悅之至候。近日清水寺邊御佛詣之由示給候。尤珍重候。必々御供可申。每事期其時候。令省略候。恐々謹言。

名字官

名乗判

月 日

某殿

御返報

凡此趣也。伊勢へ參るを參宮云云。八幡春日へ參るを社參云云。熊野へ參るを參詣と云。賀茂へ參るを上下云云。北野へ參るを宮守云云々。此所書札に可書故實也。又樽着書狀には。加事大概始此也。

貴札委細致拜見候。抑鴈一。烏五。鯛十。御樽三荷。被贈下候。祝着之至候。賞翫無比類候。併御懇意難申盡候。仍比興候へ共。折節見來候間。鰯二懸。令進入候。旁以參可申入候。可得御意候。恐惶謹言。

月 日

某殿

參貴報

先日者預御使候。殊更重寶贈給おりと畏入存候。將亦鴨五。鶉一折。鯉一。鹽引三尺。貝

名字官

名乗判

名乗判

名字官



之物。前にて可有之哉と云々。桶に入候物。進物に書付は。一桶十桶なと書へし。鳥ハ何鳥にても前に書へし。次第ハ白鳥一。鶴一。鴈五。雉十。なと有へし。何鳥にても數有へし。魚をも數を可書。但鯛一折なと有へし。鯉五。なと有書也。五喰なとは惡し。又一かけなとも不宜候。鮭をハ五尺十尺。又壹尺なと書也。赤荒までハ。數を二十三十と可書也。折紙にくつもあれ。樽の添候時ハ。奥に書へし。

一御同朋衆之事進之候。又人により□□□□  
□取調候也。同又人により御宿所と被認候方も有之也。御末男事。大概同前也。但可依時宜。

一貴人へ捧愚札に。名乗のわきに。上文字を付る事。進上に准る也。公家衆などの進物之目錄に。名乗のわきに上文字を被書候事有之。

其時ハ端に進上とハ御書候はて。かやうに被調候。かたかた毎々の義たるへし。尤武家方者必ずはしに進上と書申也。吉良殿にかきり。進上をも不被書。又名乗をも不被書義候。たゞ目錄ハかりにて御入候。昔より此牋之由うけたまはり候。

一公家衆にハ。書留所にて可得御意と被認候ハ。其分可有御心得と被申心也。武家方に可得御意と調候ハ。可有御披露と申心々にでうやまひ候方のミ調候也。此段者武家により候て可相替儀にあらずといへとも。かやうに用來候間。至于今別儀不可有之候。武家方には稱號を名乗と云り。名字を名乗と申。公家衆にハ名字を稱號といひ。名乗を名字と申也。是又更に公家より雖不可有相違。如此申來候也。

一連署事。官より名乗まで書續て。何人もおし

ならへて書也。仍其次第ハ。奥に書を上首と定。目の下より次第に奥を賞翫也。加様に候時ハ。かたに稱號を可書。將亦奉行衆之異見狀にハ。裏に判形有。名乗ハ表に有へし。

一 飯便と云事。其日之中に可相届所歟。不然旨一兩日之事ハ。書候ても能候也。數日をへて遣狀にハかくましき也。遠路と云事。國をへたれ候ての事也。一國の内にいかに日からを送候共。書間敷候也。但此段も或ハ五三日之事たるへき歟。縦國中成共。はるかの日數を送候は。書候ても不苦候。他國ならハ縦其日中に相届候とも。しきにより遠路とかき候て不苦候也。よく／＼分別可有之。

一 墨つきと云事。賞翫之御方へハ。惣別こととく文字をちいさく成つめて可書也。草に不可書也。常に墨つき之事。こくうすく有様に可書事肝要也。文字移と云事。縦は賞翫

之名を可書に。其外之内に相似合ぬ事などを書たる次に。貴人の名を書事惡也。かやうの義分別可有之。何も賞翫之名をかく時ハ。墨をこくつき候て可書。

一 御内書内御書と申ハ。小文之御内書をハ。内御内書と申也。立文のをは。御内書と云也。公方へ申上をは。申狀と申候也。御内書等之趣古今無相違者也。奉書と云事。上意之旨を奉行人相認候を。奉書と申也。奉書の認様ハ。仍執達如件などハ有之。扱可爲打付書。又恐々謹言共有へし。

一 上意の旨を。三職より被仰遣候をハ。御教書と云也。御名乗ハなくして。官受領の下に御判形有て。立紙壹枚にて上包有之也。可心得。

一 書札墨續に定たる所。書初二三行之内有之。其外者さのミ無之。書留之恐惶謹言などハ。

必筆を染也。かれ筆にて不可書尾籠也。

一着到を付る事。杉原にても。又引合にてもあまた繼て。人々參次第に。其日々々を書也。其繼たる料紙のはしを。三寸七八分程残して書初るなり。

着到

村田源兵衛尉

如此書もて行て。五

大倉久右衛門尉

百人も千人も繼て。

磯山主膳正

いか程も書終て。已

二日

上之數をかゝぬ事。

松本勘三郎

着到之故實也。其家

三日

中之人數ハ。多少付

池田土佐守

人のしれぬか可然

上村 外記

との心也。

一進上と書事。父主君師匠に對して書て。但進上とかけハ。直札の心へたるによりて。家司の名を書事常之義也。貴人へ進上する狀は。

いかにも字を眞に。文字をさのミ大に書間敷候。殊我名乗をかれ筆にて草に書事。第一の尾籠也。當時態名乗を見えぬやうに。書まきらかす人有。故實なし。狼籍第一也。公家門跡なとハ。日下に判形計をせられて名乗はなし。是ハ草名とて。名乗を草にかゝるハ心也。又名乗計をかゝれて。判形ハなきも有之。いかやうにも武家に有とくハ。名乗をかきて判形せらるハ。公家門跡にハなき事也。然に武家之輩。名乗を草に書て公家門跡の草名のまねをするに似たり。されハ尾籠之事といましむる也。又主人へ之中狀に。親を親にて候ものと不可書。子にて候ものとも候て。名字可然也。口上にて候も此分也。

一美物。公方様へ進上之事勿論候。但是に御樽添候者。奥に御樽十荷共。五荷共可然候。

進上

白鳥

一

鯉

一

熨斗

五百本

蛤

一折

以上

進上

昆布

一折

鴈

一

鯛

拾

海老

一折

貝鮑

百

御樽

十荷

以上

一主人に官を申上候時。認様之事。杉原壹枚を能程に折。申と云字を書。其下に右京大夫。

右如此折紙に認候也。公方へ白諸國歳暮又正月進上儀也。はまくりなごハ。一折千なご。數を書事。田舎方ハ尤可然歟。

其次に細川民部少輔。其次に高國計也。一枚に能程に引亂て書也。是ハ民部少輔殿にて。右京大夫之官を御申候時也。上包立紙にして卷。上下可折。

申

右京大夫

細川民部少輔

高國

無官之人ハ。此分に相調候。但伊勢七郎と申時。此のことくと申上候。

申

兵庫 助

伊勢七郎

貞孝

今度御位御昇進之儀。尤以珍重ニ候。仍爲御禮御太刀一腰。御馬一疋進上仕候。可然様ニ可預御披露候。恐惶謹言。

名字官

十一月 日

名乗判

就白傘袋。毛氈鞍覆御免之儀。被成下御内書候。尤以眉目之至置存候。仍御禮御太刀一腰。御馬一疋。青銅百疋致進上候。宜預御披露候。恐惶謹言。

名字官

十月 日

名乗判

元服同假名并一字之儀蒙仰候。雖斟酌候再之儀承候條。任其意何殿同令相用長之字進之候。御信用所仰候。恐々謹言。

天正八年

名字官

十二月廿二日

名乗判

名字名

御宿所

凡此趣也。折紙なるへし。本狀寸法之事。小文之時ハ。鳥子紙半切にして。相認たるか能也。上包の方を短きれハ。書狀之たけ見にくき也。可得心。何も鳥の子半切のたけを本と可相立。但杉原なとの時

ハ。上包の方を少短切て能也。札紙之事。小文之時ハちいさくもするなり。又文之たけも同前にも有へし。何も同前也。禮紙ハ上包みの物一御禮紙成へし。

一吊狀之事。不封事。定たる法にハあらず。唯紐を切りて。其儘卷て。上包したる可然候也。何事にても。重言を不可書。端書も無之。一嫁取以下祝言之書狀にハ。かへりてんを一番に書間敷也。如此なと、一字かくるハ不苦故實也。

一名字計宛所に認候事。其惣領の方ハ尤敬宜しく候。又官受領計も勿論にて候□□仁躰ならハ。上に書様に書合にて可然候也。一願書調様之事。

右願者。國家安全運長久息災延命爲祈念也。然者神者依人之敬増威。人者依神之德添運。而奉仰諸願成就狀如件。

年號月日

受領官途氏實名判



凡此やうなるてい也。文章品々ハ一隨筆者之御願  
り發に。色々立預こさかく事。出陣之時。願書を籠  
にハ、鏑矢にまて付て籠也。願成就之時。如願書何  
事も神へして奉る也。此ために武士のうつほに。上  
矢の鏑さて一ツさし候也。唯之時ハ。鏑をさすハ定  
たる用無之候。能々可心得。

一馬道具書狀に可調様事。

鞍一口。輿一口。鎧一足。切府一疋分。

力革一具。鼻革一間。手綱一具。

策一ツ。奉射のゆかけ。かた／＼馬上のゆ

かけ一具。

弦一筋。弦一張トハ七筋也。一桶トハ廿す

ち也。

又鞠をハ二九疋。一顆共可書。

一菟ハ一耳二耳と可書。一疋二疋とハ惡し。但

一耳とハ二の事也。一ツをハ片耳と書也。一

ツ二ツとハ可書不苦。鷹犬をハ一牙加様に

かくへし。

一置字之事。

差一向と云成也。

粗日々如此ト云成也。

宜此事如此也。可然と

專是を本トすへし

太ひたすらト

湏是を專ト思ト

情未生已前方今ニ至

所謂其子細ハ是ト

加之此事を□有つるニ

云々かやうに云たるこ

敢一期之間果てんまで

再往二度をこし

仍此事に付て

忒わか心に任て

光源院殿様一自當家奉書札調様。

殆此たいもくと云儀歟。

蓋前より申事色々

剩前に始つる事を

甚このむこさきと

豈何トして、

旁前と云中と云

強さのミ／＼と云事也。

都唐土天竺吾朝三國

遮而此事すへき前。是よ

者此事治定成

右前に来る事は成と云

隨此事ハ申終。又是を

將亦重而申事は成と

就中前の事ハ申終。又

是を申ト云儀也。

是を申ト云儀也。

光源院殿様一自當家奉書札調様。



爲御代替御禮御太刀一腰。盛光。御馬一疋河原毛。進上仕候。此等之趣宜預御披露候。恐惶謹言。

名字官

七月五日

長時判

伊勢守殿

是ハ内封之披露狀也。書様引亂て五行也。月日のけやう三寸計。月日卜名書之間二寸除。

一自公方様當家へ御返札。

爲代始禮太刀一腰。盛光。馬一疋到來日出候。猶貞孝可中也。

八月十日

御判計

小笠原大膳大夫とのへ

御内書備中引合。一書に三行被遊。如常封候て立紙にて。上包して上下折て封して。五寸ほど引也。

一公方様へ小笠原長時より被申上候伊勢守殿へ被遣候狀之寫也。

雖未中通候令啓候。抑爲御代替御禮御太刀一腰御馬一疋進上仕候。可然様御披露頼存候。仍太刀一腰。馬一疋進之候。向後者別而可申談覺悟候。恐々謹言。

七月五日

大膳大夫長時判

謹上伊勢守殿

上包之上も如此。

公方様江爲御代替御禮御太刀一腰。盛光。御馬一疋御進上之旨。令披露候畢。則被成御内書候。尤珍重存候。恐々謹言。

八月十二日

伊勢守貞孝在判

謹上小笠原大膳大夫殿六行也。上書も如此。連々申入度存候砌。半竹齋上洛之間令啓候。心底具可被申入候。幸令在洛仍候之間。御用蒙仰不可有疎意候。仍御太刀一腰進覽之候。猶重而可得御意候。恐惶謹言。

八月十四日

德盛判

御屋形

一目安調樣之事。

人々御中

松田丹波守長治

謹而言上

紀伊國長澤莊事。某先祖爲御恩之地。譜代相傳之處。依不慮之錯亂。進事令所知行候。任先規之旨。無煩之樣ニ被成御下知候者置候存候趣。可預御披露候。仍目安之狀如件。

應永元年三月十一日

伊勢因幡守殿

凡此趣也。如此認て。押卷て其表ニもはし作りの、とくニ書て。表裏をしおりて。又上包の表にも書て。如此する身ハ公方様へ訴訟を申輩多く。目安共數多有時。一度に被懸御目に。上卷紙をハかけにて取除て持參有に。其人の名見えねハ。御前にて取紛によつてなり。大畧。目安ハかなにて書事可然也。先年奉行願人之申事も。兩方かなめやすなりし也。又料紙之事。文言多時ハ。二枚三枚も可用。紙はしな殘事三寸七八分。何之書物も大方同前也。

小笠原大膳大夫長時

謹而言上

右子細者。今度知行分被仰付候處。指合之義致迷惑候。無異儀樣被仰付者。彌以忝可奉存候旨。可預御披露候。仍言上如件。

天正八年十二月日

凡此趣也。紙二枚立紙成へし。扱上包有へし。上包に目安と書付候ても能候也。又はしに謹而言上と計も有之。但名字官迄かきて。謹而言上と相と、のへ候て能也。可心得也。

一 小笠原信濃守目安。當時貞宗申狀ト云也。

開善寺殿泰山正宗大居士

肖像

小笠原信濃守源朝臣貞宗。入大鑑禪師之室。項衣孟執弟子禮。法諱正宗。號泰山。就于信州伊賀良庄。創禪刹日開善寺。請禪師開山始祖。捨河洛中村兩鄉。爲求遠僧供也。誓曰。爲我子孫者。不承於禪師法系者不我子孫。亦不可嗣我家緒也。以開善可爲氏寺矣。貞和三年五月廿六日。世壽五十七載而逝矣。塔于京東山長清寺也。其先乃清和天皇第六王子貞純

親王號六孫王。其子經基始賜源氏姓。其子滿仲號多田新發。其子賴信。其子賴義有三子。長曰八幡太郎義家。仲曰賀茂二郎義總。季曰新羅三郎義光。其子義清。其子清光。其子加賀美次郎遠光。其子小笠原次郎長清。始賜小笠原號領甲州刺史。從賴朝大將軍入洛。造東大寺。命諸將彫四天王像。公乃其一也。以餘材聞于朝。創長清寺爲仁祠。長清六世而貞宗從尊氏將軍入洛。用弓馬法樣。令爲武家定式。世有貞宗申狀也。常出入。後醍醐天皇御宇或時調馬於丹墀。或時試射於金門。勅命官畫工大藏丞繪公像。見在長清寺。衣冠像是也。授以四品官領信州刺史。寵遇無他。葬之夕勅御史臺監護之。時人榮之。□口

小笠原信濃守前司貞宗申欲□依爲武勇稽古被止犬追物御制事。

右貞宗竊孝前牒。倩按舊貫。武尊主安國之

基。撥亂禁暴之本也。是以。弧矢宣威。軒袁氏之皇風。煽萬代。干戈樹難。周武王之聖化。制諸侯。龍韜之文高。擊呂。翁溪之月如虎。如豹之勇。遙出將軍山之雲。華夷皆歸神制之內。貴賤不離震鳴之中者也。矧亦神武皇帝東征之時。賜天孫劍。以鎮靖島之騷擾。神功皇后西伐之日。受海童珠以定雞林之遐方。爾降吊民伐罪之豪。偏守春秋之經。懷忘振遠威專在弓馬之藝。倭漢之例。古今之治。曾不籍將略之權。用武功之德者乎。而漢丞相魏相有言。曰。救亂誅暴謂之豪兵。豪者王敵加於己。不得已而起者謂之應兵。兵應者勝。爭恨小。故不忍憤怒者謂之忿兵。兵忿者敗。利人。土地貨寶者謂之貪兵。兵貪者殺。恃國家之大。矜民人之衆。欲見威於敵者謂之驕兵。驕兵者滅。此五者但非大事乃天道也。然間當御代。廻豪兵應兵之旅。口力甄廢興絕之功。勳所向無前。速察虛

實之氣。不戰劫敵明張奇正之挖。用兵有亂像  
既通九變之利。閱民有法式。偏諸七德之詞。  
然間。天下歸正如就日之民。□海內嚮化如隨  
風之雲。戊櫻多草花山之馬遙嘶館。無人松關  
之折長請詠凱歌之後。施恩應之餘殊被下犬  
追物禁制之法。德覃禽獸。雖知政化仁怒人携  
弓箭。皆歎武藝之廢絕。所以者何步射之營。  
雖非無其德。騎射之勤猶堪禦其敵。絲絃馬上  
作物雖有其數。當時所用者。流鏑馬笠懸面々  
雖有益。猶於犬追物者。射馭之簡要驅逐之妙  
術也。是以。鎌倉右大將家御時權輿之。入道  
將軍賴經御代。嘉祥年中。前武州被經評定。  
有興行之沙汰。以來就爲武藝練習之最要。每  
達政務語詢之間暇。擇家々之才能有處々之  
騎射。匪嘗催興宴。偏爲習武訓也。司馬法曰。  
天下雖平忘戰必兇。春振施秋治兵。所以不忘  
戰也。就之按之。以遊畝之豪習戰射之法也。

在京奉公輩不入深山大澤者。難成逐禽驅獸  
之業。不得平原曠野者。爭携放鷹隼之遊。  
弓馬之藝術自然可斷絕者哉。居安慮危。昭代  
之令典。居治念亂。明時之規模。當時雖四海  
無波瀾之聲。萬邦無烟塵之氣。被用多算之道  
者耶。曾不慮之哉乎。然則。被止禁逼之制。被  
下御免之法。樂此道之再興。知其藝之不弃。  
貞宗偏以不肖愚昧之身。申破禁制嚴重々法  
條頗雖似過分之所存。頻依願安全之治術  
也。爲私不申之。爲公申之。爲家不申之。公家  
之斯知無不爲忠也。被察苟息之正言。達上聞  
樣爲賴洩御披露言上如件。

康永元年二月 日

以東京帝國大學史料編纂掛本謄寫校合畢

齋藤松太郎  
田中敏治校  
大和田五月

大正十四年五月五日 印刷  
大正十四年五月十日 發行  
昭和七年三月十五日 三版發行  
昭和十四年十月廿五日 五版發行

東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八  
續群書類從完成會代表者

太田藤四郎

東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九

永島喜代次郎

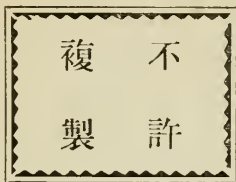
東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九

新英社印刷所

東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八

續群書類從完成會

振替東京六二六〇七 電話大塚七一八



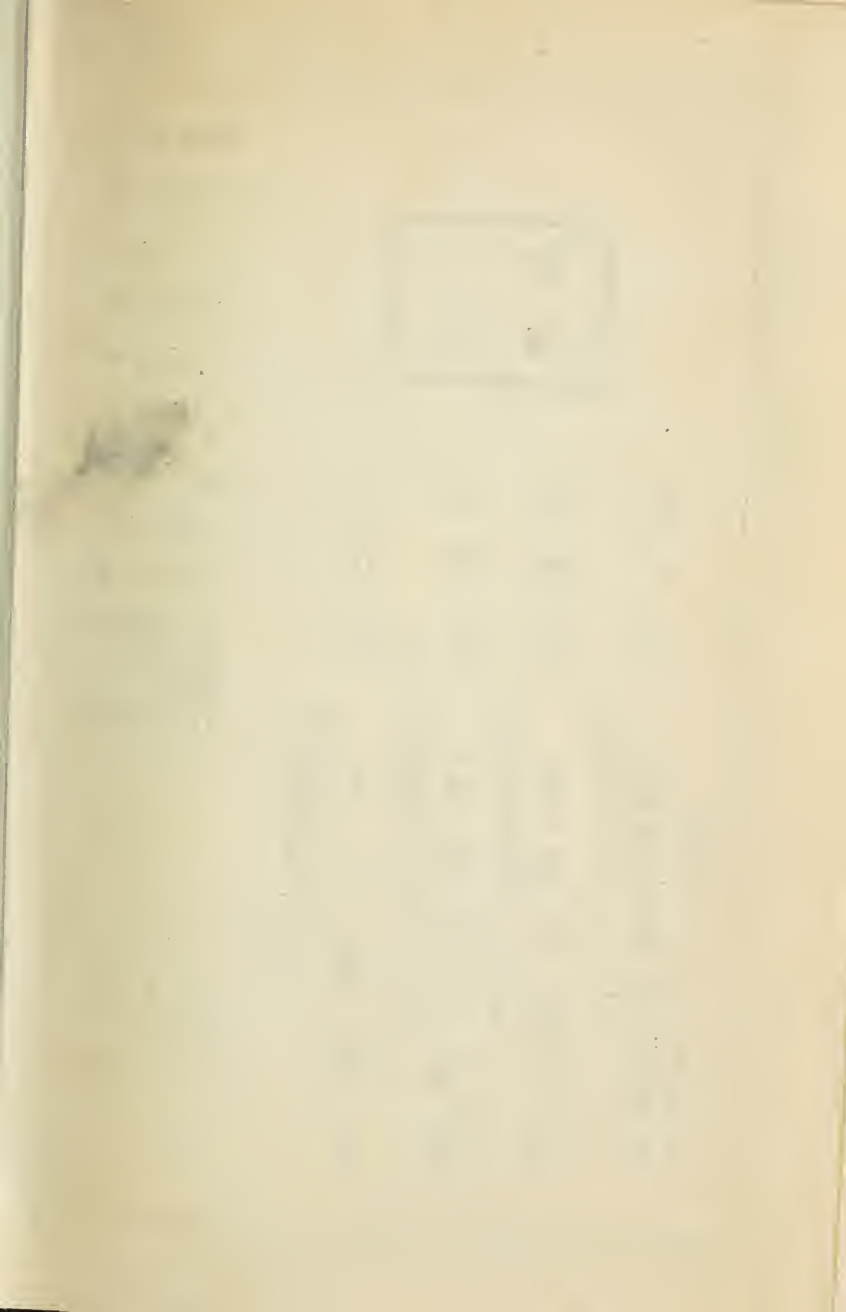
發行者

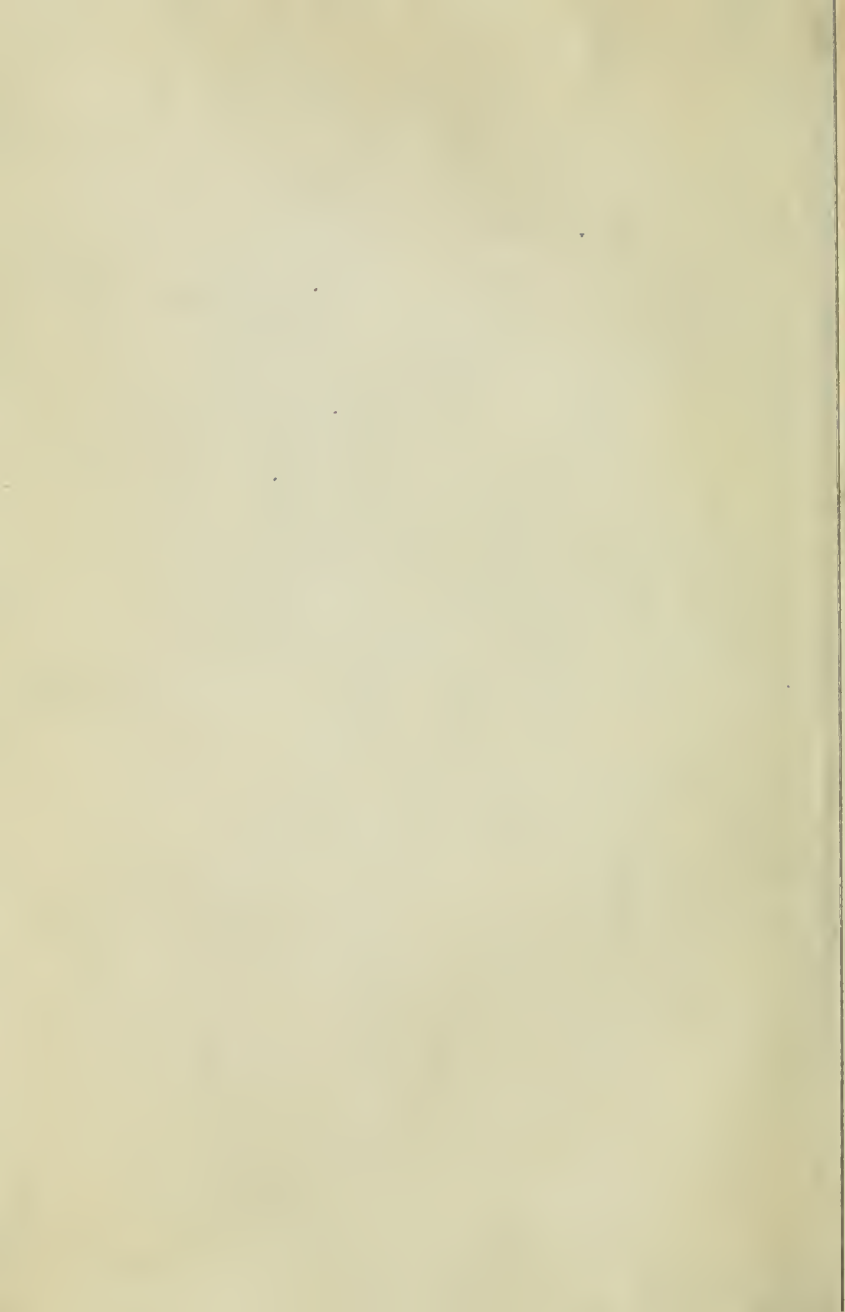
印刷者

印刷所

發行者











EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03043 6471